

シロツメクサを捧げる

Kamadouma

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

——— 死に損ないの勇者と、その弟子たち ———

本編とは逆に、須美ちゃん園子ちゃんと死別した銀ちゃんと、その後継ぎとなった芽吹と夏凜のIFストーリーです。解釈がガバガバなのはご容赦を。

## 目次

### 三ノ輪銀の章

サイボーグギンちゃん | 1

たかが勇者に選ばれただけで偉そうにすんなよ！ | 11

意外に信頼してるのね、二人とも | 19

…うはあ。ひやっとした | 32

この世の終わりへようこそ | 45

まだ二人のこと、何も知らないんだよね… | 54

これはすのうどん | 66

勇者部丸亀支部、出動！ | 82

あたしの味方はいないのかよお〜！ | 93

…めぶき…：…かりん…：… | 104

三ノ輪銀のままにいるよ | 121

### 三好夏凜の章

なによその意味深な笑顔は | 141

過労死しそうね、あんた | 152

…そんなの、ずるいじゃない… | 160

ぶっ壊すわよっそんなもの！ | 175

やってやるわよ、私の永遠の好敵手 | 189

あんたのこと、信じてみようじゃない | 202

…あんたがそう言うなら… | 218

あんたが気に入らないからよ!! | 233

勝ちたかった。勇者として絶対。 | 248

### 楠芽吹の章

どうか私たち三人を見守っていてください | 267

あなたがすぐそこにいるから  
拾った命、大切にしてください  
私たちはいいのよ、勇者部だから  
だから気を付けてと言ったんです  
あなたを、助けさせてください  
誰を恨めばいい、のかしら  
あなたは人です。紛れもない人間です  
やってやりましょう。銀のためにも  
あなたに何ができたのかを

403 389 374 359 342 328 315 296 278

結城友奈の章

それでもわたしは戦いたくない  
もう会えないなんて、イヤだよ…  
ここにいる間は敵じゃないですよ  
銀ちゃんと同じ場所に行こうとしてる  
わたしは勇者!!!  
戦う理由が、見つけられた  
そばにいるよ  
ウソなワケがないよ

625 606 583 557 537 509 478 445

## 三ノ輪銀の章 サイボーグギンちゃん

「彼女が、あなた達の教導を担う勇者…三ノ輪銀様です」

そう言つて大赦の神官が丸亀城まで連れてきて引き合わせた人物は、想像を絶する者だった。時間を過ぎても現れない面会者にイライラしていた私も、隣で姿勢を正して立っていた楠芽吹も絶句するしかなかった。

へよつす！遅れてゴメンな！三好さんに、楠さん！

「えっ…あ…え…？」

「三ノ輪…銀、さま…？」

視線を合わせて言葉を失う。左目があつた場所には、無数のセンサーのようなものがハニカム状に並べられたモノクルみたいな機械——これを義眼と呼んでいいのだろうか。まるで瞳のように、意識が集中した部分が光つて意志を伝えようとすらしている。

耳に入った声も、まるでエフェクトが入つたように機械的に響く。人の声帯から発せられた音じゃないように——口こそ動いているけど、実際に音声を出しているのは赤いチョーカーかららしい。でも、人懐っこさを隠せていない言葉だ。

謝りついでに上げた右手から、少し軋んだ音が鳴った。骨の音じゃなくて、金属の音。——そこには黒鉄色の義手があつた。どんな仕組みかもわからないその機械は、まさに人の手のように表情豊かに動いた。

——その人が唯一現存する勇者：三ノ輪銀ということを理解するまで、しばらく時間がかかった。

「そ、そのお身体は…」

へん？ああ、サイボーグギンちゃんのこと？大丈夫だって、普通に生きてけるから」

「……戦いで、失ったんですか」

へまあね。逆に勝つためにこうなっただって意味もあるよ」

本人は至って平然としてるけど、こんなものを見せられた私はたまったもんじゃない。

——勇者になるということは、いずれ三ノ輪銀のようになるということだ。戦いの中で死の淵をさまよって、勝つために機械仕掛けの化け物へと改造されていく。

怖じ気づいたわけじゃないけど、思い描いていた勇者像はこの1分で崩れ去った気がした。

——私の存在意義を証明するためには、…人間をやめなければならぬかもしれない。

へそれはさておき。改めまして、あたしは三ノ輪銀。三好さんと楠さんを一人前の勇者にするために赴任してきました！」

「ご挨拶遅れました。楠芽吹と申します。現勇者様からご指導頂けるとは、感謝の極みです」

「…三好夏凜です。これからよろしくお願いします」

へ堅苦しいなあ、二人とも。同い年なんだから他人行儀じゃなくてもいいよ」

その飄々とした面の裏に潜む真意は、読めそうで読めない。好意的

な意志表示の裏に、何か別の思惑がある…のような気がする。

対して楠はそれを疑わなかったみたいだ。私より慎重な性格なくせに。あいつだっただって裏のない人間なんていないってことを知ってるはずなのに。

——— なんてイラついてるんだろう、私。

「…人間関係には口を出しません、あなた達二人は銀様から教えをたまわる身。礼節を忘れぬよう」

「安芸先生までそんなこと言っつて。そういうのあたしは苦手なんだつて」

「あなたには教導として二人を監督し成長させるお役目があります。彼女らは友達ではなく、…いわば生徒なのです」

神官の言葉に渋々納得した様子の勇者様。扱い方を心得ているらしい。個人的な知り合いなのかしらね。

頭を黒鉄の手でかいてから、私たちに向き直った。義眼のセンサーの一つ一つがこちらを捉えているように見えて、少し戦慄する。一般人が見たら怯えるわよ、これ。

「よし、二人とも！行くぞっ！」

「早速教練ですか？」

「はいはいいや。まだあたし何も考えてないから」

「じゃあ、どこに？」

へへへ、今日はあたしのおごりだぜえ。好きなを選んで  
「…何で私たちはこんなところにいるのかしら」  
「知らないわよ。三ノ輪教導に連れられて来たんでしょ」

勇者様に連れてこられたのは、街の複合商店。そのスイーツ店で  
注文を聞いてきた。

へイネスマイスターとしてはイネスへ連れてきたかったんだけどね。  
…まあ、遠慮はいらないよ。初顔合わせの親睦会だからな！  
「親睦会？」

へそうそう。先生の前じゃ一応の上司として振る舞わなきゃいけない  
けどさ、あたし達はお互いに背中を預ける仲間なんだから。仲良くし  
たいじゃん？  
「…そういう、ものなの？」

私は正直、こういう空気に慣れていない。というより、初めてだ。

それもそうか。自分の有用性を証明するためにわき目も振らず努  
力を積んできたんだから。

それに仲間というものがいたことなんて、あつたかしら。

隣の楠も大体私と同じような顔をしていた。ポカンとして何が起  
こっているかわかってない顔。



「うん、あたしはしようゆージェラートで。三好さん：夏凜は？」

「：同じの、お願いします」

「オーケーオーケー。わかってるじゃんか。芽吹は？」

「私も同じで」

下の名前で呼ばれたのはいつ以来だろうか。親とはしばらく会ってないし——会いたくもないけど——兄に至っては大赦の中核だ。

どうしてなかなかむずがゆい気持ちになった。

勇者様は何故だかささらに上機嫌になったようだ。嬉々として店員に注文を言いつける。

———  
「というか、店員もあの義眼と義手を見ても無反応。勇者様はこの顔なじみなの？」

「：席、とっておきましようか」

「そうね…」

楠も勇者様の気迫に気圧されっぱなしか。威圧感とかじゃなくて、最初から距離が近いというか。そういうタイプの人間と関わったことがないわけじゃないけど———  
「苦手かもしれない。」

しばらく二人で無言で待っていると、器用に三つのカップをかかえてテーブルへとやってくる勇者様。それも義手の方で。どれだけ高性能なものなのか。

「おまたせ！席確保してくれてありがとな！」

「いえ、特に誉められるようなことは」

「はいいや、芽吹の端末持ってた勇者はそれに気づかなかったんだよ、最初。夏凜の方が堂々と席とって居眠り始めたから良かったんだけ」

どな

勇者様はカップを椅子の前に並べて――楠の頭をなでた。

その光景を見た私ももちろんだけど、された本人はとりあえずフリーズした。

「……………え？」

へあ、イヤだった？ごめんいつものクセで

「え、い、イヤではないのですが…は、恥ずかしい…です」

立ち直る頃には耳の先から真つ赤になっていた。受け答えもしどろもどろ。今のを後で本人に見せつけてやりたいくらいに傑作な絵面だ。

へそつか、それは良かった。…夏凜もありがと

「ちよっ！私はいいから！進言したのは楠ですからっ」

へ堅いこと言うなって。芽吹だけだったら不公平だろ？

もつともらしいことを言っ私をロックオンした勇者様。笑顔に一切のくすみがないのが憎たらしい。

手を振って拒否のジェスチャーをしたのも虚しく、勇者様の生身の方の手で触れられる。その部分から血管をもつごい勢いで血が流れていく気がした。それはもう、摩擦熱のようにヒートアップしながら。

「っく〜！」

へふふふ、さては二人とも褒められなれてないな〜？

「!!」

へ安心しなさい二人とも。銀様は褒めて伸ばすタイプだから！

「そ、それはいいけどっ…は、恥ずかしいマネはやめて！…ください」  
〈すぐ慣れるって。大丈夫大丈夫〉

私たちを見て笑い飛ばした。いじり倒すのが目的なんじゃないの  
と邪推してしまうが、——半分くらいそうなのかもね。

〈…あ、みんな同じの選んだら食べさせ合えないじゃん！〉

「なあ!?そんなことまでしようとしたの!?!」

「教導!なんのつもりですか!」

〈えーだってそういうのお約束じゃんか!…あ、同じ味でも別にオツ  
ケーか〉

「何も良くありません!」

ぶーぶーと口をしばめて文句を垂らす勇者様。全力で拒否した楠  
は肩を上下させてる。

“私たちの常識”では計り知れないことが、あつちの常識らしい。  
むしろ勇者様の方が“一般の常識”に近いのか。

だからって、そんな恥ずかしいマネできるかあ!

〈ちえっ。二人ともピュアなんだから〉

「教導は少しデリカシーに欠けています。…私はそんなこと、できな  
かったから…」

何か本音らしきものが聞こえたところで、勇者様はジェラートをス  
プーンですくって口に運んだ。不満顔が一瞬でにやけ始める。

〈二人も食べなよ。あたしはこれのために毎回生きて帰ろうって思う  
くらい好きなんだ〉

「そんな大げさな…」

小声でいただきますと言って私もそのご自慢の一品を味わう。

「……あ、これ好きだわ。塩味と甘味がいいバランス」

〈お、マジで？ようやくうまいって言ってくれる人に会えた！〉

ハマる人はハマる味だ。私にぼしを止められないように、勇者様もある種の中毒なのだろう。

同じく味見をした楠は何とも微妙な顔をしたけど。

「……これを塩分と糖分摂取を調整してまで食べたいとは思いません」  
〈え？調整？〉

「体調管理は栄養から。それはご存じですよね？」

〈………あーはい。全く考えたこともありませんでした〉

たははと笑うその顔に、冷や汗が一筋垂れる。何か嫌なことでも思い出したのだろうか。

対して楠は怒り心頭の様子。…まあ、あいつの理想の勇者像も、多分ぶち壊されたと思うし。納得かもね。

「教導は勇者としての自覚はあるのですか？体調を崩してお役目を果たせませんでした、では済まされないのでですよ？」  
〈わーっ！須美みたいなこと言うなって！〉

耳をふさいで聞かないフリをする勇者様。

義眼の方の耳も、小さなアンテナのようなものに置き換わってるのに気付いた。ここまで身体の自由を秤にかけてまで戦い続けたんだ。

それで行動の自由まで言及されたらさすがに可哀想だ。これでもたった一人でお役目を成し遂げた、歴代最強とも言われる勇者、らしいのだから。

「そこまでしておきなさいよ、楠。三ノ輪銀の戦績、あんたも知ってるわよね？勇者としての資質は、たぶん私やあんたより上よ」

「だからといって私生活がちゃんぽらんぽらんであっていいって理由にはならないわ。それで任務に支障が出たら」

「押し付けがましいわね。それでいて任務は完璧にこなした実績があるのよ。私たちが見習うべきはそこじゃないかしら」

「あ、あの、お二人さん…？」

私と楠のピリピリした空気に勇者様はオロオロしてる。険悪なムードには慣れてないらしい。

勇者に選定される前から、私たちの間柄はこうだ。まるでプログラムでも頭に入ってるみたいに過程と結果を結びつける楠と、結果さえ残せれば過程は特に気にしない私。そもそも相容れるわけがないのかもしれない。

楠のそんな一面を知らなかった方が良かったのかもしれないし、もつと深く知らなきゃいけないのかもしれない。

「す、ストロップ！ケンカはやめよう、な？」

「…そうね。教導が親睦会って言ってるんだし、空気を悪くするのも可笑しいわね」

「…出過ぎたことを言いました。申し訳ありません」

「あ、うん…。…ああ、こりや大変だあ…」

大人しくあつちも引き下がってくれたみたいだ。だけど勇者様は

苦笑いを止められない。

背中を預けるって、ねえ……。勇者様ならまだしも楠に背後を任せ  
るって、ちよっと勘弁してほしいわ。

たかが勇者に選ばれただけで偉そうにすんなよ！

勇者様も私たちの関係を察したようで、その後は面倒事にならないような話題を振ってきた。地雷がなかった訳じゃないけど。

リラックス状態とはいえない親睦会も何とか終わり、勇者様と別れて、本日のスケジュールは完了。明日から実際に勇者システムを使った教練が始まる。

教練の期間は丸亀城を改装した訓練施設で生活する。初代勇者が実際に暮らしたというあの丸亀城。

当然同期の楠もここで暮らすわけで、  
——浮かれない気分も沈んでいってしまう。

「三好さんと二人つきりか…。息がつまりそうね」

「同感。お互い衝突し合わないように善処しましょ」

「そうね。干渉は最低限で」

通用口から城内に入って広間に出る。エントランスって言ったり方がわかりやすいかもしれない。

「明日の午前6時にここに集合ね。…じゃ、おやすみ楠」

「ええ、おやすみ三好さん」

「…待て待て待て！お前らの会話それだけかよ!？」

ガラッとふすまを開けて猛烈にツツコんできた。途中で自宅に帰ったはずの三ノ輪教導だ。

一瞬身構えたけど、声を聞いて警戒を解いた。――てか、なん  
でここにいるの？

「…教導、何のご用でしょうか」  
へうわ、芽吹の視線が冷たい…」

憧れがさめてしまったのか、なかなか辛辣な視線を浴びせる。きつ  
と楠の中では、自分より劣っている部分が一つでもあつたらダメだつ  
たんでしょうね。

――あんたほどの完璧主義者、私は知らないわよ。

へええい、ひるむな三ノ輪銀！熱いハートに不可能はない！！」

「誰に言ってるの…？」

へ二人にだ！二人には誰かを温める熱いハートが足りない！」

「は、はあ…」

へというわけで二人の個室は没収！あたしと三人で共同生活を送って  
もらいます！」

「え、えーっ!?!」

黒鉄の人差し指をビシツと立てて私たちを順番に差し当てる。ど  
うだ決まっただろって顔をして。

冗談じゃないわよ！こんなカタブツと四六時中一緒なんて！頭お  
かしくなるわ！

「ちよつと、待ってください！そんな合理性のない理由で人のプライ  
バシーを奪わないでください！」

へおやあ？成績では夏凜に勝つてた楠芽吹さんともあろうお方が、仲  
間と寝食を共にすることもできないと申しますかあ？」



「できないとは言ってます！理由が納得いかないだけです！」  
へだつてさ、夏凜。芽吹は夏凜と仲良くする気はないってさ。悲しいよなあ？」

「願ったりだわ。私も同じこと考えてた」

へ……バカヤローっ!!」

三ノ輪銀は怒号を上げた。今までのおふぎけ半分の言葉じゃなくて、本気の怒り。その気迫で私も楠も褒めて伸ばすタイプじゃ、とか言えなくなった。

へたかが勇者に選ばれただけで偉そうにすんなよ！所詮あたし達は人間！一人じゃなんにもできない！」

一人じゃなんにもできない。あの、たった一人でお役目を遂げた勇者の口から出たのは、——とても信じられない言葉だった。

勇者様は一呼吸おいてから、語調を鎮めて言葉を続けた。

へ神樹様がせっかく結んでくれた縁なんだ。好き嫌いはあるかもしれないけど、嫌いのままいるのも悲しいだろ？」

へちよつとずつでいいからさ、お互いのことを好きになってく努力をしようよ」

確かに、好きになろうとする努力を怠っていたかもしれない。楠が私を拒絶したとはいえ、大人げなかったかもしれない。

楠の方が私よりずっとヒドい顔をしてると思う。青天の霹靂、自分の常識では思いも寄らない言葉を叩き付けられて戸惑いの表情を隠せていない。

そして、この人が勇者だって理由も少しだけわかった気がする。三ノ輪銀が勇者に選ばれた理由。

——この人の行動の理由が、いつも誰かのため、だから。

〈……できるよね？二人とも〉

「……もちろんよ……です。三ノ輪教導の理想は、かつての勇者たちのような関係……で、あつてますか？」

〈そうだね。夏凜と友達になりたいし、もちろん芽吹ともね〉

「……それが大赦の意志だというのなら」

〈うん。今はそれでいいよ。実際あたしの権限でこうしたんだし〉

職権濫用と言うつもりはないけど、三ノ輪教導のカリキュラムはなかなか破天荒なものになりそうだ。

〈よし、今日はあたしがご飯作るからちよつと待ってて！〉

個室に送られていた荷物を大広間に移し終えた後、誰もいない食堂

で教導が「ご飯をぐちそうすると宣言した。」

「…調理師が専属でいるんじゃない?」

「もう営業終了だよ。定時退社の大赦だからね」

「うわっ、さむ…。…滑るのわかってて言ってる?」

「ありがたい夏凜。無反応が一番悲しいから…」

教導のダジャレに軽くツツコミをいれつつ、仏頂面を崩さない楠の顔をチラリと見る。教導が一番悲しくなるという、無反応というやっただ。

にっと私に笑いかけて教導は厨房へ入っていった。何か、付き合い方がわかってきた気がする。

「教導にはああ言ったものの、…三好さんを好きになる努力、か」

「どうする?とりあえず何かしないと何も変わらないわよ」

「…知らないわよ。そんな努力、まさかするとは思ってなかったから」

「そこまで言うか、あんた。…まあ、妙に納得しちゃったのが楠を好きになれない理由よね」

楠のほとんどが向上心でできている。自身の向上のためなら平気で他人を蹴落とす———。そんな一面が、私は気に入らなかった。

『ちよつと!大丈夫!?こんなにうつ血してる…!』

『受け身の取り方も知らないのかしら。それで良く勇者の候補者を名

乗れるものですね。…時間の無駄だったわ』

まだ私たちが正式に選定される前。その時から楠芽吹とは同じ施設で訓練を受けていた。

その頃から、いけ好かないやつだったんだけど。一緒に訓練をした候補を一方的に叩き伏せ、ケガの救護もしやしない。私が気付いてなかったら、本当にマズかったかも。

確かに楠の成績は完璧だ。私も考えうる限りの努力をしたけど、あいつには一歩及ばない。だけど、それとこれとは話は別。困ってる人間を放っておく人間が、勇者であるはずがない。

『ほら、弥勒先輩。肩貸すから一緒に医務室に』

『…っ。かたじけないですわ、三好さん。…いたた』

『あまり動いちゃダメよ。ゆつくり、静かに』

『…その甘さが、命取りにならないといいけど』

『あんたみたいな人間味のないやつなんて、眼中にないわ』

選定されるのが二名とはいえ、——楠だけには負けたくないと思っただ。二番手で、こいつの後塵を拝するのはまっぴら御免だ。

それが、楠に対する私の印象。クソ真面目で努力家だけど、利己的。冷酷とさえ思える徹底した競争主義。

——何ら、私の両親と変わらないくそつたれだ。

「おい、夏凜。できたよ」  
「えっ？あ、うん」

らしくもなく思い出したくもない過去に思考を巡らせていたらしい。教導の義眼が見えて少し驚くと同時に現実に戻ってきた。

「台所に何かがあるか詳しく知らないから、簡単にうどんにしたよ」

「…の割には手が込んでませんか？」

「こう見えて実は家事全般得意なんだぜ？時短でうまい料理を作るなんて朝飯前だよ」

「意外…」

第一印象は割と男っぽいと思っていたので、こんな女子力の高い一面を見せられると反応に困る。

「麺こそ冷凍のやつだけど、つゆは明らかにめんつゆ一辺倒じゃないし、なることや麩とか薬味で簡単だけどトッピングもしてある。」

「多分、私にはできない。」

「さき、どぞ。お召し上がりくださいな」

「では、…いただきます」

先に楠が割り箸を割って口をつけた。

「…生意気言ってますみませんでした、教導。多分教導は無意識の内に自己管理をおこなっているんですね」

「へへ？」

「簡単なうどんに見せかけて、多くの品目を取り入れている。それで味も飽きないように工夫してる。…栄養士の勉強をされていたので

すか？」

「いや、全然。母ちゃんの見よう見まねで」

「母親…」

それ以上楠が声を出すことはなかった。黙々と教導特製のうどんをすすする。

「夏凜も食べてよ。伸びない内に」

「うん。…いただきます」

促されるまま私もその味を確かめる。

「…あ、おいしい。だしがしつかりしてる」

「へとりあえず見つけたにぼしとかつおで取ってみただけだね。お口に合ってたにより」

「…何か教導こそ完成型勇者に見えてきた…」

万能すぎでしょ、三ノ輪銀って人は。生活力は中学生のそれじゃないし、勇者としての実力は戦績が証明してるし、人格は——まあ、暑っ苦しいけどイヤなやつじゃないし。

まさか勇者になるべくしてなった、神樹様選ばれて然るべき。そんな次元の違いを見せつけてられたような気がした。

「へさて、あたしも食べよつと」

教導も勢いよく麺をかつこみ始めた。お上品ってキャラじゃないのはわかるけど、およそ女の子の食べ方じゃない。

でも、笑顔になってるのを目の当たりにして——どうでもよくなつた。

意外に信頼してるのね、二人とも

「おはようございます教導」

「おはよう、夏凜、芽吹。遅れてごめんな！」

「寝坊した訳でもないのに、どうされたんですか？」

教導は5分遅れで広間にやってきた。朝起きたらもういなかったのに、どこで何をしていたんだろう。

教導は苦笑いしながら答えた。

「いやね、あれだよ。教練の準備をしてたらケガした鳥を見つけてね。この時間じゃ保健所も病院も開いてないし、とりあえず監視の人に預けてたらこんな時間になっちゃって」

「…本当に何をなされているのですか？」

「…面目ない。昔っからこんなトラブルを呼び込む体質で」

本人もトラブルメーカーのような気もするけど、トラブルの方も好んで教導のところに行ってくるらしい。巻き添えを食うかもしれないから気を付けておこう。

「…あと、その『教導』って呼ぶのやめない？なんかスゴく偉そうに聞こえてさ」

「いえ、教導は教導です。上下関係をはっきりさせるための呼称ですから」

「友達に上も下もないだろー？な、夏凜」

「じゃあ何て呼んだらいい？」

「銀様でもミノさんでもいいからさ、とりあえず教導だけはやめて」

照れ臭いのか両手を横に振る仕草。奉り上げられるとダメみたい

ね。でも様付けはオーケーらしい。

でも様付けはあれね。からかう時くらいにしか使えなさそうね。

「…では三ノ輪教導、ご鞭撻の程お願いします」

〈さらさら言うことを聞く気はないってね…。ああ、これは手強い〉

「っていう教ど…銀も譲らないのはお互い様よ」

〈最初に折れたのは夏凜か…。ちよろいな〉

「誰がちよろいですってえー!?!」

いけないいけない。銀のペースに巻き込まれたらどんなムチャ振りをするかわからない。あいつ程じゃないけど揺さぶられないようにしなきゃ。

〈じゃあ、始めよっか〉

「はい。お願いします」

「…何やるの?」

〈まあまあ、ちよつとしたテストだよ〉

銀に連れられてきたのは沖で座礁して破棄された大型船。神樹様が敷いた“壁”に船首が突っ込んでるとも言われる、知る人ぞ知る瀬戸内の名物。当然大赦の管理物なんだけど。

この規模の船舶は今じゃ輸送船でも使用されていない。四国の沿岸を周回するだけなら、このサイズは返って不便だからだ。



つまり相当古い船ってこと。船内には軋みの音が鳴り響いている。

へよし、ここでなら思っきり暴れられるな

「……ここで戦闘訓練でもするわけ？沈むんじゃない、この船」

「その可能性は大いにあるかと」

へはは、ついでに沈めてこいつってことさ

笑顔でとんでもないことをぬかすわ、この勇者。脱出するまでが訓練ってことでしょ、これ。

へそれじゃテストの内容を説明するね。夏凜と芽吹で協力して甲板の先にある旗を回収して、このボートに戻ってきて脱出する。それだけ

「……それだけ、ですか？」

へもちろんあたしがお邪魔役をやらせてもらおうよ。その点も考慮して

——大昔の海外の特殊部隊かつ！そんな訓練、役に立つか！勇者にそんな任務来るわけあるか！

とツツコミ所満載のテストに言及したいのを抑えつつ、銀の思考を意図を探る。

何か、意味があるはず。

へあたしは先に行ってるから。さて、二人がどんな戦いするか、楽しみだな

「……」期待に添えるよう、努力します

「手のこった歓迎会だけど、あっさり終わらせてあげるわ」

へへへ、そう簡単にいくかな？あたしが端末にコールしたら侵入し

てきてく

銀は背中を向けて錆び付いた船内へと消えていった。

現在地は貨物搬入用のハッチ、だと思う。詳しい船内の見取り図はわかってない。しらみ潰しに道を探さないといけないかも。

「…教導は何を試したいのかしらね」

「さあ？ 私たちがちゃんと連繋して行動できるか知りたいんですよ」

「…よりにもよって三好さんと、か。教導も味な真似をするわ」

「腐れ縁よね。できれば一緒にいたくないやつと、ここまで時間を共に過ごすなんて」

でも私と楠を選んだのは神樹様。運命とも言っていない。いや、皮肉を込めて宿命と言っておこう。

それには必ず意味がある。はず。だからこいつの嫌いなところも受け入れて、乗り越えなきゃいけない。

---

それが、勇者だ。

---

「初のシステムを使った教練か。さて、見せ付けてやろうじゃない」

端末のアプリケーションを起動。視界をバラの花びらが覆って、あ

たかも私の形をした結界をつくり出す。そこに神樹様の力が満たされていく。

いつのまにやら私の首もとに紫色のイタチのような生き物――  
「勇者を守る精霊のひとつ、『雷獣』が巻き付いていた。話は聞いていたけど、なかなか、こう、かわいい。」

花吹雪が去った後、紫の勇者と雷の精霊がハッチに降り立った。

「…あんと細かい連繋なんて無理そうだから、基本的な方針だけ決めましょ」

「ええ。2対1だから、接敵したら片方が教導の足止めをする」

「もう片方は離脱して探索を続ける。先に狙われた方が囿役ね」  
「それでいいわ」

楠も青い勇者の戦衣をまとつて、アンダーバレルランチャーの着いた突撃銃のチェックをしている。その様子を鳥のような精霊――  
「津真天」って言ったけ――が銃に止まって見つめていた。

イツマデ      イツマデ

「うわっ、しゃべった。脅かすんじゃないわよ」

「…会話はしてくれなさそうね。インコだわ、これじゃ」

「バレルの上で止まってしゃべるインコなんて、こいつくらいよ」

銃口先のインコは気にせずチェックを続ける楠。煩わしい武器だこと。

楠の引き継いだ勇者システムは――先代鷲尾須美が使用していたもの。彼女は弓術や狙撃の才能を拓いて、長距離支援を得意としていた。らしい。

しかし楠が持つのは、長距離からの狙撃運用には向かないカービン。単騎でも戦えるように連射力と取り回しを重視したらしい。

———  
「実にあいつらしい理由だ。」

「…しかし、大丈夫かしらね。三好さんの武器、この閉所じゃ使い物にならないぞう」

「あんたが私の身を案ずるとはね。どういう風の吹き回しかしら」

「時間稼ぎも満足にできるか不安なこと」

「ヒトの心配してるヒマがあったら自分の安全を確保しておくなさいよ」

楠が案ずるのも無理はない。私の武器は三日月状の刃とピッケルのような杭が穂先に漂う長柄の槍——— 遠い昔の飛將軍が使っていた方天画戟という武器がモチーフと言っていた。

先代乃木園子は無数の飛ぶ刃を纏う槍で変幻自在な戦術を駆使していたって言うけど、——— 私の頭の回転ではそんな運用はできない。

だから能力の引き継ぎは最小限に、残りのリソースを威力に割り振ってもらった。

そこから導き出される現状の戦術は———

「船、沈める気で暴れるから」

「…あなた、割と力押しが好きよね」

「圧倒的なゴリ押しも完成型の戦術よ」

船の壁が簡単に戟でぶち抜けることを確かめると、端末から着信音が鳴った。

「『テスト開始！あたしはレーダーから一時消えてるから、二人の位置の確認に使ってね』。だってさ」

「…本当だ。…まあ、音でわかるでしょ」

私と楠の名前はレーダーに表示されていたが、銀の反応は無くなっていた。

勇者システムが起動する限り反応は無くならないはずだけど、まあステルスくらい大赦は作ってるかもね。『裏切り者』対策として。

船内では足音が大きく響く。軋みや波の音と被らなければ聞き逃すことはないか。システムに頼らず自分の能力を研ぎ澄ませろってこと。

「…しかし気味悪いところね。教導じゃなくて化け物が出そうだわ」

「幽霊船ってやつ？実際のわけないじゃない」

「長くそこに存在するものには、そういう念が溜まっていくものよ。ちゃんと供養すれば土地神様が住まうし、放置すれば悪霊がのさばる」

「ふーん。そういうの信じるタイプか。意外ね」

「地鎮祭や竣工式はよく知ってるもの。ないがしろにしたら、幽霊だって出るわ」

やけに詳しいわね。楠はそういうのに詳しい家で育ったのかしら。

——全然あいつの身の上なんて知らないけど。

薄暗い船内を警戒しながら、甲板へ繋がる階段を探す。

「…うわ、手にサビついた。…次はあんた開けなさいよ」

「拒否しとくわ。私が開けたら扉の向こうへ先制攻撃できないし」

「もっともらしい屁理屈を…」

クリアリングって言うんだっけ？それをするなら確かに私が開けて楠が制圧にかかるのがいいけど。

だけど、こいつの思うつぼというのが納得いかない。こんな時だけいいように使われるのは何か嫌だ。

——とかどうにかしてこいつの鼻をあかしてやろうと思ったときだ。

「だいたいねえ、あんたの指図なんて受ける気はnぶっ！」

「！なに!？」

楠に振り向いた途端、後頭部に割と重たい衝撃。思わずよろめいてしまう。精霊のバリアがなかったらかなりのダメージだ。

あいつもすぐさま銃を構えるけど、その後のアクションはない。

「…空き缶?」

「あきらかに空き缶の威力じゃなかったわよ…。：ほら、中身入ってる…」

「…でもこの部屋には教導はいなかったし…。：ポルターガイスト?」

私に投げつけられたのは古びたアルコールの缶。開封されてなくて、中身も入ってる。

楠は私の心配をするでもなく缶と飛んできた部屋を調べ始めた。ほんと可愛げのないやつ。形だけでも気づかないのかしら。

「つたく。完成型の勇者になめた真似してくれるじゃない」

「避けられなかったのに完成型？笑っちゃうわnぐお！」

とか調子こいてたら、楠の真下にあつた分厚い漫画雑誌が突然跳ね上がって顎を直撃。面白い顔をしてる。

ふ、幽霊も私たちのこと見てるのよ。

「……って言いましたけど、その辺どうなの？完成型さん？」

「……沈めましょう。船ごと」

「あんたねえ…カルシウム足りてないわよ。にぼし食べなさいよ」

楠さんは怒り心頭らしい。誰のいたずらか知らないけど、ここまで最高のタイミングでおちよくられると相当屈辱だ。

こうなるともう誰の仕業かなんてどうでもいい。本気が冗談か知らないけど、戦意はメラメラ燃えてる。

—— あいつ、割と短気なのよ。

「じゃ、旗と銀をとつと回収して幽霊どもを水底にご案内しましょうか」

「珍しく意見が合ったわね。行くわよ三好さん」

私は別に怒り心頭ってわけじゃないけど、ここにいること自体あまり乗り気じゃない。こんな所に連れてきた銀に少し文句を言いたいと思っただけど。

部屋を抜けて足早に船内へ駆け出す。強行突破よ！

「めんどくさい！天井ぶち抜くわ！一番の近道よ！」

「この上ないゴリ押しだけど…乗ったわその案！」

階段を探すのもまだるっこい。戟で天井を突いてやれば大穴が空く。ならそこから登っていけばいい。

完全なゴリ押しを敢行して上の階に上がると、さらに味な歓迎が待っていた。

「っ！またポルターガイスト！」

「うわっ！さすがに包丁は危ないって！」

このフロアは厨房だったらしい。フライパンやナイフ、その他調理器具が無数に飛来してきた。

楠は作業台に身を隠してやり過ごした。さすがの判断力と言わざるを得ない。私は初動が遅れてしまった。

「なめるなあ！幽霊ども！」

戟を演舞のように振り回して飛来する物体を弾く。動きに呼応して月牙が的確に飛来物を捉えるように飛び交う。雷光が走って飛来物がそれていく。

訓練でもやったことない動きだけど、何故か自然に身体が動いた。

「はあっ、ふうっ、どんなもんよ！」

「呆れた…。頭使いなさいよ」

「ふんっ！使わなくてもどうにかなるって見せただけよ！」

強がってはみたものの、二度はやりたくない技だ。下手するとフォークが額にぶつ刺さってたかもしれないし。



飛来が止んだのを確認するために周囲を警戒する。

——  
つて！

「楠！危ないっ!!」

「えっ?」

斧が天井をぶち破って、楠目掛けてふっ飛んできた。あきらかに料理に使うような代物じゃない。生き物を潰し断つための戦斧だ。

しゃがんでいたのが災いして、楠の視野は上に狭くなってたらしい。対処が全然間に合っていない。

「このおっ!!」

本能的に戟を斧の射線上に放り投げた。まるで私の意志を感じ取ったかのように月牙が傾いて、ロールしながら加速する。

楠のほんの目の前で何とか斧の峰を捉えて、激しく火花と雷光を散らしながら撃ち落とすことに成功した。

「楠！生きてる!?!」

「まるで死んでほしいみたいな言い方ね。残念ながら無傷よ」

「減らず口を…」

武器を回収しながら楠の安否を確認すると、これまた可愛げのない返事が聞こえた。まあ半分正解かもしれないけど。

——  
とか油断してたのがマズかったらしい。

「ぐっ!!?」

「!?!」

「いやーいやー、お見事。夏凜、なかなかキレてるね」

床に落ちていた斧が、再び動き始めた。そして私の太ももに肉薄する。雷獣が即座に反応してバリアが刃を受け止めたけど、衝撃でむち打ち確定だ。

これまでのナイフやその他もろもろは一度ぶつかったら二度は動かなかったけど、その斧だけはまるで生きてるように部屋を跳ね回った。

「けど、二人ともお互いを意識しすぎかな。作戦に集中できてないって感じ」

「！教導…!?!」

天井に空いた穴から赤い戦衣の勇者がひょっこり顔を出す。

「芽吹もナイスな判断力。けど夏凜は味方だから。そこはわかってね」

「…三好さん、走って！」  
「うわつとと!!」

楠は突如天井に向かって弾丸をぶちまけた。瞬時に銀は顔を隠す。

天井に着弾した弾は何かが破裂したように広がって、砲丸を叩き付けたような弾痕を穿った。明らかに普通のライフル弾じゃない。

「私がここを受け持つから、三好さんが旗を探して！」

「あんたねえ…! さっきので結構ダメージがっ」

「だからよ！あなたが教導と戦っても瞬殺されるのよ！」

足止めすらままならないのは確かだ。それくらい痛みが走ってま

ともに歩けない。

ここは大人しく指示を聞こう。あいつが銀にボコされようが私の知ったこつちやないし。

戦をしならせて、反動で入ってきた穴に飛び込んだ。逆戻りだけど、道はいくらでも「作れる」。

〈…意外に信頼してるのね、二人とも〉

「作戦遂行能力は。私と同じ土俵に立てる人間は三好さん以外いない」

へふふ。うんうん。楽しみになってきた〈

…うはあ。ひやつとした

何者でもなかった私が、遂に何かになった。

ただ大赦お抱えの宮大工の父親の背中に憧れていただけの子供が、遂に勇者となった。

でもそれは、同時に目標を見失うという意味でもあった。

『選考の結果、楠芽吹及び三好夏凜が勇者システム引継に抜擢されることとなりました』

『……………』

『…ありがとうございます。お役目、必ず果たしてみせます』

『楠さん、…聞いているのですか』

『…ええ』

何故かうれしくならなかった。世界を左右する競争を勝ち抜いてきたのに、当然名誉なことなのに。

私と三好さんが選出されることが自明の理だったというのもある。だけど、それ以上に――

――勇者になって、私は何をしたいのか。名誉を得たいのか。父親に誉めてもらいたいのか。自らの有用性を証明したいのか。

そう考えると、何故かみじめな感じがした。顕示欲の塊じゃない、

これじゃ。

それはつまり、私に中身がないということの裏返しか。恥や外聞を雑音に聞けるほど、渴望するものがないということか。

『何ほうけてんのよ。そんなに選抜されたのが信じられないのかしら？』

『いえ、それは当然のことよ。…どうしたものかしらね』

——一つ心当たりがあるとすれば。

私のとなりにいる同期——三好夏凜との決着がついていないこと。数値化すれば私が僅差で勝るというのが、実際に三好さんと競って決着がついたことがない。

——彼女を完全に打ち下せば、感情の堰は切れるのだろうか？  
努力の対価として相応しいものを得られるのだろうか？

疑問は晴れないままだけど、そう思うことにした。向かうべき目標がなければ、私も研鑽を積む理由がなくなってしまう。勇者である意味を見失ってしまう。

勇者として、三好夏凜を凌駕する。

世界を守るお役目につく人間としてはいささかの外れな目標だけど、神樹様の防衛という目的を果たせるのであれば大赦も黙認してくれるだろう。それくらい連中はクレバーだ。

『……三好さん、あなたは勇者に選ばれて嬉しかった？』

『そりや…もちろんよ。あのくそつたれ共の鼻っ柱を折ってやれるんだから』

『…そう』

「…教導を倒せば、問答無用でテスト合格ということですよね？」

へ言つてくれるねえ。けど、簡単には負けてあげないよ？」

天井の穴から斧がもう一振り飛んできた。隠れていた作業台ごと真っ二つにする勢い。すかさず反応して通路に繋がる扉を蹴破って突入。

三ノ輪教導の武器は一对の斧と聞いたことがある。狭い通路で大暴れするには武器が大きすぎるから、フロアで戦うより有利になるはず。

へすごいね。あたしもそこまで戦闘に詳しいわけじゃないからさ、芽吹の戦略には驚かされるよ

「お褒めの言葉、ありがたく頂戴します…って!？」

私が独学で学んだ戦術は、あくまで常識的なマニュアルに基づく。非常識なイレギュラーに当たればそれは簡単に破綻してしまう。

教導はまさしくイレギュラーだ。ポルターガイストのように斧を先に追跡させるまでは予想できたけど、その後から来た教導は――

天井を走ってきた。

「くっ……！」

同軸にいないのは想定外。ひとまず斧を撃ち落とさないと身が危ない。ゆったり回転するそれを数発撃ち抜いて、軌道を変える。

すぐさま天井に銃口を向けるけど、すでに教導の姿はない。

「ない」？

へさーて、夏凜を追っかけるかー。あたしも真似して床ぶち抜いてみるかなー？>

「!!後ろ!？」

エフェクトの入った声は後ろから聞こえた。以津真天が見た方向に振り向くけど、薄暗い通路に赤い勇者の姿はなかった。鳴るはずの足音も全く聞こえない。

「…やられた。…でも好都合か。これで今度は私がフリー」

目まぐるしく変わる戦況に踊らされて、三好さんがどうして負傷したのかを失念していた。

撃ち落とした斧は再び浮力を得て、私の太ももに刃を立てた。以津真天がすぐさま割り込んで障壁で受け止める。

「ぐうっ……！」

その後機動力を削がれた私を嘲笑うかのごとく、斧は持ち主のここ

ろへくるくる回りながら飛んでいった。

「……勝てるとは思ってなかったけど……。…これじゃ壊滅ね……」

「これじゃただ遊ばれただけじゃない！私なんてその気になれば瞬殺できたはずなのに——！」

勇者に選定されて、実は舞い上がったたのかもしれない。三ノ輪教導と同じ土俵に立てたと思いついていたのかもしれない。

それが、今のみじめな私か。こんなに悔しい思いをしたのも、初めてかもしれない。

いうことを聞かない脚を引きずりながら、迷路のような船内の壁に穴を空けつつ上へ上へと進む。

もうそろそろ甲板に出てもいい頃だと思うけど——。

〈冒険は楽しめたかな？夏凜〉

「げっ、銀……！もう来たの……!?!」

〈来ちゃった♪なーんてね〉

背後から銀の音が響いた。でも、足音は全然聞こえなかった。それが妙に不気味で、振り向くのをためらう。



けど背後を取られたままはマズイ。壁を石突きで小突いて穴を空けながら、隣の部屋に飛び込む。

厄介なのは、あのトマホーク攻撃だから距離が縮む閉所なら真つ向勝負に持ち込めるはず。勝算なんてこれっぽっちもないけど、やらないよりはマシだ。

———てか、楠のやつもうやられたの!? 時間稼ぎにもなってないじゃない!

いや、この勇者様が規格外なだけか。

「さあ来なさいよ銀! 私はこちらよ!」

へお、かっこいいねえ! そういう気合いの入り方は夏凜のいいところだね!」

埃が舞って視界が晴れない。私ならその間に奇襲するけど———  
義眼の黄色の発光は其中でじつと晴れるのを待っている。

へじゃ、あたしもかっこいいトコ、見せないとね!」

視界が晴れて赤い勇者が見えてくると、にっと笑顔を見せて飛びかかってきた。両手のバカデカイ斧を同時に振り降ろすのを戟の柄で受け止める。

受け止める準備は出来たけど、さすがの威力。脚が万全だったとしても数秒と持たないくらい。

「うあつ……なんてバカぢから……!」

へ力比べなら負けないぞ!」

案の定、戟を弾き飛ばされてしまった。

——いやこれムリな試練でしょ！伝説の勇者から逃げ切れっ  
てどう考えても荷が重すぎるわ！

でも、やられっぱなしはシヤクよねっ！

「こんのおー！なんのおー！」

へうおっ!?そう来るかあ！へ

『武器』を使った戦闘ではまるで勝ち目はないけど、殴り合いの訓練もやってないわけじゃない。

逆に銀に飛び乗って、押し倒す。ゼロ距離で有効な武器なんて、それこそ拳や脚だけだから。あとはやるだけ。

へ…だけど読みが甘いかなあへ

「え？」

次の瞬間、銀の義手が変形してプラグのような形になった。そしてその後私は天井まで吹っ飛ばされた。

「っあっ…！」

へさつきまで二人を襲ってたポルターガイスト、忘れてない？それがあたしの仕業だってこともへ

「…なっ…っ？」

部屋に張り巡らされたパイプが突然宙を舞って、私が開けた穴を網状に覆い被さって塞いだ。銀が伸ばした義手からは見えない力が働いてるみたいで、——それがあのポルターガイストの正体だったわけ。

まさに大赦の秘密兵器。思った以上に人間離れしてる。伝説呼ばわりされる噂も納得した。

天井に押し付けられる力から解放され――落ちる私を銀はすかさず抱き止めた。

〈どう？まだ動ける？〉

「…へ？」

〈ごめんな。手加減つてのがどうも苦手で、遠慮なく戦っちゃって〉

「…ちよつ…降ろしなさいよ…！」

ダメージはあるけど、動けないわけじゃない。銀と戦っても勝ち目がないのは変わらないけど。

それより、このお姫様抱っこされてる状況が非常に恥ずかしい。私にいらぬダメージを与えないって意味なんだろうけど、――何の羞恥プレイかつ！

へまあまあ。こんなかわいこちゃんを抱っこできる機会なんてないから、もう少しだけ！な!!?〉

「あんたはおっさんか！」

へはは、よく言われる！〉

冗談を言ったその直後、銀の義眼の光が後ろに集中した。生身の目は相変わらず私を見て笑ってるから状況を察しづらい。

へちよつと動くね。掴まって〉

「えっ？」

銀は軽く跳躍して部屋のロッカーを飛び越えてしゃがむ。人ひとり抱えてできる芸当じゃないけど、この勇者に私たちの常識は通用し

ない。

数秒して、鼓膜を直接叩くような破裂音がロッカーの向こう側で響いた。  
爆弾？

〈グレネード：そういうのもあるのかあ〉

「やり過ぎされた…。出し抜いたつもりだったんだけど」

〈おいで、芽吹も。夏凜もこっちにいるよ〉

「別に助けにきたわけではありません。…教導をどうにかしなければ、任務を達成できないと判断しただけです」

鉄パイプのバリケードを蹴り何発かでこじ開けて青の勇者と小さな怪鳥が姿を現した。既にサイトを覗き込んで臨戦体勢だ。

別にやられたわけじゃなかったのね。尻尾巻いて逃げたか、銀にスルーされたか。けど私と同じく足を引きずってるあたり、銀に逃げられたというのが正解か。

けど、これはチャンス。不意をつける機会はずがある。

〈うーん、正面突破されたかー。即席のバリケードじゃ効果ないか〉  
「やはり教導の仕業でしたか。その義手…サイコキネシスのように物を遠くから動かせるのですか」

〈正解！園子の勇者システムからフィードバックしたらいいんだ〉

私をそつと降ろしてロッカーに義手で触れると、強打したみたいに勢いよく楠の方へ吹き飛んだ。

私の引き継いだ勇者システムから派生した機能らしい。

刃の遠隔操作から対象を移しただけ。それでも強力な武器になり得る。

「…読めてますよそれくらい！あと上から来るのも！」

〈二回目はさすがに気づくか。残念〉

天井に義手を向けると銀の身体は浮遊し始める。これが足音がしなかった理屈か。

ロツカーを避けてさらに飛来する斧を撃ち落として、飛びかかる銀に銃口を向けた。

一切迷いのない動きこそ楠の本領。揺さぶりが効く場面が少なく、苦戦した記憶が蘇る。

〈お見事！だけど残念！〉

「…な!？」

——そんな奴の虚をつけるこの勇者は、本当に規格外だと思う。

急に落下する軌道を変えて、真下に着地。姿勢をかがめたまま接近して、顔面に文字通りのアイアンクローをお見舞いしつつ壁に叩き付けた。

「がっ……」

〈ごめんごめん。痛かったっしょ？〉

「くっ…」

その苦悶の表情は、痛みからではなく悔しさからだろう。あいつは引き分けたことはあっても負けたことはないから。初めて完敗を喫

して、初めて感情を剥き出しにしたのかしらね。

——安心なさい。あんたは負けたかもしれないけど、私はまだ負けてないから。

「でえええいつ!!」

弾き飛ばされた戟を拾ってしなりを利用して跳躍、丸腰で楠の容態を見てる銀に大きく振りかぶる。

〈おっ!まだ動ける!〉

「何かうれしそうね!」

〈夏凜の根性が見れたからね!〉

斧の一つが振り降ろした戟を受け止めるように浮く。もはや銀の手足のように自律してるらしい。

でも、それも想定内!

「いつけええええ!!」

〈ん?うおっ!〉

月牙が、飛んだ。

柄は押しえられたままだけど、紫電に光る刃は振り向いた銀の頬をかすめる。

〈…うはあ。ひやつとした〉

「…え?ちよつと!?バリアは!」

〈あたしのはついてないよ〉

銀の頬から、赤い雫が落ちる。言葉とは裏腹に、何故か満足げな顔をしてる。

「だっ、大丈夫なの!?かなり血出てるわよー!」

へんあ、大したことないって。これくらいでぎゃーぎゃー言ったら、全身機械にしてもダメだって

そりやそうだけど。でも、早く治療しないと悪化するかもしれないし。

とか思ってたたら、楠のやつ、突然息を吹き返した。意趣返しと言わんばかりに隙だらけの銀の後頭部に掴みかかって――

何故か私の頭とごっつんこさせた。

へぶっ!〜

「ぎいっ!?!ちよつと!何すんのよ!!」

「丁度よくぶつけられそうな頭があったからね」  
へきゅ〜…

バリアで衝撃を抑えられた私はまだしも、銀は頭の上にひよこや天使や死神をくるくる回してるし。どーすんのよ、これ。

――ともあれ、不意打ちながらも伝説の勇者をのしてしまったのも事実。一人で戦ったらまるで歯が立たなかったのに。

シヤクだけど、今回は楠にちよつとは感謝してあげないでもない。

「んで?お邪魔虫はご覧のとおりだけど、これからどうする?」

「甲板の旗を回収して、ポートに戻りましょう。もちろん、教導も一緒に」

「はいはい。私が銀を持つから、あんたは斧を持って」



この世の終わりへようこそ

甲板に出ると、昇り始めた太陽が気温をどんどん上げてる。さつさと旗を回収して戻ろう。

「…あっちね。ほら、赤い旗が立ってる」

「さつさと拾って帰るわよ。暑いし重いし」

「教導の方ならまだ軽いわよ。この斧、明らかに体重以上の重さよ」

どうかしらね。銀の身体、本当に全身が鋼の塊ってくらい重いわよ。義手や義眼だけじゃなくて、全身改造してるのかも。

お互い文句を垂れつつ先っぽまでたどり着いた。手の空いてる私が旗に近寄って手を伸ばす。

「……………え？」

視界に入ってくる光が、海の青じゃなくて赤色に変わったことに気づいた。

いやいや、明けはもうとつくに過ぎたわよ。さつきまで青空とネイビーブルーがうっとうしいくらいに視界に飛び込んできたのよ。

首を上げて見渡すと、  
—————そこは地獄だった。

「えっ…ちよつと…！…なによこれ！」

へへへへ…。この世の終わりへようこそ、夏凜

「ぎ、銀！あんた…！」

私の肩の上で伸びてた銀が、怪談話でもするようなテンションでしゃべり始めた。

何が何だかわからない私は、銀に問い詰めるしかなかった。

「三好さん…？消えた…？…え？」

〈芽吹もいらつしやい。ここが外の世界だよ〉

「な…何ですかこれはっ!？」

楠も同じ反応をした。それ以外の反応はありえない。

銀はこれを「外の世界」と言った。

四国の外。未知のウイルスがはびこり…てのは欺瞞で、残された人類を淘汰するための尖兵—————バーテックスがひしめく。そこまでは訓練期間で勉強した。

でも、こんなのは聞いてない。生命を拒絶するかのように乱立する火柱と、逃がしはしないと云わんばかりに広がるマグマ。風景の一部としか思えないほど無数に飛び交う菌茎—————バーテックスを構成する「星屑」。

私たちがこれから立ち向かう相手は、そんな理解不能な存在なのか。これが人類を淘汰しようとした神の強権なのか。

〈どう？怖じ気づいた？〉

「…教導は、これを見せるために…？」

〈半分正解かな〉

私の肩からすつと降りて、私たちの真意を問うように見つめてきた。生身のその強い視線も、義眼のスキヤンするような光も、逃げ場はどこにもないことを訴えかけてくる。

「…ふん。銀一人で四国を守れたって言うんだから、三人いれば楽勝でしょ」

〈頼りにしてるよ、夏凜。芽吹は？〉

「…逃げ出す理由にはなりません。今までの努力を無為にするようなことですから」

〈二人とも芯がしっかりしてるねえ。神樹様の目に狂いはなかったわけだ〉

やはり笑顔で私たちを見る。いや、むしろ笑顔でない時の方が珍しいくらいか。

私たちが見込み通りの勇者で満足したのか、それとも別の理由があるのか。私にはわからなかった。

その後銀は、私と楠の手を引っ張って歩き始める。

——義手、むっっちゃ熱くなってんだけど！

へささ、用は済んだしさささと帰ろう。暑くて死にそう

「あつつつ!!ちよつと銀!義手で触らないで!」

「何やってるの…あなた達」

——手をつないだのつて、いつ以来だっけか。兄貴と一緒にの時、だっけ。

義手にこもった熱じゃないけど、何故か全身が暖かくなる気がした。

へあーまずいね。派手に暴れたせいで崩壊が船全体に伝搬しちゃったみたい

「さつきからギーギー軋んでたし、沈没も時間の問題ですか」

「早く脱出しないとさすがに危ないわね」

「向こう側」から戻ってくると、船全体から叫び声のような軋みが生み出す。しやべる声もなかなか通らないくらい。

あとは脱出するだけだし、最悪勇者の力に身を任せて海に飛び込んでもいいと思うんだけど。

「船内から戻るのも時間がかかるし、海に飛び込んだら早いのでは?」

「…あんだ、自分がケガしてるの忘れてない?」

「これくらいで行動できなくなるほど軟弱なつもりはないわ」

へ…芽吹は怖いくらいにストイックだなあ。けど、あたし痛いのは勘

弁

銀の勇者システムには、バリアがついてない。それでこの高さから着水したら確かに痛い。済む話じゃない。

でも悠長に歩いてらんないのも事実。船と心中とか笑えないし。ここは――

「銀、しっかり掴まってなさいよ」

「え？」

「じゃ、お先行ってるわね。下手な着水してケガ増やすんじゃないわよ」

「どうも親切にありがとう三好さん。そっくりそのまま返すわ」

油断しまくりの銀を後ろから抱き上げて、朽ちたフェンスを飛び越える。

銀にバリアがないなら、銀のバリアになればいい。楠と同じくらい安直で根本的な解決方々だ。私もあいつに毒されてきたかも。

「どわわっ！夏凜！やばいって！」

「私のケガのこと？あんたがやったくせによく言うわ」

「…返す言葉もございません」

そうやって銀は黙ってしまった。――何となくだけど、この人の性格がわかってきたかも。

銀をかばうように私が水面に背中を向けて落ちる。生身だったら無事ではすまない落ち方だけど、勇者なら平気、のはず。

「衝撃用意！ぶっぶー！」

へうわあ…すごい音だったけど大丈夫？」

「…ノープロブレム。完璧な着水だったでしょ？」

派手なしぶきを立ってたけど、銀の斧の一撃に比べれば布団に飛び込んだくらいに威力だ。なんてことはない。

心配そうに顔を覗いてくる銀はずぶ濡れだけど無事そう。まどわりついてきた雷獣の頬をつんつんして遊んでる。

私は大丈夫とジェスチャーで伝えると、またド派手なしぶきが海面に上がった。

へ芽吹も無事かー？」

「はい、問題ありません。教導こそ、義肢を海水に付けても大丈夫なのですか？」

へ…帰ったらオーバーホールだね」

「…動かなくなる前に戻りましょう」

楠はため息をついてから、ボートの方へ泳いでいった。

—— そりやそうよね。こんな精密機械、いくら防水しても限界があるわよね。

「銀、ボートまで泳げそう？」

へ別に泳いでもいいんだけどね。せつかくおもしろギミックがあるん

だからね〈

「おもしろ…?」

義手を船の方に伸ばして、銀はそつちに引き寄せられた。

あ、自分を引っ張るパターンもできるのか、忘れてた。

———  
てか、これじゃ私が抱えて飛んだ意味ないような。

〈じゃ、お先〉

「…ほんと、やりたい放題よね」

ゴングンと船の側面を踏み鳴らして進む銀を見て、なんかもうどうでもよくなった。敵も味方も常識の通用しない相手だって、嫌というほど思い知らされたから。

〈うわあ…授業だるう…〉

名目上一応私たちも学生というわけで、教育を受けなければならならぬらしい。丸亀城に戻ってから、教室に集合をかけられた。

———  
席につくなり三ノ輪教導はそうぼやいて机に突っ伏す。薄々感付いていたけど、教導は優等生ではない。どちらかと言えば問題児タイプか。

義手は大赦のエンジニアに預けているのでノートは取れないというけど。体のいい屁理屈じゃないかしら。

「真面目にやりなさいよ。勇者権限で補習かないとかあんの？だからそんなに」

〈その話はやめましよう夏凜さん。あたしに悪夢を見せないでください〉

「ああ、補習は経験済みなのね。…しようがないから今日のノートは写させてあげるわ」

〈いやー助かるよ夏凜。持つべきは優しい友達だな！〉

「べ、別に優しくしたつもりはないわよ！手が使えないから仕方なくよ、仕方なく！」

また三好さんはいつものやってる。教導が仲良くしてくれただけで、こんなに甘さをさらけ出してる。

——— 教導は他の大赦の人間とは違う。私たちと対等な立場であらうとする姿勢もそうだけど。

——— うまく言い表せないけど、何故かこの人は信用していい、信用しなくちゃいけないと思ってしまう。理由も不明だし、そもそも私にそんな人は必要なのかと考えてるけど。

「…ほら銀、先生来たわよ。姿勢を正して」

〈はーい〉

「…どつちが教える立場かわからなくなるわね」

——— “教える” 気なんて毛頭ないのかもしれない。一緒に感じて、学んで、共有して。



今日の朝だってそうだ。何一つ教わってない。教導したそれらしい行為は評価だけ。――けど確かなものを得られた。

「起立」

「礼」

「神樹様に、拝」

まだ二人のこと、何も知らないんだよね…

教導の義手は昼過ぎには帰って来た。もしものことを考えて、超特急でメンテナンスを終わらせたらしい。

でも、教室で装着する場面を見せてくるのはちよつとキツイ。

〈おかえりマイアーム〉

「うわっ…ちよつとグロ…」

「…見ている気分がいいものではないわね」

教導の二の腕の骨のあった部分から、黒鉄のジョイントがせり出している。この部分はもはや人間ではないということか。

自分の身体に鉄の塊が挿入されるのを想像して――悪寒が走った。

戦い続けて、身体を失って、機械なしでは生きられなくなっても戦い続ける。

――教導の尊敬すべき生き様であり、未来の私たちの姿、なかかもしれない。

――パパが私のそんな姿を見たら、何を思うだろうか。いつも通りに一瞥だけして仕事に戻るだろうか。傷は誉れと称えてくれるだろうか。それとも――

〈ぎやあつーも、もちよつと優しく…〉

「銀様、もうそろそろ慣れてください。付ける度それでは、我々としてもやりづらいです」

へはあー。サイボーグになって無敵になったと思ったのに、まだまだあたしも人間なんだなあー」

ガンツとかカチンとか、およそ人間から出る音ではないのだけだ。

大赦のスタッフにぶつぶつ文句を垂れながらも、義手の動作のチエツクを平行して行う。この動きに関しては手慣れた様子だ。

〈動作部異常なし、と。勇者システムは〉

教導は何の予告もなしに勇者システムを起動させた。その手には端末も持つてなくて、理屈も説明がつかない。

しかし起動したものは間違いなく勇者システム。赤い牡丹の花が舞ったかと思うと、先ほど私たちを散々打ち負かした赤い勇者が身体を動かして異常の有無を確かめていた。

「え？銀、端末は？」

へこの腕の中だよ。…って言うより、身体自体がもう勇者システムでできてるんだけどね」

「…明らかなオーパーツっぷりも納得しました。そんな生き物みたく動くマシン、見たことありませんし」

へ自分でも未だに実感ないけどね。あたしと、機械と、精霊の融合ってさ」

――教導の秘密の核心に迫ることだけど、聞くのも怖い気がし

た。私たちの行く末が得体のしれないサイボーグの方が、ただの化け物になるより良い気がしたからか。

へよし、動作正常。忙しいのに申し訳なかったです

「礼には及びません。銀様はもはや神樹様の一部。かしづかずして如何としますか」

へまあ、エンジニアさんは冗談半分って感じもしますが、神官たちはほんとにもう…

たはー、と苦笑い。敬虔な連中ほど、教導の存在は畏れ多いものを感じてるのだろう。それを息苦しく思っているようだ。

へお疲れさまでした。異常なしって報告してください

「かしこまりました。…今日の教練も頑張ってください」

へかわいい後輩が二人もいますからね！銀様張り切っちゃいますよ！

システムを解除しながら教室に背を向けたエンジニアに義手を振った。誰に対してもフレンドリーなのは教導のアイデンティティーか。

「…何難しい顔してんのよ、辛気くさい」

「そういう三好さんだって、悩ましい顔してる」

「してない。銀の心配なんて」

へその気持ちだけであたしゃ胸がいつぱいだよ。ありがとね夏凜

「なあ!?別に心配なんてしてないって言ってるでしょ!?!」

——— また墓穴掘ってるわ。本当に人付き合いが不器用よね。

そしてまた教導は三好さんの頭をわしゃわしゃと撫でてる。見てるこっちも恥ずかしくなるけど、本人は言葉も出ないくらいに真っ

赤つかだ。

〈…芽吹も、いつとく?〉

「結構ですっ!」

午後からは初の教練。地下に作られた巨大空間に集合をかけられた。

教導と会った時にいた神官の監視の下で、対バーテックス用の戦術を学ぶ。ケガはまだ全快とはいかないけど、動いて支障はないそう  
だ。

〈バーテックスを倒す手順は意外と簡単だから、よく聞いてて〉

「…言ってくれるじゃない。そんな秘策があるの?」

〈勇者システムが進化したからね。足止め、引き出し、撃破の三つで片  
付くよ〉

あまりに抽象的すぎてピンとこない。言葉まで簡単になりすぎている  
ような。

〈まず一つ、足止め。接近したり攻撃したりして無力化するところか  
らね〉

「…割とそれが難しいと思うのですが」

〈簡単簡単。バリアがあるから接近は多少強引でもいいし、攻撃力は  
二人が知ってる通りだよ〉

「経験者のお墨付きって言うなら、本当に簡単なんじゃない？性能の劣ったシステムを使って殲滅したっていうならさ」

そういうのは自分で検証しないと確信できない。その楽観視で足を元をすくわれたくないから。

でもそう言っても話が進まないのは事実か。

へんで次、引き出し。お偉いさんは「封印の儀式」なんて大層な名前付けてるけど、そんな大袈裟なことじゃないよ」

「銀の基準が全然わかんないわ。高くにありすぎて」  
へなに。すぐ追い付くから。実際やってみれば」

説明するよりも、実践の中で会得していくのが教導のやり方らしい。

言葉は簡単に、あとは身体で覚える———実は理に叶ってると思う。

「…具体的には、何をすれば良いのですか？」

「バーテックスに念を送る感じ、かな。声でも何でもいいから動くなって」

「そんな都合のいいことがあるわけ…ないとは言いつれないわね」  
「こそ。神樹様は偉大なんだよ」

———それを確信もなく命がけの場で実践したあなたも、十分偉大だと思います。

あと教導はもう少し態度を大きくした方が威厳が出ます。それくらい許される立場にあるのですから。

へで、そうやって動きを封じると、御魂” っていう、ゲームで言えば本体みたいなのが出てくるよ」

「それを破壊すれば、撃破ということですか？」

「話が早いね、その通り！時間制限こそあるけど、この手順を守って戦えばまず失敗することはないはず」

おおよそ話は理解した。御魂を破壊すれば簡単に倒せるから、封印の儀式で炙り出すために足止めをする。

教導の話も分かりやすく助かる。座学こそ苦手だけど、決して頭が悪いわけではなさそう。

それがここまで生き残ってきた所以か。

「ここまで質問ある？」

「いえ、ありません」

「私もないわ」

「二人はほんと賢いねえ。…じゃ、実際にシミュレートしてみよっか。あたしは見てるから二人で頑張って」

教導は神官の隣まで下がって、何も無い空間を見渡した。

「シミュレートって…？」

「まあまあ、見てなっって」

教導の義眼が流れるように点滅すると、ホログラムのようなものが空間に描き出された。

パステルカラーの巨大な植物が幾重にも折り重なる、少し不気味な

光景。

「へ神樹様はバーテックスとの戦いの場を設けてくれるんだ。 樹海  
“って呼んでるけど、その再現”」

「…つまりこれは、銀が見た光景ってこと？」

「へそうだね。そしてこのバーテックスも、あたしが倒したやつ記録」

遠くから、地面を「泳いで」来る何かが見えた。距離からしてもかなり大きく見えるあたり、私たちの敵というのは相当大きいらしい。

私も三好さんも自然に武器を取り出した。三好さんは軽く準備運動をして身体の調子をうかがう。

私も身体をほぐしながらも、アンダーバレルの弾をどれにしたら効果的かを考える。

充実感のある訓練を目の前に、少し私もいきり立ってるのかもしれない。

「へしょせんプログラムだし物理的接触はないけど、二人のアクションに依じて敵も反応させるからちょっとやってみて」

「いきなりこんなのが来るとは思ってたけど、腕の鳴る訓練じゃない！」

「教導の記憶がそのまま投影されているならリアリティもあるつても  
の！」

二人で一斉に目標に向かって駆け出した。細かい作戦など取り決めていないけど、左右二手に別れて挟撃を試みる。

「敵の姿が見えないわ。どこから奇襲してくるかわからないから気を付けなさいよ」



「わかってる。余計なお世話よ」

この人のお節介はもはや病気みたいなものなのね。いくら嫌って  
いようが無意識に心配してしまうって。

言葉通り足元の気配を探ってみる。視覚では敵を捉えられないけ  
ど、音は聞こえる。

「……そっ……」

丁度私に狙いを定めたらしい敵が、側面の地中から真っ直ぐ迫って  
きたのを察知した。

敵の通過点を予測して地面を抉る威力のあるグレネードを撃ち込  
む。

迎撃は成功したらしく、一本釣りされた鰹のように空中へ飛び出  
た。

「捉えた！」

サイトの向こう側に捉えたのは、巨大なイカのようなオブジェク  
ト。この樹海にも負けず劣らずサイケデリックな見た目だ。

怯んでなどいられないので、即座に小銃のトリガーを引く。強烈な  
空気圧をばらまく弾丸がバーテックスの外皮を穿つ————ビジュ  
ンが見えた。

「とおおりやああー！」

撃たれて尚私に突っ込んでくるイカを、三好さんの戟が胴を突いて

打ち上げる。三好さん、いつの間に距離を詰めてたの？

戦の一撃は巨体をもものともせず、イカを更に上に突き上げた。放電したようなプラズマがバーテックスの姿をあやふやにする。

「動くな、イカ野郎！」

戟を突き立てたまま三好さんが吼えた。宙で虚しくバタついていたイカは動きをピタリと止めて、ツボの部分から角錐のようなものを落とした。

「一ミリにも満たない、極小なのだけけれど。サイトから覗かなかつたら私も見落としてる。」

「ええ!?ちよつと!?何も出てこないわよ!？」

「足元!三好さんどいてー!」

三好さんはそれを見落としたようだった。そんな木つ端みたいなものをいちいち全部見て確認する人間もどうかと思うが。

でも声にはちゃんと反応してくれて、外殻を地面に叩き付けると同時に自身は跳ね上がった。

あんな武器を使っておきながら身軽に動けるあたり、——さすが三好さんと言っておこう。

「仕留める……!」

ランチャーに再装填する時間も惜しいので小銃で狙い撃つ。

弾より小さいものに当てるなんて人の所業ではないけど  
私は勇者だ。人にできないことができる。

目で見ず、気配で合わせて、引き金を引いた。

キンツと弾ける音が鳴って、三好さんが串刺しにしたイカは崩壊、霧散していった。

「…目標撃破」

「……ありがとう、楠」

「…あなたにお礼を言われると気持ち悪いわ」

「なあ!？」

何だかギャーギャー文句を言い始めたけど、背筋に気持ち悪いものが走ったんだからしょうがない。

でも、それとは別に何か突つかかるものも感じた。

〈ブラボーブラボー。園子がビュオオオウって言いそうなデレありがとう〉

「そっちの感想!?!バートックス倒したことへのコメントはあ!?!」

〈いやね、夏凜はほんとかわいいなあ、って〉

拍手の音と共に教導がツカツカ歩いてきた。何やら訳のわからないことを言いながら。

勢い止まらず三好さんはツツコミまくる。照れ隠しなのかしら。

へまあまあ。いや、実にお見事！二人ってほんとはすごい仲良しなんじゃないの？」

「ありえませんが。三好さんとは分かりあえる部分がないに等しいので」

「…こんなこと平気で言っちゃやうやつとは仲良くできないわよ」

へそうかな？少なくとも今の動きはお互いを信頼してるみたいだよ」

私が？甘ったれの三好さんを？

彼女の能力は私も認めている。厳しい訓練を耐え抜いてほぼ同格の成績を残す力を持った人間なのは理解している。

けど、一時の感情で行動してしまう人間は信用できない。判断のブレで被害を受けるのは御免被る。

へ…そっか。あたしもまだ二人のこと、何も知らないんだよね…」

「…ええ」

「……………」

昨日とは打って変わってしんみりした顔を見せた。

何故か胸が苦しくなった。今までに感じたことのない痛み。その理由を必死で考えるけど、当てはまるものは一つとしてなかった。

へ…先生、今日の教練終わりでいい？」

「……それは銀様にお任せします」

へ…ありがと、安芸先生」

教導は神官に一応の許可をとって、教練を終了させた。

結果に満足したのか、それとも別の理由があるのかはわからない。

——でも、このモヤモヤを引きずったままいるのは良くない。  
時間をおいてくれてよかったとも思える。

これはすのうどん

「……………」

予定よりも早く教練が終わったので、大幅に時間が空いてしまった。

共同生活を送る大広間で一人正座して、さっきの感情の手がかりを探る。

三好さんは身体を動かしたいと一人ロードワークに出て、教導は必要な生活雑貨を揃えてくると言って外出中。

「……………どうしたっていうの？私」

今の私の精神は麻のように乱れている。教導に提示された課題は全てこなし、評価も悪くなかったはずなのに。

原因の尻尾すら掴めず悶々とした思考を肥やすだけ。何事にも集中できない。

———  
「こういう時は、気分転換が必要か。」

「…せっかく丸亀城にいるんだし、実物をじっくり拝見してみようかしら」

現存する城郭の中でも、特に価値のある丸亀城。西暦の時代に内部

を改修されこそしたけど、その外観は変わらない。

「……初代の勇者が過ごしたという歴史がその価値を上げたとも言えるが。」

「……やっぱり構造は大社様式なのね。大昔からの伝統を、守り続けてきたんだ」

その場で内装を見渡せば、パパが代々受け継いできた建築様式の片鱗が見える。見間違えるはずがない。

ふと、数年前にパパがとある城の改修の仕事を引き受けたことを思い出した。

「……私のパパが受け継いだものは、歴史を記すものであり、今の私の家ともなった。」

「……パパはこんなところでも私を見守ってくれているんだ。ぶっきらぼうだけど、誠実であたたい。そんな背中を思い浮かべる。」

「……こんなに連絡を取れないことがつらいと思ったことはないわ……」

「……勇者に選ばれた時点で、一般人との交流は極端に限定されている。それが、肉親であったとしても。大赦からは通達があったとは思いますが、自分で報告はできていない。」

「……ありがとう、って、伝えられてない。」

「……もう少し見て回ってみましょう」

私の心を巢食っていたモヤモヤは、パパの面影に溶け込んで見えなくなっていた。

---

銀のやつ、あんな顔しちゃって。

何であんなに私と楠の仲にこだわるのかわからないけど、悪いことしたと思ってしまう。

「はあ…。ダメだ、全然集中できない」

軽く運動して気持ちを切り替えるつもりが、ペースを維持できずに体力を消耗するだけだった。

夕焼けの丸亀城を眺めて、またメランコリックな気分になる。

「…帰ろ…。帰って安眠用のサプリ選んどこ…」

———  
そもそも何で私は申し訳なく思ってるの？銀が何を考えようが私にはどうでもいいことじゃない。

私は勇者。勇者三好夏凜。それ以上でも以下でもない。



——三ノ輪銀の亡き戦友の代替品でも、PTSDのカウンセラーでもない。使命を受けた勇者だ。

「…次はきっぱり言わないと。馴れ合うつm」

〈何をきっぱり言うって?〉

「もおお!?!」

突然エフエクトの入った声が聞こえて奇声を上げてしまった。

振り返れば愛媛ミカンのダンボールを抱えて——義手のギミックで浮かせて運ぶ銀の姿が。

〈夏凜も今帰り?〉

「…まあ、そんなところ」

〈鍛え方が違うなあ。園子の三倍は馬力あったもん〉

ぎつしり雑貨品の詰まったダンボールを片手で抱えながら言うセリフか、それは。

あと、先代と比べるのもやめてほしい。私は三好夏凜。再度言う。私は三好夏凜だから。

「…持つわよそれ。一応チャレンジなんだし」

〈そういう気遣いができるところが夏凜のいいところだね。ほんとは生身よりパワーが出るのにさ〉

身障者というにはあまりに活動的だとは思うけど。事情を知らない人から見れば目耳声と腕を失った可哀想な女の子だし。

銀から荷物を奪い取って、隣を歩く。

「…ほんと褒めてばつかよね、あんた」  
「最初に言ったっしょ、褒めて伸ばすタイプだつて。人のいいところ見つけるって、人を好きになる一歩目だと思うよ」  
「……………」

「ダメだ。この人は心の底から私を思ってるらしい。そんな人を私は裏切れない。」

「これだけ私のこと気にかけてくれる人って………今までいなかった。」

「へん？どうしたの夏凜？」

「………何でもないわよ。楠のところで仲良くしなさいって言ってきたさいよ」

「それは夏凜もだよ。芽吹のいいところ見つけて、そこを好きになろうよ」

「わかってるわ。…私も、頑張るから」

「初めて人を、信じてみようと思った。」

「パパが手掛けた内装と歴史ある外観の城郭を心行くまで拝見した後、大広間へと戻ってきた。まだ教導や三好さんは帰ってきてなかったようだ。」

「今度また丸亀城のモデル作ろうかしら」

実物を見て、部品一つひとつに込められた思いに触れて、衝動に似た創作欲がせり上がってきた。

休暇はまだないと思うので、インスピレーションをまとめようと荷物を漁る。

「…ん。誰かの荷物が混じってるわ」

かばんをまとめておいた場所に一つだけ私のじゃない物が。

「…名札がついてた。三ノ輪…教導のか」

いつ紛れ込んだんだろう。教導の置き場に戻しておこう。

それを持ち上げた時、口が空いていたのか一冊の書類を落としてしまった。

「教導…ずぼらなんですから…：『勇者御記』？」

書類はなぜか仰々しい和装で、表題には勇者御記と書かれていた。勇者に関する資料か何かかしら。

無意識の内に表紙を開いて目を通した。

かわいい勇者の後輩が二人もできた！三好夏凜と、楠芽吹。

二人ともクールだけど照れ屋さんで、似た者同士だから仲が悪いのかも。二人の仲を取り持ってあげないとね。

夏凜は意外にノリのいいところもあって、実はすごく優しい子だと思う。芽吹はちよつと気難しい性格だけど、決して悪い子じゃない。

優秀な二人と友達になれて、ほんとううれしい！もつと仲良くなりたいな。

バーテックスとの決戦が始まって、今度は二人を絶対守り抜いてみせる。

須美と園子の二の舞にはさせない。

そのページの字を追っただけで、引っ込んだはずの感情が炙り出されるようだった。

これは嘘偽りを書く必要のない教導の手記であり、

——先立った戦友のようににはさせないと決意したんだ。代替品としてではなく、友達として。

「……いい人すぎでしょ、教導……」

心の底では別の思惑を持っていると思ってたけど、教導はそういう人間ではないらしい。表も裏も存在しない、——まるでパパのように真っ直ぐな人なんだ。

——そう理解して、やっと私の気持ちに気付いた。

「……心を許したいんだ、あの人に」

私が心を許した人間はパパだけ。勇者になるための訓練を始める前も、本当の意味で心を開いた友達はいない。

——孤独の中で戦い続けるのに疲れたのかもしれない。パパと同じくらい偉大で崇高な人に、自分の本心をぶつけてみたいのかもしれない。

そう思わせる何かが、あの人にはあるんだ。

「……私も、弱ったものね」

そつと御記を閉じて、かばんの中にしまった。勝手に覗いて悪いこ

とをしたと思う。

けど、おかげで気持ちの整理がついた。

「教導の…銀の言葉、真摯に受け止めないと」

———  
神樹様、この出会いに感謝します。

〈夏凜ってさ、お兄さんいるんだね〉

「え？知ってるの？」

歩いてる途中で、銀はそんなことを聞いてきた。

どこで知ったか知らないけど、———できれば触れられたくない話題だ。

〈さつきハルさんに偶然出くわしてさ、〴〵うちのかわいい妹をよろしく〴〵ってさ〉

「なあっ!?!」

〈ほんとに妹のこと好きなんだなーって。前々からけっこう話してたもんなー〉

あのバカ兄貴は！人の思いも知らないで———！

「こつ恥ずかしいことして、あのバカはっ！」

〈こらこら、お兄さまの悪口はいけないぞ〉

「…で？どこで知り合ったの？」

〈…あたしの身体のあちこちが使い物にならなくなった時〉

——頭に登ってた血が、急転直下する。

〈…ハルさんがいてくれなかったら、たぶんあたしここにはいなかったなあ〉

「……………」

〈そんな人の頼み事だからね。夏凜が嫌がってもあたしはついてくよ〉

兄貴の意図が掴めない。あと銀に何をしてあげたのかも。

私はきつぱりと断ったはずだ。兄貴の手助けは受けない。私の力で勇者になってみせるって。

裏で何か糸を引いてたのかもしれないけど、——考えないようにしよう。

で、勇者になった途端に——銀を教導として送り込んできた、とでもいうの？

そこまで思考が回って、どうしようもない憤りが頭を埋め尽くす。勇者になってもしよせん私は出来損ないとでもいいたいわけ？だから自分の知人を送り込んできたわけ？

「へかりーん？顔怖くなってるぞー？」

「……ごめん」

——銀のきよとんとした顔を見たら、邪推に邪推を重ねていた自分が恥ずかしくなってきた。

少なくとも銀はこれっぽっちも陰謀なんて企ててない。ただ私のことをひたむきに思ってくれてるだけ。そんな人にマイナスの感情をぶつけるなんてどうかしてる。

話題を変えて、頭をリセットしよう。

「……うちのバカ兄がなんか変なことしなかった？」

「へえ？身体が不自由な間、リハビリに付き合ってくれたりお世話してくれたり話し相手になってくれたただだよ」

「例えば？」

「へお風呂入れてもらったり、ご飯食べさせてもらったり」

「……殺す。あとで必ず殺す」

銀だって年頃の女の子よ!?!男がそんなこととして許されるとでも思ってるの!?!

そりゃヘアスタイルも飾りっ気ないし、胸もこっちが気の毒になるほどべったんこだけど——。てか本人は全然気にしてる様子もないし！

「へそんなに目くじら立てることも。それともアレ？お兄ちゃんを取らないでっつへぶうっ!?!」

「……あんだ、兄貴に似てるわね。その余計なこと言うところとか」



抑えきれずに箱の中の歯みがき粉を投げつけてしまった。大袈裟にのけぞるけど、あれはからかい半分だから。気にしたら負けよ。

へ…ありがとね、夏凜。お節介焼きなところはハルさんに似てるよ

「そりやどうも。…部屋ついたわね」

へんじや芽吹も誘って食堂に行こっか

両手が塞がった私の代わりに、銀が戸を開けてくれた。仰々しく「どうぞどうぞ」なんて言って。基本的にふざけたい人なんでしょうね。

「…おかえりなさい、二人とも」

へん、ただいま。芽吹

ん？

この角の取れた落ち着いた声は、楠の？

いやいや、ありえない。銀にならまだしも、私に声かける時は基本イヤミしか言わない奴だし。

へ芽吹、これからご飯行こうよ。昨日行けなかつた食堂で

「ご一緒させていただきます、教導」

へ…気持ちの整理はついたみたいだね、感心感心

「これからは心を入れ換えて教練に臨みます」

何があったかは知らないけど、あいつも憑き物が取れたらしい。こんなに緩んだ表情の楠を見たのも初めてだ。

「三好さんも、…お互いに気に食わないところもあるけど、寄り添える努力をしましょ」

「…わかってるわよ」

こんな先制攻撃を食らうのも予想外。拒絶具合は私より酷いと思ってたのに。

それが何となく悔しくて、今度はこっちから楠の手を取って引く。

〈ビュオオオオウ！メモ！メモ取らなきゃ！〉

「外野うるさい。銀のうどんだけ具を抜き取るわよ？」

〈ごめんなさい、すのうどんさんは勘弁してください〉

的確にちやかしてくる銀は放っておいて、食堂に向かった。

—— 乃木園子のモノマネってことは、つまり彼女はそういう趣味だったわけか。銀といい乃木園子といい、変人ばかりじゃない。

〈今日も一日お疲れ様ー。二人の実力にたまげたよー〉

銀がそんなねぎらいの言葉をかけてくれたのは、城に併設された大浴場。湯船に浸かりながらいつもの笑顔で。

夕食のあと、私も楠も銀に連れられてやってきた。昨日は個々人で訓練施設のシャワールームを使ったから存在に気付かなかった。

「…なぜお風呂まで一緒に…」  
〈それはだね芽吹くん。そういう伝統があるからだよ〉  
「てか、義手をお湯につけて大丈夫なの？」  
〈熱には強いよ。今回のオーバーホールだって、しばらくやってなかったしついでにと思って〉

——義手の指をワキワキするのやめろ！絶対おさわりしてくる気でしょ！

「……でも銀は他の入浴施設じゃ出入り禁止ものよね」  
「まさか本物のフランケンシュタインの怪物を見るとは思ってたわ」

〈あ、それだ！サイボーグって言ってた割には生身が多かったし、フランケンって言った方がしつくりくるね！〉

——楠、さすがにそれは酷い例えよ？

銀の生身をさつき見たけど、身体中メスを入れて縫合した後が走っていた。タトウーを見るより生々しくてちよつと寒気を覚えたけど、やっぱり本人は全然気にしてない。

「冗談でも納得しないでください。最後に彼は創造主への復讐を果たせず、自ら命を絶ってしまうから…」  
〈そういう物語だったんだ。けど大丈夫。あたしは大赦を恨んでなんかいないし、夏凜と芽吹がいる限り死なないから〉

「面と向かってそんなこと言うのやめなさいよ…！恥ずかしいじゃない…！」  
「………銀……」

なんでそんな恥ずかしいこと、照れもせず言えるのよ！その心の仕

組みまで改造してるの!?

——ん? 楠の奴、何か変だ。あいつも照れると思ってたのに。

「……じゃあ大丈夫ですね。私と三好さんはいなくならないから」  
へへへ、うれしいこと言ってくれるじゃないの。芽吹、愛してる!」  
「たった二日で愛してるなんて言わないでください。安っぽくなりま  
す」

銀は案の定楠に抱きついた。対する楠も———何だかまんざら  
でもない様子。

あいつ、優しくされるとしおらしくなるの? 最初の親睦会もそう  
だったし。

へへへへ。でもほんとだからなー。…お?」

「きやつ!?! な、なにするんですか銀!」

へうくん、でかい。これはすのうどん」

だからスノウドンって何よ!?! 素うどんのことじゃなかったの!?!

———やばい予感がするから先に上がろう。

「わ、私は先に上がるわね」

へ逃がさんよ! ビバーク!」

「こ、こら! くつつくなあ!」

即座にターゲットを変更して飛び付いてきた。警戒はしてたつも  
りだったけど、難なく突破されてしまった。

へあたしのこの手が真っ赤n

「言わせないわよ!!てか義手むっちゃ熱っ!」

へほうほう、これは…残念ながらおでんワールド。山とは言えないねえ

「オデンワールドってなんなのよ!」

何をされたかは察しなさい。めでたく二人仲良く謎の称号をもらって、何とか聖なる探求者の魔の手から逃れた。

————— ちよつと甘やかしたらこれだし、普段は突き放すくらいでいいのかも。

勇者部丸亀支部、 出動！

「……何それ」

教導の謎の号令に、三好さんが至極当然のツツコミをいれた。

翌日の午後は、課外活動ということで学校のプールに来ていた。

水は抜いたままで、ヘドロになりかけの汚物が所々に点在してる。そして私たちの手にはデツキブラシとホース。

——これから何をするかは言うまでもない。

へ一応ね、あたし達は丸亀中の特別学級の生徒なわけで

「…イヤな響きね、銀でもないのに障害持ちみたいじゃない」

へまあそれはおいといて。二人にはあたしと一緒に「勇者部」の活動をしてもらいます

部活動ってこと？学校の生徒としてのの。

まあそれは構わないけど。大赦も一般生徒として健全に教育を受けてるって実績が欲しいのでしょうか。

——けど、「勇者部」って？バーテックスの侵攻を阻止して撃滅するのがお役目じゃないの？

「教導、勇者部というのは何でしょう」

へよくぞ聞いてくれました芽吹。勇者部とはっ！！

教導が芝居がかった声色でうれしそうに説明を始めた。私も三好

さんも怪訝な顔を止められない。

「勇者部とはっ、世のため人のために善をおこなう部なのである！」  
「…有り体にいえば、ボランティア部？」

「似てるけどちよつと違う！依頼者本人から依頼を受け取って、できる限り遂行するんだ！」

「いわゆる何でも屋というやつですか」

「あ、お金は取らないよ。困ってる人に手を差し伸べるのが目的だからね」

—— 概要は理解できたけど、教導の意図がわからない。

そういう時間があるならば、テックス討伐の鍛練に費やすべきだし、学生としての健全な実績を証明するにしても少しはすねな気がする。

「へんで、今日の依頼者は用務員さんと水泳部から！ほんとなら用務員さんがプールの掃除をするはずだったんだけど、腰を痛めちゃったらしくて」

「それで代わりに私たちに依頼をもってきたと」  
「そんな感じ。水泳部のみんなも後で合流するけど、ささっと済まして残った時間で一緒に遊ぼうと思ってさ」

途中から教導はうれしそうな顔をして親指を立てた。意図はやっぱり掴めないけど、仕事というなら早いに越したことはない。

—— 三好さんは不服そうな顔してるけど。

「それじゃ体のいい雑用じゃない。私たちにはバーテックスを殲滅するって大事な役目が」

「勇者である前に学生だよ。こういう機会でしか他の生徒と関われない」

いから、大事にしようよ」

「その必要はあるの？大赦の機嫌を取りたいなら勝手にやりなさいよ」

「三好さん、ストップ」

勇者になつてなお下働きというのが気に食わないのか、教導に噛みつく三好さん。これじゃ教導の真意を計れない。

声を強く制止して、教導にその本心を問う。

「この活動の目的を教えてください」

へあれだよ。勇者としてのお役目だけじゃなくて、その後の学校生活を楽しく過ごさせるようにと思って」

「…お役目の他、ですか」

へうん。二人ともまともな青春送ってないはずだから、せめてオフの時だけでも楽しい時間を過ごせればいいなと思わない？」

——— 教導も歯に衣着せぬ物言いをする。私たちのこの二年は確かに鍛練に明け暮れて、一般に言うところの青春など感じることはなかった。

そんなもの必要ない、と言ってしまえばその通りだけど。

——— だけど、その後はどうだ？

一般に言うところから外れていびつに育った私たちが、一般社会に溶け込んでいけるだろうか？

へほんとに嫌なら無理強いはしないよ。あたしが勝手に決めちゃった



ことだし」

「…いえ。私は教導の意向に従います。これが必要なカリキュラムと  
いうのは理解しましたので」

「…そんな悲しそうな顔しないでよ。私が悪いみたいじゃない」

「その言葉は是と捉えていいのかしら？」

「…仕方ないじゃない。そんなもつともらしい理屈を並べられたら。  
それが連中の言いなりだとしても」

三好さん、教導に不満があると言うより、大赦に媚びを売ることに  
納得いかないらしい。理由は知らないけど、表向きくらいは良い顔し  
ておいた方が利口だと思う。

「…ん？ちよつと待って。二人の話がわかんない」

「…え？」

「何がわからないのですか？」

「大赦の機嫌だとか、言いなりだとかって。細かい学校生活はあたし  
と先生に一任されてるから、別に誰かが口出ししてくるとかないよ  
？」

きよとんとした顔で首をかしげる教導。私たちが共通して思っ  
ていたのは杞憂だったらしい。——いえ、教導が悪意に気づいてな  
いだけかもしれない。

でも、やっぱり本心から私たちのその後のことまで考えてたわけ  
か。

——この人の純真さには、かなわない。

「……無駄口叩いてないで始めましょうか」

「ああもうわかったわよ。銀様はさぞかし殊勝な勇者で」

「ええ？ちよつと？二人が話してたこと教えてよ」

「教導は知らなくていいことです」

まぶしいくらい純真な人だけど、それゆえに危うい。バーテックスを撃滅できる勇者かもしれないけど、人の悪意に食われてしまいそうだ。

私が銀にできることは、その輝きを曇らせないことか。

「お？銀ちゃん、ほんとに掃除にきてくれたんだ！」

「それに神樹様選ばれた二人を連れて！」

「……何やってるのかしらね……」

聞こえてますよ、水泳部の人たち。それはしつかりと。

何をやっているのか、それは私が知りたい。

へふっははは！夏凜つてば転んでもないのにずぶ濡れじゃん！

「誰のせいだと思ってるのよ！終わった途端にぶっかけてくるなんて！」

「……やると思ってきましたが、実際やられると屈辱ね……」

私も三好さんも、全身くまなくずぶ濡れ。

掃除自体は三人協力して効率良く終えたのだけど、終わって一息ついたところに教導がホースの水を全開で。

へだってきー、何にも起きないんだもん！ブラシでチャンバラしたり、ずっこけてヘドロに突っ込んだりとか、そういうイベント！二人とも仕事出来すぎて面白みもなんにもないから！

「だったらいいわよ！相手になるわよ！仕事も終わったし！」

「教導がお望みというなら、やってやりますよ。リンチ状態になっても責任取りませんからね！」

もう何か考えるのがバカバカしくなってきた。教導の思考は深読みしても何も得られないし。陰謀とは無縁だし。

なら感情のままにフラストレーションを発散する！言い訳つけて逃げるのももううんざり！

ヘドロがまだ残ってるブラシを構えて銀に迫る。三好さんも考えは同じようだ。

へ…につく

「ぶっぶっ！」

「三好さん!？」

銀のウォーターガンは寸分の狂いもなく一番槍の三好さんの顔を撃ち抜いた。射撃する武器を使わない教導だけど、その所作は手慣れたように見える。

だけど三好さんを狙ってくれて好都合。近接武器は三好さんの方が得意って判断だろうけど、私も苦手ってわけじゃない！

「ヘドロまみれになりなさい！」

へうおっ!?!危ねっ

ブラシは教導の肩を捉えたはずだった。あっちの反応は間に合っ  
てなかったし、イレギュラーが発生したわけでもない。

けど、黒鉄の義手はブラシの柄を掴んで抑えた。あたかも義手自身  
が意志をもってるかのような動きで、主人の身を守るように。

へ汚物は消毒だあー!<

「あぶえっ!」

勢いのある水流が私のみぞおちあたりに叩き込まれた。

それなりに威力のあるウォーターガンだから、ケガしないにせよ大  
ダメージ。自分でも大袈裟と思うくらいにのけぞった。

へはっはっはー!銀様をタコ殴りにしようなんて300年早いわあ  
!<

「…ううっ、鼻に水入った…」

「うぶっ…まさか水だけで撃退されるなんて…」

へごめんごめん。二人がムキになってくれたのがうれしくってさっ

教導は手を縦にして謝りながら私たちの肩を叩く。

—— 甘いんですよね、教導!三好さんよりも!

「取った!」

へうえっ!<

「あんただけびしょ濡れじゃないなんて不公平よね?存分に濡れなさ

い！」

教導が勝ちと思い込んで隙を出したところを強襲。三好さんも同じ事を考えてたみたいだ。

さつと背後に回り込んで羽交い締めにして、そのまま後ろに倒れ込んだ。脚を絡めてやればもう銀は動けないはず。

怪しい笑みを浮かべて三好さんはウオーターガンを銀から奪い取って、容赦なく全開で放出。

「私からももらっておいってください！」

へぬへえ!?ちよつ、め、芽吹つ、タンマっ!ひ、ひひえええへへへ!>

ただ銀を三好さんの的にするのもアレだから、私は空いた手で首筋をくすぐる。

なかなか意味不明な悲鳴をあげて笑い泣きするあたり、効果は大きいようだ。

「ふふ、借りは返したわよ、銀!」

「これがお望みなんでしょう?」

へあ…ふう…。…穢されちゃった…>

——— なんですかその反応は。

負けを認めるでも勝利を祝うでもなく、なぜ大根くさい芝居で恥ずかしがるんですか。

「……あー。すごい現場目撃しちゃった」

「銀ちゃんの後輩二人は、先輩にぶっかけやあいぶしちやうけだもの

さんなんだ…」

「ぬええ!?ちよっ、ちが、違うわよっ!」

「そ、そんな不埒な関係ではっ!」

——ギヤラリーがいたのを完全に失念していた。それに気づいた途端、体温が跳ね上がるのがわかった。

あつちは完全に誤解してる。けどものって、それはあんまりでしょ!

教導があんな演技をしたのも、この悪ふざけのためか。水泳部の人たちが悪乗りするのを見越して、わざと抵抗しなかったとでも言うの?

へうへへえ…両手に花なんだぜえ、銀様

「あ、銀ちゃん起きた。お疲れ様ー」

へちいーす!ご依頼のプール掃除、すでに完了しましたー!」

「銀ちゃんありがとねー。それじゃ後輩ちゃんたちと一緒にイネス行こっか」

銀は何事もなかったかのように立ち上がって水泳部員たちに手を振った。

罨にはめてやったぜという不敵な笑みが、この時は異様に憎たらしかった。出し抜いたつもりが飛んだしっぺ返しを食らったのだから。

「…に、しても」

「こんな美少女三人が濡れ透けなんて…グツジョブ銀ちゃん!」  
「!!」

言われてみれば、学校指定のシャツの下から下着が透けてる。

ふと三好さんに視線を合わせると、身を抱いてなぜか怒りの視線で返される。いや、恥ずかしいのは私もだから。

「はいいや、あたしは二人と比べたら鉄屑のスクラップレベルだし…」  
「はい出ました銀ちゃん特有のあたしはかわいくない。銀ちゃんがかわいくないって言ったら私は錆レベルよ?」

「それとも女の子扱いされるのが恥ずかしいのかな?」  
「だあーっ!もうやめ!この話は受け付けません!」

教導が本気の拒否を見せた。

これまで割と余裕を見せていた教導にして、打つ手なしと言ってるような話の切り方。——これは意外な弱点なのかもしれない。

銀は自分がかわいくないと思っっているらしい。控えめに見ても、鉄屑なんかじゃなくてシルバーチャームに例えられるくらいに美しく愛らしいんだけど。

「はいはい行きますよ。話は後で聞きます」

「…二人はどう思う?銀ちゃん、かわいくない?」

「そりゃ…かわいいわよ。半分女捨てた私なんかとは比べられないくらい」

「夏凜!」

「どんな人が私たちの指導者なのかと思っただら、完全無欠の美少女だった」

「芽吹!」

「…以上、後輩ちゃんからの感想でした。銀ちゃん、もう愛されてるね」

声にならないうめき声をあげて銀は顔を隠してもん絶してる。褒められなれてないのは教導もじゃないですか。

無抵抗になった教導は水泳部さん二人に連れられていった。よし、やり返せたわ。



あたしの味方はいないのかよ〜！

「で、銀ちゃん。もうそろそろ二人のこと教えてよー。もったいぶらずにさ」

へタダじや教えられないなあー。そうだなー、頭文字Gであたしをぶつちぎれたら考えてあげなくもない〜

「好きだよねーゲーセン。イネスきたらずつとここだもん」

何故か水泳部さんたちと一緒に、少し遠くにある複合商店イネスに行くこととなった私たち。

教導は本舎の生徒と意外にパイプがあるらしい。この人たち以外にも、一緒に遊びに行く生徒は結構いると聞いた。

で、その中の施設の一つ、ゲームセンターに足を運んだ。

「よし、じゃあ本人に聞いてちやおう！」

「え？」

へそこういうの困ります。面会はあたしを通してからにしてください〜

「マネージャーか！…いや、勇者部のマネージャーか」

「…その、勇者部って？」

教導に聞いてもアバウトな返答しか期待できないから、外部の人間に聞いてみよう。

「銀ちゃんが転校してから始めた活動だね。前いた学校にあったんだって」

「お呼びとあらば即参上で、いろんな仕事を引き受けてくれるんだ」

「…一部大変なことになった所もあるけどね…」

〈…はは〉

表情を読まれないように真顔で笑うけど、それが返って教導のやらかしの壮絶さを物語る。

それと同時に、これ以上話を広げたらわかってるよね？という脅迫めいた圧力も感じる。

「銀ちゃんの精力的な活動のおかげで、勇者部はうちの学校でもその存在を知られることになったんだ」

「フットワークの軽さと銀ちゃんパワーでお悩み解決してたら、今じゃみんなから頼りにされる部になったんだよ」

「…銀ってやっぱり、超人よね…」

「それは同感。一年足らずで顔を合わせる機会もない生徒の信頼を勝ち取れるなんて…」

教導の武勇伝は私たちの常識を凌駕する。最強の対バーテックス戦力にして、組織内外から一目置かれるカリスマ。

これに知力まで合わさったら、大赦を乗っ取って世界征服でもしてたんじゃないかしら。そう思うくらいこの改造勇者は偉大に見えた。

〈じゃあその超人に挑戦してくれる勇者はいるかな？〉

「…やってやるわよ。今のところ銀に出し抜かれっぱなしだから、ここで完勝しておかないと」

——正直、三好さんの闘争心は私を上回ってると思う。直情的な部分を隠しきれてないのもあいまって、自分でもブレーキをかけきれないようだ。

でも、私との決戦はなぜか避けられているような気もする。

「芽吹ちゃん、ね。銀ちゃんに振り回されて大変でしょ」  
「そんなことないわ。銀は振り回してるように見せかけて、気配りばっかりしてる」

教導と三好さんはゲームの筐体に取りついてしまったので、私と水泳部さんはレストスペースで話をする流れになった。

「詳しいお役目とかは私たちは聞けないけど、あんまり気負っちゃダメだよ」

「え？」  
「なんでこんなに銀ちゃんが、お役目じゃないことに熱心か、考えたことある？」

—— 戦いが終わった後に帰る場所を作るため？

でもそれだけじゃ説得力が足りない。私たちのことをこんなに想ってくれる理由としては。

「…芽吹ちゃん、転校する前の銀ちゃんってどんなだったか、想像できる？」

「……？」

時期としては—— 私が勇者の候補として抜擢されたくらいか。つまりは。

彼女が戦友二人を失い、身体を破損させながらバーテックスを撃退した直後。

「…銀が当時のお役目から戻ってきた時に、戻るべき場所はなかった…ってことなの？」

「そう。他の友達はお役目の中で亡くなって、自分の身体はボロボロになって、…弟さんや家族にも会えなかったんだって」

「……………」

サイボーグになった娘が帰って来たら、両親は何を思うだろうか。私のパパなら――

――  
会わせないのは無難な策だろう。一つの家庭を崩壊させる理由としては十分すぎる。

その過酷な経験を私たちには遭わせまいと奔走してる、というの？

「…………相当荒んでたんだって、銀ちゃん。今の義肢をつけてからは、大赦の人に暴力振るったり人を傷つけること平気で言ったりとかしてたって」

「……………」

グレる理由としても十分か。

勝利を勝ち取ったはずなのに、得られたのはあつて然るべきの平和だけ。友達や家族、さらには己の自由すらも捧げたのに。

でも、それで周囲に噛みつく教導の姿は想像できない。私の中の教導は、徳をおふぎけで塗り固めたような、残念だけど尊敬できる人だから。

「銀ちゃんはたぶん、芽吹ちゃんやもう一人にそうなってほしくな  
いって思ってるはず。だから、…ムチャはしないでね」

「私たちにできるのは、それを願うしかないからさ」  
「…ええ」

おそらく彼女たちも教導に心からのお節介を受けたのだろう。重大なお役目を一人背負った教導に何か恩返しがしたいと思うのも道理。

彼女たちが選んだのは、銀が話してくれない真意を秘かに伝えることで少しでも助けになれば、ということか。

— そんなの、尚更意識しちゃうじゃない。

「湿っぽい話しちゃったね。さて、芽吹ちゃんの話聞かせてもらおうか」

「私の？」

「うん。クールビューティーな芽吹ちゃんの」  
「…人の数倍つまらない人生歩んでるわよ？」

断言できる自信はある。

勇者を目指す前から趣味は人とは合わなかったし、勇者を目指す時からほぼ全ての余力を鍛練に費やしたから。

「例えば?」

「休日は何するかっていえば、トレーニングトレーニング&トレーニング」

「うわあ。ガチ勢だあ」

「趣味くらいあるよね?なんかさ」

「建造物巡りとかDIY:あと、モデル?」

少なくとも女子向けの趣味ではない。それは理解してるけど、好きなものは好きだからしょうがない。

「え?モデルやってんの!」

「芽吹ちゃん美人だし、しっかり者っぽいし」

「:あなた達が想像してるものとは違うわ。『模型』の方」

「もけい:もけーつとしてるの?」

「天然ボケはいいから。模型ってアレ?プラモとか」

「そうそれ」

まあ、そういう反応よね。女らしさが日に日に崩れ落ちてるのが自分でも体感してるから。

へあたしもプラモデル、意外と好きだよ。弟と一緒に○ンダム作ったし、頭文字Gの愛車もきっちり作ったし

「ゲームまで極めてるじゃないのよ:何なら銀に勝てるのよ:」

「三好さん:惨敗したのね」

ゲームをしてた二人が帰って来た。言うまでもなく、三好さんは打ち負かされたようだった。

「イネスマイスターに死角はない！何度でも挑戦受けて立つよ！」

「じゃあショップ行つて可愛く着飾りましょうねー」

「そ、それだけはご勘弁を…」

「それいいわね。『モデル』になつてもらいましょうか」

「何で芽吹まで便乗するんだよ〜！」

「仇を討つわけじゃないけど、私も教導にどこかでは勝ちたいと思つてるから。弱点を見つけて、看過するほど私は甘くない。」

教導の義手をガツチリ掴んで、モールの方へ歩を進めた。

「……何この圧倒的美少女」

「義眼さえ、そういうアクセサリーに見えてくるわ…」

「や、やめろよ〜そういうこと言うの…」

その恥じらう姿も、まさしく美少女。少しおしゃれするだけで、銀は文字通り素朴ながらも麗しくなるのね。

何とか銀を試着室に押し込んで、試しにおしゃれをさせてみた。

私と水泳部さん二人で見繕った緩めのワンピースとカーディガン。あとは髪の毛の結び方を少し変えただけ。それだけで不思議なくらいにおしとやかに見える。

義眼や発声機はモノクルやチョーカーと捉えれば何だかおしやれにも思えるし、義手も袖で隠れてあまり目立たない。

「ヤバイ、思った通りだ。銀ちゃんは金だった」パシヤツ

「我々の念願叶ったり。ありがと芽吹ちゃん」パシヤツ

〈こ、こら！撮るなよお！〉

「どういたしましたして。でもいろいろ教えてくれたお礼としては不足じゃないかしら？」パシヤツ

「いやいや。銀ちゃんを無理矢理にでも連れ込んだ功績は大きいよ」パシヤツ

「あと芽吹ちゃん、センスいいよね。モデルじゃなくてコーディネーターだった？」パシヤツ

「…本人を無視しつつ話しながら撮影しまくるとは、なかなかヒドいわね…。でも、楠がこんなにファッションに明るいとは思いもしなかったわ」パシヤツ

〈あつ！夏凜まで!!あたしの味方はいないのかよお！〉

どうどうどうと割り込んできたけど、誰もシャッターを切るのをやめない。三ノ輪銀は美少女だったという事実を、手のひらからこぼさないように。

そしてとうとう教導はすねてしまった。

〈もういいもん…。みんながあたしがこんな格好してるのを見て笑ってても、気にしないもん…〉

「それは違いますよ、教導。今のあなたを見て笑う人間なんていません。女の子してるじゃないですか」

「それにこれがあなたの望みなんですよ？普通の学生として青春を謳歌するって。…銀がそうじゃないと私たちもどうすればいいかわからないじゃない」



〈それはそうだけど…。…てか、それとこれとは話が別!〉

三好さんの話の転換もなかなか上手だったけど、見破られてたか。やっぱり決して頭が悪いわけじゃないのね。

〈…そうやって言い訳をつけてくるだけ、あの二人よりはマシかあ…〉  
「…あの二人?」

そう聞き返した時、端末から耳障りなハザードが鳴り響いた。

〈…マジで?このタイミングで?早すぎない?〉

「な、何なのよこの音は!」

〈樹海化警報。バーテックスが壁を越えてきた時に神樹様の結界が四国を覆うって言ったけど、今まさにそれ。ご丁寧はこの音で教えてくれるんだ〉

「…あれ?何でみんな動きを止めてるの?」

〈神樹様の力を持つ人間…勇者以外は結界の外だよ。今見えてるのはあえて言うなら幻覚だね〉

教導はふうーっと、一息をついて自分の頬を叩いた。そして辺りを見回す。

説明不足な面もあったけど、三好さんはそれなりに精神をかき乱さ

れたようだ。大した教練を積む間もなく、いまここで実戦に投入されるのだから。

私とて平静なつもりではいるけど、緊張の糸は今にもはち切れんばかりに突っ張っている。

恐れ、困惑、期待――勇者に選ばれた時ですら得られなかった、心をざわつかせる感情の波を体感して可笑しな気分だ。

〈さあ勇者部、出動だよ！……ってあれ？おかしいなあ〉

「何かトラブルですか？」

〈…精神状態不安定。勇者システム展開停止…。…マジか！〉

「えっ!？」

「本当ですかっ!？」

〈…マジっぽい。おっかしーな。別に何か悩み事とかあるわけでも――

突然の教導の戦力外通知。本人は私たちより余程余裕な様子だけど、システムは不安定な状態と判断したらしい。

〈…やっぱりこんな格好させられて辱しめられたからかなあ〉

「…根に持つタイプなのね…」

「それは、その…。…すみませんでした」

事実だとすれば、大変申し訳ないことをした。割と本気で嫌がったのを知らずに調子に乗って――。

ともあれ、今はそれどころではない。教導が戦えない以上、私と三好さんで何とかするしかない。

〈樹海化が始まるよ。二人とも準備準備！〉

「や、やってやるわよ！銀はそこで見てなさい！」  
へよろしく頼むね、夏凜。ビビる様子もなくて安心した。大丈夫、二人の力を発揮すればなんとかなるよ」  
「注意点とかはありますか？これはしてはいけないとか」  
「芽吹は本当クールだよね。…バーテックスが神樹様のところに着いたらゲームオーバー。あと樹海が破壊されると現実世界に大災害。…でも、焦らず確実に戦いを進めて」  
「了解！」

世界の崩壊。その言葉で、これは訓練ではなくて決戦だということ  
を認識した。

教導は持てる力を出せば勝てると言ってくれた。――期待さ  
れてる、と思つて間違いないだろう。

程なくして風景が花びらとなって散つて、教導のシミュレーション  
で見た樹海が世界を包んだ。

へあれがいけなかったのかな。壁の向こうに行ったのが…

…めぶき……かりん……

「北の方角に巨大な飛翔体を探知。…バーテックスね」

「シミュレータのやつとは…違うのか。けど、やることは同じよ」

教導と一時別れて、端末のレーダーが指し示した敵の反応に向かって急行した。瀬戸内の海上があった場所に、私たちが打ち倒すべき存在が見える。

淡い桃色の、羽衣が宙を漂っている。解釈を変えれば、天女の姿とも見える。薄気味悪いことに変わりはないけど。

「…作戦は？」

「必要かしら？」

「そうね。足止めして、引っこ抜いて、叩き潰す。それだけよ」

「今まで通りでいいわね。お互いに気を遣わない方が、いい結果になる」

教導の提案でさんざん三好さんと組まされたからわかる。私たちの個々の力を発揮できれば、連繋など必要ないことが。

教導には仲良くしろと言われてるけど、今はそういう場合ではないわ。

「そういうこと。じゃ、一足先に」

三好さんは回り込むような進路でバーテックスにアプローチをかけるようだ。巨大な木々の枝や根を縫うように駆けて、猛スピードで接近していく。

「…さて、どう利用したものかしらね」

連繋は取らないと言ったが、行動を完全に独立させるといいうわけでもない。

三好さんが暴れて敵の注意が集中したところを見計らって、私が決定打を叩き込む。この前のシミュレーションとは逆のビジョンが思い浮かんだから、行動に移す。

三好さんとは逆からアプローチを仕掛けて潜伏。機を見て突入、封印の儀まで持ち込むでしょう。

「…あいつと違って、小細工は苦手なのよ。正面から叩き伏せてやる！」

もう既にひとつ跳びで攻撃できる距離まで近付いてる。

バーテックスもこっちには気付いてないのか、同じスピードのまま直進中。先制攻撃を仕掛けるには絶好のチャンスだ。

「うるあああああっ！」

覚悟を決めて、戟で棒高跳びしてバーテックスの上空へ躍り出る。落下速度と振り降ろす臂力を合力して全身全霊の一撃を打ち込んだ。

人間の百倍くらいのおおきさのバーテックスも、雷撃のようなこの一閃には姿勢を保つことができない。大きく転倒して土煙を上げた。

「追い打ちいっ！」

真下のバーテックスに槍先を向けて急降下。攻め切るというものも立派な戦術の一つだ。

土煙の中から何か飛んできたのが見えたけど、それごと打ち砕くまで！

「邪魔だあああつ！」

槍先が飛んできた球体を捉えた途端、それは大きく爆ぜた。

「ぬうあつ！」

爆風をもろに浴びて、吹き飛ばされる。首にまとわりついた雷獣が具現化してバリアを張ってなかったら木端微塵になる威力だ。

身体を破壊しようとする衝撃は抑えられても、身体を移動させる衝撃までは防げない。

後ろにあった大きな木まで飛ばされて、叩き付けられる。

「……なんのお！」

受けたダメージは少ないし、距離もまだまだ再接近可能な範囲だ。

すぐさま復帰して姿勢を戻したバーテックスに駆け寄る。

「ねええええいっ！」

あの爆弾を打ち出してるのは下の管かららしい。地上から詰めよって潰してしまえば！

私の動きに呼応するかのように大量の爆弾を放出して進路を塞いできた。これじゃ迂闊に近付けないじゃない！

「ちっ！味なマネしてえ！」

すり抜けようと蛇行しても、執拗に爆弾で弾幕を展開してくる。バーテックスとの距離は離れる一方だ。

排除しようと攻撃するのもNGだし、すり抜ける秘策も思い浮かばない。完全に封殺されてしまった。

「…っ！」

選択は二つに一つ。

バーテックスと距離を置いて爆弾を樹海の木でやり過ごしてから再度奇襲をかけるか、ダメージ覚悟で爆弾を誘爆させて突っ込むか。

私が決断を下す前に、遠くから爆ぜる音が聴こえた。

「ん…？楠か…？」

爆弾が器官内で暴発した音らしい。その部分が破裂しただ袋のようになっていた。

楠の姿は見えないけど、あいつの仕業に間違いない。レーダーを見れば、確かにバーテックスの進行方向にあいつの反応がある。

あつちは援護してるつもりはないだろうけど、ありがたくその恩恵を受けさせてもらうわ！

「強行突破！」

畳み掛けるときは日和ってはいけない。

全身全霊で爆弾をはね除けて、爆発を背中に受けながらも接近する。

楠もとうとう勝負を決めにきたらしい。枝と枝の間から飛び出してきて、あいつを探知して方向を変えた爆弾を撃ち落としつつ上部からバーテックスに迫る。

「もらったあつ！」

私へのマークが外れた。これなら一気に押し込んで封印の儀にまで持ち込める！

戟を振り上げて跳躍して、叩き伏せるように杭を突き立てた。

——でも、手応えがない。

「布……？」

「三好さん！その羽衣動く！」



戟が羽衣で受け止められた。刃を避けて柄にガツチリ絡んで離れない。

バーテックスの頂上を踏みつける楠の声が聴こえた時には、すでにうんともすんとも言わない。

まずっ！今度はこっちが動きを封じられた！

「これでっ！」

私の方を向いて照準器を覗いた楠。それとわかったとほぼ同時に、アンダーバレルのランチャーから弾が放たれた。

視認できる程の大きな弾丸は空気の刃をまとって、戟に絡んだ羽衣を食い破った。強烈な力から解放された反動で、私はよろめいてしま

「ぼそっとするな！」

「なっ……！」

楠から怒号が飛ぶ。私に向けられたのは初めてだ。

カチンときたのと、あいつが私を助けてくれたのを理解する間もなく、敵が次の手を打ってきた。

——楠をふるい落とすかのように、残った羽衣で打ち付けた。

「ああっ……！」

「楠！しっかりして！」

私は反射的に武器を投げて、落ちてくる楠を抱き止めていた。

理屈なんてない。それが三好夏凜という人間だから。

しかしなお、バートックスは攻撃の手を緩めない。羽衣を鞭のように縦横無尽に振るって私と楠を叩きのめそうとする。

「ちっ、何やってんのよ私はあー！」

後退しながら跳ね回って敵の攻勢をしのぐ。

楠を抱いたままだと思おうように動けない。いつ当たってもおかしくない状況だ。

楠のやつも打ち所が悪かったらしくて、見たこともない苦悶の表情をしている。とても一人で動ける状況じゃない。

———こんなやつ放っておいて、さっさと封印の儀をしてしまえ。そんな発想が頭の中を何周もする。

「できるわけ……ないでしょうがあー！」

確かにこいつはいけ好かなくて、減らず口ばっかで、利己的で、他人のことを思いやれなくて———。

でも、私を助けた。その思惑なんて想像もつかないけど、私はその人を助けたいんだ！

「…私は三好夏凜っ！勇者よっ！人の世を守る勇者であっ！」

打開策なんてないし、それが原因なのか足が震え始めたけど、そう啖呵を切ることで恐怖を振り払う。一度恐れに足を掴まれたらそこで終わりだ。

でもそれが最後の足掻きだ。根性で優劣がひっくり返る程、現実には甘くない。

とうとう、私の背中を羽衣が捉えて強打した。

「うああっ…！」

楠のやつを抱えたまま吹き飛ばされて、大木に突っ込む。バリアがあっても相殺しきれないほどの衝撃。

とっさにあいつをかばうように前に背中を向けたのが、更にダメージを加速させた。

「……うっ、は…。…バカみ…たい」

あの人が仲良くしろなんて言うから。それを真に受けて本気にするやつがいるから。そんなやつに恩を感じて庇い立てするやつがいるから。

私たちが再起不能とわかると、バーテックスは再び進行を始めた。

それが意味するのは――世界の終わりか。

樹海の真つ黒な空を赤く焼き尽くすような流星が走った。

それは真つ直ぐバーテックスの後部に降りかかって、大木の森へと引きずり込んだ。

へ…うす…うぶす…つぶす…く

音の割れた呻き声が静かな樹海に響き渡る。祝詞なんかじゃなくて、まるで呪詛のような悪意に満ち満ちた声色。

地を這っていた樹海の根や枝が突如生き物のように動き出して、その先でバーテックスの全身を貫いた。締め上げるように絡み付き、バーテックスをバラバラにしてしまおうと更に木々たちが殺到する。

へ…うす…うぶす…つぶす…く

その怨念染みた声に木々は反応しているようだった。表皮を焼け

ただれさせながらもバーテックスを圧殺しようする。

赤い勇者はほぼ樹木に埋まったバーテックスの外殻に斧を振り降ろした。只の一振りで桃色の巨体をかち割って、

---

隠されていたはずの御霊ごと、両断してしまった。

へ…うう…、み…の…こ…

---

驚いてる場合じゃない。

銀の様子がおかしいのは一目瞭然。バーテックスを討ち取って尚、表情は悪夢にうなされてる。

全身から軋みの音が聞こえるけど、楠を背負って根っこの上でうずくまる銀のところへ向かう。

「ちよつと…銀…！大丈夫なのっ…!？」

へう…あ…、か、りん…？

「…いろいろ言いたいことはあるけど、それは戻ってから！帰るわよ…！」

〈…あ……あだ……。…めろ…〉

「……ちよつと……！銀！」

私の方に振り向いた銀だけど、視線は合わさらない。義眼のセンサーも機能していないようだ。

フラッシュバックを起こしたのか、銀は何かを拒絶するような声を発して苦しむ。

「大丈夫よっ！もうバーテックスは倒した!!もう戦いは終わり！」

〈…か、りん……〉

「帰るわよっ！帰って反省会よっ！」

原因もわからないし、こういう時にどうすればいいかもわからない。けど、目の前で苦しんでる銀に何かしてあげたかった。

無我夢中で銀の手を握って、今思い浮かぶ言葉を届くように叫んだ。

「…教導……。…すみま…せん……」

〈…めぶ、き……？〉

「…下手……。打ちました……。…三好、さんのこと……。なぜ……。か、助けたく、て……」

〈…あ……う……〉

「……。帰り、ましよう……。私たち、は……。ここに、います……」

楠のやつも、出ない声を振り絞って銀に語りかけた。

銀は戦友を失った時のことを思い出して、精神がやられたっていう

の？それが変身できなかって原因――？

でもこうして駆け付けて、バーテックスを倒したし――。

〈…めぶき……かりん……〉

銀の瞳に光が戻ってきた。

悔しいけど、私の不器用な言葉なんかより楠の気持ちの機微を捉えた言葉の方が心に響いたらしい。

私たちの名前を呼んだと同時に、銀の意識が飛んだのか横に倒れた。

「銀!?!すっかりしなさい!」

「教、導……!」

「今回は銀様の代わりにあなた達から報告を承ります」

「…はい」

「……………」

バーテックスを撃破してしばらくすると樹海化は解けて、私たちは丸亀城にある祠に転位していた。

負傷もあるので中の医療施設に運ばれて、検査と治療を受ける。銀

に関しては身体以上に精神の異常が酷くて別の病院まで運ばれたけど。

それが一段落すると、銀が先生と慕う神官が病室に姿を現した。仮面をつけて一切の表情を消し去り、肉声なのに銀よりも冷たく機械的。

——正直、苦手な人だ。

「バーテックスは…三ノ輪教導が撃破しました。私たちでは力不足だったようです」

「いえ、あなた達の能力の問題ではないのです。…まだシステム自体が実戦レベルに達していないという結論を認めざるを得ません」

それが気休めにしか聞こえなくて、気分を逆撫でする。

銀はそれより劣るシステムを使って圧倒したんだ。私たちがこんなに遅れを取るのはあってはならないことなのに。

でもここで神官に噛み付いても何にもならないから、報告の続きに集中する。

「それって…」

「バリアの強度です。…銀様がそれを使って戦った期間が短すぎて、十分なデータとフィードバックがありません。本来であれば、ケガなど一切しないはずなのにですが」

「…随分過保護じゃない、あんた達にしては」



「……銀様たつての願いなのです。もう、勇者を失いたくない、と」

——どこまでも、あの人は。

それ以上の言及は楠も私もしなかった。

「……三好と楠の状態について報告します。医師の診断も異常なく回復に向かっているとのこと。自分としても特に違和感などはありません」

「…三好も右に同じです」

「承知しました。二人に問題はないと、そう認識します」

「……銀は、どうなんですか」

「……………」

そう問いただしてみると、静寂。話すのを躊躇してるのか、把握してないのかもわからない。

けど、私たちの視線は神官を逃がそうとしない。

——銀について、私たちは知らなさすぎるから。話してくれないから。もっと知りたいから。

「……銀様も、既に回復しています。明日にはこちらに合流できるようにしよう」

「……………」

「…ありがとうございます。それを聞いただけで安心しました」

返事は、簡単な現状だけだった。銀がどんな思惑を抱えているか、銀に起こった異常の詳細などは一切触れない。

—— 本人がそれを伝えるのを嫌がってるのかもしれない。私たちに余計な心配をさせたくないから。

「では、私はこれで。お役目、お疲れ様でした」

「…お疲れ様でした」

「……………」

神官は病室を後にした。私と楠だけになった途端、窮屈な空気が漂い始める。

先に沈黙を打ち破ったのは、楠だった。

「……あの時、何で私を放っておかなかったの？あの状況なら封印の儀式もできたじゃない」

「知らないわよ。銀の言葉に毒されちゃったんじゃない？てか、逆に何で私の援護なんてしたわけ？」

あいつを助けたいと思った、なんて死んでも言えない。恥ずかしくて逆に死ぬ。

そもそも楠が私を助けたからそんなことになったわけで。その理由を直接聞いてみた。

「…さあね。三好さんに任せるのが最良の選択だった、そんな理由なんでしょうね」

「何で他人事みたいに言ってるのよ。あんたのやったことじゃない」

「…けど、あなたは任されてくれなかった。私の犠牲は正直無駄だったわね」

ため息混じりにイヤミをこぼす。いつもならスルーできるけど、今日のはなぜかムカツときた。

「なっ……そこまで計算ずくだったとでも言いたいのか？」

「……さあ？ 実際私も何でそんな判断をしたのか、今でも疑問だし」

「……」

こいつもこいつで無意識の内に銀の影響を受けてるのかもね。表面上仲良くするとは言ってたけど、それらしい態度は全然してなかったし。

意識の外の方が先に行動を起こしてるのは、あいつも私も同じか。

「……あなたに言われる前に言っておくわ」

「何をよ？」

「……ありがとう」

聞き返した私がバカだった。今まで感じたことのないような虫酸が走って寒気がした。

「あんに感謝されるとか、気色悪いにも程があるわ」

「だから言ったじゃない。先に言われたら私の方が吐き気を催すから」

「百点満点のイヤミありがとう。あんたがパートナーで最高だわ」

「それはどうも。これからもイヤミで競っていきましょう」

——少しでも楠に感謝を覚えた自分が憎い。

でも、不思議とこいつの隣は居心地悪くない、かも。銀は優しすぎ

るから減らず口なんて言わないし、こいつも、悪友って感じなのかしらね。

### 三ノ輪銀のままにいるよ

「せつ、セーフっ!!何とか戻ってこれたあ!」

「ちよっ!銀!どうして戻ってきてるのよ!」

「予定じゃ明日のはずでは?」

「へ、外せない用事があつてさっ!脱走してきた!」

意外にケガは大したことないらしく、すぐに退院した。大広間で各々過ごしていると、ふすまを勢いよく開けて銀が帰って来た。

いろいろ聞きたいことはあるけど、今はそれどころじゃないらしい。銀はノートPCを開いて焦りながらも何かのセッティングを始めた。

「そんなに焦って、どうしたんですか?」

「あと1分しかないんだよ!会議が始まるまで!」

「…会議?」

「へそう、勇者部の!遅れたら風さんに何て言われるか…」

焦ってたのはそういう理由か。前の学校の部員と定期的に連絡を取り合ってるらしい。様子から察するに、怖い先輩がいるから遅れたくないようだ。

「ほんと、騒がしいわよね。銀って。」

「へほら芽吹も夏凜もそこに座って!部長にあいさつしないと!」

「…:…そもそも部員になった記憶がないのですが」

「そうよね。ノリで今日の活動に付き合っただけで、入部届とか」

「へ勇者って時点で、勇者部員なの!ほら、細かいこと言わない!」

ダメだ、理屈が通じない。その場のノリと勢いで全てを既成事実にする気だ。

もう手を打つ時間もないので、仕方なく会議に参加することにした。

へうおつ、もう呼び出し来てる！はい！風さん！丸亀勇者部三ノ輪銀、ただいま参上しましたあ！

「ほおー、今回は間に合ったか。10秒残しとは銀めなかなかやりおるわ」

「あ、銀ちゃん！こんばんはー！」

画面に映る人物の音声は銀ほどじゃないけどやかましい。

時代劇みたいな芝居があったセリフで銀をちやかした部長らしき人と、銀とはまた違った意味でテンション高くて天然そうな子。

勇者部にはまともな人間がいらないらしい。それもそうか。何たつて「神樹様を選ばれる可能性のある子」を集めたいらしい。四国中にそういうコミュニティを大赦は作ったらしいから。

「よし、メンバーも揃ったところで。神世紀300年度第1回勇者部会議を始めます！」

「わー！」

へひゅーひゅー！

何だこれ。真面目な会議かと思ったら、ただの雑談会のノリだ。鳴り物があつたら思いつきり鳴らしてそう。

「開会の言葉…は省略して、新メンバーのごあいさつからー！」

「いえ〜！」

〈待つてましたあー！出番だよつ、二人とも！〉

「え？」

「いきなり!？」

銀の計画性のなさはこの部長の影響かもしれない。完全にこの人のノリを受け継いでるわよ、これ。

段取りをすつ飛ばしていきなり振られて、頭が真っ白になる。楠の顔を見ても、  
ポカンとしている。

〈丸亀分隊には二名の新人が入りましたー！こっちのツインテの子が三好夏凜で、こっちのおさげの子が楠芽吹っていうんだ〉

「ほうほうおなごを侍らせとるのお、お銀さんや」

〈ぐへへへへ、風さんの頼みでも二人はあげられませんぜ〉

「キモい笑い方するな」

〈ぐへえつ！い、いたい夏凜…〉

わざとらしいボケをかましたから、お望み通りにツツコむ。二人して何おっさんみたいなこと言つてんのよ。

楠は額に指を当てて首を横に振ってるけど、画面の奥の部長は大爆笑だ。何がツボに入ったか知らないけど、銀に負けず劣らず下劣な笑い声をあげる。

「あひゃひゃひゃひゃつ！早速もう尻に敷かれてるわあ！さすが銀ね！」

「銀ちゃん、大丈夫？」

〈あ、全然平気だよ。夏凜の切れ味のいいツツコミはなんかもうクセになるね〉

「ドMかつ！」

「……んん。そろそろ本題に戻った方がよろしいのでは？」

会議に出てる人間の意識がてんでバラバラだ。

ボケの銀、煽る部長、天然発言の部員、真面目な新人――カオスな会合になりそうだ。

「そっちの子は真面目そうね。勇者部に足りなかった人材だわ」

「初めまして。三ノ輪教導のもと勇者部の活動に参じました楠芽吹と申します」

「わーすごい。中学生なのにそんな礼儀正しいあいさつができるなんて」

それは私も感心してる。性格さえ良ければ完璧だったのに。銀とは違う意味で残念なやつだ。

「ふはっ。銀、あんた教導なんて呼ばせてんの？」

へち、違いますって風さん！芽吹がどうしてもこの呼び方やめてくれなくて！ね、夏凜？」

「そうね、教導先生」

へうわあああ夏凜までええく……」

一旦黙ってもらおう。少し突き放してやったらいじけるだろうし。

「…勝手に勇者部に入れられた三好夏凜よ。このポンコツサイボーグを送り付けてきたのはあなた達かしら」

「おお、歯に衣着せぬ罵詈雑言。こっちのちっちゃい子もなかなかの逸材ね」

へポンコツ……」

「ぎ、銀ちゃん！大丈夫だよ！ちよつとそそっかしいところもあるけど銀ちゃんはんばってやってるよ！」



へありがたい、友奈…。あたしの味方は友奈だけだよ…

慌ててフォローをいれる友奈と呼ばれた部員。この子は冗談でも人のことを悪く言えないタイプらしい。眩しすぎるくらいにいい子だ。

それと銀は意外に打たれ弱いこともわかった。素直すぎて言葉をいちいち真に受けるらしい。自分から冗談吹っ掛けるクセに、自分はデリケートとかめんどくさいわね。

「ようこそ新人諸君。私は讃州中学校勇者部部长、犬吠埼風よ。そこにいる銀を一人前の勇者部員に育てて送り付けてやったわ」

「ただ大赦のお役目の都合で転校しちやっただけなんだけどね。あ、私は結城友奈！これからよろしくねっ、夏凜ちゃんに芽吹ちゃん！」

「…よろしく。犬吠埼先輩に、結城さん。…結城さんは同い年でいいのかしら」

「うん！二年生だよ！いいなーそっちはみんな同い年で」

「別に良くもないわよ。教えられる立場のはずなのに、上下関係がないのもめんどくさいわ」

「完全になめられてるわねー、銀ったら」

「そんなことはありません。教導は信頼に足る方です。心から尊敬できる人を輩出してくださいって、ありがとうございます」

へめ、芽吹ってば！

褒め殺しても沈んでしまうらしい。顔を真っ赤にして楠に何とも言えない視線を送る。本人は相変わらずの仏頂面だけど。

どこまでが楠の本心か、なかなか掴めない。このポーカーフフェイスにして悪ノリもできるってわかったから、余計に何しでかすかわからないのよ。

「うんうん。そつちは順調らしいわね」

〈はい。二人ともいい子であたしのやることなく困ってます〉

「贅沢な悩みねー。こつちは銀が抜けた戦力の穴埋めがまだできてなくって」

〈あれ？新入部員は確保できてないんすか？〉

「いるわよ。いるけどサイボーグギンちゃんの後任にはならないって話」

「今日の会議には参加しないのですか？」

「…ふふふ。じゃ、ご希望に応じて紹介しちゃうわよー！樹ー！おいでー！」

何をもったいぶってたのかは知らないけど、部長が名前を呼ぶとおずおずと画面に現れた気弱そうな子。

——他の連中と比べればまともな部類に入るだろうけど、勇者としてはいかなものか。優しいだけの人間に務まるお役目ではないから、適性はいざ知らず性格は勇者向けではないように思える。

〈あ、樹！とうとう勇者部デビューかあ！〉

「えへへ。銀さんの後任にはまだまだ遠く及ばないですけどね」

「何よ、知り合い？」

〈まあね。風さんの妹だからね〉

「は、初めまして！丸亀の皆さん！讃州中学校一年、犬吠埼樹ですっ」

「ううっ、樹が立派に自己紹介してるうううう。お姉ちゃん冥利につきるわああああ」

「ちよっと！お姉ちゃん！」

〈あ、始まったよ姉バカ。もしくはシスコン〉

感極まって泣き始める部長と、唐突に真顔になって会話を拒否する

銀。恥ずかしいのか姉をほこほこ叩く妹を見て、したくもないのに苦笑してしまった。

銀からしてもめんどくさいらしい。これ以上触れないように露骨なスルー態勢を取ってる。

「何よ銀！あんただってお姉ちゃんじゃない！愛しのブラザーを思えばこみ上げるものがあるでしょ！」

へいはいいや。できて当然のことを褒めるほど、あたしはマイブラザーを過小評価してないっすから！

「……これって遠回しにバカにされてる？」

へち、違うよ樹！樹はもうお姉ちゃんなんていらなほど立派な大人だよ……ね？

「そ、そんなあつ！もうあたしはお払い箱っていうのおおいきい！」

「……帰っていい？」

付き合いきれない。今の私の頭の中にある全てがその言葉。

いきなりこんなコントを見せつけて何なのよ。勇者部の活動の今後を決めていく会議じゃなかったの？

仮にも世界の情勢を占う公人の一人だっことを意識して、わきまえた行動を取ってくれないかしら。

「わあ〜ごめん夏凜ちゃん！行かないでえ〜！」

「……何で結城さんが謝ってんのよ」

いろいろと間違いだらけでしょ。後輩が先輩の失態を謝ったり、そもそも私たちは会議にいらなかったり。

———けど、結城さんの泣きそうな顔をみたら、足が止まってしまった。

「だってせっかくこれから友達になるだもん。もっとお話したいよ」

「……………」

結城さんが寂しそうにそう言うと、さすがの銀と部長も静まった。

「……………んん。教導と部長は反省してください。正座です正座」

「へ、はひいひい」

いたたまれなくなった楠のやつが、すごい剣幕で銀と部長を睨み付けた。初対面の人にここまでメンチを切れるこいつの胆力はどこから来るのか。

おかげで問題のアホ二人はフリーズして膝を折った。この時点であいつはヒエラルキーの頂点を取ってしまったらしい。

「…出過ぎたことをいいました、すみません。收拾をつけるにはこうするしかなくて」

「す、すごいね芽吹ちゃん。風先輩と銀ちゃんを一目で黙らせるなんて。裏番長って感じ!」

「クールで大人っぽくて、かつこいいです!お姉ちゃんも少しは見習ってほしいです!」

「……………ごどばかりに言いたい放題ね……」

ダメ姉ズをさらにダメ出ししてるのか、単純に楠を褒めてるのか知

らないけど。これじゃ部長と教導は立つ瀬がない。

——あと、あの中身は陰湿女が賞賛を受けてることが何か気に障った。

「……で？次の議案は？反省中の部長」

「この度ははしやぎすぎてご迷惑をおかけしたことを深く反省s」  
「いいから。さっさと進める！」

「す、スミマセン！」

へううっ、あたしの教え子たちが怖いよお

この期に及んでまだふざけられるメンタルをお持ちのようだ。けど、さつきも言ったけど付き合いきれない。強引にでも話を本筋に乗せる。

——隣で銀が泣き言言ってるけど、気にしてはいけない。

「っ、次の議題はね。…来週末、讚州と丸亀合同で活動しようって決めてたけど、その詳細がまとまりました！」

へおっ、何かいい仕事もらってきたんすか!?!<

「せっかく樹と三好さんと楠さんのデビュー戦だからね。力入ってるわよー！」

「……もう私たちも戦力に数えられてるのね」

「いいじゃない。何かもう逃れられない運命に思えてきたわ」

楠は鼻で笑って両手を上げた。あきらめたらしい。このやかましい連中から逃れられるなんて、私も無理だと思っし。

しょうがないから腹をくくるか。銀がこの部にいる時点でもう何か察しがついてたし。

へんで、何やるんすか？

「幼稚園で出し物！パペットを使った劇を考えてるわ！」  
へおおーっ！面白そう！

銀は何かすごい乗り気だけど、正直私は子供の相手なんて勘弁願いたい。

「あ、けど銀。あんたは機材担当ね」

へあたし自身は機械それほど得意じゃないのに…

「もう既に役割は考案なさってるんですか？」

「ま、ざっとね。新人ちゃんたちには表舞台は荷が思いと思うから、裏方がんばってもらおうと思ってるわ」

浮き沈みすぎよ、銀。見てるこっちが疲れるわ。

犬吠埼部長も表はアホっぽいけど、ちゃんと組織の統率を取れるタイプの人間か。銀も結城さんもなかなかキャラ濃いし、それくらいじゃないとリーダーにはなれないってか。

「そうね。時間もなし先輩方のお手並み拝見といきましょうか」

「まっかせて夏凜ちゃん！子供たちもわたし達も楽しめるように頑張っちゃうよー！」

「そゆわけだから。後で資料送るから、目通しとして」  
へはーい

会議の主な議案はこれだったらしい。メっぽいセリフを言うときちよつとの間だけ静かになった。

「よし、今回の会議はこんなもんね。何か質問とかある？特に新人ちゃん達」

へはいーはいーはいー

「…なーに、銀」

へろ、露骨にイヤそうな顔された…

「あんたのせいであたしはこうして足しびれさせながら会議してるんでしょが…少しは反省しなさい！」

へも、元はと言えば風さんが変なタイミングで姉バカになるからっ！

「…部長。反省、してます？ 教導も」

「あっ…ハイ、モチロンドス…」

へゴメンナサイ芽吹さんもう騒ぎません

—— 質問があるとすれば。

そっちの勇者部のメンバーは、勇者や外の世界についてどれだけ知ってるのか。うまい事触れないように話を進めてたようだけど、それはリーダー以外は素養を持つだけの一般人ということなのか。

全部知ってるって言うならイヤでも付き合わないといけないし、何も知らないというなら距離を置くべきだと思うし。

—— けど、何故か聴くのが怖い気がした。

へ…はい、提案です。歓迎会やりましょーよ！終わった後で！

「あ、それいい！銀ちゃんナイスアイディア！」

「ふむふむ、採用。どこでどうやるか決まったら知らせるわね」

「お姉ちゃん決断早っ！」

まあ、いいか。本人に聴くのが憚られるなら、銀にでも聴けば。

「あ、銀。後で個人的に話したいことがあるから、電話するわね」  
〈うつす〉

「質問なければ本日はお開き！閉会！以上！勇者部五箇条の復唱で  
終わりー！」

〈挨拶はきちんと〉

「なるべく諦めない」

「よく食べよく寝る」

〈悩んだら相談！〉

〈「なせば大抵なんとかなる！」〉

「お疲れさまでした」

「おやすみなさい、皆さん」

「では、これで。これからよろしくお願いします」

「……じゃ、また」

〈みんなお疲れちゃ〜ん。いい夢見ろよ〜〉

特に掘り下げもなく会議は終了。

ふざけあつてるだけで、敵対してるとかそういうのもないから当然か。なんだかんだで信頼関係がしっかりしてるのね。

接続を切ると、銀は畳の上で大の字になった。

〈うはあー、さすがの銀様もへとへとだぜえ…〉

「自覚はあったのね。さつきまで病院で寝てたんだから、元気なわけ  
ないじゃないの」



「…それを気取られまいと、あんなに騒ぎ立てていたのですか？」  
〈そんな深読みしないでよー。…まあ、みんなに心配かけたくなかつたし〉

楠の言ったことは半分正解らしい。銀の性格からすれば、考え付く強がりか。

疲れた笑顔を見せて上体を起こして私たちに向き直る。私たちが聞きたいことを溜め込んでいるのを知っていたようだ。

へさて。今日の反省会やろうか。夏凜も言ってたし

「しつかり覚えてたのね。てつきり聞こえてないかと思つた」

〈愛しの夏凜の言葉、聞き逃すわけないだろー？〉

「はいはい軽口はいいから。どうしてあんなつたのか白状しなさい」

これから深刻な話をするっていうのに、相変わらずのノリの軽さ。シリアスなのが苦手なのかしらね。

でも、そっちの方が話しやすいか。銀が相手だと自然と言葉が出て来るし。

へんー、そうだねー。まず変身できなかつた理由から

「…嫌がつてたのにおしやれさせたから、だったのでは？」

へまさか。そんなんでいちいち戦えなくなつてたら、不具合もいところだよ

「別の不具合があつたと？」

へんー。何て言うんだらうねー…「狂言」？

は？

全然意味がわからない。

狂言って、あの伝統芸能の？それともこの出来事自体が誰かの手のひらの上ってこと？それにしたってわけわからない。

「一人で力を合わせて戦ってもらおうとは思ってたし、あたし抜きでも大丈夫って思ってたんだよね。もちろん、やばそうならあたしも戦うつもりだったけど」

「…その心の緩みが、不具合を招いたのですか？」  
「戦う意志を示した時、神樹様が力を貸してくれるんだけどね。神樹様も敏感だなあ。あたしのそんな心の隙を心配してくれるなんて」

「つまりは、神樹様が銀の出撃にNOを突き付けたということか。」

「理屈は何となく掴めたけど、何か突っかかる。その程度の心の隙なら、私や楠にだって常に付きまどってるはず。銀だけ何でそんなに過剰なの？」

「…やっぱりまだ、戦友との別れを克服できてないの？」

「…では、その後で変身が可能になったのはなぜですか？……取り憑かれたようなあの姿は、いったい何なのですか？」

「取り憑かれてなんかないよ。あれがあたしのほんとの姿」  
「な、何言ってるのよ！あんな病的なの、正常なわけないじゃない！」

銀がくれたあたたかいものが全部崩壊していくような気がして、声を荒げてしまった。銀の本質がそんな真っ黒なものだなんて、信じたくないから。

銀は私の瞳を少しだけ見つめた後、言葉を続けた。

〈正常ではないかもしれないね。けど、あたしの心の中はいつもそうなんだ〉

〈……須美と園子を手にかけてバーテックスを、根絶やしにしろ。皆殺しにしろ。塵すら残すな。あの世でも撲滅しろ〉

〈あたしのこのふざけた性格の裏には、そんな真つ黒な感情が押し固められてるんだ〉

バーテックスに対する恨み言だけは、明らかな負の感情を秘めていた。敵意を向けられてない私たちですら戦慄するほどの。

もはや言葉が続けることもかなわないの知ってか、銀は楠の質問の回答を続けた。

〈二人がバーテックスに傷つけられてたのを見たら、……その真つ黒い炎が心を完全に支配して。気づいたら、変身してバーテックスに飛びかかってた〉

〈マイナスの感情とはいえ、戦う意志は承認されたみたいだ。……勇者としては、どうかと思うけどね〉

ただ復讐のために敵を殲滅する。世界を守る勇者としては、ふさわしくない。その恨みが守るべきものへと向くかも知れないから。

そこまで自覚があるのか、銀は悲しそうに微笑んだ。仲間を守りたいって願望はいつしか敵を滅ぼしたいという衝動に刷り変わっていたんだ。

それは、心まで人でなくなるのと同じだ。

〈…でも、ありがとね。二人とも〉

「……………」

「何が、ですか？」

〈あたしのそばには夏凜と芽吹がいてくれる、そう思ったら…:ちゃん  
と戻ってこれたんだ〉

「…それは」

それは、あの勇者部の人たちだったらダメだったの？犬吠  
埼部長や結城さんだって、心から銀のことを想ってくれてたはずだ。

その疑問とせめぎ合うように、——銀も私たちを必要としてる  
と気付いて、熱い感情が全身を駆け巡った。

今はその疑問の追究は止そう。だって——こんなに嬉しく  
なったのは、初めてだから。初めて自分の居場所を見つけられた気が  
したから。

〈…あたしは幸せ者だなあ。こんなにも素晴らしい仲間に囲まれて。  
失ったものごとを忘れてしまいうるようになるよ〉

「……………忘れてしまいましょ？それが悪夢となってあなたを苦しめる  
のなら、私が忘れさせてあげます」

〈芽吹…〉

「銀は勇者である前に、人間よ。無理せず自分が幸せであること、それ  
はあんたも私たちも一緒だから」

〈夏凜…〉

銀も同じことを思ってる。そう言ってくれたなら、私も銀を守ってあげなくちやいけない。

この人だって私たちと同じ人間だから。対バーテックス用最終兵器じゃなくて、三ノ輪銀っていう一人の女の子。人としての心を失ってしまえば、きつと破滅してしまう。

それは絶対に嫌だ。ようやく見つけられた大切な人を、絶対失いたくない。

へ…困ったなあ…。復讐のために生き長らえたっていうのに、それ以上で大切なものができちやうなんて…

「自業自得よ。…私たちを甘やかした」

「教導には復讐なんてできませんよ。あなたは人を好きすぎる」

今にも泣き出しそうな銀だけど、涙はきつと義眼の中なのだろう。

私は自然と銀の義手を握っていた。理由なんてわからない。わからないけど、そうせずにはいられなかった。

反対の手は桶がそつと手で包んでいた。似合わない微笑みを銀に向けながら、手の震えが止まるまでずつと。

へ…うん。二人のためにも、あたしは甘ったれ先生三ノ輪銀のままです。私たちの教導はそうです。甘ったれで、おふぎけ大好きで、お節介

「目を離せないから、どこまでもついて行ってやるわよ。しょうがないわね」

へうはあ…二人の言葉はトゲトゲだなあ…

そんな一面を知ってるのも、あんただけなのよ銀。

感動の場面が台無しだあ、とか言ってる銀の端末が着信音を鳴らした。さつき犬吠埼部長が用があるって言ってたっけ。

〈…風さん。空気読んでください〉

「余韻に浸る隙も与えないとは、とことんまで笑いを取る気なんですね」

「なに？出し物もコントやるわけ？」

〈貴重な部員の意見を部長に叩き付けてきます〉

ちよつとだけむつとした銀は大広間を出ていった。

「…さて、私たちも寝ますか。明日からは徹底的に鍛え直しよ」

「そうね。指導をこれ以上戦わせてはいけないから」

私たちが強くなれば、銀は戦わないで済む。

共通の目標を持ったのを確かめると、私たちは拳と拳を合わせた。

〈風さん、少しはタイミング考えてください〉

「え？お取り込み中だった？」

〈あたしのかわいい教え子たちと、キャツキャウフフしてたんですけど〉

「あらくそいつは残念だったわね」

〈…で？用って？〉

「…大赦から通達が来たわ」

〈……どういう、案件っすか？〉

「……勇者適性のある子を対象に、勇者ではない別のお役目についてもらうって」

〈うーん…あたしも全然わかんないっすね。ハルさんにでも聞いてみるかあ〉

「あんたが知らないっていうなら、極秘の任務か、現役の勇者に知られたらマズイ案件ってことよね」

〈…じゃ、この話も聞かなかったことにした方がいいっすね〉

「そうね。知らんぷりしといて」

〈けど…そうなるって風さんも友奈も樹も讃州からいなくなっちゃうわけっすか…〉

「そうね…銀と一緒にする勇者部の活動は、これで最後かもしれないわね…。あっちにいたら、易々と外には出られないと思うし…」  
〈さびしいっすね…。…なら、今回は全力で盛り上げていきましょう！〉

「…そうね！二度と会えなくなるってわけじゃないし、勇者部は永久に不滅よ！うじうじしてるなんて、らしくないわよね！」

〈はい！盛大にやってやりましょうよ！〉

「…ありがとね、銀。らしくもない湿っぽい話して」

〈ん？どういう意味っすか？〉

「あたし、ちよつと弱気だったのよ。…勇者部の存在意義が消えて、その後でわけのわからないお役目につかされて…友奈と樹に迷惑かけちゃったな、って」

〈…大丈夫っすよ。樹は風さんのいるところにしかいないですし、友

奈は人のためになることを勇んでする人じゃないですか。迷惑なんて思つてませんよ

「…不思議とあんたがそう言うのと、そうなんだなつて思うわ。さすが教導」

「風さんまでやめてくださいよお！あたしはイヤなんですつてその呼び方！」

「ええじゃないかええじゃないか。あんたは立派な先生よ」

「うわああああもうやめてええええあたしを崇め奉らないでええええ」

「…じゃ、何かあつたらよろしくね」

「はい！風さん、お互い頑張りましょう」

「…声大きいですよ、教導」



### 三好夏凜の章

なによその意味深な笑顔は

「ふはあつ…ダメだあ。全っ然上手くないかない」

「……これでもマシになったっていうのが、私たちの相性の悪さを物語ってるわね」

城の地下の訓練スペースで、私と楠は息を切らしながら横たわっていた。

バーテックスとの初戦の後、私たちは自分たちの課題を銀に言ってみた。

予想外の敵の行動に対応するには、二人が連携できるようにならないといけないという結論に至ったのだ。あの惨敗から、私も楠も痛感した。

「全然できてると思うけどなあ。矢継ぎ早に攻撃手が入れ替わるから防ぎきれないよ」

「とか言って一度も攻撃をもらってないじゃないですか」

「……銀に「発浴びせるまでやるわよ…！銀に完敗だなんて、私のプライドが許さないわ…！」

二人連繋して銀を倒す。この前もやったような内容だけど、これの難しいこと。

縦横無尽に飛び交う斧をしのいで、正確無比に付け狙う飛来物をいなして、銀のもとへたどり着かなければならない。一人では死角から

の攻撃をもらって即リタイアだ。

お互いの死角をカバーしつつ、さらに織り混ぜられるイレギュラーな行動にも即事対応していかなければ、銀を倒すことなど夢のまた夢か。

「でもさ、いつのまに二人とも手を取り合う感じになったの？この前までは死んでもありえないって言ってたじゃん」

「…一人の力ではバーテックスには対抗しえないと思ったまでです」

「あんたが規格外すぎるのよ。一人で12体一掃したって、今ならその化け物さが実感できるわ」

「…まあね」

「なによその意味深な笑顔は。微妙に腹立つんだけど」

いつもみたいにスルーするわけでもなく、満足気味なニヤケ面を見せつけてきた。唯一無二の存在だからって、その顔はなかなか頭にくる。

「なんだろうね。二人を守れる力が今この手にあるのがうれしいのかな」

「あんな理性を失った力で守られても、ただただ教導の心配をしてみうだけです。自分を御せないなら引っ込んでください」

「…あの時よりマシだよ。須美と園子を助けてやれなかったあの時より」

そのニヤケ面の奥底に潜む悲しみを勘繰ると、途端に言葉が詰まってしまった。

銀が人の身体を棄てても力を欲したのは、そもそも先代二人を守れなかった反動のはず。

—— 私たちが親密になればなるほど、銀はその力を解き放つのをためらわなくなるだろう。自分の身を滅ぼすと理解していながらも、その一線を簡単に踏み越えてしまうだろう。

「…それでもあんたは待つてなさい。私たちはあの二人とは違う。銀がそこにいる限り、私と楠は死なないから」

「言ったじゃないですか。私たちの教導は、復讐の炎に魂を狂わす愚か者じゃなくて、理由もなく人に優しいおバカだつて」

〈どちらにせよあたしはおバカだつてことね、あい分かりましたよ〉

その軽いひがみが、なぜか私の不安を取り除いてくれる。私たちのために私たちに任せてくれたという意味が、この上なくうれしいのかもしれない。

〈ほいじゃ、教練再開だよ！あたしに一発でも当ててくれないと、安心して樹海に送り出せないよ〉

「言ってくれますね。けど、その方が燃えるつてももの！」

「安っぽい挑発だけど、高くつくわよ銀！」

誰の真似かは知らないけど、なかなか鼻につくイヤミを言ってくれるじゃない！

体力の限界はとうに突破して、いよいよ悲鳴を上げ始めた身体に力が入る。銀に一泡吹かせるまで、絶対諦めないんだから！

〈へへ、上等！その根性、あたしは好きだぜえ！〉

「……やめとけばよかったわ。あんなにムキになって暴れたら、そりや反動がくいたたた」

「後の祭りよ。結局銀に一発も当てられなかったし、この痛みは修行不足だって意味うぐぐぐぐ」

〈二人とも……大丈夫？〉

私も三好さんも、無様に部屋の布団の上で酷使した身体の反動に悶えていた。割と本気で心配してそうな教導の声が、尚更悔しさを増長させる。

厳しい鍛練を積んできたけど、さすがに自分の限界を考えずに追い込んだことはない。返って逆効果になるから。

まあ、それが今の状態。日常生活に支障が出るレベルで身体の節々が痛み、その影響で気分も最悪。その上で目標にはかすりすらしなかった。

〈マッサージ、してあげようか？その様子だと自分じゃ出来なさそうだし〉

「……あなたは平気そうじゃなかったわ」

〈だってほとんど動いてないもん〉

「……ですよね。斧とブロックだけでしたもんね」

〈……考えてみれば、あたしの戦い方って全然動かないのかも〉

自由自在に操れるトマホークと、地形そのものが武器になるサイコキネシスによるオールレンジ攻撃。はっきり言ってこの前のバーテックスより突破口が見出だせない。付け焼き刃の連撃じゃ教導を動かすのも不可能だ。

教導が全く疲れの色を見せないのがその査証。――そこまで推測して悲しくなってきた。

「…そうね。銀にも少しは働いてもらいましょうか。マッサージ、お願いするわ」

「へよし、待ってました!」

「……………嫌な予感が」

虫の知らせというのかしら。理由も確証もないけど、それがとんでもないことだっというのが頭の中を旋回する。

うつ伏せの三好さんのの上に乗っかって、教導は義手の指を鳴らし始めた。心なしか、うつすらサイコキネシスが働いてるようにも見えるけど――。

「へじゃ、念入りにほぐしておかないとね」

「念入りって、そんなおおげさな…んんっ!?!」

教導の指が背中に触れた途端、三好さんの表情が一転した。気だるげに目を半開きにしたのが、不意に敏感なところを触られたようにドキツとした顔をした。

――私の勘も、腐ってはいなかったようだ。危うく大変な目に遭うところだった。

「ちよっ…銀んんっ……………」

「へこりやだいぶ貯まってますなあー。ま、銀様に任せてなさい。極楽浄土へ行かせてやるよ」

「うあっ…ふううん……………まっ……………」

教導の最後のセリフだけ異様に低いトーン。何だかそういう企画のボイスに聞こえてしまって、私まで顔が熱くなってきた。

ああ、三好さん。あなたは勇敢で、そして浅はかだったわ。何気ない一言が、そんな始末になってしまうのだから。

へうーん、全身がもうガチガチだね。これはあたしも全力でやらせていただくよ

「やつ…いいってえ…！それ以上はあ…！」

「……………」

この場を離れないといけないのは十二分にわかっているけど、

なぜか目の前のなまめかしさすら覚える光景を見ていたいという欲望が頭から離れない。

力なく座り込んだ私を尻目に、あちらはクライマックスのようだ。女の子が上げちやいけなような声を我慢できない三好さんと、悪気もなく全身全霊で彼女の凝り固まった筋繊維をもみほぐしていく教導。

へよし、こんなところかな？どう？気分は

「あ…ひい…ああ」

「…いつぞやの意趣返しのように撃沈させましたね…」

どれだけ効き目があったのか、三好さんは言葉を発せないくらいに息を切らして今でも教導の指の感触に悶えているようだった。

プロでもこんなことにはならないと思うし、やっぱりあの義手が放つ不思議な力がそうさせたのかしら。

——とかのんきに考察してる場合じゃなかった！間違いなく次の標的は私じゃない！

へあれは芽吹の仕業じゃんか。…ふふん、なら遠慮なくできるね」

「遠慮します！辞退します！拒否します！根に持つてるなら謝りますからご容赦を！」

へはは、芽吹のそんな必死な姿初めて見た！でも身体の余計な力を抜くだけだから、遠慮はいらないよ」

「嫌ですよ！銀と三好さんの前であんな痴態をさらすなんて！」

へ…いひひ。そうやって拒絶されると、尚更見たくなくなるよねえ。芽吹のあんな姿やこんな姿を！」

「ひ、ひやああつ」

勇者にあるまじき下衆な笑いをして、私が逃げる間もなく教導は絡み付いてきた。動きに一片の迷いもない。

あつという間に組み伏せられてマッサージ体勢が整ってしまった。教導の体温を触れた手足が感じとる度に、今までに味わったことのない感覚が脳髓に焼き付く。

へおおう…夏凜よりも具合がヒドイねえ。まるで父ちゃんの背中だあ」

「そ、それはあんまりです…」

へ誇つてもいいんだぜえ？四国を守る漢の背中だつて」

「私も教導も女の子ですよ…」

見方に寄ってはロマンチックな雰囲気かもしれないけど、教導の冗談がそんなのを軽々吹き飛ばしてしまった。

ある意味安心したけど、

——何かもつたいない気もする。

私はパパ似なんだろうか。母親には会ったことがないし、どんな人だったのか想像もつかないけど。でも、パパ似だって言われたら、それは嬉しく思う。

「…教導のお父様は、どんな方なんですか？」

〈父ちゃん？大赦の悲しき中間管理職だよ。どっちかって言うとおたしに似てて、今どき珍しい熱血漢だね。ま、それが父ちゃんのいいところなんだけど〉

「尊敬されて、いるんですね」

〈うん。仕事の関係で父ちゃんも母ちゃんも家を空けることが多かったけど、あたしがこうなりたいて思うくらいに、ね〉

—— 妙にしつかりしたところがあったは、家のことを教導が任されていたのが理由か。私も同じようなものだけだ。

〈芽吹のお父さんは…有名な宮大工だったよね〉

「ご存知なのですか？」

〈芽吹の履歴書見た時に、あ、この名前見たことある！〉って思ってたね。確かこの丸亀城の改築の主導者じゃなかったっけ

「やはりそうでしたか。真新しい箇所にもパパが培ってきた業が見受けられました」

〈…パパ〉

「…はっ！」

とんでもない墓穴を掘った気がする。

ただでさえ真面目な印象で通してるのに、まさか父親のことを「パパ」と呼んでるって知られたら！かっこのネタにされてしまう

！



へ…そうだよね。芽吹はお母さんに会ったことないんだもんね。お父さんに甘えちゃうのもわかるよ

「あ、あの、教導」

へ大丈夫大丈夫。別に変とは思ってないって。自ら進んでサイボーグになった奴とは比べ物にならないって

——全然フォローになってませんが、茶化すつもりもないようですね。安心しました。

へよし、それならあたしが芽吹の母ちゃんになってやろう！

「こんな不真面目な人にパパはあげられません」

へむ、娘に嫌われた…

「教導は教導です。落ち着きのない男の子っぽい勇者でしかないんです。パパにふさわしいのはもっとこう、人知れず背中を支えてくれるたおやかな人じゃないと」

へぬう、さつきは女の子だって言ってくれたのに…。そんなこと言う弟子はこうだ！

何か琴線に触れたのか、教導がすねたようなことを口にした。

——そのあと、この世のものとは思えないほどの甘美な刺激が背中から波及し、全身を支配した。

「うわああっ…ぎ、銀…やめっ…」

へ抜群の効き目のようだね。…抵抗しなくていいよ、全部あたしにゆだねて

「っ…！」

耳元でそうささやかれると、また耳からゾワゾワとした感覚が神経を走った。

三好さんがやられてた時でも身体の力を奪うイケボだったのに、間近で聞かされたらそれはもう。

〈頑張りやさんの芽吹に、ごほうびだよ。お疲れさま〉

「ふあ…んっ…あ…あ…」

もう抵抗するということすら考えが及ばない。意志は堅いつもりだったけど、そんなものは鉄板の上のアイスクリームのようにドロドロに溶かされてしまった。

銀の両手のあたたかくて心地よい刺激が、本能のまま流されてしまえと私のわずかに残った意志をさらっていった。

その時間は永いようにも感じられたし、あつという間だった気もする。だらしないう声を上げて銀にされるがまま、気がつけば私の背中から銀は離れていた。

〈ふふ、気に入ってくれたようだね、二人とも。銀様もやりがいがあるってもんよ〉

「……なに一人で満足してんのよセクハラ魔神！」

〈お、夏凜が復活した。イヤだなあ、ホンモノのセクハラ魔神はハルさんぶえっ！〉

「しゃべるなあ！これ以上変なこと言ったらあんたから殺すわよ！」

復活早々銀に枕を投げつけた三好さん。顔面ヒットで布団に大字で倒れた。

余程恥ずかしかったのか、三好さんは顔を真っ赤にしてさらに銀に詰め寄った。今日という今日は徹底的にしぼるつもりらしい。

〈ひゃく夏凜に襲われるうっ助けてメブうっ〉

「……勝手に襲われてればいいんじゃないですか？」  
へうおおん、芽吹が冷たいよ〜

「あなたのそのアホみたいな行動に冷めてんのよ！」  
へうひい〜、はいんはあふいよ〜

夏凜は熱いよ〜、と言いたいらしい。頬を両側からつままれてまともにならねばいけぬ。

三好さんの動きもだいたい柔らかくなつたように見える。教導のマッサージの効果はちゃんと出てるらしい。

私もさつきまでの身体の軋みが嘘のように消え去つてゐる。辱められた火照りで動きたくないけど。あの義手は医療器具か何かなのかしらね。

「このようにあなたをとちめてやれるくらいには回復したわよ。感謝しとくわ」

へふふ、悪役みたいなセリフ〜

「銀みたいなのが勇者だつていうんだから、別に聖人君主である必要もないでしょ」

へみたいなのって…。ああ、評価がどんどん下がっていくよ…

英雄としての評価は右肩下がりでですけど、勇者としての評価はストップ高を維持してますから安心してください。

いつか三好さんを下して、あなたを越えることが今の私の目標です。そのいつかは、わかりませんが。

それまでは、教導と三好さんの隣にいらさせてください。

過労死しそうね、あんた

「ようこそ讃州中へ！三好さん、楠さん！」

「お待ちしました！」

例の幼稚園での出張の前日から、私たち三人は丸亀を離れて教導の古巣の讃州市へ乗り込んだ。

学校の門前で、会議で見た勇者部本部の三人——犬吠埼部長とその妹、結城さんが出迎えてくれた。

教導とはまた違う、ほんわかした雰囲気がある。その場にいるだけで伝わる。

「あたしは!?通行止め食らった中、こんなにかわいい後輩を連れてきたあたしは歓迎してくれないの!?!」

「あーはいはい。お帰り銀」

「思春期のどら娘を軽くあしらう母ちゃんみたいな反応だあ…」

道中、土砂崩れの影響で教導が案内してくれたルートが通れなかった。教導特有の悪運かと思っただけど——。

教導の話に寄れば、樹海が損壊する程結界内に災害として顕現されるといふ。先の戦いで派手に木々を腐らせてしまったから、その影響を被ったということだろう。

「おひさしぶり銀ちゃん！あ、そっちの制服かわいいねっ、似合ってる

よ！」

〈友奈がかわいいいつて言つて誉め殺してくる…〉

「銀さん銀さん！お姉ちゃんったら銀さんに仕事押し付ける気で準備が全然」

〈樹が聞きたくなかった事実を突きつけてくる…〉

教導は今でも彼女たちの身近な仲間と思われてるらしい。再会を喜ぶより別れた時の延長上でグイグイ迫ってきてる。

演技というのはわかるけど、教導は悲しそうな顔をした。なぜそこまでネタに走るのかは少し理解できないけど。

「……銀が哀れに思えてくるわ」

「それだけ距離感が近いってことなのよ」

「銀に荷物持ちさせてる時点で二人もなかなかだと思わよ」

「銀をフリーにするとどんなちよつかいかけてくるかわからないから」

実際電車の中で割とシャレにならないいたずらをしてきたので、反省しなさいという意味を込めて荷物を持たせた。

宿泊する分荷物も多いし、私と三好さんそして本人の分を合わせれば動きたくても動けない重さになる。

——サイコキネシスを駆使する教導には全く効果がなかったけど。

「立ち話もあれだし、部室に行きましょうよ風先輩」

「そうね。樹の言うとおりの準備があまり進んでなくてね、さつそく六

人で取りかかろうと思うわけ」

「この前もそうだったじゃないっすか。もう、あたしだって結構忙しいんすからね」

「それだけ頼りにしてるってことよ、あんたのこと」

「そんなことを言われると文句も言えなくなる銀さんなのでした」

「よくご存知で樹さんや。姉のダメな部分を学んだのはこの口かあ!?」

「い、いひやいでふ銀はくん！」

妹さんのよく伸びる頬をビロンビロンしながら校舎へと入っていった一行。教導が珍しく反撃に出たのを見て、やり過ぎるとしっぺ返しを食らいそうねと思った。

「芽吹ちゃん夏凜ちゃん、けっこうハードになるかもだけどよろしくね！」

「そっちとこっちのリーダーは別作業と。放置とはなかなかやってくれるじゃない」

教導と犬吠埼部長は台本と演出の打ち合せがあるということで、別室で作業中。教導が讃州にいた時期から出し物の構成は二人の仕事だったらしい。

そして残された結城さんと犬吠埼さん、三好さんと私は舞台道具の製作に駆り出された。実際に経験があるのは結城さんだけという話だが、なんとかこなすしかない。

「ごめんね。銀ちゃんって割となんでもできる子だから、難しい仕事は優先的に割り振られちゃうんだ」

「知ってるわ。…だからこそ、教導の足を引っ張らないようにしないと」

「…そうね。あいつが度肝を抜くほどの完成品、見せつけてやろうじゃない」

いつまでも教導に尻拭いさせてるようではダメだ。戦闘であれ仕事であれ、あの人の世話にならないようにしないと。

三好さんもモチベーションは十分のようだ。教導の鼻をあかしてやろうと息巻いてる。でも三好さんって、美術や図画工作が得意だったかしら？

勇者部の主力であろう結城さんは、実質この製作組の指揮を取らないといけないので少し緊張してるようだ。リーダー気質の犬吠埼部長や面倒見のいい教導がいないのは、彼女にとっても好ましくない状況らしい。

それ以上に上がっちゃってるのが犬吠埼さん。人見知りなのか先程から一言も発せず固まってる。会議の時はそうでもなかったのに。

「…さて、資料に目は通してきたけど、どこから始めればいい？結城さん」

「うーんとね、どこからだろう？」

「ちよつ、あんたがわかってないんかい！」

リーダーシップ以前の問題として、結城さんは計画性がな  
いのかもしれない。頭が弱いと言ってしまうばそれまでだが、教導とはまた違う意味でおバカと見える。

三好さんもたまらずツツコミを入れてしまった。板についてきたわね、その役回り。

「……わかったわ。まず状況を整理しましょう。報告書によれば、パペットの製作は途中、背景画は着手してない状態、音響は…：教導の仕事ね。構成と台本もあっちの話次第と」

「演技の練習はどうなのよ。まさかそこまでやってないとか言わないでしょうね？」

「えっと、わたしと風先輩で大まかな部分は練習したよ。銀ちゃんと打ち合わせで変更があれば、そこは練習かな」

「オーケー。結城さんはいつでも抜けて練習ができるように各製作の手伝いをお願い。残り三人でパペットと背景画を割り当てるわ」

残り時間もないから、誰かがあれこれ指図しないと上手く回らないだろう。

結城さんはその役割は得意でないと見えるし、——三好さんに指図されるのはどうもシヤクなので私が指揮を取ることにした。

別に私も集団の指揮を取るのが苦手というわけでもない。勇者として必要な資質だと思ったから勉強したし、パパだって多くの人員を監督して数多く建立したんだ。

「おおっ、できる女っぽい！風先輩と銀ちゃんを黙らせた時といい、芽吹ちゃんってかっこいいよね！」

「そ、そうですよねっ！お姉ちゃんとは違ってクールでキリツとして…：憧れちゃうなあ〜」

「……ありがとう」

——こう、素直に誉められるのはどうも苦手だ。教導もそう



だったけど、結城さんや犬吠埼さんの私を見る目は何か違う。

「何ガラにもなく照れてんのよ」と、しらけた視線で三好さんが訴えてきた。あなただっただって同じ事が起こればいつものツンデレかますじやない。

「んんっ。役割を決めます。裁縫できるのは誰？」

「…わ、わたしはできないです…」

「風先輩がほほほやっちゃうからねー。わたしは縫うだけなら、かな」

「…三好さんは？」

「やってやろうじゃない。やったことないけど」

家庭科は壊滅と。作業できそうなのは私と結城さんくらいか。

——じゃあ、背景画の方は？

「……背景画、描ける自信のある人は？」

「それなら、前やったことあるよ」

「…ごめんなさい、それも苦手そうです…」

「やってやれないことはないわよ」

三好さんのセリフからは嫌な予感しかしないので、彼女に任せるのは遠慮しよう。結城さんは一応の経験者で、犬吠埼さんはこつちも苦手と。

さて、いよいよ割り振れる人員がいらないことに気づいた。途中で抜けなきやいけない結城さんに責任者を任せるわけにはいかないし、残り二人はどうにも頼りにならない。

この手札で最善のソリューションは――

「…わかりました。まずは背景を全員で取りかかります」

「え？それだと間に合わないかも…」

「とりあえず下書きは私が早急に終わらせるわ。犬吠埼さんと三好さんはその後の色塗りをお願い。結城さんも下書きが終わるまで手伝って、その後私と一緒にパペットの製作に入る手順で」

簡単な作業を指定すれば、経験のない三好さんや犬吠埼さんでもこなせるだろう。能力が必要な作業は私がさっさと済ませて、残りの単純作業は任せてしまおう。

「過労死しそうね、あんた」

「しようがないじゃない。この部がこんなに部長や教導に依存してたかって知らなかったんだし」

「あははは…ごめんね芽吹ちゃん。私はまだまだ半人前の勇者だよ…」

「銀さんはすぐにお姉ちゃんも認める勇者になったんですけどね…。わたしじゃ銀さんの後継者なんてなれないよお」

「…なるべく諦めない、だったっけ？前進をやめない限り、必ず目的地に着くわ」

部室に掲げてあった掛け軸に少し視線を合わせた。

「なるべく諦めない」、  
「なせば大抵なんとかなる」  
――私は好きな言葉だ。

「…さ、始めましょう。教員たちに閉め出される前に、やれることは

やらないと」

「イエッサー！」

「が、がんばります！」

「言われなくてもやるわよ！」

——割と、私も楽しんでるのかもしれない。こういうの、初めてだし。

…そんなの、ずるいじゃない…

へちいーす。どう進んでる〜?」

「ごめんごめん。ちよつと話こんじゃって」

「結城さん、縫製はもう終わったわ。あとは綿詰めて口を閉じるだけよ」

「オツケー芽吹ちゃん！これなら終わって背景の方に手伝いにいけるね！」

「そうね。あの二人を野放しにはできないわ」

パペットの製作はラストスパートに入っていた。生地の切り出しは結城さんに任せて、私がそれを縫い合わせる。

マシンでの作業はあまり経験なかったけど、機械はマニュアル通り使えば応えてくれる。早い段階でコツを掴んだおかげで、なんとか三好さんと犬吠埼さんの救援が間に合いそうだわ。

そこに、会議を終えた部長と教導が部室に戻ってきた。

「教導、お疲れ様です。あと少しで終わるのでちよつとだけ待っていてください」

「え、うそ。パペットもう終わるの!?!」

「すごいんですよ！芽吹ちゃん！まさに出来る女って感じで！風先輩とは違った意味で女子力マックスです！」

「くう〜、銀の人材マニアめ！あたしの後輩じゃないのがほんと悔しいわあ〜！」

へえっへん。あたしの自慢の後輩でさあたたたちよつタンマっ！」

得意げに私の自慢をする教導を、部長はヘッドロックした。女子力とは一体。ノリが男子だ。

部長は進捗率の高さが予想の遥かに上を行っていた模様。たぶん最後はこの人が全力で頑張る予定だったのかもしれないけど、そうはさせません。

「結城さんだって、謙遜した割には手際がよかつたじゃない。あなたじゃなくて三好さんが一緒だったらこうはいかなかったわ」

「そーよ。友奈こそ讃州勇者部のエース！丸亀勇者部なんて敵じゃないわあ！」

〈何で張り合ってるんすか…〉

「えへへ。芽吹ちゃんみたいに頭は良くないけど、なせば大抵なんとかなる！で頑張ってます！」

私と三好さんに必要なのは、結城さんみたいな柔和な心だ  
——  
と思った。

ぶつかりあつてばかりの私と三好さん。お互いに自分を決して曲げないんじゃないかあえるわけがないのかも。

妥協——  
——  
じゃないけど、相手に寄り添ってあげられる心が私たちの関係をなんとかするきっかけになる。はず。

「んで、樹と三好さんは？」

「美術室借りて背景画を塗ってまーす」

「…思った以上にあの二人は不器用みたいだから、早く終わらせてあっちにいかないと」

へあー、うん。そうだね。魔王城の絵だけど地獄絵図になるからね〈



たいだ。残された私と教導でパペットを完成させる。

〈すごいじゃん芽吹。ちゃんとみんなと協力して仕事できたじゃんか〉

「……三好さんとは折り合いが悪いだけです」

〈…なんでだろうね？単純に嫌い、つてわけでもなさそうだし〉

「……負けたくないんですよ。三好さんだけには」

たぶん、これが私と三好さんの心を隔てている一番の壁。お互いにこの人だけには負けたくないと思っっていること、貸しを作りたくないと思っっていること。

だから、相手のことを素直に認められない。認めてしまえば、それこそ敗北だから。

〈…じゃあ、勝ちたい？〉

「え？それはもちろん」

〈…あたしの目にはね、何だか決着をつけるのを二人ともためらってするように見えるんだ〉

「……………」

〈理由は…芽吹自身が一番わかってるんじゃないかな〉

三好さんとの決着を躊躇する理由。そんなこと言われても、機会がなかったとしか言い様がない。

——いえ、わかっています。

勝つても負けても、その瞬間ようやく巡り会えた「好敵手」は私の前から去ってしまう。私の全てを賭して挑むべきやりがいがあるが、砂になつて手のひらからすり抜けてしまう。

いつの間にか勇者になるという目標は通過点でしかなくなり、三好さんと競うことこそが私の本質となつていた。

「…はい、完成！芽吹の職人魂が宿つたことで勇者も魔王もこんなに風格が出た！」

「…ありがとうございます」

「よし、休んでるヒマはないぞガードルマン！美術室に出撃だ！」  
「誰が空の魔王の相手ですか」

「教導の『勝ちたい？』という質問の真意が掴めない。決着を躊躇してゐることを再認識させて。」

「それで、私をどうしたいの？」

「ちよ、ちよつとだけ様子を見に来たら…そ、想像以上に禍々しい絵ができてしまったわね…」

「お、お姉ちゃん、その…」



「い、いいんじゃないかな!?魔王のお城なんだしっ!」  
「……………」

楠が置いていったレシピ通りに色を合わせて、楠が指定した箇所  
その色を塗ったはずなだけど。

出来上がったのは、あいつが描いた見取図とは程遠い、それこそ樹  
海のような不条理な世界だった。

「……全部私の責任よ。犬吠埼さんは何も悪くない」

「い、いえっ!わたしが設計図を見間違ったり絵の具落としちゃった  
りしたから!三好さんに責はありません!」

「あー。それでどうにかフォローしようとして色が混ざっちゃったわ  
けね」

「……うまくいかなかったことには変わりないわ。一からやり直させ  
て」

「いやいやいやいや!これから全部やったら下校時間、間に合わない  
よ!?!」

私にこういう才能がないのを見抜いてか、あいつは一からルールを  
敷いていった。

それだけでも悔しいのに、些末事の軌道修正すら満足にできずに完  
成までこぎつけられないなんて。

悔しさとわけのわからない感情が頭を支配して、視界が歪んでき  
た。

「……うえっ!?か、夏凜ちゃんっ!?なんで泣いてるのっ!」

「し、知らないわよっ!!こんな、こと……!」

「おおおお落ち着きなさいってっ。だ、大丈夫よっ、なせば大抵なんと

かなる！から！」

「ぐぐぐぐぐめんなさい三好さん!!わたしのポカのせい!!」

その同情のような心遣いが、余計に火に油を注ぐ。どうにかなりそうな気分だ。

こんなところであいつに負けるなんて――！

芸術の才能で負けるならともかく、課された仕事をこなせないのは完全な敗北じゃないのよ――！

「……ううつ……！」

「か、夏凜ちゃんっ、待ってっ!!」

この場にいられなくなつて勝手に動き出した身体を、結城さんが手を引いて止めた。

力づくで振りほどこうとしたけど、振り返って見た結城さんの表情が私を畏縮させてしまう。

あまりにも銀みたいな、真っ直ぐで優しい顔。

「友奈、ナイス！」

「夏凜ちゃんがどうして泣いてるのかはわからないけど、悩んだら相談だよ！」

「そうそう！三好さんがそんなに思い詰めてたのは別の理由がありそうだしっ！部長として相談乗ってあげるわよ！」

「……うるさい。…あんた達には関係ないでしょ」

「そ、そうはいきませんよ！みよs…夏凜さんだつて勇者部の一人ですから！失敗の原因はわたしなんですから、罪滅ぼしさせてくださいっ！」

——今まで諦めてた優しい言葉が、私に向けられている。出来損ないとそしられ、誰の関心も得られなかった私に。銀が優しいのも、それが使命だからと言い訳つけて認めなかった私に。

今まで私が見てきた人間たちこそ例外で、ほんとは世界にはこの勇者部みたいな人たちの方が多いって———そう思っっちゃうじゃない。

そして私は———そっち側の人間だって。

「……あんたら揃いも揃って……」

「残念だったわね。みんな銀と同じでお人好しでお節介で、……夏凜のこと放っておけないのよ」

「……そんなの、ずるいじゃない……」

最後の力を振り絞って涙を引っ込める。こんな場面銀や楠に見られたら、どんなことになるかわからない。

「よし！あたし達の練習は帰ってからやるわよ！オーケー友奈!?!」

「ラジャー！」

「じゃあ友奈には別の任務！銀と楠さんを精一杯おもてなししてきなさいー！」

「了か……うええ!?!」

「いい!?絶対にあたし達が背景やり直してるのを気付かせちゃダメよ!」

ビククリしてるのは結城さんだけじゃない。私自身が一番動揺してる。

———部長が、凶星を言い当てたから。別の理由があるのを察す

るのはわかるけど、そこまで正確に心を読まれたらさすがに。

「なっ…なんでそれを」

「勇者部部長をなめないでくれるかしら？あんだみたいなわかりやすい人間の心くらい読めるのよー」

わかりやすいつて———!?

「お、おもてなしつて…どうやって…?」

「とと、とりあえずうどん食べてきなさい！ほら、これで好きなだけ食べればいいからっ」

「お札握らせるとか、とうとうお姉ちゃんも悪代官さまに…」

「あ、あたしだってどうやってたら銀と楠さんを満足させて時間稼げるかわかんないのよお！」

かつこいいこと言った部長だけど、銀と同じで肝心なところでポンコツだ。とつさに思い付いたことなんだろうけど、やり方があまりにも雑すぎる。

でも、この部長にして、あの教導だ。その理屈だけで納得してしまいうあたり、勇者部スピリットはそういうものらしい。

「ほ、ほらっ！さっさと迎えにいかないと銀と楠さんもこつちにきちやうわよー」

「わあ〜っ！ははいいい！結城友奈超特急でVIPのお迎え行つてきまあ〜すっ!!」

無意味にドタドタ慌てた様子で美術室を出ていった結城さん。ムチャ振りに付き合わされて———元はといえば私のせいだから、ホントにごめんとしか言い様がない。

『わっ！銀ちゃんに芽吹ちゃん!?!』

どうやらすぐそこで出くわしてしまっただらしい。あと少し遅かったら、二人が美術室に突入してきていた、と。

《ん？どうしたの友奈？そんなに慌てて》

『え、えつとね！風先輩がね、練習は今日の夜やるから、二人をおもてなししてきてって!』

『……？ちよつと話がつかないけど……』

『大丈夫!!大丈夫だから!!風先輩は無敵だから大丈夫!そう!うどん食べれば大丈夫だから!!』

《…友奈こそ、大丈夫?》

『ささ、久々にかめや行こうよ銀ちゃん!芽吹ちゃんもねっ!!』

『…はあ』

もう完全に勢いだけで二人を連れていこうとしてる。がっしり腕を掴んで引つ張ってる結城さんの様子が見えなくても脳裏に浮かぶ。

《…ま、そうだね。風さんがそう言うなら大丈夫なんだろうし、うどん食べたいし》

『部長に絶対の信頼を置いてるんですね』

《まあね。あたしがこうしてリーダーしてるのだから、半分あの人の真似だし》

『教導の師、ですか。……何となく、察しました』

『よ、よし!じゃ、じゃあ行こうよ二人とも!はは!風先輩ってばすごいなあー!』

その威光だけで銀と楠を納得させたのは、確かにすごいと思うけど。こんな大変な役回りを結城さんに押し付けるのは、さすがにいただけない。

三人の声が遠くなっていった。美術室に残った私たちがなぜか同時にため息をついた。

「……友奈、ごめん」

「あとでおわびしないといけないよお姉ちゃん」

「……なんか、私も、ごめんなさい」

何とも言えない空気が三人の間に漂う。勇敢な勇者の一人が「何か」を犠牲にして危機を退けたんだから、そりや変な空気になるわ。

「……さっさと詫び入れるために、終わらせましょうか」

「そうね。夏凜の言う通りね。下書きはあたしがやるから、とりあえず二人は片付けと色の準備をお願い！」

「オツケーお姉ちゃん！」

よし、切り替えていこう。結城さんが何とか用意してくれた状況だ。

楠。今回はあんたの勝ちよ。けど、何度だって私はあんたに挑戦する。負けたなら、倍勝てばいいんだから。

「うあく何とか間に合ったあく！」

「下校まで残り5分よ!?急いで出ないと！」

「幽霊さんとはったり出くわしちゃうね」

部長の指揮は手慣れたものだった。割と自由放任な銀とは違って、常に私たちに目を配ってあれこれとアドバイスをくれる。

のお陰でこれといったミスもなく背景画は何とか完成した。

残念だけど、リーダーとしての能力は犬吠埼部長の方が上よ、銀。

「!?いいいい急いで出るわよ樹い！」

「?部室の鍵って閉めてる?お姉ちゃん」

「ああああ!閉めてないいいい!どおおしよおお！」

「…先生に断り入れて閉めてもらったら?」

妹さんの方は、姉に対しては的確ないじりというか、コミュニケーションができるらしい。

——— なんか、私と二人で作業してた時は、結構ビクビクしてたのに。私って、そんなにガラ悪いかしら?

そして部長はというと、——— たぶん霊的な何かはNGらしい。一言でここまで狂乱してるのもなかなかだけど。

「そ、そうね!仕方ないわよね!真っ暗な危ない校舎を生徒だけで歩かせるわけにはいかないものね！」

「…なんか一瞬でも偉大な人とか思っただけ損した気分だわ」

「な、なにおう！」

「やめなよお姉ちゃん。一瞬だけでも尊敬してくれたんだからさ」  
「樹まで言葉にトゲを生やしてくるううう」

「でも…ありがと…。…私のこと、配慮してくれて」

「なによ、銀が話してたよりずっと素直な子じゃない。あやつめ、後でアームロックの刑ね」

「女子力（物理）って笑われちゃうよ」

「…物理的に校舎から排除される前に、早く出ましようよ」

何でこんな時間のない時に無駄話してるんだろうか。

荷物をまとめてギリギリで校舎を出ると、校門でうどんを食べにいった三人が待っていた。

「うぐぐぐ…。まだお腹が重い…」

へおおふ…。友奈め…風さんに付き合わされてあんなに大食いできるようになつてたなんて…

「え？銀ちゃんも前はあれくらい食べてなかったっけ？」

へえ!? そうだっけ!?…確かに、そうかも…

「…教導、お気を確かに。普段私たちが摂ってるくらいが適量なんです。あれは身を肥やすどころか胃を鍛えてフードファイターにでもなるレベルの量です」

どうやら胃の限界を実感するくらいに食べてきたらしい。楠と銀は具合悪そうな顔でお互いを見つめあってる。

てか結城さん。もしかしてもらったお札の分、全部使ったの？ そうでもないところな状況にはならないわよね———？



「あれま、銀と楠さんがグロッキー」

「…うつす。友奈が際限なくあたし達の分まで頼むんで、胃が…」  
「味はすばらしかつたです…が、それ以上に…」

「勇者ともあろう者がなにやってんのよ。自己管理をしろって言ったのはどこの誰だったかしら？」

「ご、ごめんね銀ちゃん芽吹ちゃん！わたしと風先輩ならあれくらいペろつと食べちゃうからつい…」

「友奈さん…お姉ちゃんは色々規格外の人間だよ…？」

女子力が違うとか部長はほざいてるけど、そういう問題じゃない。

もうどこからツッコんでいいかわからず——深く考えるのをやめた。

「…さて、今日はさつさと帰るわよ！」

「…ねえ、思ったんだけど。私たちの宿泊先って」

「ん？風さん家だよ？友奈も来るって話だから、勇者部全員揃い踏みだね」

「…こんなに大勢…ご迷惑では？」

「なーに水くさいこと言ってんのよ楠さん。妹が一人だろうが五人だろうが、最強のお姉ちゃんの手にかかれば無問題よ！」

「お姉ちゃんとわたしの二人暮らしだからスペースは大丈夫だと思えますよ」

「うん！こんなに大勢のお泊まり会、楽しみだなあ〜！」

「うへへへ、ホントにね〜」

「なによその気色悪い笑いは。またセクハラしたら承知しないわよ！」

「…言っても無駄な気もするけど」

「へようお分かりで芽吹や。今はしやがないでいつはしやぐんだよ？」  
「銀ちゃん銀ちゃーん！わたしも混ぜてー！」

へお？友奈も挑戦するのか!? 霊峰の数々に!〜

「やってやりますよ三ノ輪隊長! 二人一緒なら、どんな困難だって越えていけるよ!」

結城さんは遠慮なく後ろから銀に抱きついて、お互いに一点のくすみのない笑顔を見せあった。銀が出向する前は、一番親しい友達だったんでしょね。

ぶっ壊すわよっそんなもの！

〈……寝れないの？夏凜〉

「…あんたこそ。しばらくくたばってたじゃない」

部長の家に来てからは、もう何もかもめちゃくちやだった。

胃が悲鳴をあげてる銀と楠にうどんを振る舞う部長。ノックアウトした銀の替わりにセクハラ魔神と化した結城さん。犬吠埼さんが楠の介抱にあたると、残されたのは私だけ。

このカオスにあてられて、神経がギンギンに冴えてしまった。片っ端からツツコんでたのがいけなかったのもあるけど。

他のみんなが寝静まった夜中。玄関先から讃州の夜景を眺めてる銀を見つけた。

〈ホントにね。一杯食わされたよ〉

「一杯どころじゃないでしょうが。何で家に来てまでうどん食わされてんのよ」

〈いいじゃんいいじゃん。食い倒れた芽吹なんてもう一生見られないよ〉

「拒否すればいいものを…。あいつもバカなんだから」

あいつも銀も、出されたものは全部食べきった。己の胃袋がもう使い物にならないのを理解していながら、部長の料理は無駄にできないと言って意地を見せ付けた。

その結果、楠のやつはガチで具合が悪くなって、銀はアホ面しながら

らその場で転がる始末。二人とも拒否しないバカだけど、遠慮なくおかわりを継ぎ足す部長もちよつとどうかしてる。

〈…楽しいでしょ？勇者部〉

「これを見て楽しいかと聞くとか…。あんたも大概ね」

〈ふふ、でも悪くないって顔してるよ？〉

「…悪くはない、わよ。疲れるだけで」

…あんたの隣は、ね。

〈そういうこと言ってくれとあたしもうれしいな〉

「そうさせたのはあんたよ。こんなことになるなんて、思ってもなかった」

〈そんなことないよ。夏凜も芽吹も、ホントはみんな一緒にわいわい騒ぎたいんだよ〉

騒ぎたいのはあり得ないとして。

みんなと一緒に何かするのは、嫌いじゃないかも。

———これが、私と楠に足りてないもの、なのかしら？

「あの楠が、ねえ。一匹狼気取ってるような奴が」

〈……二人とも、お互いを意識しすぎだよ。前も言ったかもしれないけど〉

「…あいつだけには負けられないのよ。…あんな奴が勇者に選ばれたのだから、今でも納得いかないから」

口にすると、忘れかけていたあいつへの怒りが蘇ってきた。銀にそ

れを打ち明けるのは少し躊躇があったけど――

どの道、いつかは三人で向き合わないといけない問題だ。銀だって知っておかなきゃいけないことよね。

銀が視線を私の方に向けて、疑問の符を見せた。

〈？…どういう意味で？〉

「…あなたはまだ見たことないかもしれないわね、あいつの本性。自分の目的のためなら、どんな手段もためらわない。それが他人を傷付けることであっても」

〈芽吹が？ほんとに？〉

「…あいつに潰された候補者も、少くないわ。身体的にも、精神的にも」

本人は、その気はなかったかもしれない。けど、あいつの言葉が、訓練が、視線が、間違いなく数名の候補者を途中で諦めさせたのも事実。

――私は、何もできなかつた。あいつを上から叩いてやることも、共に歩んだ仲間を守ることも。

〈…じゃあ夏凜は、その子たちの仇をとりたい？芽吹を同じ目にあわせたい？〉

「それは……」

――銀の突拍子のない質問に、言葉が詰まってしまった。

昔の私なら、即答でもちろんだと答えたはずだ。あいつのこと、単なる敵だと思ってたから。

——けど、なぜだろう。思考はそこで停止してしまった。

へ……例えばさ。あたしが芽吹を再起不能になるまで打ちのめしたら、夏凜はどんな気持ちになる？

「えっ……？」

へそんな人間は勇者に相応しくない、あたしが直々に手を下してやるって言ったらさ

「や、やめろよそんなこと!! あんたが本気でそんなことしたらっ、いくらあいつでもっ」

間違いなく二度と立ち上がれなくなるだろう。

——あいつだって銀のこと信頼してるはずだし、そんな人にお前は必要ないって言われて力の違いを見せ付けられた——私だっけ心が折れる。

そんな楠の姿を見て、私は——

へ潰れるだろうね。心も身体も。そうなったら、夏凜はうれしい？それとも

「やめろっ!! あんたおかしいわよっ!!」

へあはは、そうかな？けど、こんな簡単な質問にも答えられない夏凜も、ちよっとおかしいんじゃないかな？

質問に答えることを拒否してしまった。答えを出すことを良しとしないから。

銀はなおもいつものほほえみで私の回答を待っている。その視線だけで足は貼り付けられて、逃げることを許さない。

感じたこともない恐怖が、私の身体を支配した。

〈聞きたいんだ、あたし。夏凜が芽吹をどうしたいかって〉

「どうしたいって……?」

〈勇者をやめるって言うまで叩きのめすのか、二度と逆らわないように屈服させるのか〉

「そんなことするわけっ……!」

〈なんで?芽吹に勝つってそういうことじゃない?嫌なやつをどうにかするって〉

銀が示した提案には、まるで血が通ってなかった。妖しげなほほえみのままでいるのが、なおのこと狂気を感じさせる。

力づくで心までも屈服させ、意のままにする。最短で抜本的方法だ。

でも

私があいつに求めることはそうじゃない。私が見てきた汚い大人みたいに心を蹂躪するんじゃない

「あいつは……楠は仲間よっ!そんなことしていいわけないっ!」  
へじゃあ、どうするの?このままじゃ、ずっと二人の間には壁が残った

「まだまだよ？」

——ようやく会えた好敵手を、仲間にしたいんだ。

「ぶっ壊すわよっそんなもの！私たちが積み立ててきた壁なんて全部！」

へ…ふふ。そうだね。壁は殴って壊すしかないよね」

——本当は、あいつを仲間って認めたかったんだ。誰の指図も受けずひたすらに高みへ登るあいつの姿は、——私の憧れだった。

——だけど、仲間として認識してもらうにはどちらかが歩み寄る——  
——負けを認めるしかない。

私も楠も、高いプライドがそんなことを認めなかった。気づけばそれを正当化するように後付けの理屈を並べて、お互いの本当の姿なんて見えなくなってた。

私たちの関係をどうにかしたいなら、——言い訳なんてしないで、本音でぶつかり合って、納得するしかない。

「そんであいつも殴るっ！一切の手加減なく！」



「おお、あたしは止めないけど、大丈夫？」  
「止めたらあんたからぶちのめす」

止めなくて結構。銀は関係ないから。これは私と楠のけじめだから。

そうと決まれば即決行したいけど、肝心のあいつはダウン中。そして昼間は幼稚園に訪問。その夜打ち上げ会。最短でもその後か。

少し時間が空いて頭が冷えてくると、自分の置かれた位置が見えてきた。肩肘はってやせ我慢してた自分のバカバカしさも。

本音を絞り出すのって、こんなに難しいことだったかしら。いつの間にかそれができなくなってたのかも。

「何をモヤモヤしてたんだろ。こんな単純明快な解決法がすぐそこにあったのに」

「ホントにね。なんでためらってたの？」

「あいつだけには、膝を着きたくないのよ。…けど、今回は私の勝ちね。銀の出した課題、先に解いたのは私よ」

「ヒントをくれたのはあんだけど。公平じゃないとは思うけど、勝ちが勝ち。」

「これで決着が着くとも思っていないけど。」

「そのためには、小さな勝ちはくれてやるって？」

「ええ。何倍の価値があるもの」

「『勝ち』、だけに？」

「……冷えてきたわね。さつさと布団に戻るわよ、銀」  
「言ったのは夏凜じゃんかよ〜」

そんな寒いダジャレさえ、心地よく聞こえてしまうのよ。  
これ以上は言わせんな。

「あ、サイボーグのねえちゃんだ〜！ひさしぶり〜！」  
「おお〜！ずいぶん大きくなったなあ、ぼうず達！今日は銀様がたっぷり遊んでやるぞ〜！〜」

幼稚園につくなり、銀は園児たちに群がられる。主に男子に。あの義手と義眼が男心を掴んで止まないのか。

対して女子が詰め寄せてきたのは――

「おねえちゃん、きれ〜。せがたかくてかっこいい〜」  
「そう？…ありがと。あなたもすぐに美人になれるわよ」

――楠に、だ。

確かにすつと姿勢が良くて、頭良さそうなクールな顔立ちで、私以外にはそれなりに愛想がいい、完璧な美少女だけけど。

なんか納得いかない。納得いかないけど――決着は後で。

「んじや予定通りに、中休みまで一緒遊んで、その後人形劇やるわね」  
「：銀があの様子だけど、準備大丈夫なの？」

「大丈夫だよ。銀ちゃんが来ると、いつもあんなんだから」

「大人気ですよ、銀さん。憧れちゃいます」

「楠さんも大したもんよ。できる人間は子供たちも気づいてしまうよ  
うね」

子供たちだけじゃなくて、勇者部の面々も楠の評価は高いようだ。

—— そりやそうよね。経験もない仕事の指揮をとって、多方面  
に才能を発揮して。

だからこそ、私は挑む。あの性悪女に。どれだけ多才なやつでも、  
勝つべきところで勝てば、それは勝ちだから。

「よし、先生方の指示に従って、子供たちの相手になるわよー！」

「おー！」

「…おー」

「ほらほら、もつと気合いいれないとあたしには当てられないぞ〜？」  
「うう〜っ！風ねえちゃんからだデカいのに当たらないよ〜！」

結局二人一組でグループに分かれた子供たちの遊びに付き合うこ  
とになった。

私と犬吠埼部長、楠と犬吠埼さん、銀と結城さんの組分けで、私の

チームはドッジボールをやってる。運動好きの子たちに混ざって、私と部長のガチバトルになっていた。

「…いい？ 投げるぞ投げるぞって相手を見てたら相手も避けるわ」

「えー？ そしたらどうやって当てればいいのさー」

「相手が見てないところから投げたらいいのよ。こんな感じに」

大人げなくボールを避ける部長は、少し痛い目にあってももらわないといけない。

たぶん一番運動神経のいい男の子からボールを借りると、ノールツクで部長に投げ付けた。

「ぶおっ!! か、夏凜っあんた卑怯よっ!」

「子供たちにお手本を見せただけよ。ほら、部長アウト」

さすがに私の豪速球は受け止められなかったらしい。油断してたところをつかれたのか、腕に当たったボールが顔面に跳ね返ってヒット。そのまま帰って来たボールを男の子に託す。

「かつ…かつこいいい…! 夏凜ねえちゃん!」

「…ふ、ふん。鍛え方が違うわよ。あんたも鍛えれば、これくらい余裕よ」

「お、おのれ丸亀勇者部…」

「すっげー! 銀ねえちゃんよりつよい人はじめてみたー!」

このワンプレーで、子供たちが歓声をあげた。敵味方関係なく、私の名前を呼ぶ声が絶えない。

——— なによ、三好夏凜。こんなことで浮かれてるんじゃないわよ。褒められなれてないだけだから。

「おほほほ、照れてる照れてる」

「何か言った？」

「とんでもございませぬ勇者夏凜様」

「あんたの株はどんどん下がってるけど、取り返しにきなさいよ。部長の風さんよお！」

「あたぼうよお！」

こぼれ球をキャッチして外野から豪速球を放ってきた。私相手なら手加減はなしってか。

大人げないのは相変わらずだけど、それなら私も退屈しないってもの！

「すつごーい！芽吹ねえちゃん、絵じょうずー！」  
「そうでもないわよ。勉強したら誰でもこれくらいは描けるものよ」

私と犬吠埼さんが行った組は、お絵描きの時間だった。子供たちになぜかせがまれて、私は先生の似顔絵を描くことに。

風景画や見取図を描き起こすのは慣れたものだけど、それ以外の絵というのはあまり描いたことがない。所詮私の描くものは作品の完成予想図や設計図でしかなくて、そこに関心はなかった。

「ほんとすごいですよ楠さん！この短い時間でこんな上手に描けるなんてー！」

「あなただつて苦手って言った割にはできてるじゃない、犬吠埼さん。…あなたの問題はたぶん、自信のなさじゃないかしらね」

線画だけど、程よくデフォルメが効いた彼女らしい可愛らしい絵。若干怪奇物に片足を踏み入れた部分もあるけど、三好さんより余程絵心はあるようだ。

部長の妹さんなんだし、本来持つてる才覚は同等かそれ以外のはず。

——— 勝手な推測だけ。

姉に甘え過ぎた結果、自立の意識が低くて各所に弊害が出てる、ということなのかしら。——— もつたいない話よ、才能を埋もれさせるって。

「うんうん！樹ねえちゃんもじょうずー！」

「あ、ありがとね。みんなも上手に描けたね！」

「ええ。苦手なことでも勇気をもって挑戦する、それだけでもう立派な勇者よ」

子供たちの無邪気な様子にあてられてか、私らしくもなく饒舌に話してる。

——— 自分の放った言葉が、自分に突き刺さった気がした。

三好さんとの決着からなぜ逃げるの？そんなに競い合える人を失

うのが怖い？それとも負けるとでも思ってるの？私が？

負けを怖れて何が勇者だ。

私に簡単に負けたっていうのなら、所詮三好さんはその程度の人間だったということ。そして、私は三好さんに勝つためにここまで研鑽してきたわけだし、敗北なんてあり得ない。

「さて、片付けしましょうか。みんな、自分で使ったものは自分で元の場所に戻して」

「はーい！」

「ふふ、先生より先生してるかも」

「うぐつ、厳しいご指摘痛み入ります…」

すみません、新任の先生。出過ぎた真似をしました。

〈ブラボーブラボー！みんな気持ち歌声で一つになってるよー！〉  
「うんうん！これなら発表会でも金賞間違いなし、だね！」

「サイボーグのねえちゃんがいつしよだと、すごくがんばるよね！みんなー！」

「あと友奈ねえちゃんはすつごくやさしくおしえてくれるし！」  
〈そうだろー？けど友奈はあげないぞつ。なんたってあたしの嫁なん

だからなー！<

「銀ちゃんもあげられないよつ。銀ちゃんはわたしのお嫁さんなんだからね！銀ちゃんぎゅ〜」

「ばかっぷる〜」

へ…おっと、もうそろそろ時間だね。みんな、また後でね！面白いものを見せてあげるからー！<

「うんうん！お楽しみにー！」



やってやるわよ、私の永遠の好敵手

「…なにやってるんですか、部長。それに三好さんも」

「…返す言葉もございません」

「し、仕方ないじゃない！風のやつがやつきになるから！」

「言い訳しない！」

「は、はいい！」

「…ちっ、何よ偉そうに」

風のやつと二人仲良く鼻に詰め物をしながら、楠の前で正座して  
る。この前は銀がそのポジションだったのに、今度は私だ。

ドッジボールでヒートアップした私と風は、子供たちそっちのけで  
投げ合っていた。むしろその様子を子供たちは楽しんでた節はある  
けど。

んで、受け止めたつもりのボールが顔面に跳ね返ったり、バランス  
崩して顔面からずっこけたりして。

結果、二人とも女子にあるまじき鼻血を垂らしながらドッジボール  
を続ける始末。準備の時間にみんなが迎えに来るまで、周りが見えて  
なかった。

へまあまあ芽吹。子供たちは満足してんだし、今回は

「問題はそこじゃないです。どうするんですかそのツラ。部長はパ  
ペット劇とはいえ表に出るんですよ？」

「…お姉ちゃん、大丈夫？」

「ノープロブレム。あたしの女子力にかかればこんなもの」

「…反省、してるんですか？」

「申し訳ございません。猛省しております」

風の眼前で思い切りメンチを切る楠。お説教キャラが板についてきたわね。相変わらず上級生に対してもあの凄み方だけど。

——とか他人事に思ってたなら、あいつが物凄い形相でこっちをにらみつけてきた。

「三好さんも配慮が足りないわね。子供たちの前で大人げなくガチの勝負して、恥ずかしくないの?」

「知らないわよ、恥も外聞も。通さなきやいけない筋があるっていうんなら」

やけに鼻につく言い方をしてくれる。こいつのそういうところ、はつきり言って嫌いだ。

「呆れた…。そういうのは頭の中だけにしてくれろ?」

「お叱りの言葉ありがとうございます、首席勇者様。肝の中に銘じておきます」

何をそんなにムキになってるのか。石頭なのは重々知ってるけど、現実を見ずに常識人ぶってるのが何か腹立つ。

へはいはいそこまで。夏凜も屁理屈こねてないで素直に謝りなつて。芽吹ももう少し夏凜の事情をくんであげて

「ですが教導。先方にもご迷惑をかけるようなこと、言語道断です」  
へ芽吹。熱くなりすぎだよ。先生方は全然オーケーって言ってたし、風さんだって夏凜のこと気に入ってくれたみたいだし

「あたしと張り合ってくれる人なんて、知り合った当初の銀くらいだったしね。少し女子力に火が着いたつてもんよ」

「……………けど、あんな醜態をさらすなんて、……………」

珍しく楠の言葉が末しぼみになった。最後の方は何て言ってるかわかんない。

「何よ。言いたいことがあるならばつきり言ってみなさいよ」

〈夏凜。芽吹が怒ってるのはそういうとこだよ。ちゃんと反省してるかどうか、態度で示さないと納得しないってことだよ〉

「反省してるわよ。周りが全然見えてなかったって」

「教導の言葉、ちゃんと受け止めてる？態度で示せて」

〈はいはいはいはい。………二人とも、退場〉

いつも通りの声色の言葉だけど、——銀のその言葉には冷たさがあった。

たったその一言で、血の気が異常かと思うくらいに引いた。熱気を感じてたのに、途端に寒気が襲ってきた。

これ以上しゃべることもままならず、銀の言葉通りにその場から離れるしかなかった。

同じく席を外した楠も、ひどい顔をしていた。銀に拒絶されたのは、あいつにとっても耐えがたいものだったのか。

〈なんか、ごめんな。みんな。…あの二人さ、なかなか上手くいってないんだよ〉

『あんたも苦労してるわね。二人とも優秀な分、プライドが高いっていうか』

『でも、銀ちゃんはほんとに先生みたいだったよ！銀ちゃんなら二人を仲直りさせられるよー！』

『きつかけがあれば、きつとすぐにできますよ!』  
《ありがとね、元気が出てきたよ。正直あたしも参つてたところなん  
だ》

——あの銀に、そこまで思わせるくらいに、私たちの関係は酷  
かったんだ。

——そう思うと、なんてことをしていたのだろう。銀の気持ちも考えず  
に

「……………」

私も三好さんも、準備してる間は一言も口にしなかった。さっきの  
出来事が今も頭の中を反芻している。

——教導が見せたあの、失望にも似た表情。あれを目の当たりにしただ  
けで、思考も身体も凍りついてしまった。

——あの時、教導の真意に気付けなかったのがとても悔しい。私の好敵  
手が晒した醜態を叱咤するばかりで、周りの人のことを全く見ていな  
かった。

——いさかいがある度に、教導はマイナスの感情を少しだけ漏  
らしてしまう。最初は怒り、次に悲しみ、そして今回は

「……楠さん？机の向き逆ですよ？」

「…あ。ごめんなさい犬吠埼さん。ちよつと考え事を」

こんな初歩的なミスまで誘発するとは、余程精神状態が不安定なようだ。私の豪胆さを過大評価してたと思う。

犬吠埼さんが心配そうに私のことを見つめてくる。年下にまで気を遣われるなんて。

「…銀さんのこと、ですよね」

「否定するつもりもないけど…心配は無用よ。ここであなたに気を遣われてたら、三好さんに笑われてしまうから」

「夏凜さんと違って、…芽吹さんは強がり上手ですよね」

机の向きを正すと、一枚の絵札が置かれた。――タロット？

「エンプレスの逆位置。…あれだけ司令塔として頑張ってた芽吹さんだけど、今は感情的になりすぎて周りが見えてない…です」  
「……………」

凶星すぎてぐうの音も出なかった。正しく彼女の言うとおりだ。

「勇者部五箇条一つ。悩んだら相談、ですよ。芽吹さんが溜め込んだことを、口にすればきつと楽になるはずですよ」  
「……………」

「…わわー！ごめんなさい出過ぎたこと言いました！でもしよんぼりしてる芽吹さんを見てたらどうしても元気付けたくて！」

なまいき言ってますみませんすみません！――と樹ちゃんは頭を下げ続けた。

悩んだら相談。基本的なことだ。けど、私の中の話を誰かに打ち明けるのは――

――何をためらう必要があったのかしらね。

教導に心を許した時点で、一人で何でもできるなんて妄想は頭から否定してるじゃない。

ただ、今この話をできる人間がいなかっただけで、意地を張る意味なんてどこにもない。実に非合理だ。

「…ありがとう、樹ちゃん。けど、今は目の前の仕事に集中よ」

「は、はい！がんばります！」

――誰かに心配されるくらいなら、喜んで悩みをぶちまけよう。それが良い結果につながるというのなら。

感情的になって私たちは何度も失敗してるのだから、――他人の言葉を、少しは信用してみよう。

「占い、得意なのね。凶星を言い当てられてびっくりしたわ」

「ほっ、当たっててよかった…。これで全然のはずれだったら、…芽吹さんにどんな目で見られてたか…」

「…あなた、割と豪胆よね」

昔々、あるところに勇者がいました。人々に嫌がらせばかりする魔王を説得するために一人、旅に出ています。

ついに魔王の城にたどり着いた勇者。

「魔王！嫌がらせなんてやめてみんなで話し合おうよ！」

「村人のほうが最初に仲間外れにしたんじゃないか！」

劇は予定通りに進んでる。風と結城さんがパペットを操りながらセリフを掛け合い、犬吠埼さんが噛みながらもナレーションをして、銀はPCから音声やBGMを操作してる。

銀と風に許可をもらって、私は席を外させてもらった。教室の外で一人青空を見上げてる。

———とても、あの場所で一緒にいられる気分じゃない。私のせいで変な空気になってしまったから。

「…随分と辛気くさい顔してるわね」

「…何よ楠。さっきの続きでも話そうってわけ？」

「開口一番それか。…お互い難儀な性格よね」

手持ち無沙汰になった楠が、廊下を歩いてきた。いつものイヤミを口にしながら。

———今日はそれだけじゃなくて、缶コーヒーも投げ付けてきたけど。

「全く。何でコーヒーなんて差し入れに入ってるんだか。子供たちは飲めないじゃない」

「…どういふ風の吹き回しよ」

「深い意味なんてない。死に在庫の処分と、…あなたに話しておきたいことがある」

——あいつから話してくるなんて、未だかつてなかった。他人との交流を極限まで削ぎ落としたような奴が、しかも目の敵にするであろう相手に。

話しておきたいことって何？あいつの内面を詳しく知らない以上、想像もつかない。

「…場所、移さない？…教導には見られたくない」

「…わかったわよ」

その行動の意味も推測すら立たない。何から何まで予想外すぎて、首を縦に振るしかなかった。

幼稚園の敷地を出て、神樹様を祀る小さな祠の前まで来た。

——一般的に言うところ、祠の前というのは何か誓いを立てる場所だったり、真実を打ち明ける場所だ。けどこいつの口から出る言葉なんて、私には思いもよらない。

妙な緊張感からか、受け取ったコーヒーを全部飲み干してしまっ



た。

「……単刀直入に言うわ。…もう、競り合うのは最後にしましょう」  
「……え？」

その言葉の衝撃は、私の脳を直接叩いたようにクラクラさせた。理由なんてわからない。カランカランと落とした空き缶が転がっている。

「……私たちの関係がこじれてるのは、直接対決を避けていたから。あいつには負けたくないと思ってるのは、負けるのを怖れたり……」

言葉の途中で楠の視線は下がって行って、らしくもない憂いた表情を見せた。

——楠のやつでも、そんな悲しそうな顔するんだ。

「……共に研鑽し合える好敵手を失いたくないから」

「……え？」  
「何度も言わせないで。…勝つても負けても、もうその時点で同じ土俵には立てない。…そして、あなたが隣にいなければ、私が戦う理由なんてない」

理解が追い付かない。あいつは私も認める好敵手で、勝敗が決すれば私とあいつの接点はなくなっている。

楠は、それが嫌だと言った。

理解が追い付かない。――私もなぜか、そう思ってしまったから。

「……でも、終わりにしましょう。惨めすぎるわ、こんなの。絶対にわかり合えない人に依存して、それで心から尊敬する人を悩ませるなんて……」

「ちよつ……ちよつと待つてよつ！あんた何言つて……！」

言葉に殴打されて、脳髄は理解を拒んだ。

たった一つ理解したことは、楠が私たちの関係を終わらせたいと望んだこと。銀を悩ませる災いの種を摘み取るために。

――その結果、失いたくないものを捨てることになってる。

けど、それで銀が納得するわけないじゃない――！

「今ここに、正式に決闘を申し込むわ。……その結果どうなっても、私は受け入れる」

「……認められない。私はそんなの、認めない」  
「……？」

感情の氾濫の中から、言葉を絞り出した。足が震えて、声がかすれて、もはや強がりにはしか見えないのは自分でもわかってる。

そうしてでも、私のところから離れていこうとする楠を止めたかった。依存してるのは楠だけじゃないし、

—— 私たちは三人で、勇者なんだ —— !

「…決闘を拒否する、とでも言いたいのか？」

「いいや。受けて立つ。…あんたを縛り付けるために」

「…引き分けて、また先延ばしにするつもり？ それじゃいつまで経っても教導の懸念は晴れない」

「そんなつもりもない。あんたに勝って…思い知らせてやる…！」

敗北の悔しさと、雪辱に燃える熱さを！

一度私はいかに負けた。ええ、勇者部員としてはあなたの方が優秀よ。

けど、だからこそ、私はいかに勝ちたい！ 負けたくないんじゃないんですよ、勝ちたい！

そうすれば、あなたもわかるはず。再戦を待望するんじゃないかと、私たちの腐れ縁はもう解離することはないって！

「…ええ。それでいいわ。私の、最初で最後の好敵手」

「やってやるわよ、私の永遠の好敵手」

イツマデ イツマデ

「え…？樹海化警報…？」

「このタイミングで…!？」

私たちのモバイルがけたたましく声をあげた。以津真天が飛び出してきて、私の目の前に樹海化警報の文字を持ち上げてきた。

全くの想定外だった。大赦の予測でもしばらくはバーテックスの接近はないとされていたし、——— よりにもよって教導とはぐれたタイミングで——— !

「…勝負はお預けよ。バーテックスを撃退する」

「わかってるわよ。けど、銀は幼稚園に…」

「…教導を戦わせてはいけないわ。私たち二人で、確実に仕留めるわよ」

「そうね。銀のやつがまた暴走したら…：…決闘どころじゃないし」

水を注されたけど、おかげで少し頭が冷えた気がする。三好さんとの決着は“その時”につけるから、今はバーテックスとの戦いに集中できる。

三好さんの精霊、雷獣も彼女の首に巻き付いて準備完了らしい。ためらいなく勇者システムを起動させて、花びらとなって散っていく世界に青と紫の花弁を添えた。

へ……やっぱり来ちやったかー。そんな予感したんだよね  
「え!?携帯からすごい音鳴ってるよ!?!」

へ………え?友奈…動いてる…?<

「ど、どうなってるのこれえく!?!」

へ樹も…?なんで…?<

「……あたしたちも、選ばれたっていうの…?…銀」

へ……あたし達だけじゃ、足りないつつうのかよ…!<

あんたのこと、信じてみようじゃない

「…三体……。……何を狼狽えてるのよ、楠芽吹ともあろう者が」  
「…上等！…こいつらを蹴散らして、銀の出番なんてもうないつてのを証明してやる！」

リーダーに写った敵影は三体。ナンバー7キヤンサー、ナンバー11スコープオン、ナンバー12サジタリウス。過去の出現データからも、この三体は同時に侵攻してくることが多いことがわかってる。

故に、対策も練ってあった。教導の過去の戦闘データから奴らの行動は把握してるし、有効な戦術も用意できてる。

——あくまで、教導の戦闘能力をもつての話、だが。

「相手も連撃を得意とするタイプよ。術中にはまらないようにしないと」

「なら、連撃の要の蟹野郎を即攻でぶっ潰そうじゃない」

三好さんの提案は正しい。出張ってくるキヤンサーに手間取っていると、サジタリウスの援護射撃やスコープオンの手痛い一撃が来る。

装甲の硬いキヤンサーを手早く仕留めるのは少し手間だけど、方法がないわけじゃない。

「そうね、奴を仕留めるのが第一よ。…まず、奴一体を孤立させるために陽動から始めましょう」

「…相手の方が数多いわよ？」

「一人で二体の面倒をみればいい話でしょ？サジタリウスとスコープ

オンにちよつかい出して気を引いておくから、三好さんはキャンサーを遠くまで深追いさせて」

「…わかった。あんたの見せ場、しっかりこなさないよ」

——これまでなら是が非でも首を縦に振らなかっただろう。私の指示なんて絶対聞こうとしなかったから。

だけど、今なら素直に協力できる。私たちの決着に、他の何かが入することは許さない。例え教導であっても。邪魔するのであれば、二人足並みを揃えて最速で排除するまで。

初めて私と三好さんの思考が一致したと思う。うわべだけの考えじゃなくて、心から同じ方向を向いたような気がする。

「…孤立したら、一気に封印するわ。それで数はイーブンよ」  
「任せた。有言実行、期待してるわ」

そう言っつて、私は樹海へ駆け出した。陽動の都合上、私が前線に立たなければならぬから。

気取られないように木の陰を縫いながらスコープオンの側面に位置取る。既に三体のバーテックスも分散して、突出したキャンサーが三好さんの襲撃を受けているようだ。

「二体に挑発なんて、自殺行為ね。何やってるのかしら、私は」

キャンサーを援護射撃しようとしたサジタリウスに、ランチャーから徹甲弾を放つ。ライフルで届かない距離でも、風をまとって揚力を得られる滑腔砲なら射程内。巨大な矢ごとへし折って、オウム貝の中へと貫通させる。

これで二体の標的となった。即座に尾を振るってきたスコープオンに向き直り、回避行動を取った。

「…無力化が先決か」

早くもサジタリウスは身体を再生させている。攻撃再開まで時間は多いとは言えない。

その間にスコープオンの攻撃力を削ぎ取らないと。サジタリウスに接近しながら攻撃を回避しつつ、尻尾目掛けてライフル弾を少しずつ撃ち込む。

単発では怯みもしないけど、これはただの弾じゃない。

「さて、そろそろもらいましょうか。その尻尾！」

指をパチンと鳴らせば、貫通しなかった弾丸が一斉に破裂する。一発の衝撃が小さくても、合力すれば巨躯を解体するほどの威力になる。

スコープオンの尻尾は弾け飛んで、バランスを崩して転倒した。これではらくは動けないだろう。

「…三好さん、あとはあなたの役割よ」



再生を完了しようとするサジタリウスに楔を打ち込むべく、更に接近していく。

私がしくじれば、三好さんも道ずれだ。二人仲良く地獄行き。

そうなったら、銀は本当に壊れちゃうわね。必ず二人揃って、帰りましょう。

「な…何が起こってるの…?」

へ…夏凜と芽吹が、一緒に戦ってる。四国を、みんなを守るために

「戦うって…? 銀さん…これは一体…?」

へ…みんな、あたしから離れないで。こっちにも敵が来るかもしれない  
い

「……あなたは戦っちゃダメよ、銀。わかってんでしょ、自分のことくらい」

へ…わかってます風さん。バーテックスを前にすると、自我を抑えきれないことくらい。でも、危なくなったら…いきます

「……わかった。…友奈、樹。今は銀の言うことを聞きましよう。  
戻ったら、…全部話すわ」  
〈風さん…ありがとう〉

「このうすノロおっ！早くしないとぶっ飛ばすわよ!!」

十分ダメージも与えだし、相手もちよこまか動き回る私を叩き潰そうと躍起になってる。あとは他二体の対応範囲からこいつを炙り出すだけ。

楠のやつもうまく立ち回ってるみたいだ。遠くから見ても他二体は動きを止めてる。――負けてらんないわね!

「甘い甘い！銀の攻撃の応酬に比べたら穴だらけなのよ!!」

浮遊するプレートで押し潰そうとしてくるけど、こんなノロい攻撃じゃ止まって見える。逃げ道を塞ぐような連続攻撃でもない。

銀にしごかれて強くなった私には、この程度敵じゃない!

「…いいタイミングね！仕留める!」

レーダーで測った距離は予定通りの数値だし、他二体を目視しても私に構ってる余裕はないようだ。

プレートからプレートに跳び移って本体の上まで登る。頂点を取ったら渾身の力で戟の杭を振り下ろす。

確かに硬いけど、この武器なら抜けない防御でもない。装甲を叩き割ってヒビを伝搬させて、巨体を地面に叩き付けた。

「動くなカニ野郎っ!!」

声と共に、意識を「見えない何か」に集中させる。すると雷獣が察知してくれてかのように私の首元から飛び出して、数字の入った魔法陣みたいなのをバーテックスの下に描いた。

程なくしてカニ野郎が御魂を吐き出した。あとは、数字がゼロになる前にこれを粉碎するだけ。

「もらったあっ!!」

すかさず逆ピラミッドに飛びかかって、戟の刃を突き立てる。

しかし、御魂はおちよくるように滑って私の戟を回避する。

「そんな小細工っ!!悪あがきなのよお!!」

当たらないなら当たる攻撃をすればいい。

戟のしなりで高高度まで飛び上がって、勢い殺さず落下。戟を地面に叩き付ける。

猛烈な電撃と砕け散った大地の破片が、辺り一面を吹き飛ばした。もちろん、御魂もバーテックスも巻き込んで。

「まずひとつ！この勢いで殲滅してやる！」

敵の位置を確認しようとレーダーを覗く。

「…ん？銀？…バーテックスがそっち向かってるじゃない！」

楠は確かにバーテックスを引き付けていたけど、一体が遠くの銀の方向へ向かってる。

銀を戦わせてちゃいけない。もうあんな銀は見たくない。

理屈も何も捨て去って、私は銀の方へ駆け出した。

「キャンサーの反応の消滅を確認。早いわね、三好さん。…ふ、そうだなきや」

再生しかけていたサジタリウスの口に炸裂弾を放り込んだ直後。レーダーからバーテックスの反応が一つ消えた。

手柄を先取りされたのに、なぜか嬉しくなった。全く、人の感情の何と御しがたきことよ。私の知らないことを平然と目の前に突き立ててくる。

「私も戦功の一つでも立てておきたいわね」

スコープオンは再生まで時間がかかるようだ。身体の半分を失ったのだから、当然といえば当然か。削がれた機動力でさまよっている。

ならば、ここで勝敗を決してしまうべきか。残り二体も無力化できているし、三好さんもすぐさまこっちに向かってくるはずだ。

無気力に宙を漂うサジタリウスに銃口を向けて、引き金を引いた。

「あなたの御魂、もらい受ける」

着弾点からどういう手品か以津真天が飛び立った。いつまで、いつまでと叫び声がこだますると、シミュレーターで見た角錐が顕現する。

御魂は飛び出した途端、サジタリウスの周りを猛スピードで旋回し始めた。時間稼ぎのつもりか。

「…それでどうにかなると思ったわけ？なめないでくれるかしら」

的当てのつもりかもしれないけど、そんな余興に付き合うほど私は心が広くない。

ランチャーに徹甲弾を再装填して、照準もつけずに発砲。もちろん射線上に御魂はないけど、弾は空気の波に乗って追尾する。簡易的なミサイルとして機能するのよ。

「あなたの役目は終わり。…滅びなさい」

加速する徹甲弾はとうとう角錐を捉えて、貫通した。御魂もバー

テックスも、時間が止まったように静止する。

一瞬の後、サジタリウスは霧散した。

「…目標排除」

次の行動の優先順位を確認する。

——三好さんと合流しよう。スコープピオンを二人がかりで撃破するだけ、だけど油断せず徹底的に追い詰めるわ。

位置を把握しようとレーダーを確認する。

「……………！教導と…スコープピオン!?!」

〈……………仕方ないよ、風さん。あたしが戦わなきゃ、みんなを守れない〉  
「ダメよ銀！あんたが壊れちゃう！」  
〈でも、もう失うのはたくさんなんです。大切な人と会えなくなるくらいなら、目玉でも腕でも脳みそでもくれてやります〉

「それは困るのよ！あんたの介護なんて、死んでも引き受けてやらな  
いんだから！」

〈夏凜…？〉

超特急で樹海を駆け抜けて、銀のところまでたどり着いた。

銀に力を振るわせてはいけない。ただそれだけを思っただけで後先考えず走ったけど、楠のやつが一体葬ったらしいし丁度いい。

〈…一体、倒してきたんだね〉

「あんたのしごきの方が百倍キツかったわ。おかげでバーテックスなんて敵じゃない」

〈それはよかった。先生冥利につきるね〉

「……で？なんで風たちまでいるわけ？」

〈神樹様を選んだんだよ。風さんと、友奈と、樹を〉

苦虫を噛み潰したような顔をする銀。喜べることではないらしい。

まあ、出番はないわよ。作らせない。銀と一緒に楽しい勇者部を守ってもらわないと。

「…あんなたちはもつと後退して。最後の一体も私と楠で消し去ってやるから」

〈オーケー夏凜。ロートルは引っ込んでるよ。…何か、吹っ切れたみたいだね〉

「ええ。こんな戦い前座だから。真に勝たなきゃいけないやつは別にいるし」

———  
それに勝って初めて、私たちは「本当の勇者」になる。

へみんな、ここは夏凜に任せて避難しよう。大丈夫、あたしの弟子はもう一人前だよ」

「夏凜ちゃん……無事に帰ってきてね……！」

「当たり前よ結城さん。楠に勝つまで死ねないんだから」

こんな異常事態でも結城さんは私の心配をしてくれるらしい。

「……なんだろう。なぜか結城さんのその言葉に危うさを感じた。」

この人は——銀以上に勇者になったらまずい人かもしれない。戦わなくていいように、私たちがしつかりしないと。

そんな憂慮をしてると、しゃべる怪鳥が目についた。

「そうね、簡単に死んでもらっては困る。あなたも、教導も」  
「お、芽吹。しつかり一体倒してきたんだね」

レーダーを見れば、オウム貝みたいなバーテックスが姿を消している。楠が仕留めたらしい。

「……やるじゃない。二対一で立ち回ったあげく首級もあげてくるなんて」

「あなたの陽動があつてこそよ。あつちを任せられると思ったから、私も集中できた」

素直に世辞で返してきた。



今までなら虫酸が走ったような言葉だけど、今は素直に嬉しくなった。あいつのこと、ちゃんと理解しようとしてるからか。

「…じゃあ、仕上げね。三好さん、準備はいい？」

「もちろんよ。見てなさい銀。あんたの出番はもうないってことを！」

へはは、あたしクビかあ。友奈たちと一緒にご隠居生活も悪くないけどね」

別にいなくなれとは言っていないんだけど。年寄りみたいな物言いも板についてきたわね、銀。

やっと私たちのあるべき姿が見えてきた気がする。好敵手がいて、先生がいて、私がいる。

楠、あんたもわかるはずよ。それが何よりもかけがえのないものだって。自ら手放すなんてとんでもないことだって。

「なによ、全然いい雰囲気じゃないのよ」

「仲直りできたんだね！よかったよかった！」

「いい意味でライバルって感じですよ！」

「…そう、ありたいものね。できれば、……」

「できれば、じゃないわよ。あんたは私が認めたたった一人の好敵手だから」

へ……芽吹……。そっか……」

楠の言葉の最後の方は聞こえなかったけど、あんたとの関係を終わらせてたまるか。

銀には聞こえてみたいだけ。あのアンテナみたいな耳もだいぶ高性能なのかしらね。後で楠が何言ってたか聞いてみよう。

「さあ、迫ってきたわね。銀、みんなを頼んだわよ」

「へがってん！いい報告、期待してるよ！」

「任せてください。…教導、行ってきます」

銀の義手のサムズアップを一目見てから、近づいてきたバーテックスへと駆け出す。それだけでどんなサプリより元気が湧いてくる。

とつとと終わらせて、祝勝会といこうじゃない！

「再生は間に合っていないようね。御魂を引きずり出してすぐ仕留めましょう」

「二人がかりで行くわよ！楠！」

正面から注意を引くようにライフルを斉射して、楠はじりじりと距離を詰めていく。

私は裏をかいて回り込んだ。ちぎれた尻尾じゃこいつは無抵抗に等しいから、強引に側面を突く。

「どおりやああっ！」

槍先をフラスコみたいな部分に食い込ませて、一本背負いのように振り回す。地面に叩き付けてやれば、あとは封印を始めるだけだ。

「封印開始！」

「援護するわ！」

いつのまにか私の首元を離れていた雷獣と、バーテックスの身体をついばんでいた以津真天。封印の準備も完璧だ。

上の部分が開いて、逆ピラミッドが姿を現した。けど――

「よしっ、終わらせる……って!? 増えた!?!」

「また子供だましの小細工を……」

あれよあれよと瞬く間に数を増やした御魂。全部一辺に破壊しないとどんどん増殖するらしい。下手に触ると時間が足りなくなるかも。

とか考えてたら、増えた御魂が散らばってきた。これはマズイ。早く手を打たないと。

「…三好さん。あの“ドスン”の準備をして」

「え? でもあんなに散らばったらさすがに仕留めきれないわよ」

「そこは私になんとかするわ」

「…わかった。あんたのこと、信じてみようじゃない」

楠に状況を打開する策があるらしい。私の目をまっすぐ見て、私を信じてと訴えかけてきた。私もじっと楠の目を見据える。

その視線にフィルターはもうかかかってない。打算や牽制抜きの、心からの信頼。あいつがそう見てるのは知らないけど、少なくとも私は腹を決めた。

「用意はいい? 三好さん」

「いつでもいけるわ」

「…オーケー。行くわよ!」

私が高飛びをすると同時に、楠はランチャーを御魂の足元に撃ち込んだ。

地面を穿った弾は強烈な風を巻き込んで御魂を吸い寄せた。あいつめ、自分の力をどんどん応用し始めている。私も力任せの一撃だけじゃないのも考えないと、あいつに勝てない。

「三好さん!今よ!!」

「だああありやああああ!!」

それでも今はフルパワーの一撃が必要だ。稲妻のように紫電をまとう戟を大地に打ち降ろした。

辺り一面が真っ白になるような雷鳴のあとには、御魂もバーテックスも残っていない。——全部、うまくいったみたいね。

「…目標の排除を確認。三好さん、お疲れ様」

「ええ。楠も。あんたの策、完璧だったわ」

「…?三好さん、お腹の模様、光ってない?」

「え?…本当だ。なんだろうこれ。後で銀に聞いてみるか」

オーバーヒートでもしてるのかしら。バラの模様の何枚かが帯電したみたいになっ光ってる。

特に身体に異常とかはないんだけど

——大事になる前に報告

すべきよね。

「…それ以外の異常はなさそうね。完勝といったところかしら」

「あんたの機転の利いた戦術、見事だったわよ。私一人じゃどうにもならなかった」

「三好さんの破壊力があってこそ、よ。攻撃力じゃ逆立ちしても三好さんには勝てっこない」

「芸の多さじゃ私も楠には勝てないわよ。あと、頭の回転の良さも」

なぜかお互いの長所を言い合ってる。そんなこと前なら絶対ありえないことだったのに。

変な気分だ。ハイタッチしようとしてる自分も、そのせいってことにしてしまえ。

素直にハイタッチで返してくれた楠を見て、また変な気分になる。

まあ、悪くはない、けど。

「…でも、これも。…三好さんとの決着がつくまでのこと。…あなたを完全には、受け入れられない」

「……………楠」

今は話さないでおこう。今言ってもあいつには伝わらないから。

さびしそうに楠が視線をそらした先から、樹海は消え去っていった。

…あんたがそう言うなら…

〈大義であったぞ諸侯。そなたらこそ四国の宝よ〉

「はいはいありがたきお言葉です銀様」

「ご無事でしたか教導。他の皆さんは？」

〈先に幼稚園に戻ってもらったよ。さて、風さんはどんな言い訳するやら〉

決闘を受理した祠に戻ると、銀がお出迎えしてくれた。時代劇みtainな台詞回しで。風といい銀といい、流行ってるのかしら？

その部長さんは幼稚園に言い訳をしに行ったらしい。そりやそうよね。突如劇の途中でパツタリ姿を消したら、説明が不要なわけないし。

「…では、私たちも戻りましょう。そっちの方が説明もつけやすいと思います」

〈そうだね。けど、どこまで話していいやら〉

「大赦のお役目って言えば、大体察してくれるんじゃない？アンタツチャブルって感じで暗黙の了解になってるし」

〈それで子供たちが納得してくれるといいんだけどね〉

銀の懸念は子供たちへの配慮か。大人の事情も通用しなさそうだし。

方法を思案しながら幼稚園に戻るけど、三人揃って頭を抱えてしまった。

〈うーん…別の話題で注意を引く？〉

「例えば？」

〈夏凜と芽吹がヒーローになって悪い奴を退治しに行った、とか？〉  
「却下です。内容がまんまです。それに教導一人で抜け駆けしようとししないでください」

〈えー？ホントのことじゃん。今回あたしは一切戦ってないよ？〉  
「三人で一つのチームでしょうが。連帯責任よ」

でもそれ以上いい考えは浮かばなかった。三人寄れば、とか言うけど、一を三回かけても一のままよね。

結局ロクな準備もないまま、幼稚園に帰ってきてしまった。

「あつ！ヒーローのおねえちゃんたちかえってきたー！」

「すつごいすつごーい！へんしんみせてみせてー！」

「ぬええっ!?!な、何よ急に!?!」

「これはどういう…!?!」

〈…あー。うん、風さん、やりやがりましたね〉

戻るなり、子供たちが私と楠に殺到する。ヒーローヒーローと言葉を揃えて。

銀の言ったことが本当なら、私たちが却下した案を風のやつは実行したらしい。

「よおー、ヒーローたち！お勤めご苦労さん!!」

〈風さん…他人事だと思つて…〉

「…あれ？そんなにマズかった…?」

〈噂が羽をつけて飛び回る未来が見えますよお…どうすんすかマジで…〉

割と本気で泣き言を漏らした銀。根も葉もない噂から大赦の秘密が露見したり、その秘密兵器である私たちが有名になるのは避けたかったようだ。

けど、それも後の祭。無邪気な子供たちの口から、瞬く間に広まっていくでしょうね。他人事みたいに言ってるけど、私にも楠にも非常にマズイことなわけで。

「…情報統制、頼まないダメかなあ…。あーあ、風さんのせいで…」  
「ご、ごめんね銀！そんな大事になるなんて考えてなくって！」

「今回風さん全然いいところなしじゃないっすかあ…。友奈や樹の方が全然頑張っていましたよお…」

「うぐっ…：…おっしやる通りでございます…」

「…今日、風さんのおごりっすからね」

ネチネチ小言を並べられて、風はいいように丸め込まれてしまった。

「ま、自業自得よね。しっかり後輩におごってやりなさいよ、部長。」

でも、銀っておごってもらおう必要がある？言えはいくらでも資金を用意してもらえ立場なんじゃないの？

「ねーねー夏凜おねえちゃんってばー」

「ダメよ。戦う時以外はダメ」

「助けが必要な時には見せてあげるわ。…ヒーローって、そういうものよ」

ぶーぶー言われつつも、先生方に引き連れられて子供たちは下がっ



ていった。

「へみんな、二人が正義のヒーローってことは内緒な！誰かにバラしたら悪の怪人がみんなをさらっていつちやうぞー」

「え？でも風おねえちゃんバラした…」

「へ…うん。みんな、風さんにお礼を言いな。今までありがとうって」

「んなっ!?あたし死ぬみたいじゃないそれ！」

銀の冗談は通じたかどうか。大爆笑が教室を包んだ。

——— まあ、気にしても仕方ない。今はそれより

——— 楠に勝つ。必ず、絶対。

「へ…よし。打ち上げの前に、今日のことについて打ち明けておこうか」  
「打ち上げで打ち明け？こんな時にあんたは……」  
「夏凜、そこは拾ってほしくなかったかも」

三好さんがいららないツツコミを入れた。教導が真剣に話してるんだから、空気を読んでほしい。

今日も部長の家で、打ち上げ会。昨日も似たようなことしてたけど、割と本格的な準備をしてたらしい。

で、その前に。樹海化に巻き込まれた経緯を話しておこうと、教導が名乗り出た。

「銀。それはあたしがやるわ。：あたしの責任だから」  
へこうなった以上、責任者はあたしです。『勇者』の監督者、なんだし」

「けど」  
へ風さん。：風さんだつてただ巻き込まれただけなんです。本当なら、勇者はあたしと夏凜と芽吹の三人だけだったのに」

理由はわからないけど、部長は結城さんと樹ちゃんに負い目を感じてるようだ。その責任を果たそうとして、表情を堅くしてる。

でも教導は待ったをかけた。部長たちは関係ない。部長たちが勇者になる必要はないって。

その理由もわからない。教導ならてつきり頼れる仲間が増えるのを喜ぶと思つたけど、そうじゃないみたいだ。

「そうかもしれないけど」  
へ……だから、ここからはあたしに任せてください。あたし達が世界の平和を守りますから、風さん達は大切な日常を守ってください」  
「……………」

部長は黙りこくってしまった。

なんとなく、わかつた気がする。

教導にとって、勇者部は帰ってくるべき日常なんだ。だから、勇者のお役目とは切り離したい。全てをかけてでも、どん底の自分を救ってくれた部長や結城さんや樹ちゃんの幸せを壊させたくない。

私たちはどうなのだろうか。教導は「勇者」として私と三好さんと交友を深めてきた。一緒に戦うことを認めてくれた。

その違いは、なんだろうか。確かに私たちは自ら進んで勇者になる道を選んだ。ただの一学生の結城さんや樹ちゃんとは違う。

でも、教導の隣にいられる理由はそれだけじゃない気がする

〈…それなら話すべきじゃないでしょ、って言いたそうですね〉

「…そうね。あんたが何考えてんのか、ちよつとわかんない」

〈でも友奈も樹もさ。忘れろって言われて忘れられるものじゃないよね?〉

「そ、そうだよ。…銀ちゃんは、…あれと戦って身体のいろんなところをなくしちゃったんだよね…?」

〈…うん。今まで隠しててごめん〉

「銀さん…」

事実を聞いて、結城さんも樹ちゃんも視線を下げてしまった。

もし自分が戦えば、教導と同じようになってしまいかもしれない。そんなにボロボロになるまで戦い続けて、自分たちを守っていたことを知って、思うことがないわけがない。

二人から言葉が出てこない様子を見て、教導は言葉を続けた。

「あ、あたし達『勇者』は、神樹様を付け狙う敵を倒すのが勤めなんだ。神樹様に何かあったらこの世界が終わっちゃうから、命がけで戦ってる。…それで、二人の友達が殉職しちゃったんだ」

「…鷺尾さんと、乃木さん、だっけ」

「…うん。…かけがえのない友達、だったんだ」

震えるはずのない機械音声に悲しみの感情が乗って、なおさら虚しく響く。

教導にとつてどれだけ大切な人だったかは知る由もないけど、今までのお節介の原点がそこにあるとすれば家族同然の存在だったのだろうか。

「…もう、そんな思いはしたくないんだよ。あたしがもつと強かったら、須美も園子も死ななくてよかったのに。それだけの力を得て、また大切な人を失ったら…あたしは…」

「…銀。それならなんで私と楠は、あんたと一緒に危険な任務をするのよ。バーテックスがいくら押し寄せても、あんた一人で片付けられるじゃない」

聞いてしまうのね、三好さん。

私には聞けない。私たちにとつて——とても残酷な事実が隠されてる気がしてならない。知ってしまったえば、銀と築いてきた信頼が崩れ去ってしまうかもしれない。

「…ごめん、夏凜。…今は言えない」

「…そう。…あんたがそう言うなら…」

銀の悲しそうな表情は、目にしただけで胸が苦しくなる。銀にとつ

ても、知られてしまえば今の関係じゃいられなくなる真実、ということか。

—— 私たちは、最強の勇者三ノ輪銀の心の支え。今はそう思うことにしよう。銀が私たちを求めてくれたのだから。

△…話を戻すね。…友奈と樹、それに風さんは、神樹様に選ばれたんだ。あたし達と同じ、勇者として△

「…わたし達が？」

△…元々神樹様の力を授かる素質が、みんなあったんだ。風さんが配ってくれたそのモバイル、それにその力を解き放つシステムが入ってたんだ△

「えっ…？お姉ちゃん…？」

「…ごめん、樹。それに友奈。…あたしね、大赦の人間だったのよ」

部長はその時が来るまで、隠し通すつもりだったらしい。適性のあつる子を管理下において、有事に備えてるって。

他のコミュニケーションじゃ口封じした上で真実を打ち明けることもしてるのに。

—— そのことなかれ主義が、逆に二人にシヨツクを与えてしまった。部長はそれに負い目を感じてるのかしら。

「選ばれる確率なんて低かったし、…銀がいるから大丈夫って、勝手に思い込んでた…」

△…あたしもそう思っていました。あたしと、勝ち上がった二人がいれば他の勇者はいらないって。…でも、神樹様は風さん達に戦う“権利”を与えた△

「…戦って、とは言わないんだね…」

△…できることなら、友奈たちには戦ってほしくない。あたしが戦う

理由は、それだから…」

裏ではバーテックスへの復讐に執念を燃やしてるけど、表の本音だって嘘なわけない。心の闇を打ち払えば、銀は優しい銀だから。

でも、それと同じくらい優しい結城さんは——銀が苦悩の中戦いに身を投じているのを知って、黙っていられるわけもない。だって、結城さんの一番の親友というのだから。

「……わかったよ。わたしは銀ちゃんのこと、信じる」

「…ありがと、友奈」

「でも…悩んだら相談、だよ？ホントに大変なことになったら…：絶対助けを呼んでね…？」

「うん。…約束、する」

結城さんは銀の手をとって訴えかけた。

——これを信頼関係というのだろうか。理屈でもなく、打算でもなく、信頼のみを基準にして判断する。私には思いも寄らないことだった。

そしてなぜか。——さつきとは違う痛みが胸を締め付ける。

そのわけの尻尾すら掴めないから、余計に苛む。

「樹も、あたしのこと信じてくれる？あたしは絶対負けられないから、帰りを待ってほしいんだ」

「はい。銀さんも夏凜さんも芽吹きさんも、みんな強い人ですから。わたしが心配する必要なんてどこにもないですよ。けど…絶対帰ってきてくださいね」

「…うん。犠牲なんて出させるもんか。もう、須美や園子みたいなこ

とは、絶対起こさせないから」

「……悪いわね、全部任せてちゃって……。…そう、大赦の方にも伝えとくわ」

「…お願いします、風さん。この件はあたしが預かるって、そういうことになっておいてください」

「銀…ありがとう」

全幅の信頼を見せた樹ちゃんと、バツが悪そうに視線を下げる部長。どちらも銀のことを大切に思ってるからこそ、いろいろな感情が湧いてくるのだろう。

そして、銀や私たちに何かあつたら

「…よし！暗い話題はここまで！樹と夏凜と芽吹の勇者部デビューの大成功、そしてバーテックス三体の同時撃破成功を祝して、打ち上げ会を開催します！」

「よっ！待ってました〜！宴会部長〜！」

「あんまり名誉な役職じゃないけど、さあさあ皆さんお飲み物を持って〜」

ジメジメした空気を吹っ飛ばすように、銀と結城さんが明るい声をあげて乾杯の音頭をとった。

そうしたいと思ってた二人は即座に息を合わせて盛り上げようとしたようだ。以心伝心、言葉にしなくてもお互いのことをわかり合えるらしい。

——その考えに至って、さらに胸が痛くなる。

なぜ？なぜ結城さんと銀が仲良くしてるだけで、私はこんなに心をかき乱されているんだろうか？

へじゃあ新入部員を代表して、樹に乾杯の音頭を取ってもらいましょう！<

「ええっ!?わたしいっ!?そんなそんな!!活躍具合から言えば夏凜さんや芽吹さんの方が!」

「ま、待ちなさいよ!ここは勇者部員としても勇者としても素晴らしい戦果を残した楠が適役じゃないかしら!」

へなんでそんなになすりつけ合ってるのさ。テキトーでいいんだよテキトーで<

「……じゃあ、こほん」

別に必死になって拒否するほどのことでもないし。さつさと済ませて開会といきましょう。

「…空気の読めないバーテックスの襲撃もありましたが日程を全て完遂できたこと、そして全員無事に難局をくぐり抜けられたことを祝います、開会の挨拶とさせていただきます。乾杯」

「へかんぱーい!!<」

後で銀に堅すぎとか言われるかもしれないけど、適当でいいと言ったのはあなたですからね。

——ともあれ、今日はさすがに疲れた。緊張を解いて心身の静養としよう。



来たるべき決闘に備えて。

(……まだ起きてるひと一挙手ー)

(…何ようるさいわね風。人が眠気を捕まえようとしてる時に)

(お姉ちゃんったら…またいつものアレ?)

(…あまりうるさくすると、教導と結城さんが起きてしまいますよ。二人はもう夢の中です)

おしゃべりしたり遊んだりした打ち上げの時間は、あつという間に過ぎ去ってしまった。それだけ私も楽しんでいたということか。

こんな集まり、初めてだったから。

明日の朝丸亀に帰るので、もうとつくに寝てなければいけない時間なのだけれど。気持ちが高揚したままで思うように寝付けない。三好さんも同じように、まぶたの裏の世界に浮かんだままのようだった。

(…ほんとね。銀のやつ、はしゃぐだけはしゃいでとつとと落ちるんだもん。聞きたかったことがあったのにタイムミング逃したじゃない)(友奈もね。まあ、盛り上げ役の二人はお疲れさんってことでそのままにしときましょ)

(……本当に、仲がいいんですね…銀と結城さん)

(讃州にいたときは友奈さんの家にホームステイしてましたからね。ほぼずつと一緒だったと思います)

(……………)

——— 　　「そういう、関係だったのね。」

荒れくれてた銀の心を癒したのは結城さん。そういうことだろう。家族同然なのかもしれない。

銀は少なからず結城さんに依存してるし、——— 　　様子を見る限り結城さんも銀のことをただの友達以上に想っているんだ。

——— 　　いけない。余計に目が冴えてしまった。嫌な鼓動がしつこく耳にまとわりつく。

（はあ、仲良し姉妹って感じか）

（そうですね。わたしとお姉ちゃんくらいに仲良しだと思います）

「う” おおおいつきいいお姉ちゃんをそこまで慕ってくれるのおおお」

「風うるさい！二人が起きちゃうでしょ！」

あの姉バカにそこまで言わしめるといふのなら、銀と結城さんの間に割って入れる人間など存在しないのだろう。

——— 　　ふと隣で寝入った二人を見る。物理的にも、割って入る隙間などない。同じ布団で抱き合うように寝息を立ててる。

——— 　　ダメだ。私、何かがおかしい。

久々にあった親友と仲睦まじくするなんてごく当たり前のことで

しように。銀も結城さんも無邪気に喜んでたじゃない。私だって、銀がうれしいのならそれを喜ぶべきでしょうが。

なのに――何が気に入らないのよ――？

(…ごめん。…ところでさ。銀の好きな人は間違いなく友奈だけど、お二人さんは好きな人とかいるわけ?)

「!!」

部長の唐突な質問は容赦なく私の心を突き刺した。私が今まさに悩まされている疑問の核心を突く言葉。

――まさかそれが、私を苛むものの正体だというの――？

(はあ?…いないわよそんなの。今までどんだけ時間を鍛錬に費やしてきたと思ってるわけ?)

(ふふ、なんか予想通りの回答で安心しました。夏凜さんはそういう人ですよね)

(遠回しにバカにされてるように聞こえるんだけど? 樹?)

もやは声を上げることもできない。三人の会話の内容も頭に入らない。暗い部屋の闇が私の世界を圧縮するように、感覚がどんどん狭まってくる。

(…楠さん…芽吹はどう? すごくモテそうだけど)

(……………)

(…寝ちやっみたい、ですね)

…ごめんなさい、部長。今は質問に答える余裕ありません。

今は――気持ちを落ち着かせる時間をください。

あんたが気に入らないからよ!!

日の光が壁の向こうから射し込んで、夜空を紫色に侵食していく頃。結局眠れなかった私は、海岸で一人たたずんでいた。

壁の向こうの闇のような、踏破できるはずのない疑問の答えを求めて思考の海へと繰り出して。繰り出しては波に打ち戻されて。ひたすらに無意味な抵抗を続けてただけ。

そうしてる内に、誰かが海岸へとやってきた。

「……ここにいたか。そんな気がしてた」

「…三好さん」

一人部屋を抜け出したのを知ってか、三好さんが私を探してたらしい。どういう意図かははかりかねるけど。

———  
けど、今こそその時か。私の悩み的一切合切を打ち破る手段。三好さんと決着をつける時。

「……ここに來たってことは、そういうつもりと解釈していいわね？」

「……ええ。それでいい。始めましょう。私たちの戦いを」

交わすべき言葉はそれまで。あとは結果が全てを語る。

それが重罪とわかっていながらためらいもせず、私と三好さんは勇者の力を解き放った。

「…どちらかが負けを認めるか、力尽きるまで。それで文句はないわね？」

「それでしか、お互い納得しないでしょう？」

「そうね。…行くわよ、楠！」

「来なさい、三好さん！」

お互いにこの瞬間を待ち望んでいたらしい。掛け声と共に嬉々として一歩目を踏み出した。

三好さんは迷わず前進。まるで四足歩行の狼のような低姿勢で突っ込んでくる。あの重厚長大な方天戟にしてこのスピード。敵に回すと厄介この上ない。

距離を詰められると苦しいのは重々承知してるので、あえて三好さんの背後へ回り込むように頭上へ飛び出す。あのスピードじゃ急な方向転換はできないはず。

「…そこっ！」

振り返ってランチャーのトリガーを引く。最大威力の炸裂弾だ。

「ちっ！」

「…読まれてる？」

三好さんは舌打ちと共に走り去っていった。弾丸は虚しく地面を穿ち砂塵を立てる。

さすが、というべきか。伊達に長い時間一緒に戦ってないわ。お互いの戦術を熟知してる。

「…視界が悪い…えっ!?」

「そこだああああ!」

砂塵を切り裂いて紫電が横一文字を描く。紙一重で飛び退いて直撃は免れたけど――。

いくらなんでも早すぎる!どんな手品で反転してきたっていうのよ!

「くっ…!なめるなあ!」

今なお残留する雷光の向こう側ヘライフル弾をぶっぱなす。ここで牽制を挟まないとどんどん追い込まれる――!

「なんのお!」

「!その動き…!」

視界に捉えた三好さんは、全く足を止めていない。重たい戟の刃を軸に、遠心力を利用して高速で旋回してきた。

けど、牽制の効果はあった。遠回りしてきただけでも、対処する時間が生まれる!

「そこよっ!!」

薬莢しか入ってないはずのランチャーの引き金を引けば、強烈な空気の塊がそこから放たれる。

着弾点は三好さんの進路上。地面に着弾すれば辺りをクレーターにするくらいの威力はある。脱兎がごとく高速で駆け回る三好さんとして、避けきれぬ道理がない。

「ぐうっ…！」

「捉えたっ！」

衝撃波ではね飛ばされた三好さんは即座に受け身を取ったけど、足を止めた時点で私的的よ！

ここで残弾を撃ち尽くす！耐えられるかしら、三好さん！

「ま だ ま だ あ あ あ!!!」

「!!？」

途切れ途切れの咆哮と同時に、戟が槍先を向けて飛んでくる。紫電が渦を巻けば巻くほど加速度的にスピードを上げて、私の身体を貫こうとする。

回避は間に合わなかった。本能的に銃で受け止めようとするけど、威力をそらす間もなく弾き飛ばされてしまった。

そんなの関係なしに加速する戟が私の胴に到達して、バリアと電撃が凄まじい光を放つ。

「うあああああっ！」



数十メートルは飛ばされただろうか。砂地に身体を滑らせてようやく止まった。

いくらバリアが防いだとはいえ、三好さんの体重を悠に越える物体があのでスピードでぶつかってきたんだ。殺しきれなかった衝撃で内臓を直接潰されるような激痛が走る。

「……うぐっ……えあ……」

「……うっ……ま、だ……よ……」

霞んできた視界に捉えた紫色の勇者は、這いずりながらも私に迫ってくる。

ほぼ全弾直撃したらしい。片腕だけで強引に身体を前に進める様子を見て、三好さんもまともに戦える状態ではないというのがわかった。

——— だけど、まだ決着はついてない。私も負けを認めたわけじゃないし、力尽きてもいない。

「……っ……このっ……」

武器を回収されてはまずい。砂地についた戟を掴んで海へと放り込んだ。その行動だけでも傷に響いて、激痛が身体と精神を鈍らせる。

痛みをやり過ぎす間もなく、詰めよってきた三好さんが決死の力を振り絞って飛びかかってきた。この期に及んで回避できるはずもなく、組み伏せられてしまう。

「うあつ……！」  
「……いつ以来、かしらね……っ！あんたと、こうして取っ組み合うのも……！」

—— たった一度つきりだったはずだ。

激怒した三好さんが我を忘れて掴みかかってきたことがあった。

—— たぶん、その時からだ。三好さんを好敵手として認識したのは。

『……くだらない。そんな足の引つ張り合いしかできない奴らが勇者になれるとでも？』  
『楠さん、ごめ、なさい……』

事の発端は訓練生時代までさかのぼる。

成績でトップを独走する私は、何かといやがらせを受けていた。道具を隠されることに始まり、シカトを決め込まれ、果ては出任せを広めて私の評価を追い落とそうとまで。

—— 特に憤りを覚えたとか、そういうのではない。二度とそんな

ことをしたくなくなるよう、徹底的に報復してやろうとは思ったけど。

そう決めてから最初の銃剣道の訓練の時。監視する指導員がいな  
いことをいいことに、あくまで形式に乗っ取って連中の一人に無効打  
をひたすらに打ち付けた。

試合の決着はつかないけど、防具のないところを的確に突いてやつ  
たから痛みでもう戦意はない。そこを徹底的に攻め込んでやれば、命  
乞いだってする。

『…あなたは敵でしかない。私の行く手を阻む敵。世界の秩序に背を  
向けた敵。勇者の意味を理解しない敵。…敵に情をかける程、私は甘  
くない』

『!!』

『失せなさい。とつとつこの場から。わかってるんでしよう?ここに  
いたって勇者になれないことくらい』

ギャラリーから非難が飛んでるのは聞こえてるけど、私に挑んでく  
るような奴はいない。賢そうな諦観を受け入れてしまった連中には、  
現実に立ち向かう気概などないのだろう。

—— たった一人を除いて。

『あんだねえっ!!いい加減にしなさいよっ!!こんなの試合でもなんで  
もないじゃないっ!!』

『…そうね。これじゃただのかわいがり、よね?』

『あんたはどこまで腐ってんのよっ!!』

三好夏凜。腐った土で、たった一人花開いた秀才。

彼女は臆せず私に挑んでくる。恐れを知らない行動選択に、何度も追い詰められた。

三好さんは敵意剥き出しの視線を私に向けて、私の肩に掴みかかってきた。これまではイヤミの言い合いだけだったけど、今回はそれで済む話じゃないらしい。

『…なぜあなたが怒っているのかしら？別に馴れ合ってたわけでもないでしょう？』

『あんたが気に入らないからよ!!』  
『っ!?!』

そのまま首に腕を回され、転ばされてしまった。体裁も何も、もう三好さんは考えられないらしい。

振り上げられた拳を見て、私もそう確信した。

『勇者になるためなら何をやっても許されるってんならっ、あんたをぶっ潰すっ!!』

『…ふっ。何を今更!』

その後は、ただの殴り合いだ。

誰が呼んだのか指導員がすぐやってきて、ここでも決着はつかなかった。大量の反省文と謹慎だけが、そのいさかいで得られたものだった。

「あんたのこと、ホント気に入らなかったっ！他人を貶めてまで勇者になるって、バカなんじゃないのって思った！」

「先にやってきたたわけに倍返ししただけよ。薄汚い小細工でしか反抗できないバカどもに、身の程をわきまえさせただけ」

振り上げられた拳は私の顔面目掛けて降ろされた。首だけ振ってなんとか避ける。

「……そうだとしてみっ、同じやり口で仕返ししたらあいっらと同じじゃないっ！」

「その何がいけないのかしら？矮小な連中にしては、賢い判断だと思っただけど？ただ、ケンカを売った相手が悪かっただけ！」

三好さんの首を掴んで、引き寄せながらヘッドバット。たまらず三好さんもひるんだ。

すかさず膝を起こして三好さんの身体を押しさえながら横に転がる。これで形勢逆転、三好さんに馬乗りした形になった。

「いけないにっ、決まってんでしょうがあっ!!私を失望させるなあっ!!?  
!!」

三好さんの言葉に一瞬身体を止めてしまった。

その隙を逃すはずもなく、三好さんが私の首を掴んで私の顔を地面に叩き付ける。砂地だったからダメージこそ少ないものの、そっくり

そのまま横に転がって形勢逆転されてしまった。

「誰にも頼らず、一人で肅々と上に登ってくあんたの姿っ！私の憧れだった!!」

「…え？」

「あんたがいなきや、私もとつくに腐ってたっ!!あんたが私の目の前を走ってくれてたから、必死であんたに追い付こうとした!」

私の二の腕を押さえて、腹部に膝を乗せて体重をかけてくる。さっきの戟のダメージと相乗して、身動きができない程の激痛が襲ってきた。

「がっ…ああ…」

「けど、私の憧れはもういない。目の前にいるのは、楠芽吹。私が仲間になりたい人なのよっ!!」

——打っ手が無い。

格闘戦のセンスはやはり三好さんに敵わない。戟の投擲も含めて、三好さんは詰めを完全にした。私は詰みの状態といえる。

押さえられた手で届く範囲にも

——悪手は、あった。

「ぐうっ…はあっ…!」

「!!」

手の届くポーチに、ランチャーの弾があつた。信管部分に念を込めれば、銃がなくても起爆する。

三好さんの脇腹にそれを突き付けて、起爆。猛烈な圧縮空気が破裂して、私も三好さんも吹き飛んだ。

「あつ……うう……えええ」

「……つえ……ああ」

二人仲良く我慢していた血ヘッドをぶちまけた。どちらも中の方のダメージがひどいらしい。

もはやどちらも立ち上がれない。覚束ない意識の中でのたうち回るだけ。

これでどちらかが先に事切れても決着とは言えない。お互いに同じタイミングで戦闘不能となったのだから。

また、ドロ―。私たちの決着は、何がなんでもつかない。そんな摺理が頭をよぎった。

でも、そんな通例を、三好さんは打ち破った。

「勝たない、わけにはっ…いかないんだよおおおっつ!!!」

---

明けの空に、紫の妖花が “満開” した。

誇張表現なんかじゃなくて、花火でも映ってるんじゃないかと思うくらいにその光は目に焼き付いた。

そして、倒れていた三好さんの姿も消えていた。

「な…に…っ?」

——奥の手? そんなものあるなんて聞いてない。

けど、三好さんがまだ動いてるのは確定的だ。すでに限界を通りすぎた身体に鞭打って周囲を警戒する。

——私が捉えたのは、この世界に存在しないはずのものだった。

「航空機…?」



神世紀以降、空を飛ぶものは忌避されている。初頭に蔓延した“天空恐怖症候群”への配慮だったり、貴重な燃料の適正配分の結果の淘汰だったり、必要性の消失だったり。様々な理由があると聞いている。

しかし明けの空に見えたのは、巨大な翼を持つ暗い色の巨鳥。翼が放つソニックブームは紫電を帯びて、例え話でなく空を切り裂いている。

「なんて…速さ…!!」

相当距離が離れてるはずなのに、あっという間に視界を横切る速さ。私の銃弾の速さを越えている。

大きく旋回して、機首を私に向けてきた。その先に、勇者の姿が見えた。

「これが私のおお！覚悟だあああつっ!!」

神々しさすら覚える戦衣をまとって、戟を携える紫の勇者  
三好さん。

それを理解した時には、もう目の前に黒い鳥はいた。元々動ける状態じゃないけど、圧倒されてそのことすら頭から抜け落ちていた。

「うっ……」

その槍先が私の胴を突いた瞬間、視界は真っ白になった。

---

「はあっ…はあっ…！やった…勝った…！！」

「…な、何がなんだか…よくわからなかった、けど…勝ちは、勝ち…  
よっ…！！」

「…楠？ちよつと…楠…!?」

「起きなさいっ、よ…！！こんくらいで、伸びてんじや、ないわよっ…！！」

「…あっ…こっ、まで…か…私…も…」

---

「…どういうことだよっ…これ!?芽吹っ！夏凜っ！しっかりしろって  
！」

「銀っ！落ち着きなさい！まずは救護よ！」

「こ、こんなに血が…」

「な…なんで…？夏凜ちゃんも…芽吹ちゃんも…！！」

〈大至急！霊的医療班をお願いします!!讃州の海岸!!〉

「息はあるわ。…外傷は…酷い打痕ね…。まさか、勇者同士で戦ったっていうの…?」

〈…なんだよそれ…!…あたしのせい、じゃんかよ…!〉

「え…?銀ちゃん…?」

〈あたしが…:あたしがあんな思わせ振りの態度とつたから…!二人が真剣にお互いに向き合ってほしいなんて、出過ぎたマネをしたから…!〉

「違うよ銀ちゃん!銀ちゃんは悪くない!!二人を大切に思ったことが、悪いなんてことありえないよ!!」

〈友奈…?〉

「…後で、二人に事情を聞こう?こんなことになっちゃったのはつらいけど…銀ちゃんの想いは伝わってるはずだから…」

〈……………〉

勝ちたかった。勇者として絶対。

「…これってさ。オミットしたはずの、『満開』、だよね…?」

「…答えてよ、安芸先生。これはもう使わないって約束だったじゃないか。あたしが『こうなる』代わりに後続の勇者には何も背負わせないって言ったじゃないか」

「…それが大赦の返答ってことね。あたしは信用できないって。…で、先生。先生自身はどう思ってるの?」

「…私、ですか」

「自分の受け持った生徒がさ、こうして蝕まれていくのを見てさ。あたしなんて八回だよ、八回。半身全部ダメにしたんだし」

「…人並みの感性を持ってるのであれば、耐え難い苦悩でしょう」  
「…他人事みたいに言っちゃって…。…あたしはとても耐えられない。大切な友達が、可愛い可愛い弟子たちが『散華』して…事実を知って壊れていくのなんて…」

「…いけませんよ、銀様。次に『それ』を使えば、あなたは戻ってこられませんか。その時こそ、世界の終わりです」

「…知ってる。あたしがチップにかけるのは世界だって話。二人を消耗品扱いするなら、『全て』を敵にしてもいい」

「……………」

「もう、決めたんだ。気付いたんだ。あの時『死んだはず』のあたしがどうしてここにいるか。その天命を果たそうって」

「…それが彼女たちに、更なる苦難を強いるとしても？」

「…二人なら、乗り越えられる。あたしも、滅びゆく神樹様も、外の火の海も。その布石になれるっていうなら、あたしは笑って魂を売るよ」

「銀様……」

「前に言ったよね、安芸先生。私だけは最後まで銀様の味方だって」

「…だから、……あたしのわがまま、聞いてくれる…？」

うつすらと意識が覚醒しはじめると、見慣れたハニカム状のセンサーが目に入った。

「お目覚めかな？マイハニー」

「……ツツコミ入れられるほど、まだ冴えてないんだけど」

「…よかった。いつも通りの夏凜だ」

銀ったら、こっちはまだ寝起きだつつうの。年中無休でツツコミやっているとってんじやないわよ。

横になっていた身体を起こして、見渡した。どうやらどこかの医療

施設らしい。向かいのベッドで包帯巻いた楠が寝てる。

———  
なんでこんなところにいるんだっけ？えつーと

へじゃあ一発ゲンコツね

「えっ!?ちよっと!?!」

へ勇者パーンチっ!」

突然ゲンコツを宣言して、止める間もなく拳の形をした鉄塊が私の頭を打つ。

「うっ…うおおお…」

へはい。懲罰はこれでおしまい。以後気を付けるように」  
「(っ)…」

正直、楠のライフル弾レベルの衝撃がある。勇者じゃなかったら即気絶する威力。

痛みで急速に意識がはつきりと戻ってきた。———  
銀の言った懲罰の意味も理解した。

「…ごめん、銀。どうしてもあいつとけじめをつけなきゃいけなかったんだ」

へ殴らなきゃわかんないって言ってたもんね。…で、ケリはついたの?」

「勝敗はね。あとはあいつがこの勝敗をどう思ったか」

———  
私は勝った。ずっと、追い越せなかった楠に。

認めたくなかったんだ。決着がつかないことが宿命だなんて。お互い力尽きてその事実を認めようとした時、神樹様が翼をくれた気が

した。

——よく、覚えてないんだけどね。その後のこと。勝ったことしか覚えてない。

〈…夏凜の心のつつかえはもうないみたいだね〉

「…そうね。やれることはやった。これで結果が良くなくても、受け入れるしかないわよ」

〈そっか。…こればかりは、芽吹次第だね〉

——あいつは果たして、何を思ったのだろうか？

あいつだって、負けた後のことなんて考えたことないはずだし。リベンジに闘志を燃やしてくれてるだろうか？それとも、高潔なプライドが修復できないくらいに折れてしまったのだろうか？

けど、信じたい。本質は私と同じだって。不転の心で挑み続ける人だって。——その人が隣にいなきゃ、私も前に進めない。

「……あいつが起きたら、一緒に社会奉仕にでも行ってくるわ」

〈ええ？懲罰はもう与えたよ？〉

「あんたからのね。大赦もそれでお咎めなしって言うんだろうけど、私はそれで納得できないから」

勇者の力をお役目以外で使ったこと、目的も私的なこと、勇者同士での決闘。どれも重大な反逆行為だ。

それを承知で私も桶も力を解き放った。後で懲罰を受けるのを覚悟の上。

——銀の権力ならもみ消すことくらいわからないんだろうけど、

それじゃ筋が通らない。自戒の意味でも、自分を罰しなきや。

〈…わかった。それじゃあたしも連帯責にn〉

「銀は来ないで。これは私と楠のけじめだから」

〈が、がーん…。あたしのけもの…〉

「遊びじゃないのよ。…でも、そう言ってくれて、嬉しかった」

銀にも触れてほしくない、神聖な領域だから。それに、それじゃ銀に頼ってばかりでカッコ悪い。

あんたが優しいのは良く良くわかってるから、  
————— そこで待ってて。

〈わかったよ。もしその間にバーテックスが来たら、あたしが歓迎しておくよ〉

「…：くれぐれも自分を見失うんじゃないわよ。銀も、楠も、私の大切な人なんだから。三人一緒じゃないとダメなんだから」

〈…夏凜からそんなセリフが聞けるなんてね。ハルさんが聞いたら風さん並みに号泣しそう〉

「兄貴に言ったら殺すから」

〈い、一緒じゃないとダメって言ったのに…〉

「あんたは殺しても死なないわよ。不死身だって自分で言ってたじゃない」

〈あれ？そうだったけー？〉

とぼけちゃって。あんたが同じようなこと最初に宣言してたじゃないのよ。

————— その意味を、私はやっと理解したのよ。



「…そういうえば風たちは？学校？」

へうん。終わったからお見舞にくるって言ってたけど。なんやかんやで二人の救護を手伝ってもらっちゃって、なんかお礼しないとなー」  
「そうね。…楠が目え覚ますの間に合えばいいけど」

もう正午を回って、私はいろいろと検査を受けた。身体だけじゃなくて、勇者システム自体も。端末も不具合がないかどうかのチェックで、現在手元がない。

どこから持ってきたのか、銀は果物の詰められたカゴからリングを取り出してウサギの形に切った。弟さんにこうやって喜んでもらってたのかしらね。

へはい、ウサギちゃんですよー」

「手慣れたものね。ありがとう、いただきます」

へはい、あーん」

「…え？」

フォークの先のウサギちゃんを私の眼前に差し出してきた。

その意味を理解するまで、数秒。そして羞恥心がメーターを振り切る。

へこの前できなかつたじゃんか。せつかくだし、ね？」

「ま、待って！そんな恥ずかしいことっ」

へ何を今更言いますかあ〜マイハニー。お互いに愛の告白をする仲だ

ろくろく？

「愛の告白じゃないしっ!!あれはそのっ」

〈言い訳してないで食えっ〉

「ぶごっ」

言い訳に意識しすぎて、まるでお留守だった。すつとウサギちゃんが口の中に入り込んできた。

にししし、といたずらっ子みたいに笑う銀。先生っぽい大人な面もあれば、今みたいに子供みたいなことする時もあるし――忙しいやつよ、ホント。

果汁たっぷりのリンゴを頬張りながら、銀に顔を見られないようにそっぽを向いた。――いつかあんたにも同じ目にあってもらうんだから。

「…ま、いいか。こんな平穩なもの」

〈おお、なんだか余裕が見えるね。勝者の余裕ってやつ?〉

「ええ。泥沼の戦いだったけど、私が勝者よ」

実際、気分はこれ以上になくすつきりとしている。長年悩まされていたできものとおさらばしたような、そんな気持ち。

銀は少し間を置いてから、質問してきた。

〈…でも、良く勝てたね〉

「神樹様が私の根性を買ってくれたのよ。空に花が咲いて、力が形になって、大きな翼を持つ音速を超える船になって」

〈…使っちゃったんだね…「満開」…〉

「満開っていうのね、この機能。こんな隠し玉があるなら先に言いな  
「さよ」

銀も銀だ。勇者として戦うなら知ってなきやいけなことを説明してくれないなんて。この満開があればバーテックスなんて敵じゃないでしょうに。

でも、銀の表情は次第に沈んでいった。

「…できれば、使ってほしくなかったんだ。ゲージが溜まる前にあたしが片付ければ、夏凜も芽吹も満開を解き放たないで済むから…」

「……まるで副作用でもあるって言い方ね」

「……その通り、だよ。あたしの左目も、左耳も、左足も、声も、心臓も、生殖器も、味覚も、涙も。全部その副作用でダメになっちゃったんだ」

私が返せる言葉なんて、その時は存在しなかった。

銀がサイボーグになったのは、満開のせい———？

「……神様が無償で力を貸してくれるなんて、ありえないよ」

「穢れを知らない、神様に見初められた子だけが、その身を対価に力を得られる」

「花は咲き誇って、その後は散るだけ。『散華』の時は平等に訪れる」

〈……それじゃいけないと思って、あたしはシステムをダウングレードさせた。他の勇者にも使わせないように、大赦に満開のオミットを突き付けた〉

〈……けど大赦はあたしには秘密にして、夏凜と芽吹の勇者システムに満開を搭載した〉

〈……ホントに、ごめん。そんなことにならないよう手を打ってたはずなのに……〉

らしくもない沈んだ声と、謝罪。

何かあったのは私の方なのに、銀は被るべきでもない罪に苦悶してる。

——私のせい、だ。

〈あたしが焦ってけしかけたから……。芽吹との関係をなんとかしようって催促したから……〉

「…何一人で全部背負おうとしてんのよ。どう見たって私のせいでしょうが」

〈えっ……〉

「あいつとの仲をこじれさせたのも私。決着を切に望んだのも私。花開かせたのも私。銀は何も関係ないじゃない」

〈でも……〉

「…あんたもつらい過去を、もう二度と経験したくないでしょうけど……独りよがりの善意を押し付けられても、銀のこと心配するだけな

のよ」

銀の情けない顔を見てたら、自然と言葉が溢れてきた。両手が自然と銀の義手を握る。

あんたが私たちのことを大切に思うように、私たちも銀のことかけがえのない人って思ってたのよ。

銀に重荷を一人で背負わせたくない。肩の荷を預かるくらい、私たちにさせなさいよね。

「……それに、謝るのは私の方よ。銀にそんな心配ばかりかけて。……ごめん、なさい」

「あ、謝ることじゃないよ。しよせんあたしの余計なお世話だから……」

「…そう、よかった。…それなら私を信じて」

「…え？」

「もう独断はしないし、満開も使わない。銀が心配するようなことは、もうしないから」

——そんなことする理由も、もうなくなつたから。

これからは、あんたと楠と、ずっと一緒だから。

「……泣きたいのに泣けないって、つらいね」

「そのシケた面だけでも、十分気持ちは伝わるわよ」

「…芽吹に見られたら、余計な詮索されちゃうね。…よし、ありがと夏凜。勇者免許皆伝だよ」

「銀……」

銀は教導期間の終了を告げるとともに、優しく肩を抱いてきた。機械音声が感極まって震えてるようにも聞こえる。

今にも泣き出しそうな吐息は、なぜか温度がしなかった。

「……寒いのか？銀」

〈え？……いや、暑いくらいだよ？〉

「……………」

〈…捧げられたのは、温感、なのかな…〉

手とか足じゃなくて、ホツとした。日常生活に支障が出る障害だったらサイボーグ待ったなしだし。

けど、人肌の温度を感じられないのは寂しい、かも。

「サイボーグになるほどのことでもないわね。逆に快適かもしれないし」

〈熱中症とか凍死とかやめてよー？〉

「怖いのはそれくらいでしょ？免許皆伝完成型の私が、そんな間抜けなことしないわ」

〈…合格なんて言わなきゃよかったかも〉

「もう遅いわよ銀。大丈夫、調子乗ってたら隣で寝てるあいつがしばいてくるから」

あいつも、わかってくれるはずだ。

「夏凜ちゃん！芽吹ちゃん！」

〈お、やっぱり友奈が一番乗りだ。あたしの予想通り〉  
「…わざわざありがとう、…結城さん。ご覧の通り全然元気よ」

しばらくして、結城さんが切迫した表情で病室へ入ってきた。その後、風に樹が続く。二人もいい顔はしてない。

「よかった…！無事で…！」

「あの程度何ともないわよ。平気平気…いたたた」

「頭痛いの!?夏凜ちゃんしつかりして！」

〈あーごめん。それあたしのゲンコツのたんこぶだわ〉

頭を動かすとゲンコツの痛みが染みる。体罰なんて食らったことなかったけど、なかなか教訓になる痛みだ。

結城さんが「へっ…？」って顔をしてポカーンとして、その様子を見て風がブツと吹き出した。

「いい先生じゃんか、銀先生」

〈ちやかさないで下さいよ風さん〉

「げ、ゲンコツって…痛そう…」

〈樹も悪さしたらゴチーン、だよ？〉

「樹がそんなことするわけないでしょ!？」

〈信じて送り出した真面目な教え子二人が、血みどろのケンカをしたんすよ？樹だって反抗期が来ますって〉

「そ、そんなあ！樹いいお姉ちゃんを嫌いにならないでえええ」

「…そういう悪ノリすぎるところ、ちよつと嫌いかなあ」

——いい加減このノリにも慣れてきた。少しうるさい気もするけど、悪くはない、と思う。

場を和ませようとした三人だけど、結城さんは乗ってはくれなかつ

た。私たちのことを真剣に心配してくれてるらしい。

〈友奈もそんな顔するなって。二人が無事じゃなかったら、あたしが平気でいられるわけないだろ?〉

「それは…そうだけど…」

〈ほら、芽吹も狸寝入りはそこまでにしてさ。友奈を安心させてよ〉

銀は楠のベッドに行つて、こめかみのあたりを両手でグリグリした。

「ぎいえええつ!!」

「!!?」

普段のあいつからは想像もつかない理性の欠片もない悲鳴。樹が髪の毛を逆立てるように背筋を伸ばす。

心中お察しします。ゲンコツもすさまじい威力だったけど、それも一般人を病院送りにする技なんじゃないの?

「うわあ…銀の体罰は加減を知らないわねえ…」

「だっ、大丈夫芽吹ちゃん!」

「め、目の覚める一撃でした…」

狸寝入りだったかどうかはわからないけど、楠も完全に意識を取り戻したようだ。息を切らせながら周りを見渡してる。

〈おはよう、あたしの愛娘〉

「…だから教導にはパパをあげられないって言ったじゃないですか」

「…パパ?」

「……あ」



樹がそのフレーズを聞き返すと、楠はフリーズした。

——あの真面目でお堅いイメージの楠から、まさかの「パパ」発言。そのインパクトたるや、銀以外の全員が固まってしまいうくらいだ。

「いやね、父子家庭っていうからあたしがママになってやろうって言ってるんだけどさ。恥ずかしがっちゃって」

「いやいや銀、そこじゃなくて」

「ち、違うんです風さん！父を尊敬してはいますが決して教導とそういう関係があるわけではっ」

「???どういう意味かな？芽吹ちゃん」

「…結城さんは知らなくていいことよ。銀がからかったせいで、あいつもワケわかんなくなってるだけだから」

これじゃ話が進まないじゃない。この前の会議みたいに。

——それが勇者部、か。

「んんっ！この話はここまでです！終わりです！」

「ええーせっかく芽吹の意外な面を知ってもらおうと思っただのにー」

「それはあんまりです！私の独断にご立腹なのは重々承知してますが！」

「うん、怒ってはいないよ？…ま、いつか。みんなポカンとしてるし」

いたずらっ子みたいにはくそ笑む銀。体罰も加減を知らないけど、精神攻撃もえげつない。これが大赦の権力者っていうんだから、世も末だ。

「め、芽吹ちゃんも元気そうで何よりだね！」

「…ええ。でも狸寝入りという訳ではないけど、もう少し寝かせてほ

しかった」

「起きてるんだか寝てたんだかはつきりしてよー。どこから説明すればいいかわかんないじゃん」

「…」から説明させてください。それと…何なりと罰を」

「ふふ、夏凜と同じこと言ってる。二人とも欲しがりさんだなあー」

意味深な言い方やめろ。ネタなんだかガチなんだかわからないじゃない。

でも、あいつと考えてることは一緒とわかって、なんだか嬉しくなった。

「…三好さんと?」

「うん。二人一緒に社会奉仕の旅に行きたいって」

「いやいや銀。さすがに現実的じゃないでしょ…」

「女二人：旅の道中：何も起きないはずが…：ビュオオオウ!」

「さつきからそういうネタに走るのやめなさいよっ!」

自分で言ったことだけど、なんかすごく恥ずかしくなってきた。

もっと距離を詰めたい人と二人つきり。そんな風に茶化されたら、イヤでも意識しちゃうわよ!

「??銀ちゃん、どういうこと?」

「ふふふ、そりゃあれだよ。仲直りに夏凜と芽吹がにやんにやんす」

「銀!!それ以上言わせない!」

「ぶうえっ!」

顔を真っ赤にして、楠は銀のチョーカーを力いっぱい引つ張った。

——因果応報よ、銀。

普通の人間にやっちゃいけない技だけど、銀なら別にいいか。不死身のサイボーグだし、こうでもしないと黙らないし。

「にやんにやん…？仲良く遊ぶんだね！」

「そ、そうよ結城さん！三好さんとにやんにやんって！」

「そ、そう！お互いににやんにやんって言ってさ！」

「うふふ、二人とも必死ねー」

「お姉ちゃん、あんまりちやかしたら可哀想だよ…」

――風のやつ、後で覚えてなさいよ。

てか、なんで結城さんの純粹な心を守ろうと必死になってんだろ  
か。――まあ、銀みたくなってほしくはないけど。

「…おほん。皆さんも詳しい事情を知りたいと思うので、説明させて  
ください」

「このポンコツサイボーグが伸びてる内にね」

「二人とも、割と銀の扱い雑よね」

「お姉ちゃんが言う？それ」

「あははは…。銀ちゃんと二人は仲良しってことだよね」

それは認める。自然と持ち上げる気にならないのよ。

事情をひとつずつ説明していった。どうして私たちがいがみ合っ  
ていたか、人となりをお互いに言い合って。

「私は楠のこと、ずっといけ好かない奴だと思ってた。平気で人を傷  
つけるし、一匹狼気取ってるし」

「私だって三好さんには背中を預けられないと思ってた。感情的だ  
し、甘ったれだし」

「…でも、理由もなくそんなことしてるんじゃないって気付いた時、楠の生き様がすごくカッコ良く見えた」

「…銀が神樹様に選ばれた理由を察した時、三好さんの人格こそが勇者にふさわしいと思った」

「…だからこそ、勝ちたかった。その人と抜きつ抜かれつ、そんな関係になりたかったから」

「…だからこそ、負けたくなかった。隣を走る人と決着がついてしまえば、私の隣には誰もいなくなってしまうから」

「…勝ったのは、夏凜ちゃん…?」

「…ええ。全力で挑んで、死力を振り絞った三好さんに、私は敗北した」

「…銀のやつが説明してなかった満開って機能を、土壇場で呼び起こした。それがなきやまたドロ―だった」

「隠してたのは教導の方だったのね…」

「…どうなのさ、夏凜。それに芽吹。決着がついてみて」

「私も実力で勝ったとは思ってない。楠も満開を使ったら、引き分けるに決まってるし」

「…でも一敗は一敗よ。そこは認める」

「ん?」

「…こんな気持ちは初めてなの。本気で三好さんに勝ちたいって」

「教導にコテンパンにされた時には勝てなくて然るべきだと思った」  
「でも三好さんの前で膝をついたら、どうしようもなく自分が許せなくなかった」

「どっちが上かはつきりわかって、同じ立場でいられなくなると思っ  
てたけど、…結局、尚更三好さんに挑みたくなった」

「許されるのなら、…三好さん。…いえ、夏凜」

「同じ先生の下でお互いを高め合うことを許してほしい。これまで通り同じ立場で競う関係が、私のただひとつの望み」

「…私も同じよ、…芽吹」

「私はあるに一度完全敗北した。勇者部の仕事の指揮をとったあと、与えられた仕事一つこなせなかった私。能力の違いをまざまざと見せつけられたわ」

「だから、勝ちたかった。勇者として絶対。そこで負けたら私には何も残らないから」

「二勝一敗。優劣なんてまだまだわからないわよ」

「…芽吹。これからも私と競い合ってほしい。それが今の私の生きる意味なのよ」

「しゃべればしゃべるほど、お互いに同じことを思っていたことがわかってきた。」

嫌ってる振りをしながらお互いに尊敬できるところを見つけていたり、その関係が心地よくて下手に改善しようとしなくなかったり。

本当は相手もわかり合いたいと知ることができれば、私たちを隔ててきた壁なんてもう必要ない。心をはがんにがらめにしてきた鎖が外れて、ようやく壁を越えられる。打ち壊せる。

「…夏凜」

「…芽吹」

「…うん！ちゃんと仲直りできたね！最後は握手握手！」

「ちよつ、結城さん!？」

向かいのベッドで見据えてくる芽吹に視線を返し続けていたら、結城さんが私を担いで芽吹の隣の椅子まで運んだ。

そして、結城さんに促されるまま芽吹の包帯で巻かれた手を握った。

「これで二人はもう銀ちゃんだつて割り込めないくらいの大親友だよ！」

「…大親友、か」

「…雨降つて地固まるつて言うけど、私たちの場合は全部流された後に残った岩盤じゃない？」

「もうそれ以上削れないし、割れもしない。いいじゃない、それで」

「そうね。夏凜以上に親しい人なんて、それこそ銀くらいだし」

銀や結城さんみたく、仲良しを前面に押し出せるわけもなく。これまでと変わらない、ドライで冷めた会話。

でもそれが私たちの正しい距離。お互いの思いが同じとわかればこそ、なおさらこの関係が心地いい。

「…ありがと、結城さん…友奈。こんなに世話焼いてくれて」

「銀ちゃんの大事な人なら、わたしの大事な人だよ！お安いご用ってことー」

「…いつか、お礼させて」

———  
こんなにも支えられていたことに気付いた。銀のやつが私たちにお節介だった理由も、今ならわかる気がする。

——— 私も、そうなれるかな。

## 楠芽吹の章

どうか私たち三人を見守っていてください

「…話を聞く限りじゃ余裕とか思ってたけど…」

「これは…かつてない大仕事になりそうね…」

教導から通達された私と夏凜への懲罰。

瀬戸大橋に程近い場所に存在する、勇者として世界を救った人間を  
標す墓碑——の清掃。

「ご挨拶ついでにキレイにしてきてよ」と軽いノリで言い渡してきたけど、ここって大赦の中でも限られた人間しか入れない神聖な場所よ？ガラじゃないけど、流石に恐れ多く感じる。

「…墓守りさんからは許可を頂いてるし、さっさと始めましょう夏凜。

銀がいらない分時間のロスはなくなるし、ペース上げていきましょ」

「銀のやつがいらない分手数は減るけど。途中でバテないでよ芽吹」

「夏凜こそ。銀がいらないからって寂しくて私に当たらないでくれるかしら。リードを引いてくれる人がいないんだから、噛みつくの自重してよ」

「銀の犬はあんたじゃない。銀に選べってあんたが言ったから、こんなヘビーな仕事回ってきたんでしょうが。忬度に付き合わされる身にもなってくれないかしら」

——あの決闘の後の私たちの関係はこうだ。

息を吸うようにイヤミ皮肉が私と夏凜の間に飛び交う。こうなっ

たちらもはや銀も口を挟めないみたいだった。

—— 犬も食わないって銀が言ったら、二人揃って標的が変わったけど。

「今日はやけに噛みついてくるわね。そんなに寂しいのかしら？甘ったれの夏凜ちゃん？」

「どの口が言うか。口数増えてんのはそっちでしょ？あーあ、リアルぼっちは一味違うわね」

「人のこと言えるのかしら？お兄さん以外に親しい人いるの？」

「ファザコンが良く言うわ。大切に育てられてなんでこんな性格になっちゃったわけ？」

「ちゃんと親孝行してるわよ、夏凜と違って。親の顔が見てみたいわ」「はいはい優等生優等生。それで世渡り上手気取ってるわけ？」

—— 今までなら、この後即実力行使になっていたはず。他人のデリケートな問題まで突っ込んだ煽りなのだから。

そうならないのは、お互いのことを大切に思っただけか合おうとしてるからか。心の底では信頼し合ってるのをわかってるから、冗談でもそんなことが言える。

—— まあそれで時間を浪費してたら、教導に笑われる。切り替えて仕事に取りかかろう。

「…言いたいことはそれだけかしら？いい加減始めないと銀のこと笑えなくなるわよ」

「…そうね。時間を浪費して課題の山に埋もれた銀を笑ってやれなくなるわね」



「うあああん助けてかりーん！めぶきー！」

「銀様が向かわせたのではありませんか。無駄口を叩く前に、溜め込んだ課題に向き合ってください」

「ううっ…こんなの一人じゃどうにもならないよ…先生え…」

「二人はちゃんと提出してから出向していきましたが」

「うそおっ!?!ずっとトレーニングしてやる時間全然なかったのに!?!」

「銀様がマンガを読んだりゲームをしてる間にやっていたんですよ、二人は」

「…自分が恥ずかしくなってくると同時に、心が折れそう…」

「帰ってきた二人に面倒見られているようでは、勇者の先輩として失格です。銀様の威厳を保つためにも、終わらせてください」

「…うん、やる。こんなところ見られたら、絶対手伝ってくるもん。夏凜も芽吹も優しいから」

「…ふふ。いくら役職についたとはいえ、まだまだ子供ですね」

「ん？先生、何か言った？」

「いえ。普段からそれくらいやる気を出してくれれば、と思っただけ。銀様をここまで勉強させるとは。須美、園子、待ってるよー！銀様の本気、見せてやるぞー！」

片っ端から聖水と儀礼済の布で墓標の数々を磨くこと数時間。墓守りさんが毎回丁寧に仕事してたのか一つひとつにかかる時間はそれほど多くはなかったが、数が数だ。まだまだ時間がかかりそうね。

そして、私と関わりのある英霊の碑の前まできた。

深く拝をしてから、伝えるべき言葉を口にする。

「…鷲尾須美、様。お初にお目にかかります、あなたの後継者の楠芽吹と申します」

「紆余曲折ありましたが、三ノ輪教導のもとで勇者の任を全うしております。安心してお休みください」

「もちろん返事はない。あつたことのない人なのだから、幻聴もないのも当然だけど。」

「どんな人だったんだろうか。教導の話の断片から想像するに、真面目で意識の高い人なのだろう。それでいてなかなか我が濃い部分もあつたり。」

「他人じゃないような気がしてきた。銀が言った通り、私と似ているのかもしれない。」

「…あなたの親友は、もう立ち直りましたよ。荒れくれ者の私たちを一人前に育ててくださるくらいに」

「…願わくば、銀に祝福を。今度は私と夏凜が銀を支えますので、どうか私たち三人を見守っていてください」

私が英霊に告げられる言葉はただそれだけだった。

らしくもなく、誰かに願ってしまった。彼女が銀の親友だから、あらゆる種神格化してるのかもしれない。

でも、銀が抱える心の闇を解きたいのは事実。私じゃ到底銀の琴線には触れられないから、神頼みしてしまったのかもしれないわね。

「…私にとっても銀は大切な人です。銀がいなければ私は勇者の意味をはき違えてたし、これからも一緒になければ…」

そこまで言葉にして、何故か友奈の顔が思い浮かんだ。そして胸の辺りが締め付けられるように痛む。

「…この気持ちだけは未だ解消されないわね…。…どうかしてますよね、私。優しさと善意の塊みたいな人に、こんな気持ちを抱くなんて…」

「…知っているのであれば、教えてください。この感情と向き合う方法を…」

もちろん返事はない。無音のままなのはさっきと同じだけど、私は返事を渴望するように耳をすませるばかりだった。

「……乃木家の末裔、か」

乃木園子。大赦に関わりを持つ人間で、その名前を知らない者はいないだろう。

初代勇者の直系の血筋。大赦の実質的な統治者の子。存在自体がもはや神々しくすらある天才。

それが、私と芽吹の教導の親友っていうわけで。どう面しているかわからなくなってきた。これまでノンストップで清掃をやってきたけど、乃木園子の碑の前で手が止まってしまった。

「……まあ、あいさつくらいはしないといけないわよね」

「……初めまして、乃木……園子様。後継者の三好夏凜です」

「私ともう一人が頑張ってバーテックスを殲滅しますので……こつちのことは任せてください」

「……………」

言葉が続かない。知り合いでもない人の慰霊なんて、何をすればいいのよ。

——一つだけ、接点があるとすれば。

「…兄から…三好春信からあなたの話は聞いてます。望まれて勇者になつた、誰からも認められる人間だつて」

「…あなたは何のために勇者になつたんですか？お家のためですか？大赦のためですか？それとも…」

答えが返ってくることはないのを知つていながらも、聞いてみたいことを口にするのをやめられなかった。

周囲の期待に応えて勇者になつた園子様と、疎んじられても勇者の座を勝ち取つた私。その存在は許されるのか。

「私は最初、半ば両親への復讐のために、当て付けのように勇者を目指しました。わき目もふらずひたすら努力して」

「でも、兄は私をこう諭しました。『勇者というのは人のためになることを勇んで行うもの』だと」

——兄貴の言葉を反芻して、ようやくその意味を理解できた。

「…何だ、風たちと同じこと言つてるじゃない、兄貴も」

「あなたの親友のご指導のおかげで、私はちゃんと勇者になれたと思います。今はもう復讐なんてどうでもいいですし、…守りたい人もできましたし」

「…ですから、見守つていてください。私と、芽吹と、銀がいつまでも一緒にいられますように」

——全く。兄貴も銀も、風も友奈も樹も。異口同音じゃないのよ。勇者の心得つて。

「何でしたっけ、乃木家の家訓。『何事にも報いを』でしたっけ。後継者として、私を勇者にしてくれた人たちに報いようと思います」

ぐっと胸の奥が重くなったのは、園子様のせいだろう。視界がぼやけてくるのも園子様のせい。そういうことにはしておこう。

瀬戸内が赤く染まった頃。ようやく仕事の終わりが見えてきた。

数も残りわずかなので、夏凜と合流して仕事の分担を決めて手早く終えよう。そんな協力を遠慮なしにできるくらいには、私たちの仲は進展した。

「夏凜、道具の片付けは私がやっておくから、残りを任せていい？」

「りょーかい。あ、端の方の桶には気をつけなさいよ」

「何に気をつけるっていうのよ」

「フナムシが沢山わいてたから、覚悟してあたるのよ」

「……………」

嫌なものを押し付けられてしまった。分担しようって進言したのは私だけだ。

あれこれ文句を垂れてもしようがない。虫はアシダカグモで慣れたし、何とか回収できるはず。

「…さて、芽吹のところをちやちやつと…うぎやあ！」

「あ、忘れてた。そこ、ゲジゲジがいたから後回しにした」

「先に言えええええ！」

持ち前の瞬発力で墓碑から飛び退く夏凜。面白いポーズで着地して私をにらんでくる。

まあ、因果応報よ。私にフナムシを押し付けようとした。

「ぐぬぬ…やってやるわよゲジゲジ野郎！完成型勇者を本気にさせたわねー！」

「頑張って夏凜。応援してる」

「棒読みで言ったら煽ってるようにしか聞こえないでしょうがあ！」

銀がいたら、＼ナイスツッコミ！＼って太鼓判を押ししてるわね。私からしても期待してた返事がきて満足してる。

どこからか持ってきた火ばさみで応戦する夏凜を視界の端に捉えてから、私もフナムシと格闘する準備をする。

「…ん？」

!!

「何か、いる？」

標的の桶を見つけると、夕日の光ではない、黄色の光が流れた。行き先は墓所の上の岩の屋根だ。

まさかとは思うけど、恐る恐る屋根の上を覗いてみる。こんなところにいるわけが

「……教導、何をなされてるんですか」

〈…あー、バレちゃった？さすがは須美の後継者〉

そのまさかが的中した。ヤモリのように岩に貼り付いてバツの悪そうな顔をする銀。

「先生のところで課題の始末をしていたのでは？」

〈聞かないで。今日だけは絶対ここにこないといけない日だからさ〉

「……？」

〈…命日なんだ。須美と、園子の。課題を終わらせてから、と思ったけど…〉

脱走してきたのはいただけじゃないけど、そんな大事な日なら酌量の余地はあるか。直接上に掛け合っても許可が降りるような気もするけど。

私が表情を緩めたのを見ると、教導は降りてきた。別に怒るつもりはなかったし、隠れる必要もなかったのでは？

〈…ちよつと嫌な予感がするんだ〉

「……バーテックス、ですか？」

〈…気のせいかもしれないけどね。須美が二人を守ってって、言ってる気がするんだ…〉

「須美様が？」

〈……この機会に話しておこうか。あたしの秘密を〉

夕焼けをバックにする銀の表情は見えない。チリチリと義眼の光が点滅するだけ。

銀の秘密。私たちとは違う、身体を直接勇者システムに繋いだサイボーグのこと、なのだろうか。



「大事な話なら、夏凜にも聞いてもらわないといけません。あと少しで作業完了なので、それまでお二方にご挨拶を済ませておいてください」

へわかったよ、芽吹

「では、私はこいつらをなんとかします」

へあ、フナムシ。まあまあ、それなら銀様に任せなさい

義手が展開して磁場のようなものを解き放つと、桶に残った水がフナムシたちをくるんで浮遊する。シャボン玉みたいにプカプカと漂って瀬戸内の方に消えていった。

「ずるい気もしますが、ありがとうございます。サクサク終わらせますので、少々お待ちを」

へはいよー。お土産もあるからファイトファイトー

道具をまとめてると、一部始終を見ていた夏凜が「ちよつとズルしてんじゃないわよお！ゲジゲジがあああ！」って叫んでた。へつぴり腰でつついてる姿が何とも哀愁漂う。

——銀が「ぐへへ高く付きますぞえ三好の旦那あ」とかほざきながら、ゲジゲジを処理して事なきを得ただけだね。

あなたがすぐそこにいるから

へはい、お疲れ様。これ、まかない飯ついでに食べて

「ありがとうございます、教導」

「焼きそば…そういうのもできるのね、あんた」

パック詰めされた、ソース味の焼きそば。教導特製の一品らしい。

須美様と園子様の墓前にも同じものが置いてあった。いささか不似合いな品だけど、そこに思い出があつたのかしら。

——— そんな勘繰りをしてると、私と夏凜のお腹から仲良く空腹を告げる虫の鳴き声が。まあ、昼食抜きで仕事してたし当然か。

「では、いただきます」

〈どうぞどうぞ〉

「いただきます、銀」

〈今回は自信作なんだ。感想聞かせて〉

輪ゴムに括られてた割り箸で、香ばしい匂いのする麺を口に運ぶ。

「…：…：想いが味にこもってますね。…：こんな温かくなる料理、あの時のうどん以来です」

へうおう、芽吹からそんなエモーショナルな感想が。…：ありがと、あたしの気持ち伝わって何よりだよ

「…：そうね。一般家庭という所の母親の味、なのかもね。私がそんなこと思う料理なんて、たぶんあんたしか作れないんじゃないかしら」  
〈夏凜からはへビーブローをいただきましたー。…：いいよ、あたしが二人のママになってあげる〉

「いらぬです」

へうおおおん娘が反抗期いいへ

空腹と美味しさが相乗して、二人ともあつという間に焼きそばを完食してしまった。これを作ったのがそこでくだらないボケをかましてる中学生だと思ふと、世の中というものもがわからなくなってくる。

「ごちそうさまでした、教導」

「ごちそうさま、おいしかったわよ。…で話つて？」

へ…須美と園子と、あたしの話へ

一転して銀の表情が神妙になるのがわかった。冗談をはさめる話じゃないらしい。

へ…二年前の今日、遠足の帰り道。バーテックスが押し寄せたんだへ  
「……………」

へこの前二人が倒した三体が、その時も一緒にきたへ

『…なあ、須美。園子。この状況で勝てる方法教えてくれよ。このままだとあたし須美の大好きな“天皇陛下バンザイ!!”ってやるしかなくなるから』

はつきり言って、この時のあたし達は未熟だった。というより、バーテックスをなめてたつて言った方がいいかも。

三体のバーテックスが連繫を組んできた途端に戦線が瓦解したんだから。矢を放つバーテックスの奇襲でこっちの連繫が崩れて、三人揃って致命傷をもらっちゃったんだ。

二人より頑丈だったあたしは何とか戦線に復帰できそうだったけど、二人を置いていくのは怖かった。須美と園子の安否の意味でも、あたし自身の安全の意味でも。

『ごんな、時に…冗談、なんて…』

『冗談ってことにしてほしい。あたしだって二階級特進はイヤだし』

『ミノさん……とにかく、足止め、して。私とわっしー、が回復するの…待ってから、…迎撃する、よ…』

『オーケーリーダー。早く来てくれないと銀様犬死にだかんな!』

園子があたしの質問の解答をくれた。二人が合流するまで意地でも抜かせるな、ってオーダー。

敢えて死をイメージさせる言葉を笑い飛ばしてみたけど、恐怖はすでにあたしの影から隙を窺ってる。臆した時がお前の最期だよ、と。

そうはさせるかよ。園子に焼きそばの何たるかを教えてなきやいけないし、須美さんの登頂はまだ途中だし、マイブラザーの教育はまだまだだし、やらなきやいけないことは盛り沢山なんだよ。

恐怖に別れを告げるように、須美と園子に一言だけ言った。

『じゃ、またね』

『…銀、どうか無事で…!』

『待ってて、ね…!ミノさん…!』

足止めたってたって、三対一じゃどうしようもない。半分陽動みたいな戦いになる。

あたしにとって一番厄介なのは矢のバーテックス。なぜなら近づけないから。これを一人でどうにかするには、それなりの工夫が必要だ。

『さて、絶望的希望、見せつけてやるよおっ！』

硬いバーテックスの後ろに隠れてる矢のバーテックス。配置は完璧だ。

普通なら硬いバーテックスをやり過ぎてから矢のバーテックスを攻撃したいところ。だけど、生憎あたしに援護はないんでね！

『そらあつ！上がガラ空きだあ！』

降り下ろされた硬いハサミに飛び乗って、バーテックスの上へ駆け上がる。

プレートで反射してくるのは見たけど、絶対に本体に向かっては矢を放ってこない。この方法なら安全に矢の奴に近付ける。

硬いプレートの一番上を蹴りこんでさらに跳躍。それでも矢のバーテックスに攻撃は届かないけどね。

『あたしだって投げるものを持ってないわけじゃないんだよおっ!!』

両手には巨大な刃に申し訳程度の取っ手を着けただけのバカみたいな設計の大斧。取り回しなんて少しも考慮してない。できるのは足を止めての斬り合いだけ。

そんなエモノを投げるって発想は、一体どこから出てきたんだろうね。正直あたしもあの時は何かおかしかったと思う。

正しく縦回転する斧はバーテックスの巨大な矢をへし折って、中へと肉薄した。バランスを崩した矢の奴は橋の上に転落して転がる。

『よしっ……ってうわあっ!!』

空中に放り出されたあたしは無防備だ。すかさず尻尾のバーテックスが針を突き刺してくる。

もう片方の斧で何とか針を受け止めたけど、針に触れた部分から斧は腐食していく。

使い物にならないと判断して斧を身代わりに身を翻した。伸びきった尻尾を滑走してフラスコみたいな部分まで接近する。

『やっぱり最後はこれだあっ!!』

滑走の勢いそのまま、拳を振りかぶる。精一杯握りしめて、バーテックスのフラスコみたいな部分に叩きつけた。

『つぐつ……何のお！今がチャンスだあ！』

割れた。バーテックスの身体と、あたしの右手の骨が。尻尾の奴の身体のヒビから液体が吹き出して、あたしの右手の指はあり得ない方向に曲がってる。

予想以上に敵のダメージが大きいらしくて、再生した部分が自分の体液で破壊されてのたうち回ってる。

——まあ、あたしの方もダメージ大きいんだけどね。あわよくばトドメって考えてたけど、これじゃ斧も握れないし。

けど、チャンスはチャンス。即座に矢のバーテックスの方に詰め寄って、斧を回収。硬いバーテックスに突撃を試みる。

『へへ、これでイーブンだぜバーテックスさんよお！後はどっちの間が先に戻ってくるかだなあ！』

ゼロ距離の殴り合いは望むところ！指の動かなくなった右手をバーテックス擦り付けながら這い回って、プレートが落ちてくるのを左手の斧で受け止めながら逃げ回る。

正直、ジリ貧。あたしが反撃できる機会は全くない。

ただその時は信じてた。須美と、園子が戻ってくるのを。それだけが、あたしを動かす最後の希望だったから。

どれだけ経っただろうか。この攻防は永遠にも感じられるくらいに長かったような。

『ぐっ……バカだなあお前はあ！あたしなんか構わずそのまま突破すれば良かったものを！』

減らず口を叩いたのも、あたしの限界が近かったからか。この時の気持ちはよく覚えてない。ただ必死でバーテックスにしがみついた。

でも、膠着を打ち破ったのはあたしにとって最悪の奴だった。

矢のバーテックスがいつの間にか浮上して、チャンスを窺ってる。少しでも同士討ちにならない場所に出たら、ぶち抜いてやるって感じで。

『…ちっ！っついてないなあ！』

下手に動けば即撃たれるし、動かなかつたら硬いプレートに潰される。

はつきり言って詰みだけど、少しくらいでも時間を稼ぎたかった。押し迫るプレートに斧を突き付けて、全力を込めて踏ん張る。

『…ううっ…！ヒーローものなら、このタイミングで助っ人がくるのになあ…！』

弟がよく見てたヒーローものの作品なら、一人奮闘する仲間が絶体絶命になつたらすかさず残りの仲間が現れるのがお約束だ。

けど、現実是非情だ。バーテックスが圧力を緩めて大きく身体をよじって振り落としてきた。完全に反応が遅れたから受け身を取るの  
で精一杯。



待ってましたと言わんばかりに矢のバーテックスが巨大な針を撃ち込んでくる。

『つぎあつ……！』

須美の矢より早い物体を避けられるはずもなく、あたしの何倍の長さもある矢は右足を地面に縫い付けた。

万事休す。もう一步も動けないし、飛びかけた意識を手繰り寄せるので精一杯だから、実質戦闘不能みたいなものだし。

そして、あたしの影があたしを飲み込もうと伸びてきた。お前はここで死ぬと宣言しながら。

恐怖が勇気に勝った瞬間だ。あたしはもう片方の足の膝をついた。捨て台詞を発しようにも声が出ない。

『……………っ』

まるで勝ち誇るように、晒し首をかぎすようにハサミのバーテックスはあたしの潰れた右手を挟んで吊り上げる。

『うあああああつっ!!』

ブチブチと生々しい音を立てて縫い付けられた右足は千切れた。

痛い。なまじ足だったものが残ってるせいでいつまでも痛みが走り回る。普通なら意識が飛んではずなのに、勇者の力なのかあたしの意地なのかわからないけど諦めることを許さない。

『……………』

バーテックスの顔らしい部分を見つめる。そんなことしても、こいつらが何を考えてるかなんてわからない。だって人間じゃないし、生き物ですらないんだもん。

あっちも人間のことなんてわからないだろう。わかるつもりもないんだろう。ただ、滅ぼすだけ。

『……わかんないだろうな、人間サマの魂ってやつをさあ……！』

人間にしかないもの。あたしだってそんなものわからない。この沸き上がる感情も何かわからない。

頭より先に身体が動くタイプだってよくよく言われるけど、この時はあたしじゃない誰かに動かされてるみたいだった。

だって、掴まれた右手を斧で斬り落として脱出したんだから。

『つあああああああ!!!』

誰かに突き動かされるまま、千切れた足で橋の支柱を蹴って硬いバーテックスに突っ込む。反対側の支柱に叩きつけて転ばす。

『お前もおおおおおおっつっつ!!!』

状況が掴めてない矢のバーテックスは無防備。最後の力を込めて斧を放り投げた。

どんな手品か知らないけど、斧は火を吹いて回転してどんどん加速

する。バーテックスの体内に入ってもまだ回転を続けて、そこから中に亀裂を撒き散らす。

『はあっ…はあっ…くそっ…こんなもんでえ…』

精神より先に、身体が崩壊し始めた。失った手足から蛇口をひねったように血が流れ出して、ギンギンに冴えた意識とは裏腹に神経が痺れを覚えてきて身体が動かなくなる。

『…まあ、こんな、ところか、な。…はは、あつけない、もんだね…』

後は須美と園子に任せるしかない、かな。ごめん、次会うのは閻魔大王のそこだね。

『……………あ、れ？』

夜空と樹海が視界に入る。死神さまがあたしをお迎えに来たっていうのに。

起き上がろうとして右手がないことに気づいた。思い出した。自分で斬り落としたんだと。

その傷口は止血されて、縫い合わされてる。医者ほど正確にはないにしても、完璧な処置だったと思うね。

『…何だろ、メモの切れ端…？』

全身をチエックしてると、左手の袖のところに紙が挟まった。

うん、左手じゃ取れない位置だ。

地面に擦り付けて抜き取って、文字を目で追う。

『…「ミノさん、お疲れさまー！たっぷり時間を稼いでくれたおかげで、バーテックスの再生前にわっしーと私復活！ケガの手当てはわっしーが薬箱を持ってきてやってくれたから、安心して休みたまえ〜！バーテックスはぜったい追い払ってくるよ！…乃木園子』』

『はっ、園子も須美も、相変わらずだなあ』

薬箱をどこに隠してたんだよ、須美。その山嶺に隠してたのかあ？

おっと、これ以上言うと鬼が現れる。

園子、お前もだよ。こんなところまでメモ帳持ってきて。バーテックスでも取材する気だったのかあ？

文面を見て安心感が湧き出てくると共に、二人に銀様復活を教えるやらなきやいけないと思った。端末機を取り出してレーザーを確認する。

『…お、バーテックスはお引き取りになったか。やるねえ二人とも。んじゃ合流しよっか』

バーテックスの反応はなし、須美と園子は同じ場所にいるみたいだ。

上体を起こして立ち上がるとうると、足の先がないせいで上手く立ち上がれない。———今考えるとこれ、家族には見せられない状

態だなあ。

樹海の枝を少し借りて、ようやく移動できるようになった。

『やあやあご苦労さん勇者たち。諸君らの活躍であたしは、…えっ  
……』

冗談言つて心配させないようにしたけど、言ってる場合じゃなくなつた。

背中側から見てもわかる、お腹にぽっかり穴を開けた須美。針ネズミみたいに背中から細長いトゲを生やしてる園子。抱き合うようにして全く動かない二人を見て、理解できなかつた。したくなかつた。

『お、おいつ…園子っ！須美っ！あたしはちゃんと戻ってきたぞっ…！勝手に、どっかいくくなよっ…！』

『須美っ…！セクハラみたいないたずら、もうやらないからっ…！ちやんと、一人で、スケジュールこなすからっ…！』

『園子っ…！昼寝してる、とき、うどん禁止とか刷り込まないからっ…！お前の隣を、歩いてても、釣り合う服も着るからっ…！』

『…あたしをつ、…あたしをつ置いてかないでよおっ…！』

あたしが涙を流したのは、この時が最後だ。

守りたかったものを、守れなかった。あたしも大きな代償を払ったのに、結果は納得できるものじゃなかった。

この時から、あたしの心は焦げ付き始めた。

へ：須美も、園子も、あたしを守ってお役目を果たした。：ほんと、尊敬しちゃうよ」

へそれに比べてあたしは：。あの時一体でも、無理にでもバーテックスを倒しておけば、二人は死なずに済んだんじゃないかって。未だに思っっちゃうんだ」

銀は瀬戸内の向こうを見つめながら、自分の無念を語った。

同じ立場に立たされたとして、私も同じことを思うのだろう。銀と夏凜が戦いの中で先立つとしたら、自分にできることはなかったのかと自分に叱責するのだろうか。

けど、夏凜は意外な反応をした。

「：あなたの葛藤や頑張りは、あっちの園子様も須美様もちゃんと見てるわよ、きつと。でも、その動機がお二人への無念の穴埋めのままなら、余計心配するんじゃないかしら」

へ：うん。あたしもそうだと思ってる。自分なりに決着もつけたつも

りだし」

「…でも、バーテックスを目の前にしたら、フラッシュバックするわよね、あんた」

「…そこについても話しておこうか。あたしの表と裏のこと」

バーテックスを前に昂ると、ドス黒い感情を剥き出しにして暴れ回る姿。今思い出しても恐ろしくて、息が苦しくなる。

おふぎけばかりする表も銀だし、裏のバーテックスを怨み殺すのも銀。私たちはそれと向き合わないといけない。

「前に本当のあたしは真っ黒って言ったじゃんか。バーテックスを、天の神を滅ぼせて」

「…ええ」

「そんな心の壊れた人間が、またちゃんとした人格を取り戻せると思う？」

「…実際にしたんじゃないですか。風さんと、友奈と、樹ちゃんと、あなた自身が」

「…はは。…半分正解、だけどね」

何がおかしいのか。少しだけ笑い声を銀はもらした。

「…こうして二人と正面切って話せてるのも、須美と園子のおかげなんだ」

「どういうことよ？」

「あたしの身体から失われた機能は、勇者システムで補完してるって言ったじゃんか」

「はい。その義手や義眼、その他全身を機械化してますけど…。須美様、園子様とどういう関係が？」

「…その全部が、須美と園子に管理されてるんだ」

銀の言葉の意味を、理解できなかつた。

管理？亡くなられたお二人に？

理屈が合わない。生きていなければそんなことはできない。お二人は殉職されたと記録が残ってるし、銀の記憶もそう告げている。

じゃあ、どういう意味なのよ――？

「意味わかんない。死人にそんなことできるわけないし」

へうん。二人は人間として死を迎えた。そこは間違いないよ

「……人間として？」

へ……あたしが人間でなくなったように、須美と園子も人間をやめた

銀の義手が紫電を走らせ、義眼が青く点滅した。

へこの義手は「どこかで生かされている園子」と繋がってるし、この義眼は「試験管の中で電極に繋がれた須美」と繋がってる」  
「……！」

ぐにやりと視界が歪んだ。私の脳が正確さを失ったのか、世界がねじ曲がったのかもわからなくなった。

齢10年そこらの子供を機械化までして戦いに備えるのも異常だと思っただけど、奴らはさらに人道を踏み外したことをやっていた。

へ繋がった二人の意識があたしの中に流れ込んで、今にも壁の外へ行ってバーテックスを皆殺しにしようとする三ノ輪銀を抑制してる

へ二人の想いが、あたしを繋ぎ止めてくれてる。少しでも揺らいだら離れていっっちゃうくらいに頼りない糸で、だけどね



〈…それが、三ノ輪銀って存在。この世界を守るって、三人の意志が融合した化け物〉

——それを機械で繋ぎ精霊で補強したのが、大赦の答え、か。

私は言葉にできなかった。何を言っていないかわからなかった。

「……ありえないわよそんなの。人を人と思っていないじゃない……！」  
〈…勇者になった時点で、もう人とは思われてないんじゃないかな。神に近い存在、人類の希望の象徴、防衛機構の部品…どれも何一つ間違っていない〉  
「間違ってるわよ!!何納得してんのよ!銀!」

夏凜は納得できない様子だった。勇者をまるで部品扱いしてるのが信じられないというのか。

私は

〈うん、これで納得しろって方がおかしいよね〉  
「なら何であんたは!!言いなりになってんのよ!!」  
〈……この世界を守るためだよ。あたしと、須美と、園子で誓った約束。生き残ったあたしの義務だから〉

サイボーグにされても、親友が脳みそだけにされても、そんなことした大赦が許せなかったとしても、譲れないものがある。

銀の背負ったものは、あまりにも大きすぎる。自身の魂をすら捧げても抱えきれないくらいに。

それに比べて私は。

やれ思いを踏みにじったと、やれ人を人と思っていない連中だと、まるで大切なものが見えてなかった。本当に大切なもののためなら、そんなのは些末事。

「…あなたが私の教導でよかったです。同じ志を持ちたいと、心から思えましたから」

「…本当に？人間扱いされなくても？何もかも犠牲にしても？」

「はい。だって、あなたがすぐそこにいるから。本当に大切なものがそこにあるなら、選択肢は一つです」

誰の思惑も関係ない。私がやるべきこと、やりたいことをやる。

「…そうよね？夏凜」

「本気で意味わかって言ってるの芽吹。連中に私たちの全部使われるってことなのよ…!？」

「…構わない。私は銀を信じてる」

「へたはー。あたしを信じて」って言うつもりだったのに先取りされたあゝ

食い気味に銀が割り込んできた。シリアスをぶち壊したい腹が見え見えだ。

全くこの人は――

「…いつまでもそんなつもりはないし、あたしだって色々考えてるよ？だからさ夏凜、あたし」

銀の言葉を遮るように樹海化警報が鳴り響いた。まるで謀ったか

のようなタイミングだ。

〈…あの、セリフ言いかけなんすけど〉

「…はあ、大丈夫よ銀。だいたい言いたいことは伝わってるから。…連中への信用はもう皆無だけど、あんたを放っておけないから」

ため息をついて返事をした夏凜。なんだ、わめくだけわめいておきながら覚悟は決まってたじゃない。

〈ならオーケーかな。けど、空気の読めないバーテックスさんには銀様からの有難い教育をしてあげないと〉

「大丈夫なんですか？抑制が効かなくなるんじゃない」

〈…見届けてて、二人とも。二人が心の壁を乗り越えたように、あたしも克服しないと〉

銀の表情は自信で満ち溢れていた。弟子二人の覚悟を見られて安心したのか、自分もうかうかしてられないと思ったのか。

——その表情一つで納得させてくれるあたり、この人には敵わないと思った。

拾った命、大切にしてください

へまたやられにいらっしやって。懲りませんなあ

言われてみれば銀の実戦を見るのは初めてだ。圧倒的技量と能力を持つてるのはわかってるけど、バーテックス相手にどんな戦術を駆使するのかは未知数。

へ芽吹、夏凜、もしもの時のために用意しておいて。いや、しくじるつもりはないけどね

「了解よ銀。見せてもらおうじゃない」

「承知しました。敵は一体のみの様子ですが、私たちが警戒しておきます」

銀は平静を保ってる。冗談をかましたり的確な指示を出せるくらいには。

これで私たちがしくじるのは申し訳が立たない。異常がないか念入りに警戒しよう。

「……？夏凜、首のそれは？」

「え？ああ、新しく私の補助をしてくれる精霊が増えたのよ。名前は『蛟』」

勇者姿の夏凜の首にはいつも雷獣がファーみたくなってるのは知ってたけど、その下に水色の数珠みたいに巻き付いてる蛇がいた。

ミズチ——水神の一つだったかしら。肩に背負った戟の石突から水蒸気が噴き出してる。

「失った温感を補うのが変温動物の蛇っていうのもアレだけど」  
「蛇って熱を『視る』ことができるっていうけどね。どう？夏凜には見える？」

「それができるのはあんたでしょうに。義眼にサーモグラフがついてんですよ」

「へはは！ついでに服も透視できる！」

「くたばれ！そんで須美様に謝れ！」

「ぐはあっ！」

石突きで銀の横っ腹をどついた夏凜。オーバー気味にのたうち回るけど、私たちの見る目は冷ややかなまま。まあ、因果応報だし。

「…さあ、各自展開しましょうか。夏凜、両端を押さえるわよ」

「了解。お互い抜かりなく、ね」

「うーん、そのスルースキルをもっと有効活用できたらなあ」

「不毛なツツコミはしませんので」

「あー、はい。遊んでないで仕事してきます！」

サムズアップした直後には、銀は宙を滑っていった。夏凜の機動力ですらあれを捉えるのは至難でしょうね。

私と夏凜は銀の両サイドに展開して敵の伏兵や奇襲を見張る。リーダーに反応が一つしかないとはいえ、不測の事態に備えておかないと。ステルス能力を持つてる奴もいるかもしれないし。

「先手必勝だあっ！」

バーテックスの真正面から突撃する銀。斧二振りを自分の前に広げローターのよう回転させて、盾のように構えた。

射撃物は弾かれるだろうし、斧に触れでもすれば簡単に切り取られてしまうだろう。非常に理に叶っている。

バーテックスはなす術もなく銀に取り付かれた。速攻というのも立派な戦術か。

へよしっ！とどめだあっ！

二振りの斧が義手のサイコネシスと連動して、驚異的な回転数で金属音を響かせる。まるでサーキュラーソーのようにバーテックスにそれを突き立てると、豆腐を切るようにあつけなく刃が肉薄する。

あつという間にバーテックスを薪割りにして、丸ノコに巻き込まれた御魂も両断。光となって消えた。

へ見たか！銀様の勇者30！世界を守るのに一分もいらなんだぜえ！

「…自信なくすわ…。こんなヤバい奴がすぐそこにいたなんて…」

「相手になってなかったわね…。何もさせてもらえなかったっていうか…」

へふははは！勇者三人分の力ってやつよお！

私も夏凜も強くなったつもりでいたけど、次元の違いを見せつけられた。不安定な力とはいえ、私たちが知恵と力を出し尽くしてようやく倒せる相手を軽く蹂躪したんだもの。

そして、銀にも特におかしな様子はない。斧に座って着地しながら得意げに笑ってる。

へあたしも修行して、自分を抑えられるように精神を鍛えたんだ。これで、二人を守れるね

「いつの間にか？あんだ、教練以外は遊んでばっかじゃないのよ」

「だから先生に缶詰めにされて課題をやらされるんですよ」

へぐおつ。…そう、それ。キミたちの辛辣なツッコミがあたしを強くした!!」

「よし、なら遠慮なくバツサリ斬れるわね」

「ええ、それで銀が強くなるっていうならやらない手はないですね」

へああああ変なこと言わなきゃよかったああああ

銀はわざとらしく頭を抱えて解けていく樹海に向かって叫んだ。

冗談なのか事実なのかはわからないけど、実際に銀は自分を制御した。その点は安心していいだろう。

須美様、園子様。ありがとうございます。銀と一緒に戦える、それだけで一層距離が縮んだ気がします。

バーテックス撃退後、神樹様はご親切に丸亀城の祠まで転送してくれた。この疲労の中電車に揺られれば間違いなく寝落ちするし、結構ありがたいことだ。

気がつけば三人で大浴場を占領しながら、何気なく話していた。

へんで、何だっけ、どこまで話したっけ

「あれよ、連中に脳みそだけになるまで使われるのはいいのかって」  
へそう言われると物騒なことしてるよね。はあ、どうしてこんなこと

になったんだか」

「それが正常な反応よね。まあ、私も銀も芽吹も、もはや正常な人間じゃないけど」

「…反論する気も起きないわね」

まるで他人事みたいに言ってしまうのは、大人になったからなのか。それともある種の諦観か。

三人揃ってため息を漏らすと、銀が天井を仰ぎながら言葉が続けた。

「それだから、大人たちは勇者を人間扱いしないのかもしれないね」

「…下手に人間扱いすれば、制御できなくなる？」

「…そうだね。神格化することで、人身御供になってるってことを誤魔化してるのかな」

「人身御供って、妙な言い方するわね」

「実際そうだと思うよ。満開の代価として身体の機能が失われていくのは、神樹様にそれが捧げられてるって意味だし」

「さりと放った言葉だけど、絶対に聞き逃したらいけないやつだ。」

夏凜の温感がなくなったのは、神樹様にそれを献上したから。銀の身体のうちこちが機能してないのは、全部力の代償を払ったから。

「…二人とも、イヤだよな？あたしみたいくなるのは」

「…できれば遠慮したいわね、それでどうにかなるなら。今回失ったのが大したものじゃなかったけど、次満開した時に致命的な欠陥が出たら…」

「……ええ」

自分でもひどいと思うくらいの生返事だった。



私だけ何も失ってない。銀は世界を守るために何度も満開と散花を繰り返し、夏凜は私との仲を取り持つために身体を捧げた。

「じゃあ私は？二人にもらってばかりで、何も返せてないじゃない。」

「こんな言い方は変だけど、もし二人がピンチになったなら私は迷わず満開を使う自信がある。止められようがお構い無く。」

「へだからさ。どうにかしようと思ってるんだよね」

「どうにかって、どうにかなるものなの？」

「…バーテックスが来なくなれば、あたし達は勇者の任から解放されるよね？」

「それはそうだ。戦うべき敵がいなければ。」

「……そんな方法があったら、とつくの昔に誰かがやっています」

「へそうだね。誰も思い付かなかったんだよね」

「はあ」

「へでもね、さつきも言ったとおり、ここには天才乃木園子と傑物鷲尾須美と三ノ輪銀の脳みそがあるんだよ」

「三人寄らば文殊の知恵。三百年戦い続けた人類が及ばなかった難題に、勇者三人が解を見つけたというのか。」

「…倒すのさ、バーテックスを統率する親玉を」

「…その顔でそんな大それたこと言われても、説得力ないわよ」

「…つまり、天の神そのものを廃滅する、ということですか」

「うん。あたし達で終わらせよう」

冗談で言ってるわけではないらしい。神世紀300年の戦いの歴史に幕を引こうとしているのか。

——銀が苦しみながらも戦い続けてる理由がそこにある気がしてならない。

「そのための策を園子様と須美様が思い付いたってわけ？」

〈…まだ計画を練ってる段階だから、話せる部分も少ないけどね。まあ、勝算はあるよ〉

「……………」

〈芽吹？どうしたの？変な方向向いちやって〉

「…いえ、何でもありません」

聞きたいことは山ほどある。天の神の所在や実力、その対抗策、そして私と夏凜にできること。

でも、聞けない。怖くて聞けない。

神そのものを超越するなら、〚それ相応の代価〛が必要だから。身体機能どころの話じゃなくて、この人なら命すら捧げてしまいそうだから。

〈二人とも、絶対勝とうな〉

「もちろんよ。銀と芽吹、そして私がいればどんな戦いでも勝てる」

「……勝って、その後の世界を見届けてましよう」

——私はそう願った。強く、強く。

「いよつしやあああつ!!これで自由だあああ!!」  
「出所おめでとう。まさかあの後徹夜で終わらせるとは思ってたけど」

「だって二人と遊びに行きたかったんだもん!今日逃したら次はいつになるかわかんないし!!」

課題を提出して戻ってきた一言目が歓喜の叫びだった。

銀は寝ずに課題をやってたらしい。前日の就寝時間も、起床時間も、日課の夏凜と一緒に朝練から帰ってきてても共同部屋の机にかじりついていた。

うわ言を垂れ流しながらペンを走らせる姿は正直可哀想にも思えてきたけど、手伝うのも野暮つてもよね。繋がってるはずの須美様や園子様を手出した様子がないのも、私と同じ理由だと思うし。

「…確かにオフの日ですが、そんな予定入れてましたっけ?」

「堅いこと言うなよお!二人が本当の親友になったのをあたしはまだ祝えてないから!ね!いいでしょ!」

「…しようがないですね。そうと決まれば徹底的に楽しませよう」

「あんた最近デレデレね。あの頃の狂犬はどこに行ったのかしら」

「隠してるつもりだったかもしれないけど夏凜も大概よ?相変わらず照れ隠しも下手だし」

「はい始まりました弟子二人のかわいい口喧嘩。ああ、尊い…」

園子様。銀の思考に入り込めるからって、変な知識を横流

ししないでください。そのニタニタした顔を見てると腹が立ってきますので。

あと夏凜。せめて自分のところに返ってこない煽りをできないのかしら。

へさーて、どこ行こつかない。あつ、二人の行きたいところがいい！  
「え？ 私たちの？」

「…そんなこと言われてもパツと出てこないわよ」  
へじゃあ考えて考えて！二人の日常をもっと知りたいんだ！

ここぞとばかりに迫ってくる銀。普段の教導から一気に精神年齢が下がって、  
「……それこそ、これが本来の銀の姿なんじゃないかしら。」

私の行きたいところ、か。

「芽吹、あんた何かない？ 私が立案するとジムとかドラッグストアになりそうだし」

へうーんぬかりない完成型勇者。夏凜は自分の趣味を見つけた方がいいかも

「うるさいわね、トレーニングが趣味で何か文句ある？」

——夏凜の私生活って、私以上に謎かも。トレーニング以外何してるかわからない。

このままじゃ行き先が決まりそうにないので、さっと思いついた案を言ってみることにしよう。

「じゃあ、行きたいところというか、やりたいことが  
へおっ？ 芽吹、なにになに？」

「この畳の大広間、座椅子がないのはちよつと不便かなと思ひまして」  
「あー、確かに。勉強してた時も背もたれがないのはつらかった」  
「なので、座椅子を作りたいです」  
「へ…ん?」

銀と夏凜の頭上に?マークが見える。何に対しての疑問かはわからないけど。

説明が不足してたかもしれない。ちゃんと計画を説明しておこう。

「この和室の雰囲気合った、木組みのものを考えてます。設計はもう頭に浮かんでますので、すぐに設計図をk」

「待った待った! “作る” って!」  
「何でそこに行き着くのよ!?普通にホームセンターで買えるものですよ!」

「それじゃただの買い物です。三人で作ったインテリアで私たちの部屋を彩る…素敵だと思いますか?」

「おおおう…芽吹がこんなぐいぐい来るって初めて知った…。けど、いいねそれ!」

———  
むしろ買うという発想がなかった。考えてみれば、日曜大工ができる中学生も珍しいか。

銀は生身の目を輝かせて食い付いてきた。勇者部での活動を見て思ったけど、銀はこういうものづくりが結構好きと見える。

「しようがないわねえ…あなたの趣味に付き合つてやるとしますか」

「そうね。夏凜にもできるような工夫、考えとくわ」

「人を不器用みたいに言うな」

「そうじゃないの?」

「人並みにはできるわよ」

「えっ…マジで？」

「何で銀までそっちに便乗するのよ!？」

—— 気付かれてないつもりだったの、夏凜？あなたが手の施しようのないくらいの不器用だって。

何か言いたそうにしてるけど、待っててもしょうがない。ひとまず場所を移そう。

「とりあえずホームセンターへ行ってみましょう」

「オツケー芽吹!」

「ちよつと！まだ話は終わってないわよ！」

「文句は完成してから受け付けるわ。時間はあるようでないから、浪費はできない」

「ぐぬぬ…」

「…大掛かりな機材は用意できないから、全部手作業で詰めていかないと」

「どっから持ってきたのよその工具一式…」

「これ、芽吹の私物なんだって。ちゃんと手入れされてるのがもう職人っていうか」

「父から徹底的に教え込まれましたので。大切にされてない道具で作られたものには魂は宿らないって」

座椅子三台分の木材と消耗品を買い揃えて丸亀城まで戻ってきた。

台車を引きずって帰るのは骨が折れたけど、やっとこれで作業に取り  
かかれる。

城に居を移した時にも持ってきた工具がようやく日を見る。定期  
的に磨いたりしてたけど、実際に使わないと意味がない。

「設計図は起こしましたが、私が一台分の線を引きます。二人はそれ  
と設計図を見比べながら同じように線を引いてください」

〈オツス！棟梁！〉

「いつも通りでいいです教導」

〈すみません！〉

「確信犯でしょあんた…。芽吹がツツコんでくるって」

〈お約束だから！〉

このボケ方は銀一人の考えたことじゃないって発想が頭をよぎっ  
た。だって、あまりにも作られたボケだから。

そこまで会話に造詣があるのは、深い洞察力がある人——園子  
様の影響がある気がしてならない。

〈でもさ、難しいところは芽吹がやっちゃった方がいいんじゃない？〉  
「いえ、それでは意味がありません。一人ひとりが実際に手掛けな  
ければ」

「技術の授業か！」

〈そうっすね！芽吹先生！〉

「何回言わせる気ですか。先生は銀の方です」

〈そうだね、三ノ輪銀教導だね！〉

——記念品なので、二人が作ったという方が気持ちがかもりま  
すから。

まあ、夏凜の不器用さに関しては私がちゃんとフォローしてあげないと。

「そうですそうです、最後まで力を抜かずに。綺麗にできてます」

〈楽しいねこれ！コツを掴んだらいくらでもやっちゃおうよ！〉

「あまりかけ過ぎると厚さが合わなくなってしまうますから、全体的に均一になつたらオーケーです」

銀は予想通り飲み込みが早い。

鉋がけの手順を一回教えただけで完全にものにしている。差し金の使い方もすぐにマスターしたし、切り出しに至っては私より正確に真つ直ぐだったし。義眼に測量機でもついているのかしらね。

対する夏凜の方は――

「夏凜。刃を寝かせすぎよ。それじゃ上手く切れないし曲がる原因にもなる」

「だあああああ！戟なら一発で真つ二つなのにい！」

「電撃で焦げ目がつくからやめて」

未だ鋸で材木と格闘中。同じ刃物でも戟と鋸じゃ訳が違うらしい。

でも、少しずつだけ慣れてきてる。問題を解決してきてる。どんな時も努力を怠らないその姿勢こそ、私の好敵手よ。



〈ファイトファイト♪夏凜がんば♪〉

「その余裕そうな顔見ると腹立ってくるわね……!」

〈おおう怖い怖い〉

「鉋がけは終わったみたいですね。次にいきましょるか」

〈ん？芽吹は何やってるの?〉

「鉋の予備もないので、ヤスリをかけてます」

三人で平行作業できるほど道具の予備はないので、私自身は別の方  
法で作業を行っていた。

差し金はスケールと糸と重りで代用したり、表面加工はあえて紙ヤ  
スリを使ったり。時間ばかり使ってしまうけど、二人と足並みを揃え  
るには丁度いい。

「木口をもう少し整えたかったところですが、時間は限られてるので  
釘を打ちましょう」

〈オーケーベイバー!〉

「手順は設計図の裏に書いた通りです。順番を間違えると面倒なこと  
になるので注意してください」

〈わかったー!わかんなくなったら聞きにくるー!〉

———  
天才の教育者というのも大変なものだ。一聞いて十覚え  
るのだから、その先まで考えて満足させなきゃいけない。

私も夏凜も天才とは程遠い。ひたすらに研鑽することでようやく  
同じ土俵に立つことができるんだ。

「……夏凜」

「何よ」

「天才って、本当にいるのね」

「そうね。三人の天才の集合体がそこにいるわね」

「私たちはひたすら追いかけるしかない、か」  
「ええ。あんたと一緒に、あいつを追いかける。そんな一時が何より楽しいじゃない」

——夏凜も楽しんでくれてるみたいだ。何だかほつとした。

三人だから楽しい。一人でいる時には考えもしなかったし、感じられなかったこと。

——勇者の任が終われば、こうして楽しい時間をずっと過ごせるのかしら——

へうおおっ！いい！これいい！

「完成したみたいです。…ん？その座布団はどこから？」

銀はヤボ用と言ってしばらく戻ってこなかったけど、夏凜がようやく組み立てに入ったあたりで帰ってきた。

ほぼ完成させてから部屋を出ていったみたいだし、何をしていたのだろうか。座椅子の面に赤い座椅子が敷いてあった。

へふふ、超特急で作ってきた！

「え？」

へ実際試してみたら、やっぱあった方がいいね！よし、二人の分も作ってくる！

「え、ええ!？」

また慌ただしく立ち上がって部屋を出ていく銀。そういうそそっかしい人だとはわかっていても、反応がついていかない。

空いた時間で座布団を製作していたらしい。簡単なクッションみたいな作りだけど、この短時間で完成させてしまうのはもはや神業。天才三人分の能力は底が知れない。

「：通り雨みたいなやつよね、銀」

「ええ。まさにその通りね」

「さて、あいつが帰ってくる前に私も終わらせるか」

「あともう少しよ、ケガしないように気をつけて」

「余計なお世話よ」

「それは失礼したわ」

口角を上げてそんなこと言っても、照れ隠しにもならないわよ、夏凜。

夏凜の作業も大詰めだし、そろそろ後始末に取りかかるか。疲労がないわけじゃないから、効率良く行程を完了して休みたい。

片付けを終えて、それぞれ完成した座椅子に腰をかけて卓を囲んだ。普段と変わらない光景なのに、たった一つエッセンスを加えるだけで何か良くなった気になる。

「夏凜、銀、お疲れ様」

〈オッス！素敵なレクを提案してくれてありがとな芽吹！〉

「……ありがと、芽吹」

〈ビュオオオオウ！これは強烈なデレだあっ！デレるか!?芽吹もそのままだ！〉

「教導、頭をシバくのに最適な角材がここにありますが」

〈やめて！ツツコミは期待してるけど！痛いのはやめて！〉

なら余計な事言わなきゃいいのに。まあ、夏凜も「余計な事」言つたせいでお互い恥ずかしい思いしてるんだけど。

ようやく完成を見た私たちの座椅子。三者三様の設計図通りとは言えない出来映えだけど、なんだかそれもいい気がしてきた。

赤い座椅子が敷かれてる銀の作品は、折角切り出しや鉋がけが完璧なのに部品の左右上下が間違ってる。途中で座布団の製作を思い付いたらしくて、急いでやったら間違つたとのこと。

「あんたも学習しないわねえ……」

〈感動の探求に危険は付き物だから！〉

「まったく。天才なんだかバカなんだか……」

紙一重よ、それも境界線ギリギリを攻める。

はあー、とため息をついて紫の座布団が敷かれた座椅子に寄りかかる夏凜。少し曲がってたりするけど、入念に手をかけた跡が残ってるのが製作者の性格を表してる。不器用で不格好かもしれないけど、私はこういうのは好きだ。

「作家じゃないんですから。火遊びもほどほどに」

へうん、命がいくつあっても足りないね、これじゃ

「拾った命、大切にしてください」

—— おふぎけもほどほどに、という意味もあるけど、無茶しないですって意味もある。

折角くつろいでることだし、お茶を出そうと席を立つ。

私の座椅子には青の座布団を用意してくれた。余った素材で作ったらしいけど、満足のいく使い心地だ。銀の粋な計らいには感謝と嬉しさを感じてしまう。

座椅子の方も余った道具で本来の作り方をしてないので、満点とは言えない完成度。——この二つが合わさると、まるで私と銀の関係を表してるみたい。

「お茶、用意しますね」

へうーん、おねがーい

「ぐうたら亭主め、母親になるとか言ってなかった？」

へたまにはお姉ちゃんに甘えさせてよー。数ヶ月だけど芽吹はお姉ちゃんなんだしー

「リアル姉が言うセリフか」

一応、この中で一番早生まれらしい。かといって一番姉らしいわけでもないけど。一番気が回るのはやっぱり銀だし。

まあ、いつも姉をやってるのも疲れそうだから、何も言わないでおこう。

「…まあ、芽吹がやりたいって言うんなら私も飲んであげるけど」

へうおお、完璧！完璧なツンデレ！芸術点あげちゃう！

「こんのおおおお！さつき散々注意したでしょうがああああ！」

へうひゃあ♪逃げろー♪

「…あなたも大概よね、夏凜」

揃いも揃って学ばない人間の集まりよね、まったく。

私たちはいいのよ、勇者部だから

〈悪いね二人とも。ちよつとの間空けるけど、その間お願いな！〉

「ええ、お任せを。いいお話、期待してます」

「怪しまれないように分散ってねえ。まあ、上手くやってきなさいよ」

銀は極秘の出張に行くというらしい。例の“どうにかする計画”の一環ということで、場所も教えられてない。

私と芽吹は丸亀城で待機、バーテックスが現れたら即時対応する。私たちまで銀に同行したら目を付けられる、ってわけだ。

「…では、銀様」

へうん。先生、二人をお願いね」

「承知しました」

先生にあいさつしてから、銀は丸亀城を後にした。——何だかんだ言っても、銀は先生のことを信用してるらしい。つまりは先生も“ごつち側”ってことか。

「…先生も、銀が何をしようとしてるかご存知なんですか」

「…はい。私は銀様付きの神官。意思決定は銀様にあります」

「…何でもいいけど。銀の障害になるんだったら、私は容赦しないわよ。例え先生でも」

相変わらず仮面の下の表情は読めない。本当に銀に付き従う人なのか、大赦の密告者なのか、全然わからない。

「…さて、勇者部の依頼やっていきましようか、夏凜」

「あんたがそのセリフを言うとは思ってなかったわ」

「別に嫌じゃないし」

「あつそ。お利口さんね」

ま、訓練も根詰めすぎても良くないし、やってやりますか。

芽吹が割と乗り気だったのは意外だけど。前なら時間の無駄って言って取り合ってくれなかっただろうし。

「大掛かりなのは銀が帰ってからにして、二人でどうにかなる依頼を当たっていきましよう」

「そうね。あいつの負担を減らしてやらないと」

〈…まさかあたしがこれをやるなんてね〉

〈須美、銀様の一世一代の大芝居、刮目せよ！〉

〈国防仮面三号、推参！〉



「夏凜ちゃん夏凜ちゃん」

「ん？どうした？」

「この付近にも現れたらしいよ」

銀は一週間は戻ってこない。ここまで空けるのは初めてだけど、私たちだけでも勇者部の仕事をやっていける。

んで、図書室の蔵書点検を手伝ってたら、委員の人がホットなスクープを持ってきた。

「現れたって？」

「国防仮面」

「国防、仮面？」

「うん、巷で話題の」

何よその胡散臭い名前のヒーローは。

「何なのよその不審者は」

「突然現れて困ってる人を助ける謎のマスクマンだって。『次は君が誰かを助ける国防仮面になるんだ！』って言ってさっそうと立ち去るらしいよ」

「わけわかんないわね」

全くもってわけがわからない。愉快犯なのか、都市伝説で賑わっているのか。どちらにしても、あまり関わりたくない。

「ちよつと見に行ってみない？そう遠くには行ってないはずだし」

「遠慮しとく。早く終わらせて芽吹とトレーニング行く予定だし」

「えー。芽吹ちゃんは『確認しておくべきね』って言って先に行ったけど」

「あいつ…」

どんだん銀に毒されてんじゃないの？クールを装っておかしなことに首突っ込んで遊んで。お高くまとまったイメーはイメーだけなのかもしれない。

ちよつと一言言つてやりたいから、私も行こう。

「あいつに言つてやんないと。今どこにいるの？」

「うん、そうでなきや。行こ行こ」

やってきたのは学校のすぐそばの個人経営の小さな書店。そこに似つかわしくない程の人ばかりが見える。

「ごこつぽいね。ほら、芽吹ちゃんもいるし」

「こんな野次馬がいるのは聞いてないわね。中の様子が見えないし」

仕方ないから耳だけ傾ける。ガヤガヤしてるけど、一応聞き取れそうだ。

「芽吹：あんた何やってんのよ」

「来たのね夏凜。国防仮面の正体を暴きに来たのよ」

「何でそんなことに首突っ込むんだか。どうでもいいじゃない」

「私たちも無関係じゃない気がするのよ。そうじゃなくても単純に興味があるし。まるで私たち勇者部みたいじゃない」

無関係じゃない？：どういうこと？——あ。

もしかしたら銀が言った計画の一環なのかもしれない。私たちも知らされてないけど、知っておきたいと思ったし。

「…ん？何か聞こえない？」

「声、なのかしら、これ」

〈お待たせしましたー！古い蛍光灯はこっちで処分しておきますんでー！〉

「ありがとね、えーと」

〈国防仮面です！今度はおばあちゃんが困ってる人を助けてあげてくださいー！〉

——聞きなれた私たちだからこの声が機械音声だってわかるけど、普通に聞いても肉声と聞き間違えるくらいには修正されてる。

そして、国防仮面の正体が誰かも確信した。

「芽吹」

「ええ。夏凜」

「「確保よ!!」」

私たちの意見は一致した。そして、これからどうするかも。

何のつもりか知らないけど、こんなところで遊んでるアホから事情聴取しないといけない。

〈ではっこれにてっ！〉

「そうはいくかあああ！」

〈うおっ!?!やばっ!退却うー!〉

気付かれた!

足早に詰め寄った私から逃げるように身を翻して、軍服の不審者は人だかりの隙間を縫っていった。その動きはもはや人間じゃない。

——アレ、一目じゃあのポンコツサイボーグだってわからな  
い。マスクと義眼が一体化してるし、グローブで義手は見えないし、  
スカーフが見事にチョーカーを隠してる。

「そこですね!抜けてこられるのは!」

〈何っ!?!何のお!〉

芽吹は行動を先読みして人だかりを抜けた不審者に立ちほだかる。

さすがにビックリしたのか一瞬足を止めたけど、次の一瞬で芽吹を  
突破した。

〈へへ、眼福眼福う〉

「…え?」

仁王立ちした芽吹の股下をスライディングで抜けた。

——私たちは制服のまま国防仮面を追いかけてきた。つまり。

〈やっぱり下から見ると全然違うね!〉

「…!!」

〈正義のヒーローは正体がバレちゃいけないんだ!バイバイ子猫ちゃ  
ん!〉

「あーあ、取り逃した。あのセクハラヒーロー、相変わらずすばしっこいわね」

「……………」

芽吹は顔を真っ赤にしてプルプル震えてる。脱衣場で見られるのとスカートの下から覗かれるのじゃワケが違うか。

まさか、これがどうにかする秘策の一つなの？ワケわかんないわね。

〈…やっぱりちよつと迂闊だったかな。勇者二人が襲いかかってくるのは予想外〉

〈けど、徐々に噂になってるね、国防仮面。このまま続けていけば…………〉

〈…次は丸亀から離れないと。そしたら…風さんたちのところでも行ってくるか。何してるかも気になるし〉

「…うわ、国防仮面、トレンドになってるし…」

「神出鬼没の変人、よね。これじゃ」

仕事を終えて、図書室で委員の人たちと国防仮面の情報を集めていた。お役目に関係ない話なら放っておいたのに。

正体がアレだって気付いちやったらから、調べないわけにはいかない。

「でも夏凜ちゃんも芽吹ちゃんも大胆だよね。いきなり捕まえにくいなんて」

「…一応大赦の人間だからね。治安を乱すようなやつからは事情を聞かないと」

「いいことしてたけどねー」

「その意図が掴めないから怖いよ。理由もなく、代価もなく、施しをする人間って、不気味じゃない？」

「芽吹ちゃん、ブーメラン刺さってる」

「私たちはいいのよ、勇者部だから。銀のスピリットを引き継いでるから」

「なにそれ」

クスクス笑われるけど、何かもう気にならない。勇者部であることがアイデンティティになりつつあるのかしら。自分でもどうかと思うけど。

「案外同じような考えの人だったりして、二人と銀ちゃんと同じ」

「だったらいいんだけどね」

「…あ、また国防仮面が出たって。大束町の方」

「随分遠くない？この短時間で…」

その神出鬼没さを実現できるのは、あの人しかない。確

証が持てた。

「タワ―の外壁に登って降りられなくなったネコを救出したってー。相変わらざるの超人っぶりー」

「いや、辛うじて人間技だっっていうのがますます怪しいわよ」

「度胸と身体能力だけで全部やってるからね、どんな人なんだろう？」

「さあ？男か女かも判別つかなかったし」

芽吹、なかなか言ってやるわね。スカートの中覗かれた仕返しかしら。

上げられた動画には、磁石みたいに吸い付いて壁を登ってネコの所まで行く軍服の変人が収められていた。窓枠や排気口を上手く使って登ってるように見えるけど、私にはどうも本当に「吸い付いてる」ようにしか見えない。

「次あったら絶対確保しないと」

「燃えてるねー芽吹ちゃん。ファイトファイト」

「出し抜かれたし、次は一杯食わせてやる」

そんで洗いざらい吐いてもらうわ。私たちにまで秘密にするのは情報漏洩対策なんだろうけど、手をこまねいてる私たちでもないわよ。

へはい、お待たせ。ちょっと怯えてるけどすぐに元通りになるよ

「ありがとう！…えっと」

〈憂国の戦士、国防仮面だ！救いを求める声があるところに国防仮面あり！お嬢ちゃんも困ってる人がいたらなるべく助けてあげるんだぞ！〉

「うん！」

「あれが噂の国防仮面…あーあ、囚われの私も救ってくれないかなあ」

「たぶん頑張れとしか言ってくれないわよ、雀」

「風隊長はまたそんなこと言うー！」

「だって、あんた困ってるように見えないんだもん」

「死ぬ寸前まで困ってますよおー！」

「あんな危ないところを命綱もなしで、無鉄砲な所は三好さんみたいですよわね」

「弥勒さん、夏凜さんのこと知ってるんですか？」

「ええ、三好さんと楠さんと勇者の座をかけて競ってたのですのよ」

「…何か二人が選ばれた理由が納得できたかも」

「何を納得してるのですか樹さん！」

「…三ノ輪？」

「え？どうしたのしずくちゃん」

「あの声は…三ノ輪じゃないの…？」

「銀ちゃん？…あ、確かに！上手くチョーカーが隠れてたけど、銀ちゃんだよアレ！国防仮面！」

「…でも、何で？」

「聞いてくるねー！」



へさて、風さんたちの様子も見れたし、そろそろ帰るかなー。…はあ、これ着替えるのもめんどくさ…

「銀ちゃんー!」

へどはあつ! ゆ、友奈!?

「お久しぶりー!」

へうおっ…不意をつかれた…

「国防仮面カッコいいねー銀ちゃん!」

へその感想は須美のやつに言っつてやってくれよ。あたしはなりきるだけで精一杯だよ

「うんうん! 上手くやってると思うよ!」

へありがと、友奈。でも友奈にバレちゃった。正体は秘密でお願い!」  
「わかったよー、でも何で変装してるの?」

へ国防仮面流行ればいいなーって、須美さんの野望のせい」  
「親友のお願いじゃ断れないよね、やっぱり」

「あ、銀ちゃん」

へん? どうしたの?」

「これ、銀ちゃんと夏凜ちゃんと芽吹ちゃんに!」

へ…押し花のお守り? クローバー?」

「うん、シロツメクサ! この前間に合わなかったから、今渡しておくね!」

へおお、ありがとう友奈。また押し花の腕上げたんじゃない?」

「銀ちゃんたちのためだからね。かなり気合いいれて作ったよ!」

へへへ、これはいいお土産ができた。…でも何でクローバー? しかも四つ葉じゃないやつ」

「花言葉は約束！幸福！銀ちゃんたちにピッタリだなあと思つて」  
〈そつかあ。それなら三つ葉の方が三人組つて意味もあるし似合つて  
るよね〉

「えへへ。銀ちゃんが喜んでくれてなによりだよ」

〈じゃあ、友奈とも約束しないとね〉

「へ？」

〈勇者三ノ輪銀は必ず結城友奈のところに戻つてきます。今は離れば  
なれだけど、役目を果たしたら、必ず戻つてくるよ〉

「銀ちゃん……」

〈……そんな顔すんなつて。あたしは不死身だし、仮に死んだとしても  
あの二人が生き返らせてくれるよ、たぶん〉

「……………」

〈そんでき、また勇者部六人でパーつとやろうよ〉

「……うん」

〈……じゃあ、最後にぎゅーつとして友奈。パワーをわけてもらおっかな〉  
「……えへへ、わたしも銀ちゃんパワーをいただいちゃおっかな！」

〈「ぎゅーつ！」〉

〈よっしゃあ！これで銀様は無敵だあ！国防仮面、任務に戻ります！〉

「頑張れ国防仮面！人々のために！」

〈ではさらば！〉

「……銀ちゃん、ちゃんとわたしのことも見てくれてたんだ……」

「シロツメクサのもう一つの花言葉……ごめんね。疑ったりして……」

「……大好きだよ、銀ちゃん」

だから気を付けてと言ったんです

私たちは無意識の内に国防仮面の足取りを追っていた。別に調べつもりはなかったけど、正直ヒマでヒマで。

銀の只のおふぎけならその場でおしおきしてやればいいし、計画の一つなら知っておきたいし。どちらかも判断付かない状況がイヤだったのかもしれない。

「…今日は徳島の方に現れたか」

「休みがないわね。毎日どこかに現れてる」

「………こんだけ大活躍してボロを一つも出さないなんて、徹底してるわね」

「私たちの他にも確保を試みた人たちがいたみたいだけど、全て失敗に終わってる」

救いのヒーロー。

国防仮面から与えられる情報はそれだけ。そのミステリアスさは不気味を通り越して、神格化すらされはじめてる。

どこの情報共有サービスでもメディア業者でも、正体を暴くようなことや批判的な意見が見受けられない。

「…ああーっ！モヤモヤする！銀のやつは私たちの知らないところで何をしてるのよー！」

「………確かにこれは精神衛生上良くないわ。私たちにも話せないことって、一体何なの……？」

日に日に私も芽吹もストレスを溜め込んでるのがわかった。銀が只の出張に行ってるだけなら全然文句ないけど、目の前を飛んで逃げたハエみたいにならぬ姿が見えるから。

「…あつ！もうつ！」

「…静かにして夏凜。余計に気が散る」

「どうにもならないわよこんなの！」

「しようがないじゃない。私たちの権限じゃどうしようもない」

「でもこのままで良いわけないでしょ!?下手すりゃ勇者に変身するの待ったがかかるレベルよ！」

こんなにイライラしたのもいつ以来か。何もかも手に付かない。

———  
だったら、どうにかするしかない。

「それは私たちの精神が未熟だから。これも試練ってことですよ？」

「それをどうにかする方法を考えるのも私たちへの課題よ！やってやろうじゃない三ノ輪教導！」

「夏凜、頭を冷やして」

———  
突然、芽吹が私の内腿をつまんでちねった。

「ひいいいっ！」

「……私たちの浅はかな行動が計画を頓挫させてしまうかもしれないのよ？銀を信じて待つしかない」

「そうですね、そうですねか。お利口さんよね相変わらず。私だって銀のことは信頼してるけど、だからって何も知らされないまま信じろって言われても納得できない」

「……じゃあ、直接聞いてみる？」

「…は？」

「銀に、直接」

ある種の禁じ手を芽吹は提案した。銀に直接聞くという。

盲点じゃなかったけど、何かこれは負けた気がしてやりたくなくなかった。

「もうこれしか手段は残ってないと思うわよ？」

「……そうね。ある意味じゃ一番穏便な方法かもしれないし」

芽吹もそのつもりだったらしい。けど、今までやらなかったのはなぜだろうか。

まあいい。もう体裁なんて気にしてらんない。クレームの電話の一つでも入れてやろう。

「じゃ、電突よ」

〈はあい♪マイハニー♪〉

「……………」

〈ん？あれ？夏凜？〉

「……そのふざけた声聞いたら無性に腹立ってきた」

何がマイハニーよ！こつちが悶々としてる時に！わざとじゃなくても殺意が沸くわ！

〈まあまあ、落ち着いて落ち着いて。にぼし食べて食べて〉

「あんたねえ……！」

〈ごめんなさい二人の心中は察しておりますです〉

ようやく伝わったのか早口で謝りだした。このパターンも慣れてきたけど、さすがに今回はちよつと許せない。

「根掘り葉掘り聞かせてもらおうよ、国防仮面について」  
「あー。：はい、なんなりと」

「まず、国防仮面は三ノ輪銀で間違いないわね？」  
「はい。鷲尾須美プロデュースの新感覚ゲリラ系ヒーロー国防仮面の  
中の人はあたしです」  
「須美様…」

横から聞いてた芽吹が何か喪失感のある顔をした。

銀が勇者としてアレだから、須美様に理想の勇者像を重ねていたのかしら。そして、実態は銀と同レベルの残念な人と知って打ち砕かれるまでが一連の流れ。

「…で？目的は？これも計画の一環なワケ？」

「電話口じゃしゃべれない機密です」

「は？」

「傍受されたらマズイんです！百歩譲って国防仮面Ⅱ三ノ輪銀つてのが露見するのはいいとしても、国防仮面がどうして現れるのかは知られちゃいけないんだよ！」

「やんごとなき事情があるのはわかった。銀がこうして必死で頼み込む時は、もう後がない時だからだ。」

「と言っても納得するつもりはない。そんな言い訳で落ち着けるほど私は人間できちゃいない。」

「あつそ。それなら別に言わなくてもいいわ」

〈ほっ…よかった。納得して〉

「ないわよ。次国防仮面が現れる場所に行つて、取っ捕まえてやる」  
〈え!?!〉

こんなビックリした銀は初めてだ。上手く出し抜いてやったわ。

「…電話で話せないならそうするしかないです。くれぐれも気を付けてくださいね、教導」

〈おおおう…マジで…?〉

芽吹も乗ってきた。理屈さえ通つていれば芽吹は積極的に活動するつて、最近わかつてきた。

今銀がどんな顔してるか見てみたいわ。こんだけあいつの裏をかいてやったのも初めてだから、うろたえる様子を見て笑ってやりた  
い。

〈ぎ、気を付けます、勇者様〉

「ええ、せいぜい善行に励んでるといいわ。その尻尾を掴まえて全部吐かせてやる」

「人の少ない道とか選んじやダメですよ?襲つてくださいって言うてるものですからね?」

〈そ、それが誘導なのかそうじやないのかわからないのが怖い…〉

縮こまった様子の銀。相当ビビってるらしい。

私は俄然やる気が湧いてきた。芽吹も早速情報を集め出してるし、本気で捕まえに行く気らしい。

「じゃあ、楽しみにしてなさいよ」

「必死で逃げる策を考えておくことですね」



へうわあ：悪の女幹部みたいだあ：〜

「なによそれ。切るわよ」

へはい。捕まってるあんなことやこんなことされないように気をつけます〜

最後の一言が意味不明だったけど。これでモヤモヤを払拭する方法がわかった。

「通信してたのはこの辺のはずだけど」

「まあ、いないわね」

銀のやつ、電話使ってた時だけステルスを解除してたらしい。芽吹がそれに気付いて位置情報のメモを取っていた。

早速そこへ自転車で出向いて、着いたのは徳島と香川の県境。すぐそこに愛媛も見えてくる山道。

まあ、もう移動してた訳で。けど、枝のない道だから進むか戻るかしか選択はない。

「香川に向かったか、徳島に戻ったか。何か情報ないかしら」

「：傾向から言って、折り返す動きはないわね。周回するような経路を取ってる」

「……あ、新しい発見情報。やっぱり香川の方に行ったか」

いくら神出鬼没とはいえ、出現場所はある程度パターン化してる。銀だつて人だし、考え方に偏りがなきやおかしい。

新しい現場は香川の方。——これ、丸亀の方じゃないの。

「…丸亀か。また挑発的なことをしてくれるわね」

「あの人のことだもの、きつと楽しんでるのよ。私たちとのゲームを」  
「なるほどね、納得した。銀の性格ならそうね」

多分、待ち構えてる。けど、真正面から当たっても簡単に逃げられるのは百も承知。あいつの裏をかかないといけない。

どんな手を打つべきか考えつつ、私たちはペダルを漕ぎ出した。

「はあ、全く。芽吹のせいでもた無駄足じゃないのよ」

「どの口が言うのかしら。私はただ場所を確認しただけで、夏凜が現場に行きたいって言ったんじゃない」

「それがわかってて何で止めないのよ。参謀面して何の役にも立ってないって、自覚ある?」

「バカの手綱引くのも大変なのよ? 私が意見したら反論してくるし熟考する時間も待てないから下策しか打てないのよ」

「…アレ、やばくない? 夏凜ちゃんと芽吹ちゃんがケンカしちやつて

るよ」

「うわっ、とうとう掴みかかっちゃったよ!?! どうしようどうしよう!」  
「噂じゃ二人とも無茶苦茶鍛えられてるらしいし、うちらじゃ手つけられないよお!」

「と、とりあえず先生呼ばなきゃ!」

—— たぶん先生方もアンタツチャブルな案件よ、これは。

放課後の学校の校庭。部活動の生徒も多いここなら国防仮面の助けが  
いる人がいるかもしれないと思い、足を伸ばしたまではよかつた。

けど、結局ギスギスしてた空気がとうとう引火して、私は芽吹の胸ぐら  
を掴んだ。対する芽吹ももう「その気」だ。

「いいご身分ね、ホント。その鼻っ柱へし折ってやる!」

「バカを治す方法ってないわよ。もしかしたら叩いたら治るかもしれない  
けど!」

「はわ、はわわわ…」

「ヤバイヤバイ!どっちもヤバイ!」

問答無用で罵倒と暴力をお互いに行使し合う。こうなればもう誰にも止められない。

そう、《同じ立場の人》じゃないと。

しばらく殺陣のように拳を交えていると、奴は現れた。

〈…ヤバいよ、あれはっ〉

「……あ、国防仮面！」

〈止めなきや…！〉

—— 来た。国防仮面。すごく切迫した顔して。

そりやそうよ。間違いなくケンカの仲裁を周りから求められるし、そうすれば間違いなく自身を付け狙うハンターに捕まる。

それが芽吹の打ち出した策だ。

つまりこのケンカも誘き出すための狂言つてこと。国防仮面と私たちの立場を利用した、逃れようのない撒き餌。意地悪だとは思うけど、正直こうでもしないとあいつを捕らえられない。

〈…はいお二人さん！暴力はダメですよー！〉

「あ？？」

「何よいきなり」

〈うひょー怖い怖い…〉

軍服の変人が割り込んできた。—— まだこっちがケンカの演技をしてるってのには気付いてないらしい。

芽吹とアイコンタクトをして、確保のタイミングを伺う。いつでもいける、そう目が言ってる。

〈どうしたのさ二人とも。ま、とりあえず場所変えようか〉

「……出番よ雷獣！蛟！」

「以津真天！目を塞いで！」

〈のわあっ！〉

私たちの動きが警戒されるなら、私たちが動かなきゃいい。私たちには頼れるパートナーが三人もいるし。

まず雷獣が国防仮面にまとわりついて義手の自由を奪う。次いで蛟が襟から背中やお腹を這い回つてくすぐる。最後に以津真天が翼で顔を覆い隠せば、あのサイボーグでも身動きがとれない。

案の定のたうちまわって息も絶え絶えに。あとは拘束すれば完了。

〈ひやあああやめてえええ〉

「…あー、何か発作起こしたみたいね」

「ひとまず安全な場所に移動させないと」

「そうね、丁度私たちの寮が近いし、連れてきましょう」

「ええ、夏凜。そっちの肩持って」

棒読みで最もらしい屁理屈を並べた。観衆がこれで収まるとは思えないけど、他に打つ手がない。

「マジか。とうとう国防仮面を捕まえた人間が現れたか。どんな手を使ったんだろ」

「それが勇者部の新入り二人なんてね。銀ちゃんも鼻が高いなあ」

「てか、あの二人ガチ喧嘩してなかった？」

「…あれだよ。国防仮面を欺くための演技だったんだよ」

——あくまで見てるだけ、らしい。そっちの方がありがたいけど。私たちがアンタッチャブルなことしてるのはみんな知ってるから、きな臭い話になると何も追及してこなくなる。

何はともあれ、何とか銀を捕らえることができた。さて、吐かせてやろうじゃない。

へひどいよ二人とも！あんな騙し方するなんて！回避しようがないじゃん！

「だから気を付けてと言ったんです。どこにどんな謀略が潜んでいるかわからないって」

「迂闊に私たちを挑発するから。あんたの出来心が敗因よ」

まず初めに国防仮面を簀巻きにして正座させた。これで私たちの気持ちと置かれた状況はわかってくれると思う。

少しやりすぎたとは思うけど、ここは心を鬼にして聞かなきゃいけないことを吐き出させないと。

「さて、敗北者にはそれらしいことしてやろうじゃない」

へやめて！あたしに酷いことする気だ

「まだ余裕があるようだし、手加減はいららないですね。さっさと話せば楽になりますよ？」

へ二人ってそんなSだったっけ!?!

「いいからさっさと吐け」

へううっ、もはやボケさせてもくれない…

そりゃ、話が脱線して結局聞けなくなるし。芽吹は結構乗っかるけ

ど、私はそうはいかないわよ。

〈…はい。白状します、国防仮面の秘密〉

「……………」

〈国防仮面っていうのは、神樹様に代わる救いのヒーローなんです〉

「…は？」

——聞く人に次第では、憤慨するようなことを言い出した。神樹様の代わりって、おこがましいにも程があるって。

「…『代わる』？どういう意味ですか？」

〈…もう300年だよ？神世紀が始まって。いくら神様っていったって、休みもせず人類に恵みを届けてたら力もなくなってくるよ〉

「……寿命、ってこと？」

〈うん、大体あってるよ。だから、人類は自分の足で立たなきゃいけない〉

なかなかショッキングな事実を突きつけてきたけど、今聞きたいのはそれじゃない。銀のどうにかする計画と国防仮面がどう繋がるのかって。

「…それと救いのヒーローが現れることが繋がらないのですが」

〈……そう、だよね〉

「…言いづらいことでもあんの？」

〈…まあ。勇者として絶対言っちゃいけないことだから〉

「……………」

〈…一回だけしか言わないから良く聞いて〉

「へ神樹様が滅びることも前提なんだ。国防仮面っていう救いのヒーローがいないと、残された人類の心の支えがなくなっちゃうから」

「とんでもない爆弾発言に、私も芽吹もただただ驚愕するだけだった。」

神樹様を守る、ではなく。滅んだ後どうするかを考える。この神世紀に生きる人間の誰が、そんな神をも恐れぬ異端な発想をするのか。

「冗談でも言えない。言っではいけない。そんなタブーを、銀は踏み越えようとしてる。」

「へ…それが、あたしが国防仮面になった理由。混乱は免れないけど、残された人類が少しでも前向きになれるように、あの人みたいに生きてみようと思えるように」

「……………」

「……………銀、あなたは……………」

「もうこれ以上何も言えない。聞けない。私たちが信じてきた常識を根底から覆すなんて、考えもしてなかったから。」

「銀についていくつて覚悟は決めてたけど、まさか『勇者の任』まで否定する覚悟が必要だなんて。手に入れた何もかもが溶けて流れていくような気分だった。」



鳴り止まない鼓動の連打に合わせて、私たちの端末が声を上げた。

へ…なんか大事な話してるとバーテックスがやってくるよね。もしかして盗聴されてる？

「…銀、その」

へ今は目の前の任務に集中！勇者部、出撃だ！

「…ええ」

集中できる気がしないけど、やるしかない。ここでボロを出したら、銀の計画全てが水の泡だ。

あなたを、助けさせてください

「……あ、樹海化……」

「大丈夫よ友奈。銀たちならやってくれるわ」

「そうですね。……でもお姉ちゃん、わたし達以外は樹海に引き込まれないのは寂しいね……」

「終わったら元の場所に戻してくれるでしょ神樹様も。あたし達は待ってるしかないわよ」

「……銀ちゃん……」

「……あれ……？シロツメツクサのお守りが……欠けてる……？」

「……気にしすぎよ友奈。銀なら大丈夫。それに夏凜も芽吹もついでる」

「……ごめんなさいっ、風先輩っ！樹ちゃんっ！」

「ちよっ！友奈さんっ！どこ行く気ですかっ！」

「勇者システムあるってっただって、あの子たちの手伝いなんてできるわけないでしょっ!!」

「それでもっ！銀ちゃんがっ……！」

〈……こりや、大仕事だね〉

「同時七体…」

「何よ。別に意識する必要はないでしょ。私たちなら勝てる」

別に夏凜が言ったことを否定するわけじゃないけど、銀が微妙な笑いをこぼしてるのを聞いて不安になってくる。

私たちが任に着いてから倒したバーテックスは五。種類は12体いるから、残り全部が今ここにいることになる。

〈んじや、戦いの前にお土産のプレゼント〉

「お土産？」

〈これ、友奈から二人に〉

「お守り、ですか？」

〈友奈お手製の押し花。みんなでいろいろやったの思い出してねって〉

クローバーの押し花。シンプルながらも構図やバランスを工夫した、才能の垣間見える逸品だ。

クローバー——シロツメツクサの花言葉ってなんだったかしら。どこかで調べたことがある気がする。

「四つ葉じゃないってところが、いかにも私たちにらしいわね。雑草魂っていうか」

〈それぞれ。友奈はそんなつもりで選んだんじゃないと思うけど、そう思っちゃうよね〉

「…幸福、約束……」

〈お、花言葉知ってるの芽吹？友奈はそっちで選んだと思うんだ〉  
「そう、ですか…」

もう二つほど意味があるのを思い出したけど、そうしたら怖くなっ

てきた。

“私を見て”、 “復讐”  
—— 銀や友奈の心情に妙に当てはまっ  
てしまうから

〈さて、 どうしようか〉

「…これだけ数の差があるなら、 神樹様への特攻も考えられます。 特にピスケスやジエミニの潜航や突出に警戒すべきかと」

〈勉強してるね、 芽吹。 よし、 じゃあそいつらはあたしが受け持った〉  
「残り五体を私たちで抑えるわけね。 了解よ」

戦略はすぐに決まった。 銀が別動隊を強襲して、 私たちは正面の敵の足止めをする。 バートックスの生態をよく知る銀が乗ってきたってことは、 その戦略で問題ないってことか。

〈あたしが合流するまで遊んでやってな。 功に焦ったらいけないぞ〉

「わかった。 芽吹、 行くわよ！」

「ええ。 銀、 気を付けて」

〈そういつて送り出してくれると、 嬉しくなっちゃうね、 えへへ〉

照れ隠しをすることもなく、 微笑みながら背中を向けた銀。 心配を口にはしたけど、 銀なら大丈夫って思ってる。

それより私たちが下手打たないことの方が大事だ。 同時五体の陽動はこの前よりずっと重荷だ。

「…アリエスが一体だけで出張ってきてるわ。他が着いてきてない」  
「なによそれ、困ってわけ？銀が受け持ったやつらも両翼から迫ってきてるし」

「…まあ、真ん中を抜かせる訳にはいかないわね。夏凜、後ろの四体に仕掛けられる？」

「オーケー。あんたはきっちりひよろ長を仕留めなさいよ」

やっぱり相手も戦略を考えてる。こっちの数を把握して、分散させてから残りの戦力をぶつけて各個撃破するって魂胆らしい。

けど、そうそう相手の術中には嵌まらない。真ん中を抑えて、本隊に特攻。一番の戦力は両翼への遊撃に添える。一つ間違えれば瓦解必至な戦略だけど、私たちならできる。

水蒸気を撒き散らしながら夏凜は樹海へと消えていった。銀の機動力は桁外れだけど、夏凜もなかなか無茶苦茶な動きをする。

「…アリエス。切断すると分裂・増殖するバーテックス、だったわね」  
相手の特徴を復唱して、次の一手を考える。もう視界に入ってきてるからモタモタしてる暇はない。

風穴開けて分解するのはNG、というのなら別の手段でダメージを与える必要がある。

「面の衝撃…これなら！」

相手の側面を取って小銃弾をぶちまけた。

ただの弾じゃない。近接信管。着弾する寸前で破裂して空圧を叩き付ける弾。

パパパつと高い音が鳴ってバーテックスの前面はつぶれたアルミ缶みたいにボコボコになる。低速で滑空していた敵はバランスを崩して地面を擦って止まった。

「ここはすぐに封印すべきね」

間髪入れずにランチャーの弾をバーテックスの着地点に撃ち込む。以津真天が旋回すると海老ぞりになったバーテックスから御魂が吐き出された。

悪あがきにドリルのように回り始めたけど、本当にただの悪あがきだ。

「…同じ回転数だけ逆風を吹かせればいいだけ！」

地面を穿った徹甲弾からつむじ風が起きて、御魂を包み込む。

逆回転の突風が動きを阻害して御魂はほぼ静止状態。これなら簡単に撃ち抜ける。

「終わりよ」

単発の小銃弾がむなしく御魂を貫通して崩壊。アリエスは霧散していく。

「…次は夏凜の援護に行くべきね」

あっけなく倒してしまっただけ、それだけ私たちの実力がついたと証明できただけ。驚いたり困惑したりするほどでもない。

感傷に浸ることもなく、危なっかしい相棒の世話を焼くことにした。

へはい、地中を泳いでも銀様には見え見えです。それでここにうなぎを簡単に掴み取れるマジックハンドもありまーす

心配するでもないけど、銀の方を覗いてみる。そこにはサイコキネシスで釣り上げられたピスケスの姿が。

へどうやって料理しよつかない。でもバーテックスって変な味しかないんだよな

—— 食べたんですか、銀。

へじゃ、握りにしちゃいますか

マジックハンドという比喻で表現するなら、そのまま握り潰したと  
いうのが正しいだろう。サイコキネシスで圧力をかけてペシヤンコ  
にしてしまった。御魂が現れることもなく光となっていく。

へうわ…我ながら悪役みたいなことやってる…

割と似合ってると思ったけど、言わないことにした。

「後ろのデカイのはだいぶ遅れてるみたいね。それでも三対一で不利なのは変わらないけど」

芽吹が相手してるバーテックスからはかなりの距離がある。横槍を刺されることはないから、この三体に集中するだけ！

角が足みたくなってるやつ、まんま天秤のやつ、ボールが三つ集合してるやつ。この前のやつらみたいに連繋するつもりらしい。

「出鼻をくじく！沈めえ！」

天秤のやつ足の元に詰め寄って戟を薙ぎ払う。紫電が通った後は真っ二つになって、切り口から通電する。

「こっちもー！」

傾きかけた天秤をさらに石突きで強打する。接触した途端に水蒸気を上げてた無数の穴から高压の水が噴き出して、敵に穴を開けた。

槍先が雷の斬撃なら、石突きは水の打撃。近づけさえすればどんな相手でも叩きのめせる。私の性格にあった武器の進化だ。



自重を支えられなくなった天秤は更に傾く。これでしばらく動けないでしょ。

「次は…うわっ！」

倒れるバーテックスの影から飛び退くと同時に巨大な水の塊が鼻をかすめた。水の威力はさつき確認したから、さすがにドキツとする。

「ふっ、はっ！私ってどうしてこうも何か投げつけられてばっかなのかしらー！」

尚も絶え間なくボールから放られる水球が襲い掛かる。避ける度にジリジリと後退するハメに。

天秤のやつの援護ってか。化け物のくせに随分仲間思いなことではない。

「…いつまでも後手に回ってる完成型勇者じゃないわよ！」

石突きで地面を叩き付けると水圧の反動で大きく飛び上がる。今までは長柄のしなりを使って跳んでたけど、これなら予備動作がいらぬ。

ふらふらと側面から近づいてきた角のバーテックスを盾にするように着地して、すかさず戟を突き刺す。

「これで撃てないでしょうが！仲良しさん達!!」

力を込めれば水がジェットスキーみたいに噴き出して、角のやつを押し出す。

巨大なバーテックスすら動かす推力で、このままボールのやつに叩き付けてやる！

「いつけえええ!!」

勢いそのまま、ボールのやつを角のバーテックスで突っ込む。それでも勢いが余って、二体一緒に樹海の幹にめり込ませた。

「はあ、はあつ、芽吹のやつにも負けないほど戦略の幅があるでしょ!？」

ほぼ力押しなのは相変わらずだけど、そんな無茶ができるくらいに力があるってこと。今なら三体相手でも封印できそうだ。

自信が実感に変わるのを噛みしめながら戟を引き抜いて後退する。ダメージは大きいはずだし、起き上がってこないでしょ。

土煙で視覚は役に立たないので耳を済ませる。まだ動くのかしら、バーテックスは。

「……………ん？…………ぎつ…………何この音……!」

私の耳に飛び込んできたのは言葉で表現しようのない怪音波だ。脳幹を直接鷲掴みにされるような感覚に襲われて、立つこともままならない。

思考も飛びそうだけど、それだけは避けなきゃ。考えられる内になんとかしないと。

「あの…角の鐘、かつ…………!」

なんとか視界に捉えたのは角の土台の上に乗った揺れ動く鐘。あそこからこの怪音波が出てるらしい。

——けど、わかったところで身体が言うことを聞かない。言うことを聞かせるにはあれを止めなきゃいけない。

「止めるって……！どうやって……!？」

自問自答を繰り返す。こんな状況で考えつくことなんてたかが知れてるんだけど。

だから、最も単純なことしか思い付かない。大声を上げて聞こえないようにするって安直な発想しか。

「だああああああっ！！！！」

力の限りに吠え続ければ、自然と身体が動くようになった。けど、息が続く内になんとかしないとイケない。

私の咆哮と共に、方天戟の刃に雷光が走って、石突きから水が噴き出す。気持ちの高揚を表すように、水蒸気が紫電を纏って輝きを増す。

「今すぐ黙れえええっ！」

打てる手はたった一つだった。戟を投げ付ける。私の唯一の飛び道具。

雷雲のゲートをくぐった戟は信じられないくらいに加速して、次の瞬間には鐘に大穴を空けていた。

「はあっ…はあっ…、やば…体力使いすぎた…」

能力をフル稼働させて戦ったんだ、自身の消耗が限界を越えていてもおかしくない。

おかげで三体はしばらく立ち上がれないでしょうけど。けど、奥のバカデカイのがまだ残ってる。

「…はあっ、次はあいつ、ね…」

三体が再生する前に奥のやつを叩かないと。

——気持ちばかりが先走って身体がついてこない。踏み出した足が身体を支えきれずにバランスを崩してしまう。

「うえっ…!?!」

「バカ。そんな状態で戦えるわけないでしょ」

「…芽吹」

倒れかけた私を、芽吹が抱き止めてくれた。あいつ、いつの間に。

けど、芽吹の一言で完全に緊張の糸が切れてしまった。引き剥がすこともままならない。

「…もうすぐ銀が合流するわ。それまで少し休んで」

「……ええ、そうさせてもらう」

「それまで私が警戒を引き継ぐから、揃ったら一気に押し込むわよ」

——言葉からは優しさなんて感じられないのに、妙に安心してしまおう。

大切な仲間、だからなのかしら。

へいつ見ても足早くて気持ち悪いなー、こいつ。けど、ようやくあたしも追い付けるようになったんだぜ？

銀が浮遊する斧に座って疾走するバーテックスと並走してるのが見えた。あれが箒なら魔女っ子みたいで可愛らしいんだけど。

もう片方の斧が銀の手から離れると、その瞬間にバーテックスの足を削いだ。避けようと思っても避けられない攻撃だし、前に進むだけの相手がどうにかする手段なんてない。

へこれであたしの苦手は全部克服つと。バイバイ、二度と来んなよ

斧の二撃目は薪割りのようにバーテックスを真つ二つにした。丁度御魂も切断するように割って、バーテックスは消滅。

銀の戦い方って、すごく効率的。手数も少ないし敵の弱点を的確についでる。銀の経験から来る攻略法と、その戦術を可能にする勇者システム。一切隙がない。

へサブクエストはクリアつと。じゃ、メインディッシュをいただきますか

普段のあのうぎったいくらの余裕が、戦場じゃこの上ない安心に

繋がる。銀と一緒になら絶対負けないうて。

———てか、即オチ過ぎて全然休めてないんだけど。もう銀のやつこつち来てるじゃない。

〈おやあ？夏凜はもうダウンかあ？〉

「うるさいわね、三対一をやってやったんだから少しは休ませなさいよ。こつちは伝説じゃない、ただの勇者なんだから」

〈へへ、あたしを称える気になった？〉

「ならない。絶対調子こくし」

〈夏凜は相変わらず手厳しいなあ。…でも、よくやったよ。三体相手に無力化まで追い込むなんて〉

義手でくしゃくしゃと私の頭を撫でつける。恥ずかしいからやめろ！って言いたいけど、振りほどく気力もない。

せめて視線で訴えてやろうと思つて銀の方を見ると、———なん  
ていい顔してんのよ。にらみつけようとしてもできなくなったじゃない。

〈けど、あれな！〉

「…なによ」

〈満開は使つちやダメだぞ。もうゲージは溜まつてるかもだけど、絶対ダメだからな！〉

「それはフリ？」

〈使つたら勇者システムは没収です。それであたしの鞆持ちにしてやるー〉

「うわっ、絶対ヤダ」

———わかつてるわよ、あんたの心配事くらい。

〈わかってくれたならよし〉

「あんたがいれば必要ないわよ」

〈頼りにされてるなあー。……お、芽吹から通信だ〉

義眼が流れるように青く光ると、スピーカーから芽吹の声が聞こえてきた。

〈銀、報告しますっ！〉

〈どしたの芽吹、そんな慌てて〉

〈バーテックス四体が、合体しましたっ！〉

〈……え？〉

銀の記録にもないことだ。まさかレオを中心にバーテックスが合体するなんて。

最大級の体躯を持ったレオを越す圧倒的な質量。各バーテックスの能力を使い分ける高度な戦略。実力が未知数なのは承知してるけど、一つだけ確かなのは私の手には余るってことだ。

敵を観測できる場所に身を隠して銀に連絡を入れる。

〈…そりゃあたしも初めてだわ〉

「今わかってるのは、各バーテックスの能力を操ること、桁違いのパワーと耐久力があること、私一人では対処できないことです」

〈オーケー。まずはあたしが……んんっ!〉

「どうしました、銀」

銀が指示を出そうとしゃべり始めた途中で、驚愕の声が待ったをかけた。

〈じよ、冗談でしょ…!?!〉

「何があったんですか、銀」

〈レーダー！レーダー見て！〉

何か動きがあったのか。敵を目視する限りでは変化はない。

銀の言うとおりにレーダーを覗くと、信じられないものが映っていた。

「えっ…友奈…?」

〈ど、どういうことよこれ！〉

〈わかんないよ！けど、友奈がこっちに来てる！〉

私たちの背後から『結城友奈』の反応が迫っている。

銀の慌て具合が半端じゃない。私たちが話してる間にもどうしようとしよと呟きっぱなしだ。

銀が本当に守らないといけない人は————私たちじゃなくて友奈と勇者部の仲間のはずだ。危険が迫っていると知れば平常心を保つてられないのも道理か。

————私がしつかりしないと。

「銀。落ち着いて聞いてください。あなたは友奈から事情を聞いて、戦場に近付かないように説得してきてください。私と夏凜でなんと



かもたせます」

〈で、でももしたら二人が危ないって!〉

〈危ないのは重々承知よ。でも、友奈を説得できるのはあんなだけだし、私たちのことも信じてほしいし〉

「説得が終わったら、合流してください。…大丈夫です、私たちは」

呻き声を上げて、葛藤の中を突き進む銀。板挟みだし綱渡りなのはわかってます。須美様と園子様の時みたいな状況と被ることも。

でも

「…あなたを、助けさせてください」

〈…うーっ!…絶対無事でいてよ!絶対満開なんて使っちゃダメだぞ!〉

「わかっています。それが私たちだけじゃなくて、銀にまで災いすること」

〈さ、時間はないわよ!行った行った!〉

〈二人とも、帰ったら撫で倒してやるうー!〉

謎の捨て台詞と同時に銀との通信が切れた。この心理状態でも息を吐くように冗談を出せるのはある意味才能か。

〈…じゃ、やってやりますかね〉

「ええ、夏凜。もう復帰できる?」

〈万全じゃないけど、あんた一人にもしてやれないし〉

「…無茶はしないでよ?何かあったら銀が暴走するから」

〈わかってるわよ〉

立ち向かうのはこれ以上ない大敵だけど、不思議と高揚感や不安感はない。——私の向上心はどこへ行ってしまったのかしら。

ただ、銀と夏凜と一緒に、無事帰ることだけ。それしか考えられなかった。

誰を恨めばいい、のかしら

〈ちよーつと待ったあー!!〉

「へ？銀ちゃん!?戦ってたんじゃ!？」

〈どうしたのさ友奈!こんなところまで来て!〉

「…銀ちゃんのこと心配で……」

〈…うん、そうだよ。そこで危険な戦いをしてるってのに、心配しない方がおかしいよね〉

「そうだよ!今銀ちゃんがここにいるってことは、二人が!わたしも行く!」

〈待つて待つて。ちよつと確認させて。まず、勇者システムに友奈の反応があるってことは、防人の装備の他に勇者システムを持つてることだよね?〉

「え?あ、そういうえば風先輩からもらったこれに勇者システムが入ってるんだっけ」

〈お忘れでしたか…。とりあえずここで止まってもらってよかった〉

「それならわたしも!」

〈ダメ。友奈は待つてて〉

「なんで!!」

〈…事情があるんだ。あたしと夏凜と芽吹だけでやらなきゃいけない理由が〉

「…銀ちゃん、また隠し事……」

〈…ごめん。今は待つててとしか言えない〉

「……心配だよ、銀ちゃんのこと……。戦いだけじゃなくて、いろんな隠し事して……」

〈……………〉

「…夏凜ちゃんや芽吹ちゃんにも言えないことも隠してるよね…？銀ちゃん、つらそうな顔してるよ…？」

〈……………やめてよ〉

「悩んだら相談、だよ…？わたしや二人に言えなくても、風先輩に」  
〈大丈夫だから。あたしは、大丈夫だから…〉

「……………見てるだけでわたしも辛いよ…。銀ちゃんのそんな顔…」  
〈……………ごめん。ほんとに、ごめん、友奈〉

「うあつ！」

「芽吹！大丈夫!？」

「…ええ、まだいけるわ。けどこの手数、銀のしごきを思い出すわね」

レオの火球、アクエリアスの水球、タウルスの音波、ライブラの風圧。実に巧みに使い分けてくる。夏凜と二人でフォローし合っても近づくことさえできずにダメージを蓄積していくだけ。

先か。  
完全なジリ貧状態。銀が合流するのが先か、私たちが力尽きるのが先か。

それでも私たちは全力で相手の注意を引くことしかできない。

——満開を使えば話は変わってくるかもしれないけど。

「…でも、正直打つ手無しよ。こっちの攻撃がまるで通ってない」  
「無理やり封印するにも、まず近づけないし。…結局、銀頼みか」

「満開使えば？」

「はっ。そんなの絶対イヤよ。勇者免職な上に銀の召し使いにされる」

「それは死んでも御免ね！」

こうして減らず口を叩いてる間にもバーテックスの攻撃が迫ってきた。察知した瞬間に二人とも散開して、誘導する火球を振り払う。

銀が満開の使用を強く禁じているのはわかったけど、

正直、それしか打つ手がない。

夏凜に負担を背負わせるくらいなら、私が

「ちっ！何かやんないところのまま押し切られるわよ！」

「わかってる！わかってるけど……！」

力を解き放とうとする度に、銀のいろんな表情が脳裏をよぎる。嬉しそうに笑う顔、心を鬼にして怒る顔、悲しみがにじみ出した顔。

ダメだ。寸前でためらってしまう。銀が背負った想いを知ってしまったから、なおさら銀の気持ちに寄り添おうとしてしまう。

「芽吹っ！危ないっ!!」

「えっ？」

反応が鈍った瞬間に、飛来した巨大な水球が私を包みこんだ。

「…がっ…うつ……」

抜け出そうと手で漕いでも手応えは全くないし、風圧で吹き飛ばそうにもまるで真ん中に重力があるようにすぐに水が集まってくる。

まずい。息ができない。溺れてしまう。

——ここで放たないと、最悪の結果になってしまう。

「私の相棒に、何してくれてんのよおっっ!!!」

水にかき消されてよく聞き取れなかったけど、夏凜が叫んだと同時に水球が側方へ消し飛んだ。

水球に触れた石突きから凄まじい量の水が放出されたらしい。激流を征するは清流、逆もしかりというわけか。

「芽吹！生きてる!?!」

「げほっ、げう…はあ、残念ながら無傷よ。口の中が謎のソーダ味だけど」

「…前も似たような口叩いてたわね」

「…そうね。けど、今回は言っておくわ。ありがとう、夏凜」

「ふん。生きてんならこの状況なんとかしてやりましょうよ」

悠長に言い合ってる場合じゃない。相手の次の手を見て動かないと。

視線を上げた私と、振り返った夏凜は想像を絶するものを目の当たりにした。

「ちよっ！なんて大ききさ！」

「ちっ、絶対に避けられない攻撃を準備させたか！」

レオの火球が何千と集まって、あたかも太陽を思わせる球体を形成していた。こんなものが起爆すれば、いくら距離を取ろうが巻き込まれてしまう。

幸い、他の能力を使う余力はないようだ。ここを防ぎきれば、あるいは。

「どうすんのよあんなの！」

「どうにかするのよ！夏凜！力を合わせて！」

「どうにかって！どうやって！」

「爆発の圧力は私の風圧で！熱は夏凜の水流で！防壁を作るのよ！」

「わ、わかったわよ！！」

一か八かだ。というより、これ以外のしのぐ手段なんて存在しない。遮蔽物に隠れたところでそれごと吹き飛ばされる。

背中合わせになって、石突きと銃口を天に向ける。放たれた空砲と水流がお互いに絡みあつて嵐を呼ぶ。

「夏凜！！温存はいらない！！全力で放って！！」

「任せろおおおっつ！！」

落ちてきた太陽と沸き立つ大嵐が接触する。

爆発の衝撃、放出された熱、水蒸気へと変わる水流、対流を起こす風、その混沌を伝う雷。私たちも何が起こっているのかはわからない。

一つわかったのは、私たちが意識を取り戻したということだ。

「……………つあ、う……」

「……ぐ……く……」

「……………生きて、る……？夏凜……？」

「……おかげ、様で、ね……」

二人仲良く嵐の目の真ん中で倒れ込んでいた。打撲、裂傷、骨折、火傷、その他もろもろ付きで。

生き残っただけでも上出来か。精霊のバリアで軽減して辛うじて繋いだ。けど、もはや立ち上がれない。

「やつ……は……？」

「……………」

あの混沌の中でバーテックスも無事では済まないだろうと思ってたけど、相手は早くも傷を再生させてる。



それを見た瞬間に、敗北を悟った。

「……ごめん、なさい……銀。あんまり、役に立て……なかつた……」  
「な、に……言ってるの、よ……。……いや、……その通り、か……」

バーテックスは私たちにとどめを刺すのか、神樹様に向かうのか。

私たちには、どうすることもできない。

袖に隠してた、友奈からもらったシロツメクサの押し花を見つめる。ただ銀と彼女の無事を祈って。

〈……夏凜！芽吹！〉

「銀ちゃん！やっぱりわたしも！二人がつ！」

〈お願いだからそこで待っててよ友奈!!あたしがやんなきやいけないんだ！〉

「そしたら銀ちゃんが！銀ちゃんが！」

〈だけどっ！〉

〈あたしが二人と離れたから！友奈が待ってくれないから!!〉  
「!!」

〈…あつ……〉

「……そ、……そう、だよ……ね……」

〈……ご……ごめん……〉

「……わたし、も……」

〈……くそっ!〉

「あつ…銀ちゃん…!」

〈初めからそうすればよかった。友奈から勇者システムを没収すればよかったんだよ〉

「銀ちゃん…?」

〈これで文句ないよね?須美?園子?〉

「何、言ってるの…?」

〈…あとはあたしの好きにやらせてもらうから〉

---

再生を済ませたバーテックスがとうとう私たちの所へ動き始めた。

当然、私たちの回復は間に合っていない。

「……こんな、ところで…終わり、とはね……」

「……ええ。……誰を恨めばいい、のかしら、ね…?」

「……わかん、ない」

「…そう…。それで、いい…わ」

脳内を忙しく走馬灯が走るけど、不思議と暗い気持ちにはならなかった。三人で過ごした、あつという間の、人生で初めて色の付いた思い出が流れるだけ。

強いて言えば、この後銀がどうなるのかが心配、ということだけ。怒りに我を忘れて暴威となるのか、悲しみに塞ぎ込んでしまうのか。

——どちらにせよ、もう手遅れか。

「…約束、守れなかった、わね……」

「満開は…使わなかった、わ」

「…銀を置いていなくならない、って…」

「……それは閻魔様のところ、で懺悔しましよ…」

——ごめんなさい、銀。私が力不足だったばかりに、あなたにまた同じ悲しみを——

〈閻魔様をお呼びかな?〉

「…え…?」

「…銀…来てくれたんですね……」

〈遅くなってごめんな。けど、まだ地獄行きの切符は渡してやれないなあ〉

赤い勇者が、私たちのすぐ上に漂っていた。幻覚だろうか、なぜか

神々しく見える。

「もう二度と犠牲を出させないって決めたんだ。二人に死なれちゃ困る」

「……………え……………」

「な…………何をやってる、んですか…………銀…………！」

銀は自分の義手を生身の手で掴んで——無理矢理引きちぎった。

接合部から血が飛散して、夏凜に赤い模様を描いた。手に持ってた押し花のお守りも赤く穢される。ガシヤつと音を鳴らして落ちた義手に紫電が走る。

「…………地獄に行くのはお前らだ、つけあがったイカレども」

次に義眼を掴んで、思い切り引き抜いた。血飛沫が私の頬に斑点を描く。友奈の祈りを踏みにじるように、赤い染みがお守りを穢す。

投げ捨てられた義眼が私のそばで赤く点滅した。まるで、何かを警告するように。

「その前に一つ、教育してやるよ。人間様の魂ってやつを」

「ペイバックだ、————」

聞き取れなかった言葉を最後に、鈍い鉛色の障気が樹海を覆い尽くした。

鉛色の霧のせいで何が起こっているのかわからない。戦闘してる音がするから、銀がバーテックスと戦っているんだろうけど――

不気味に響く音の中で、私たちの身体が急激に治癒してしくのがわかった。上体を起こして相棒の容態を確認する。

「夏凜、動ける?」

「ええ、なんとか。でも、こんなに再生が早いわけないし」

「……銀の血の影響、かしら」

いつの間にか血糊は消えていた。それと全身の傷と痛みも。

これが銀の血の影響じゃなければ説明がつかない。

―― だけど、押し花だけはドス黒く変色していく。

「…でもなんなのよこの霧は。いきなり現れて」

「……私たちのところだけ妙に薄いわ。この霧も銀がコントロールしてるっていうの…?」

「…あいつ、義手も義眼も投げ捨てたのよ? 戦えるわけが…」

「……!!!」

地面に転がっていた義眼を見て、重大な事実を思い出した。

このパーツたちは、どこかで生かされている須美様や園子様と繋がっていた。今、銀はそれをつけていない。

——銀の本性を押し留めていたものが、なくなってしまったんだ。つまり今戦っているのは。

「夏凜!!銀が!!銀が暴走してる!!」

「えっ…!?!」

「ここに須美様と園子様がいるのよ!!銀は今一人きり!!ストッパーが全部外れてる!!」

「や、ヤバいって!!なんとかしないと!!」

回復したての身体に無茶させて、鉛色の世界へと飛び込んだ。放り投げられた義眼を手に。夏凜は義手を抱えて。

入ったと同時に、むせ返るほどの濃度のガスが呼吸器を襲う。まとも息を吸えばやられる。

「ぐっ…!」

「夏凜…!しゃべったらダメ…!」

何のガスかはわからないけど、有害なものだっというのは確定的だ。カプリーコンバーテックスの毒霧すら凌駕する有毒性を示している。

勇者システムが浄化しているけど、全然追いつかない。口元を塞いでひたすら音源の方へ足を進める。

ふと、レーダーを覗くと友奈の反応と銀の反応が同じ場所にある。何がどうなってるかわからないし、知る術もない。この目で確認する

までは。

二つの反応に接近するほど、銀の声らしき音が聞こえてくる。

へあははははっ！いいザマ！意気揚々と攻め込んでおいてこんな惨めな姿で終わるってさあ！〜

響いた声からは、狂気しか感じられない。戯れに笑うあの優しい銀のものじゃない。

霧の向こうによろやく見えた真実は、壁の外以上の地獄だった。

へもう少し眺めててもよかったけど、お客さんが来ちゃったからね。人間が残した地獄でゆっくり悶えてね〜

巨大なバーテックスを喰らう、いくつもの巨大な鉛色の蛇の頭。噛まれた縁から溶け出して、そこからバラバラに分解されて、された端から飲み込まれて。

どんな罪を犯せばこんな惨いことをされるのか

へやあ、勇者諸君。ショーは楽しんでくれたかな？〜

「なっ…何よこれ…!?あんたの…真の力だっけ言うの…?」

霧の向こうから、シユルシユルと音がする。そして姿が見えてく

る。

銀だ。——蛇の胴と失った腕が繋がった。赤い装衣にも鱗のように鉛色の紋が走って、まるで魔物のようだった。

へまさか。こんなのお遊びだよ

「え……」

へあたしの大切な人を傷付けたやつを晒し首にするなんて。ホントなら一瞬で毒殺だよ？

ポツカリ空いた眼孔から底知れない闇がこちらを覗いている。それに合わせて表情も狂気で満たされていた。

明らかにいつもの銀じゃない。暴走、って感じには見えないけど、とてつもなく危険だというのがひしひしと伝わる。

へさあ、二人とも。一緒に見届けてよ。この世界が終わるのを

「……え？」

へ二人が一緒ならもう何もいらぬ。須美も園子も必死で止めてたけど、もうあたしは我慢できない

「ま……待ってください、銀……！」

へ大切な人をあたしの前から消し去った天の神も、大切な人をいいだけ利用した大赦も、大切な人を守ろうともしない人間も、大切な人を供物に生き長らえる神樹も。あたしが全部終わらせてやる

銀が言葉を終えたと同時に、大蛇はバーテックスを全て飲み干した。その後霧となって消えて、失った右腕に収束していく。



〈…二人に出会えて、ホントによかった〉

銀の霧の手が樹海の大地に放出されて、樹海は腐って崩壊していった。

あなたは人です。紛れもない人間です

崩壊した樹海から、私たちは現実世界に戻された。一番最初に訪れた、あの難破船の甲板に。

船首を見れば、めり込んでいた「壁」が腐って海へと飲み込まれていく。難破船もサビをふるい落として、今にも沈みそうに船体を軋ませる。

〈そこで見てて、夏凜。芽吹〉

「…何をするって言うんですか」

〈言ったとおりだよ。まず、神樹から残った力を吸い上げる。そんで、外の火の海をまるっと飲み込む。最後に天の神も食い尽くす〉

「そんなことできるわけ…」

〈言っただろ？勝算はあるって〉

〈聖なる神々が忌み嫌う不浄。それがあたしの本質。神樹が300年集めた人間の負の感情をあたしが全部引き取ったんだ〉

銀が最後の秘密を明かし始めた。

——— 最後の最後で種明かし、という雰囲気じゃない。まるで、これまで私たちに何かを教えてくれたように。

〈なんで300年も平和だったと思う？信仰心を育ててきたから？争ってる場合じゃないから？〉

へ…違うね。神樹を構成する一柱の邪神が、人々の負の感情をエサに苗床になってたからさ」

へ…失意のあたしに、その邪神は接触してきた。神世紀で初めて、深く人を呪った勇者だっていつて。あたしと同じく食い物にされたもの同士だっていつて」

へあたしは邪神に触れた。触れてしまった。神樹から預かった力は失われて、代わりに邪悪な力があたしを満たしてくれた」

へだから、滅ぼす。300年も邪神を苗床にした地祇も、その原因を作った天神も、負の感情を提供してくれる家畜も」

まるで私たちが名指しするかののように、視線を通わず。空っぽの眼孔から一筋の血が流れて、涙のように頬を伝う。

言ってることが理解できない。理屈はわかってても理解することを拒否する。

いや、理解しちやダメだ。

銀の言葉にはいつも裏の意味があった。それを理解した時、私と夏凜が初めて仲間となった。

銀が本当に伝えたいことは、そうじゃないはずだ。

「それが、…あんたの計画…？」

「へそうだね。須美や園子はもつと穏便に済ますつもりだったみたいだけど。もう既にあたしが外にまいた『旗』が芽を出して、暴れてるころだと思うよ」

「……………」

夏凜は言葉を失った。今何を思っているのか私にはわからないけど、ひたすらに銀のことを見つめている。

「それが…銀の望みなんですか」

「へうん。あたしの望みだし、世界を呪って死んでいった人たちの望みだよ。こうしている今も深淵からささやいてくるんだ、不条理な世界を滅ぼせ、って呪詛が」

「じゃあ、あなたが私たちにくれた心は、全部須美様や園子様作り物だったって言うんですか」

「……………」

「三人で守ってきたものを、あなたの一存で終わらせていいんですか」

「……………」  
「わかってるよ。けど、もう限界なんだ。苦しいんだ。おかしくなりそうなんだ。人の絶望がどこにいても聞こえるのは」

「……………」  
「そう、ですか」

銀に向けて小銃を構えて、引き金を引いた。

数発の弾が銀の上体と頭を捉えた。着弾と共に破裂して、赤い飛沫をあげた。

「え……………」  
「芽吹……………」

「……………」

へ…なるほど、勇者だ。さすがはあたしの愛弟子。世のため人のために善をなす…忘れてなかったわけな〜

音声が終わった瞬間には、何事もなかったかのように吹き飛んだ頭と身体が再生した。

——私たちは銀に苦しみを強いてきたのかもしれない。最初から呪いの力を解き放つつもりの銀に、世界に未練を残すような想いをさせて。

ならば、私たちがけじめをつけてあげなければいけない。それが銀の真なる望みだ。

大切な人の手で、邪悪に堕ちた自分を終わらせてほしいと。

「あなたと、夏凜と、須美様と、園子様と。果たし続けてきた約束に従って、……銀、あなたを討ちます」

へうん、その返事が訊きたかった。…夏凜は？どうする？〜

「…私は…」

暗黒の眼孔から送られる視線に夏凜は狼狽える。

そうなるのかもしれない。しようがないけど——

あなたなら、わかってくれるはず。

へ目の前には世界を食い尽くす化け物。夏凜は世界を守る勇者。……選択肢はたった一つだよな？〜

「……それでも…」

〈大赦が二人を勇者に選んだ理由。二人が戦うべきはバーテックスじゃなくて、すぐそばにいる邪神…三ノ輪銀を討ち取ることで言うたら？〉

「…！」

〈勇者として家族を見返してやるのが目標だったんじゃないの？なら、勇者のお役目を果たすんだ〉

「……………」

夏凜は拳を強く、強く握った。震えて血が出て、それでも何かを握りつぶすように。

「…ごめん。それだけできない」

〈……そう〉

「…それより大切な使命が、あんたを助けるって使命が、私にはあるからっ!!」

夏凜が銀に叫んだ言葉を追うように、雷光が甲板を走った。蛇の頭をした銀の腕と鉛色の霧を吹き飛ばして、向こう側の世界への境界を曖昧にする。

ただの雷じゃない。まるで電気を帯びた水が加速して飛んでいったようだった。

「芽吹。…あんたの言うことも正しい。だけど、私は絶対銀を助ける。その可能性にかける」

「…それが更に銀を苦しめるとしても?」

「ええ。三人一緒って約束、私にとって一番大切だから。泣いて謝っても助ける」

〈……うれしいよ、あたしは。だけど、助けられるわけにはいかないんだ〉

吹き飛んだ腕から、また蛇の頭が生えてきた。霧を吸って巨大化して、さつきバーテックスを食い殺した化け物が甲板の端を囲う。

「芽吹！一か八か、義手と義眼を元に戻すのよ！どちみちこのままじゃ勝ち目がない！」

「ええー！わかったー！」

正攻法で行っても、まず戦いにならない。再生されて、大蛇に食いつかれるのがオチだ。

私たちに勝機があるとすれば、須美様と園子様の手が届くところに銀を置くこと。呪いの力を絶たなければ、少なくともこの世界は終わってしまう。

夏凜が義手を片手に銀に突っ込む。対する銀は何の反応もない。

「…ダメだ、二人には手を出せないや」

「少し黙ってなさいよおっ！」

「うぶおっ!!」

石突が銀の腹部を直撃する。ビリヤード球みたいに手すりまで吹き飛んだけど、大蛇はまるで意に返さない。あたかも自身が本体であるように。

「へいてて…。不死身とはいえ痛いものは痛いなあ…」

「支援するわ！」

義手を取り付けなきゃいけないから、大蛇と繋がっては邪魔だ。接合部に徹甲弾を撃ち込んで、空圧で切断する。

「夏凜！再生が始まらないうちに！」

「オーケー！」

膝をついた銀に飛び掛かって組み伏せた夏凜。再生が始まるわずかな時間の中で、夏凜はやってみせた。

〈…うへへ、かわいいなあ。夏凜は〉

「何よこんなタイピングで」

〈…そんなかわいい弟子が、こんな世界のためにいいように使われるなんて〉

「…くそつたれな世界かもしれないけど、あんたと芽吹が隣にいるなら。私にとっては最高の世界よ」

〈……ならさ、三人で作ろうよ。神樹もバーテックスもない、新しい世界をさ〉

舌をチロチロさせていた鉛色の大蛇が鎌首をもたげた。

巨体に似つかわしくない俊敏さ。まるで夏凜が方天戟を振るうみたいなスピードで、重なりあつた二人に首を突っ込む。

「っ！夏凜！！」

私も最速の反応で大蛇の頭を撃ち抜いたはずだけど、既に夏凜は宙を飛んでいた。穿たれた穴も気にすることもなく、自由落下する夏凜を丸呑みしようと大口を開ける。

「やめろおおおっつ！！」

気がつけばありつたけの弾を蛇の喉元に叩きつけていた。頭がちぎれるほどの穴が空いて、伸ばした胴体が倒れてくる。



「夏凜!!」

落ちてくる夏凜を受け止めようと駆け出す。理屈なんて全て捨て去って。

へ…芽吹もほんと変わったよね。もう、いとすぎてあたしも妬けちゃうよ

「…!?!」

耳元で銀の声が聞こえた。その瞬間に私は何かに身体を締め上げられた。

「あうっ、うぐうっ…!」

へごめん、ちよつと痛かったね

「ぎ…銀…?」

私を捕らえたのは蛇の尻尾らしい。丸太のような極太の体躯で締め上げられて、全身の骨がバキバキ折られる錯覚すら覚える。

尾の先から銀が “生えて” きて、私の目の前で片手を上げた。途端に拘束が少しだけ緩くなる。

へ…ここで二人が負けても誰も文句を言わないよ? 言う人がいなくなるんだもん

「…そう、でしょう、ねっ…!けどっ、私の戦う、理由…は…!」

へ立派な覚悟だよ、ほんとに。あたしにはできない覚悟だね。だって大切な人から心を搾取するやつなんて、死んでしまえばいいって思ってるもん

「傲慢、ですねっ…!まるで、昔の、私みたいに…!」

へ…はは、怒られちゃった。…全部終わったら全力で叱ってね、芽吹

銀が私の顎に手をかける。そしてそつと顔を近づける。

「私の相棒にいいいつ！手え出すなああああつっ!!!」  
へうおっ!？」

怒号と雷轟が蛇の尾を断ち斬った。バランスを崩した銀は私から飛び退いて、切れた右腕を霧に変える。

大蛇に締め上げられたダメージは相当大きいらしい。精霊のバリアも効いてなかったし、不浄の力は私たちの天敵というのか。

「園子様に叱られて来いいっ!!」

電光石火で銀との距離を詰めて、義手を掲げる夏凜。

へ…発狂しそうなのに監禁して我慢我慢って言うってくる園子なんて嫌いだよ」

霧を迫る夏凜に吹き付けた。

強烈な有毒ガスだから、被害がないわけがない。

「夏凜っ…!」

「ぐうあ…うっ…」

夏凜はうずくまって口元を押さえていた。たったこれだけでもはや戦えない。

何とかしないと———!

へ夏凜、もうそろそろ気持ちよくなってくると思うよ。毒と薬は紙一

重だからね〈

「あうっ…あ…っ」

へさあ、夏凜もおいで。神樹の家畜小屋を出て、人のあるべき世界に〈  
頭を再生させた大蛇が、足から夏凜を少しずつ飲み込み始めた。夏凜も抵抗もせず、だらしない声をあげてゆっくり飲まれるのを待つだけ。

動けっ———！

何をうずくまっているのよ！楠芽吹!!あなたの大切な人が、目の前で消えようとしているのよ———!!!

「うおおおっつっつ!!」

腕や脚が引きちぎれようが、構わず走り出す。気持ちしが本能に勝った瞬間だ。

ただただ必死で、飲まれていく夏凜の右手を掴んだ。

「夏凜っ!!諦めるなあっ!!」

「…めぶ……き…っ」

意地でも義手だけは手放さない夏凜。よかった、諦めてはいない。

この手だけは放してはいけない。放せば全部終わってしまう。

「……い、き……て……」

「夏凜!?あなた何をっ!!」

紫電を纏う三日月が、

---

夏凜の右腕を断ち斬った。

「うわああああああっっっっ!!!」

---

天空を舞う青の妖花が鈍く光る大蛇を海の色に染め上げた。

花卉を突っ切り空を裂くのは、空色の十字架。失われたはずの航空機。機首に掴まる私と、機首から覗く剣呑な機関砲。

「今すぐ離せええええ!!!」

昂った声に同調するように、機体は大蛇へと急降下し、機関砲も咆哮を上げた。一発が空圧の連鎖爆破に匹敵する威力の砲弾を、数えられないほどの連射で撃ち込む。

大蛇を尻尾から撫でるような射線で撃った砲弾は、一瞬でその体躯を消し飛ばした。残った頭部も力を失い、飲み込みかけた夏凜をだらしなく吐き出す。

その後、甲板スレスレを背面飛行して夏凜を大蛇からかつきさう。

「夏凜っ!!この大バカっ!!」

「め……ぶき……?」

目の焦点が合っていない。たぶん私の姿も見えてない。私の叱咤も聞こえてない。

「何をカツコつけて私に託してるのよっ!!あなたがやっていいことじゃないっ!!」

「……う……あ」

「生きるのはあなたもよ!!」

「……う……ん……」

その返事も、振り絞って出したらしい。私の目の色を焼き付けるように見た後、まぶたを閉じてうなだれた。

風防の中に夏凜を押し込めて、私は前を向く。

十字架の航空機は大きく旋回して、再度甲板に機首を向ける。その先には、銀がいる。

〈満開、キレイだよ芽吹。さあ、あたしを終わらせてよ。あたしの友達四人なら、それができる〉

「うおおあああつつつつ!!!」

それが私の意識なのか、それともこの航空機の意識なのかはわからない。ただ銀に向かっていく。

ノーズが銀の身体を捉えて、そのまま艦橋へと突っ込む。銀は避けようともせず、私を受け止めた。真っ赤な血で大蛇を染めて。

〈…ぐふっ。…ああ、痛いなあ〉

「…痛いですよ、それは私にもわかります」

〈…そうだね。それはあたしが人、だからかな〉

「ええ。あなたは人です。紛れもない人間です」

〈うん…。…人として、終わりたいなあ〉

「……須美様、園子様が許すのであれば」

〈…うん。聞かせて。須美と、園子の答えを〉

夏凜から預かった義手と、私が持っていた義眼を、銀にはめ込んだ。

〈……そっか。隠してたもんな、あたしに聞こえてた声のこと〉

〈……はは。謝んнатて〉

〈でもさあ、もう、ダメかな。須美と園子まで悪意に飲まれちゃうもん〉

〈……二人のこと、よろしくな〉

——その言葉を最期に、銀は鉛になって溶けていった。大蛇の残骸も船へと吸い込まれていく。

船は霧を噴出して、腐り落ちた壁の代わりに鉛色の境界を敷く。そして、宙を漂い始めた。

「……………」

——青く光る義眼と、紫電を走らす義手だけが、旅立つ船の行方を知る。その先を聞き出すように、一つのモバイルがけたたましく声を上げていた。



やってやりましょう。銀のためにも

「……………」

見上げた夜中の病室の天井は、狭くて遠いような気がした。

なぜなら、私の右眼は散華してしまっただから。勇者として致命的な機能の欠損だ。

見えない目で隣のベッドに横になつてる夏凜の様子を見る。

夏凜はずっと意識を失ったままだった。大赦でも把握しえない何かによつて、回復が阻まれているらしい。

「……………いたた。首振るのもつらいわ」

私も私で全身の骨が折れているらしい。みるみる再生しているけど、まだ動くには至らない。

———もどかしい。私にはやらなきゃいけないことが山ほどあるのに。

「……………銀……………」

———あまりにも夜の静寂が深すぎて、心細くなってくる。私たちの心にいつも明るい音を届けてくれた人は、ここにはいない。

———あれ、もう片方の視界も霞んできた。

「…………涙…?」

生きてる目から枕を濡らす涙が流れてきた。涙を流すなんて、いつ以来だろうか。

「……………」  
私らしくもない。泣いたところで銀が帰ってくるはずもないのに。

「……………」

押し寄せる胸の苦しさとともに、今日のことを思い出される。銀が背負ったもの、その苦しみ、私たちの選択。

「……………」  
選択肢なんてなかった。銀はようやく重荷から解放されて、今度は私たちが……………」

「……………?どうするっていうの…?」

神樹は滅んでいないし、人間も残された明日を迎えられるし、バーテックスも外で侵攻の機会をうかがってるだろう。

銀は外に旗をまいたと言った。それが芽を出すと。そして、四国を覆う深い霧とその奥へと進み始めた座礁船。

「……………」  
まさか、銀の計画って」

「……………」  
神樹が滅びるのも前提と言っていたけど、あなた自身が消えるのも計画の内だったのでは……………」  
?」

だとすると、これまでのことが全て銀の描いた青写真のとおり、それでつじつまが合ってしまう。

人類を憎む邪神は勇者によって討伐され、外界に取り残された残滓が神々への復讐を果たす。三ノ輪銀という生け贄を邪神に捧げることによって。

「……あなたは」

どこまで行っても、人間じゃないですか

「芽吹ちゃん!!夏凜ちゃん!!」

「…友奈」

朝一番で病室に突入してきたのは、何やら武装した友奈。私は結局一睡もできず、夏凜は未だまぶたの裏の世界から帰ってきてない。

「よかった…!無事で…!」

「ええ…。…銀のおかげで」

泣き崩れるように私に寄りかかる友奈。私も腕が動かないので支えてあげられない。

友奈が戦場に向かったのも、私たちのことを心配して助力に向かったからだろう。

「どうしたの…？その武装は…」

「…風先輩を撒いてきたんだ」

「…特別なお役目についてるって言うってたものね。それがこの装備か」

「うん…。…けど、命令を無視して…」

銀のためなら命令に背くことも辞さない。そういう人が、友奈は。

何があつたかはわからないけど、——銀の理性のたがが外れた原因の一つは、友奈にあると思われる。

——それを責めるつもりもないけど。全て銀の手のひらの上のことなら、避けられない別れなのだから。

「そこにあなたのモバイルがあるわ。銀が持ってきたし、取られたのかしら」

「あつ…うん…。勇者に変身したら、絶対戦うよねって…。…ケンカみたいになっちゃって…それで…」

「…そう。…それも、返しておくわ」

「…え？」

モバイルの裏に、銀が友奈からもらったシロツメクサのお守りが貼り付けてあつた。大切にしてたのだろう、丁寧にパックに詰めて。あずぼらな銀にそうさせるのなら、相当だ。

「これ、銀ちゃんの…」

「…ええ。銀があなたからもらったものよ」

「…え…？」

「…持ち主は、…もういないのよ」

「…え…？」

友奈は聞き返してきた。何を言ってるのかわからないと言った顔で。

「……そのモバイルに、あなたへの最後のメッセージが残ってる。聞き届けるのが、あなたの責務よ」

「最後、って……」

—— こういう感情が、銀をに追い込んだ感情なのだろう。友奈は表情を歪めて、声をかすれさせて、それでもモバイルに残った音声を再生した。

—— どうして私は、他人の感情を参照することでしか自分の感情を知り得ないのかしら。私だって、友奈と同じ感情を抱いてるはずなのに。

---

へやつほ。友奈、ごめんな。あたしもあの時は切羽詰まってさ。この場をなんとかすることで精一杯だったんだよ  
へ……うん、ちゃんと謝っとくか。ごめんなさい。友奈のせいみたいに言って〜

へたぶん、これを聞いてるってことは、あたしはもういない。闇墮ちした勇者は、弟子の手で天誅されました〜

へ…けど、二人を恨んじやだめだぞ？恨むのは三ノ輪銀の方だかな？

へ…けど、銀様は不死身よお！絶対、ぜえーったい友奈のところへ帰ってきてみせるからな！約束、ぜえーったい守るからな！へだからさ、友奈。…待ってて。あの時と同じだけど、ほんのこれっぽっちの可能性もないかもしれないけど…待ってて

「…んんっ…！！」

「友奈…」

口を押さえて、声が漏れないようにして、友奈は涙した。

これが冗談だとしても質が悪いし、本気だとしてもあまりに酷だ。友奈は何もできないまま、何も知らされないまま親友を失ったのだから。そして、最後のお願いが「待ってて」と。

友奈とのいざこざが決め手となって銀の理性は崩壊した、と考えていいだろう。銀と友奈の優しすぎる関係が、結果的に銀を破滅に追い込んだと。

友奈を恨む理由としては十分すぎるけど、私にはまるで他

人事のようにすら思えてくる。友奈とのすれ違いすら銀の目論見通りと思えるのだから。

——ただ、銀がそこまで友奈を想ってたとわかると、あの時沸いた感情が傷だらけの心をあぶる。

「……銀は、もういない。いないのよ……」

「そん……な……」

私の手が動けば、涙を流す友奈の頭を撫でてあげられるのだろう。私には、ただ肩を貸すことしかできない。

「……銀のおかげで、戦局は変わりつつある。残された私たちは、それをきっかけに勝ち取らなきゃいけない」

「……………」

「……本当の自由を、ね……」

——銀が本当に目指していたものは、それなのかもしれない。パーテックスからも、大赦からも、神樹からも束縛されない世界。本当の自由。人間のあるべき姿。

——あなたは、本当に。スケールが大きすぎますよ。勇者じゃなくて、革命家の称号こそ相応しいです。

「……友奈」

「……芽吹、ちゃん……」

「……やってやりましょう。銀のためにも」

泣き崩れる友奈の琴線に触れる言葉を、私は知らない。だから、私は私の道へと彼女を引き込むことしかできない。

「…落ち着いたかしら、友奈」

「うん……ありがとう、芽吹ちゃん……」

私の身体が少しずつ動くようになると同時に、友奈も平静を取り戻したようだ。表情に陰を落とすのは変わらないけど、話ができるくらいには気持ちの整理がついたってことか。

「……どうして…銀ちゃんが……」

「……元々そのつもりだったみたいよ、私が銀と出会う前から。終わりの近い世界を解放すべく、自らが命を賭して道を切り開くって」

「……芽吹ちゃんは、…悲しくないの…?」

「…悲しいわよ、それは。今までで一番…」

「…平気、なの…?」

「……そんな訳ないわ。でも、…私にはやるべきことがあるから。立ち止まったら銀に申し訳が立たない」

私に残されたたった一つの使命。私がこの世界に生きる意味。

銀がこじ開けてくれた世界の扉から出て、水先案内人となること。もし邪なるものが人類に徒なすのなら、それを勇者として討滅すること。

銀が私たちを育ててくれたのは、そういう理由だった。私はそう理解したんだ。



「……強いね…芽吹ちゃんは……」

「人より感性が鈍いだけよ。人並みの感情の持ち主なら、…正気じゃないられないと思う」

むしろ助かったとさえ思えてくる。私の心が人並みなら、もう二度と立ち上がれなくなると思うから。

友奈も現実と向き合う覚悟はできたみたいだけど、あまりに可哀想だ。――銀のためにも、彼女を支えてあげないと。

見えない目で友奈を見つめていると、隣のベッドから物音がした。

「！夏凜……！」

「……あ…つうあつ…！」

「夏凜ちゃん……！」

悪夢から覚めるように呻き声を振り払って起き上がる。腕が片方なくなってるのにも気付かず、上腕が空を切る。

「大丈夫!?夏凜ちゃん……！」

「…友奈…?それに芽吹も…」

「…よかった。目が覚めないのも覚悟してたから…」

一つひとつ何が起こったかを確認するように、夏凜は目を左右に動かして思考を巡らせた。

「…銀は!?銀はどうなったの!?!」

「……ここにはいない」

「いないって…!どこにいるのよ…!」

「…わからない。本当に消滅してしまったのか、あの大蛇に飲み込まれてしまったのか、霧の向こう側にいるのか」

私の記憶に残っている出来事を、一つずつ話した。私が満開を解き放って右眼を捧げたこと、それで義眼と義手を元に戻したこと、須美様と園子様と言葉を交わしたこと、その後鉛になって溶けていったこと。

戦いの後の世界の変貌も伝えた。神樹の壁は腐って崩壊して、代わりに鉛色の霧が四国中を包んだこと。座礁船が浮遊して霧の奥の火の海へ漕ぎ出していったこと。あれだけ樹海が荒らされたのに、現実世界への影響はなかったこと。

「…行かなきゃ。銀を助けにいかないよ」

「待ちなさい夏凜。そもそもどこにいるかわからないじゃない」

「それでも…私は約束した！私は決めた！何があっても銀を助けるって！」

夏凜はあの時誓いを立てた。銀を助けると。邪悪から銀を解き放つと。

でも、銀はそれを望んでいない。私の師の覚悟を踏みにじることは、私にはできない。

だから、許せなくなつて、気持ちが昂る。

「それは銀の望んだことじゃない！あなたのエゴよ！」

「だとしても！私は認めないからっ！三人一緒って…約束したからっ…!!」

「現実を見なさい夏凜!!あなたのそれは銀の覚悟を否定してるのよっ!!」

「私たちと別れることもっ！邪悪に飲み込まれることもっ！そんな恐怖を全部受け止めてっ、銀は私たちと世界のために自ら命を捧げたのよっ!!」

「誰が同情できるの!?誰が代われるの!?何が助けるよ!!そんなの傲慢よっ!!」

「わかってる…!!それでもっ…本当の望みを諦めたくない…!銀が今までくれた優しさを…全部なかったことになんてできない…!」

夏凜は泣いていた。今までのことを思い出してか、これからの苦悩を嘆いてか。私にはわからない。

でも、私の言葉を詰まらせるには十分すぎた。

私だって、銀と夏凜と一緒にいられるのならそうしたい。銀だってそれを望んだだろう。そうじゃなかったら、私は銀に魂を吹き込まれた傀儡にすぎない。

私たちは勇者なのか、それとも友達なのか。その選択を迫られているのか。

「夏凜ちゃん…」

「……ごめん。ちよっと一人で考えさせて」  
「……………」

夏凜はそっぽを向いてしまった。

私と同じなのかもしれない。お互いの考えに触れて、折り

合いをつけなければならぬって思ってるのだろうか。

「…友奈、…ありがとう。私も少し気持ちを整理したいから…」

「うん…。…芽吹ちゃん、夏凜ちゃん…。自分を追い詰めすぎないでね…」

沈んだ表情で友奈は病室をあとにした。友奈も私たちと同じで、自分なりの答えを見つける時間が必要なはずだ。

「……………」

朝の日差しが窓から照らしてるのに、半分の視界にはどこまでも闇が広がっていった。

「…お役目、ご苦労様でした」

「……先生」

「現状は医師から伺っています。ご無事で何よりです」

「……はい。…全て、銀のおかげです」

医者のもメディカルチェックが終わった後に、勇者付きの神官が部屋を訪れた。間が悪く、夏凜の診断はまだまだ時間がかかるらしくて私一人だ。

無機質な声と表情を隠蔽する仮面で、淡々と必要事項を伝えてきた。

「…敵の主戦力を壊滅させられたので、しばらくの猶予が生まれまし  
た」

「…そんなことはどうでもいいです。…崩壊した壁や、鉛色の霧につ  
いて何か分かりませんか」

「現在調査中、としか言えません。根も葉もない噂が飛び交って扇動  
させられている民衆もいますが、我々は真実を見極めて導かなければ  
なりません」

「……………」

この人は銀の味方だと言った。大赦の信奉者ではなくて、一人の勇  
者の従者。

この様子なら、本当なのだろう。神樹が作った壁が崩壊し  
たなんて、あの狂信者たちが知れば正気じゃいられないし。

ただ、あまりに無機質すぎる。あなたの教え子が、その信  
念に殉じたというのに。

「…銀については」

「……………こちらをご覧ください。銀様の、遺品です」

仰々しい和装の、一冊の書物を差し出した。銀と出会って間もない  
頃、盗み見してしまったあの『勇者御記』だ。

「……芽吹様には、銀様が残した義眼が宛がわれることとなりま  
した。夏凜様には、同じく義手を」

「…そう」

「…私からは以上です。失礼させていただきます」

「……………」

先生は何も指示を出さなかった。どうするかは自分で決めろってことか。

その答えは、これに書いてあるのか。私はそれを求めて御記を開いた。

あなたに何ができたのかを

〈勇者御記 三ノ輪銀記〉

——がつけてたらしい日記を、あたしが引き継ぐことになった。勇者御記ってタイソウなお名前だけど、あたしはあたしらしく書いてくことにする。

まず、勇者としての現状から。勇者は現在たった一人。あたし三ノ輪銀だけ。——と——は使命を果たして落命した。

そのたった一人の勇者も、大変な状態だ。右腕はなくなってるわ右足も千切れてるわで、はつきり言って戦えない。利き手じゃない手で字を書くだけでもむちゃくちゃ時間かかってる。

めっちゃ不安。足引っこ抜かれた時より胸が痛い。だけど、誰に話していいかわからない。

どうしよう、これじゃ世界を守れない。怖い。あたしの大切なものが全部奪われちゃうみたいなきらんだ。

——と——がいなくなるだけで、こんなに涙が止まらなくなるなんて。イヤだ。会いたい。話したい。笑いたい。不安をぶちまけたい。

そんな話ができる人、他にはいない。

最初のページには、銀が一人になった時の気持ち赤裸々に綴られていた。

これが普通の人間の感想なのだろう。大切な仲間を失って、後ろ向きにならないわけがない。乗り越える葛藤がないわけがない。

そうとわかって、私は自分自身がわからなくなってきた。感受性が薄いのは重々承知してたけど、自分自身の気持ちまで感じ取れなくなっているというのか。

欠けた感情を埋めるべく、さらにページをめくる。

さすがの勇者システムでも、千切れた手足は再生できないらしい。てなわけで、義手と義足を作ってくれることになった。



まあ、それでも慣らしというか、リハビリというか、そういうのが必要なわけで。看護師さんじゃない、大赦の人がそれに付き合ってくれることになった。

三好春信さん。なんかお兄さんって感じなのに、大赦のエリートさんらしい。勇者と直接面会できるのも相当高位の人じゃないといけないらしいし。

そのくせに、この人なかなかクセモノだ。なんか看護師さんナンパしはじめると、ちよつとイジワルだし。なんかムカついて手が出ちゃった。ごめんなさい。

でもハルさんという時だけは、少しだけ不安がゆるむ気がする。

三好春信——夏凜の兄さんで、今は大赦の出世頭、といった人だ。

不安に押し潰されそうな銀を救ってくれたのは、この人が初めてだったのか。同時に、表の銀の悪い面を育て上げたのも。

英雄色を好むというけれど、何か無性に腹が立ってきた。夏凜の兄というのなら尚更。銀のあのセクハラもこの人の影響だと思う。

眉をひそめながらも、更に御記を読み進めていく。

ハルさんのおかげで無事退院できた。義手義足もピッタリはまって、もう戦える。

けど、あたしは家に帰れないらしい。神樹館にも通えないらしい。神官たちが仮面の下から監視してくるヤシキで、――の時を待つだけ。

気が狂いそうだ。家に残してきた弟の様子が気になるし、神樹館の友達との約束をすっぽかしてるし、あたしのやりたいことは何一つできない。

何してるんだろ、あたし。何のために生きてるか、――と――  
が何のために生き残らせてくれたか、全然わかんなくなっちゃった。  
自由になりたい。やりたいことができる場所に行きたい。

病的な感情が、文を追うだけで伝わってきた。傷つける言葉じゃないのに、読み手の心を締め上げる。

それが銀の根本にある感情、ということか。嘘偽りを書く必要のない、銀の手記なのだから。

歪んだ感情が産んだ、歪んだ願い。だけどそれが銀が本当に望んだことなんだ。

銀はやりたいことをやった。世界を解放することも、私たちを立派な勇者にすることも。

でもそれはまだまだ途中。私たちの手助けが必要というのなら、その気持ちに応えます。

こんな状況でも、バーテックスは待つてくれない。予想より早く奴らは来るらしい。

あたしの勇者システムも、一人で戦えるようにバージョンアップしてる。不完全ながらも攻撃をシャダンするバリア、いろんなサポートをしてくれる精霊――、それに溜めたパワーを解き放つ大技――。

これなら十分戦える。――と――が守ってくれた世界をあたしも守れる。奴らを地獄に叩き落としてやれる。

このページの文の最後は、ペンが力んで字がぐちゃぐちゃだ。感情がそれだけ昂っていたのだろう。

言ったとおりだった。銀の本質は復讐。

今もなお、苛む傷の痛みを感じながら、自我を失いながら戦い続けているのか。それはあまりに哀しいと思うけど――

――夏凜が助けたいって言った意味が、ようやくわかった気がする。

押し寄せてきたバーテックスは全て狩り尽くした。けど、あたしの気分は少しも晴れなかった。もっとやらなきや。もっと殺さなきや、と。

何か右眼も見えなくなっただし、耳も遠くなっただし、声もかれちゃったけど、気にせず――の向こう側に進んだ。

そこは―――――だった。気持ち悪い―――――がせま  
い視界を埋め尽くすほどいるし、―――も―――もない―――――がどこ  
までも続いている。

その―――――がアリみたいに集合して、バーテックスの形を作っ  
てた。そうとわかると、キョム感と怒りと絶望がごちや混ぜになっ  
た。気づいたら集合体に襲いかかった。

限界なんて考えずに戦い続けて、あたしは力尽きた。考える力もも  
うなくて、もうどうでもいいやと投げやりになったところで、―――――  
―――が話しかけてきた。

―――ちよつと待って。

銀のあの姿は、邪悪な神に触れたからって言った。けど、この夕  
イミングで語りかけてきたのは精霊―――――？

何か重大なことが隠れている気がする。何か、誰かの作為があるよ  
うな。

あたしはどうしたいかって。このまま犬死にしていいいのかって。

いいわけない。そこら中にいるバーテックスを全部排除して、  
と　　にむくいなきや。そのためだったらあたしは悪魔にだつ  
て魂を売る。

は、その怨みや怒りを忘れるなど言った。それが  
らしさだと言った。憎むことをためらうなど、自分の感情に嘘をつく  
など。

としやべってたら、何でか大橋のほこらまで戻されて  
た。青い鳥が　　を連れ去っていった。

御記を読んでも謎が深まるばかりだった。銀自身も何が起こった  
のかわかってないんだし、私にわかるわけもないか。

青い鳥。確か、最初座礁船の訓練の時に銀が助けたのも青い鳥だったような。

それがわかったところで、謎が解けるわけでもないけど。

わかるのは、銀についての精霊は邪悪な存在だということだけだ。

やっちゃった。

安芸先生を、殴っちゃった。

今さら後悔しても遅いし、感情に嘘をつくのはもう限界だった。

だって、勇者をやめろって言われたんだもん。――と――の後任が選出されるから、あたしはもう戦うなって。

他の神官たちも同じ意見だった。はれ物をさわるような感じで、ヒクツな態度で。

誰もあたしの味方になってくれない。用済みだけど、捨てるってテイサイが悪い、そんなやつかい者だから。

ここにあたしの居場所はない。なら、ここにいる必要はない。

銀の心の闇は、ただ須美様や園子様を失った悲しみだけじゃなくて、自分の大切なもの全てが否定されたことが由来だっていうの？

支えが必要な時に、誰も銀のそばにいなかった。周りは彼女を拒絶した。心の闇を育てるには十分な養分だ。人を恨む理由としても不足ない。

感情を抑えられなくなって、非行に走って、それを後悔して——  
——これほどの絶望を神世紀で味わった人はどれほどいるのだろう。

もはやあたしは——　　じゃないらしい。

あれから死に場所を求めて戦い続けた。でも、いくら戦ってもあた



しは死なない。死ねない。――があたしを絶対守るから。

――を使えば身体のごくおかしくなるし、勇者になった時だけ代わりの機能が発動する。

なんだこれ。出来の悪い冗談だ。あたしの大切なものは全て消え失せて、自由や――らしさまで奪われて。

――だけがあたしにしゃべりかけてくる。一緒に――  
――。あたしのことをめちやくちやにした  
奴らに――しようって。

どうせこの先も勇者という名の――になるか、あてもなくさまよう死に損ないになるしかないし。案外、いい話だと思った。

――悪魔に魂を売るって言ってたけど、本当に売ってしまったうなんて。

心の弱さにつけこんでとんでもない要求を突きつけてくる。誰かが隣にいれば踏み切る一歩手前で止まったかもしれない。

けど、そんな人はいなかった。銀は鼻つまみ者だったから。

塗り潰された。"らしき"というところには、"人間"って文字が入るんじゃないかしら。だって、銀を人間じゃなくしたのは周りだから。

はあたしにとんでもない力をくれた。  
があたしの武器になるらしい。

なんでも、  
は人間の  
らしい。でも神樹様が現れてからの300年間、まるで  
のように  
を神樹様に  
、活動で  
きなくなっただって。

そのおかげで四国の人の  
は  
を介して神樹様に届けられて、浄化されてる。だから、四国はこんなに平和なんだって。

神樹様を介さない  
の力は、  
を  
、  
。その気になれば  
外のバーテックスを送り付けてくる  
らしい。

聞こえてくる。バーテックスに殺された勇者たちの  
が。

天恐になつて発狂した人の――が。逃げ切れずに――に食  
い殺された人の――が。――の後聞こえなくなった右耳か  
らいつも聞こえてくる。

あたしが壊れるのが先か、――のが先か。

やってやる。こんな無念の声を聞いて、黙つてられるほどあたしは  
落ちちやいない。あたしだって、何もかも――んだから。

このページは異様に修正が多かった。誰が修正したか知らないけ  
ど、一般人に見せてはいけない部分は消されている。

銀についた精霊が、やはりすべての原因なのだろう。でも、それが  
なければ私たちは銀に会うこともなかった。

私は誰も恨むつもりはない。前を見据えて戦うだけ。それしかで  
きない。

逃亡生活二日目。風のむくまま讃州の方まできた。

一人浜辺で瀬戸内の向こう側を眺めていた。――  
――にはまだ人間の――  
――が足りないらしいから、今は見て  
るだけ。

どうすれば四国の人が――  
――に――  
――かな、  
なんて考えてたら。同い年くらいの子が話しかけてきた。

名前は結城友奈。この辺の学校の子らしい。義手や義足が珍しかったのか、無邪気にいろいろ聞いてきた。まあ、声が出なくてしゃべれないんだけど。

家出娘だって砂に書いて伝えると、だったらうちにおいでよって  
言って結局一泊することになった。

何か、関係のない人まであたしの――  
――に付き合わせるのはイヤな  
気がした。友奈はちゃんとあたし…三ノ輪銀って人間と向き合っ  
てくれたから。

――や――  
――みたいに。

銀の心の支えは、やっぱり友奈だった。誰も立ち入ることのできない孤独をずかずかと踏み荒らしたのは、やっぱり友奈だった。

もし友奈と出会わなかったら、銀はただの復讐鬼となっていたのだろう。それも、全人類——いえ、全ての神々の天敵として。

友奈の穢れない心だから、複雑に入り組んだ銀の琴線に触れられた。何も知らなかったから、銀は何も背負わせようとしなかった。

友奈が銀を破滅に——自らを滅ぼす選択を強いたのかもしれないけど、銀が友奈を求めたのは疑いようのない事実なんだ。

さすがにバレた。あたしの逃亡生活も一週間で終了だ。

友奈の家まで迎えにきたのは、安芸先生……だった人だ。神官の装束をして仮面もばっちりつけて。聞いてみたら、あたしにした仕打ちを考えたら顔を向き合わせることもできないとか何とか。

友奈は意外に反抗した。帰りたくない理由があるって言って。そりゃ、帰りたくないよ？あんなところなんて。

でも、そこじゃないとできないこともある。

その言葉で、あたしは戻ることを決めた。安芸先生は、あたしを見捨ててなかったから。

友奈にありがとうって、言えなかったわ。

文が完全に塗り潰された部分があった。その文自体を消さなければならぬ理由があったというのか。

この時から、銀は何かを企み始めたことがわかる。漠然とした何かを、形作る方法を。

———というか、逃亡生活中まで日記をつけるなんて、銀にとってはもはや習慣だったようだ。まあ、おかげで銀のことを理解する機会を得られたのだけだ。

まさかこんな形で再会するなんて。

アップデートした義手と、見えなくなった右眼を補う義眼。その二つを適合すると、――と――の声が頭の中に聞こえてきた。

これはハルさんの計らいだって言う。実はあたしの友達二人は死んだわけじゃなくて、――の状態で生きてるらしい。それを知ったハルさんが、二人をあたしのサポートに宛ててほしいと進言したって、――が言ってる。

連中がどんな実験や研究をしてたなんてどうでもいい。ただ、もう会えないと思ってた友達と再会できて、あたしは嬉しかった。ハルさんには感謝してもしきれない。

ただ、二人はあたしのやろうとしてることにあまりいい返事をしない。

お二人は銀の復讐を止めたかったのだろう。それが銀を破滅させてしまうことを察知してしまったから。

夏凜のお兄さんは、銀にとっては本当にお兄さんみたいな人なんだ

ろうか。これだけ人間不信になった人に、これだけの信頼を得ているなんて。

一度、会って話を聞きたい。

先生の計らいで、中学校は讃州の方の学校に行くことになった。まあ、連中のあまり目の届かないところの方があたし的にも都合がいい。

そんな理由で、隠れみのつてわけじゃないけど、あたしは友奈の家で預かれることになった。まさか快く迎え入れられるとは思ってなかったけど、友奈もご両親もまるで家族みたいに接してくれた。

あたしのなくしたものが、どんどん取り戻されてきたみたいだ。うれしくなる反面、不安もどんどんふくれてくる。

あたしが気づいた…気づいてしまった――――の行き場がなくなるんじゃないかって。



一度気づいてしまった感情は、二度と消せない。大きくなったり小さくなることはあっても、完全に忘れることはできない。

銀が気づかせてくれたことだ。おかげで私は自分の感情と向き合って、私を支配しようとする衝動を乗り越えた。

でも、銀自身は衝動の波を越えられなかった。こんな波乱万丈な人生を歩んでも、私たちと同じ中学生なんだ。背負った十字架の重さは私なんかとは次元が違うし、克己できなくても仕方ない。

ようやく、銀が初めて本当の意味で“人間”と思えた。

私は銀のことを崇拜しすぎていたのかもしれない。私が越えなきやいけない理想と同じ意味を持つ人だったから。

けど、この日記を書いた人は間違いなく一人の女の子だ。世界の運命の鍵を持たされた勇者じゃなくて、私たちと同じただの人の子。

だから、あなたの気持ちをもっと知りたい。

と 後継者をセンチしてるって話だったけど、他に

も勇者を探す計画の話聞いた。

その計画の関係者の一人が、犬吠埼風先輩。入学式の直後に接触してきた。

ご両親が大赦の技術者だったけど、フリヨの事故で他界されて：：な  
んやかんやで大赦の協力者をやってるって。あたしの義手や義眼に  
も、犬吠埼さんの開発したものが使われてるってさ。

風先輩もあたしの事情を知ってるらしい。けど、一番驚いたのは、  
友奈がトップクラスの勇者の適性を持つてるってことだった。

——勇者になるのはあたしだけでいい。こんな——をやめ  
なきゃいけない、つらい思いをするのは。

風先輩と友奈には、戦ってほしくない。

風さんはずっと前から銀の協力者だったんだ。お互いの事情を分  
かち合って、同じ目線から協力するって。

風さんなら、今のこの状況をどう見るだろうか。どんな意見を持つ  
だろうか。

「いや、やめておこう。銀がもういないって聞かせるのは酷だ。風さんにとっても、銀は単なる協力者以上の存在のはずだから。」

風さんが「勇者部」を旗揚げした。メンバーは風さんと、あたしと、友奈。

名目上は世のため人のために善をおこなうって感じだけど、実態は勇者候補の囲い込みだ。まあ、あたしは勇者そのものなんだけど。

四国中と同じ成り立ちのコミュニティが作られてて、神樹様を選ばれた集まりが新たな勇者としてバーテックスと戦う。

それから。安芸先生のおかげであたしは勇者の力…いや、——  
——の力を没収されずにすんで、代わりに先代勇者の後継ぎの教導を任されることになった。

正式に決定するまで、あたしは風さんと友奈と一緒に、勇者部として活動する。あたしには休暇が必要だってさ。

——その休暇は、考え直しの時間だったのか、それとも準備期間だったのか。

結果は銀を板挟みにして追い詰めて、破滅の道を選択させた。誰も予測しなかっただろう。銀が命を賭けて世界を救う道を見つけてるんて。

私たちの教導の任も、最初は嫌々だったのかもしれない。計画の一つだったのかもしれない。

——だけど、銀と繋いだ絆は決して作り物じゃない。私はそう確信してる。

あたしの勇者システムは、独自の進化をしていた。

まず、神樹様の力が使えないから根本的にシステムの意味合いが違う。前までの勇者システムは神樹様から力を預かるって感じだったがけど、これはあたしに絡み付いた——の力を制御するためのもの。

——バリアなんてないし、——もない。てか、これから勇者になる人

用の分からは除外させた。――はあただけでいい。

その代わりに、――が周りの情報のサポートしてくれる。空間把握や敵味方の状態、簡単な未来予知まで身に付けた――はやっぱり頼もしい。

――も力を貸してくれる。どんな仕組みかは聞いてもわからなかったけど、物を手に触れず持ち上げたり、自分の身体を浮かせたり飛ばしたりしてくれる。二人が一緒ならあたしは無敵だ。

あと、――って必殺システムもある。初代の勇者様たちが使ってたらしいんだけど、精霊の力を直接身体にまとうって奥の手。

使えば使うほど――が溜まってくる危険な機能だけど、あたしにおあつらえむきの必殺技だね。

とはいえ、まだ準備は整ってない。安芸先生もいろいろアンヤクしてるみたいだし、整うまでは大人しくしよう。

---

それが、銀のあの姿の正体。

精霊――いえ、邪悪な神の力を直接宿した姿。絶望と憤怒を糧に暴虐の限りを尽くす鉛色の大蛇。

それが危険なものとかわかっていても、先祖返りさせたのは一体誰の

思惑か。先生？お兄さん？それとも――

この真相はわからない。調べる必要があるそうね。

やばい。

勇者部としての活動を、楽しんでるあたしがいる。誰かの役に立つことで嬉しくなってるあたしがいる。誰かの笑った様子を見て笑顔になってるあたしがいる。

あたしの感じた――――がどんどん薄らいでる。これじゃ

――なんてできなくなる。

――と――まで忘れていいって言ってくる。そんなのあたしに似合わないって言って。

ダメだ。忘れちゃダメだ。これを忘れたらあたしが生き延びた意味がなくなっちゃう。

けど、みんなと笑って過ごしたいって思うあたしが、――と――と一緒に戦ったあたしだったはずだよね。

わからない。自分自身のこと、わからない。

銀はこんなに迷っていたんだ。葛藤していたんだ。

世界への復讐を誓ったのも銀の本心だし、世界の幸せを祈ったのも銀の本音だ。どちらが偽物なんてことはない。二律背反の中で、必死にもがいていたんだ。

その答えが、あなた自身の破滅だなんて

とうとう勇者部のみんなと別れる時が来た。

と の後継ぎが決定したから、あたしがその教導として二人を育てる任務に就く。その前段階として、教育の舞台になる丸亀城で準備しないとイケない。

風さんは「あんたならどんな困難が来ても大丈夫、一人前の勇者部員だから」って太鼓判をおしてくれた。友奈は「会えなくなるわけじゃないから、さびしがることないよ」って再会を約束してくれた。樹は「わたしだって憧れる銀さんですから、絶対うまくいきますよ」って応援してくれた。

泣きたいのに泣けなかった。だって、これからあたしは――  
――のために戦うんだから。みんなの優しい言葉を無下に  
しちやうんだから。

イヤだ。怖い。離れたくない。みんなと一緒にいたい。独りになりたくない。

その思いに伝えて、あたしの聞こえなくなった耳から――の言葉が  
際限なく入ってくる。

やめて。違うんだ。大切な人がまだ世界にいるんだ。あたしに――  
――ないで

最後の方はもうぐしゃぐしゃだった。誰かに助けを求めるように、  
感情を直接白紙に打ち込むように。

――銀が救いを求めている。あの、自分が犠牲になることしか考  
えてないような銀が。



私の覚悟まで揺らいでくるじゃない。あなたの犠牲を貴んで遺志を継ごうと思つたのに。

読まなかつた方が、幸せだったのかもしれない。

でも、知つてしまったからには全部知る義務がある。どんなジレンマにすりつぶされることになつても、私はあなたの弟子であつたことを誇りに思います。

かわいい勇者の後輩が二人もできた！三好夏凜と、楠芽吹。二人ともクールだけど照れ屋さんで、似た者同士だから仲が悪いのかも。二人の仲を取り持つてあげないとね。

夏凜は意外にノリのいいところもあつて、実はすごく優しい子だと思ふ。芽吹はちよつと気難しい性格だけど、決して悪い子じゃない。優秀な二人と友達になれて、ほんとううれしい！もつと仲良くなりたくな。

バーテックスとの決戦が始まっても、今度は二人を絶対守り抜いてみせる。

――の二の舞にはさせない。

これは前に見たページだ。修正が入ってるけど。

だけど、全然違った印象を受ける。あの時は底抜けに明るいイメージを持ったけど、その背景を知ってしまうと悲壮感が増す。

必死に明るく振る舞っていたのか、自分の表面を信じて行動したのか。銀の心の拠り所はどこにあったのだろうか。

すごかった。夏凜も芽吹も。

まさかのされちゃうなんて思ってもなかった。どれだけ二人が勇者にかける思いが強いか身に染みだ。

なるべく戦わせないようにしようと思ってたけど、それは失礼だね。ちゃんとした志を持った勇者だから。あたしも真剣に向き合わないと。

だから、二人には仲良くしてもらわないといけない。勇者として成

功するために。ホントに―――――が来ても任務をまっとうできるように。

夏凜と芽吹をさえぎる壁。お互いに勝手に持った印象を山のよう  
に積み重ねた壁。これじゃお互いのホントの姿なんて見えない。

でも、壁を壊したり乗り越えたりできるのは本人たちだけ。あたし  
にできるのは、夏凜が芽吹の、芽吹が夏凜のホントの姿を知りたくな  
るようにお手伝いすることだけ。

よし！なんかすぐくやる気が出てきた！風さんみたく最高の先輩  
になれるように、気合い入れて頑張るぞー！

当初は私たちのことを戦力として数えるつもりはなかった、という  
ことらしい。

だけど、私たちが力を、意志を示した。私たちの本気は銀に伝わ  
た。

だから、銀は私たちを「本当の勇者」に育てようとした。バーテツ  
クスと戦う勇者じゃなくて、世界を守る勇者として。

―――自意識過剰かもしれないけど、私たちが銀の運命を変えて  
しまったのかもしれない。

丸亀勇者部の、初めての活動！プールの掃除！

お互いのことを知るには、やっぱり一緒に何かやるのが一番。ちよつと強引だけど、芽吹も夏凜も満足してくれたみたいだ。あと、あたしも眼の保養になったし。

でも、思わぬ逆襲にあった。遊びに行ったらまさか――や――みたいなオシヤレを押し付けてくるなんて。恥ずかしくて変身できなくなるどころだった。

やばい。最近二人のことしか考えられなくなってる。芽吹ともつとしゃべりたいし、夏凜ともつとふれあいたい。あたしのことをもつと知ってもらいたい。

ダメだ。それは。隠し通さなきゃ。どんなにつらくても、誰かに肩代わりしてもらうなんてダメだ。

あたしは助けられちゃダメなんだ。今日みたいな失態は二度と見せちゃダメだ。

楽しそうに書いていた前半から、焦燥感がにじみ出てる後半の言葉。

どれだけの虚勢を張っていたのか。暴走した後もひょうひょうとしていたし、それ以上弱みを見せなかった。どんな思いで私たちと向き合っていたのか、考えるだけで気が重くなる。

そして、私たちの存在が銀にとってどんどん重荷になっていったことを思い知らされた。私たちと銀の絆が深まる度に、銀の心の傷は苛む。

銀に寄り添えば寄り添うほどに彼女を傷付けるなんて。運命を決めた者はあまりにも酷い仕打ちをする。

そして、私の決意すらも揺るがす

二人の交流を妨げる原因は、たぶんお互いを知る方法を知らないか

らだと思う。だから相手に優位を取られないようにけん制的なことばっかり言っちゃうんじゃないかな。

必要なのは本音のぶつかり合いだから、お互いの腹の内を言い合う機会を作ろうと思う。この際おだやかな方法じゃなくても仕方ない。

話を聞く限りでは、夏凜の方がどうにかしようと思う気持ちが強みたい。口では言わないけど芽吹のことを尊敬してるみたいだし、腐れ縁って割り切ってるみたいだし。

逆に芽吹は消極的かも。本当の夏凜と向き合った時に、夏凜が本当に自分のライバルなのか、自分がそれにふさわしいのか知るのが怖いんじゃないかな。芽吹は慎重派だもんね。

もう少しまくいかなかったらどうしよう。夏凜はもうその気になったみたいだし。

二人を信じるしかない、のかな。

銀が下した評価を見て、少し恥ずかしくなってきた。

完全に心を見透かされていた。ようやく見つけた好敵手がいなくなるのが怖かったのも全部お見通しだった。

それに比べて夏凜は私の数歩先も行っていった。私よりずっと大人だった。――なんか、悔しい。

作戦は成功だ！

二人はちやんと手を取り合って、あたし抜きでバーテックス3体を倒した。何があったかはわかってないけど、二人とも一皮むけたみたいだ。

でも、――さんや――やが樹海に引き込まれるのは予想外。神樹様が手引きをしたのか、それとも――。それはおいおい調べることにしよう。

ともかく、勇者部合同企画は大成功！夏凜も芽吹も立派な勇者に成長したし！なんか嬉しくておかしくなりそう。

だから、守らないと。この大切な日常を。大切な人たちを。

もう自分に嘘をつけない。――するより、大事な人のことを思う。結局あたしは――になりきれないお人好しなんだ。

悲痛な心の叫びが、このページの文からは聞こえてこなかった。

心境に変化があったのはこの時だったのか。誰かを恨むより誰かを愛したいって。表の銀が自分の影を打ち払ったのか。

でも結局は

最悪だ。

まさか、勇者同士で――するなんて思ってた。なかった。

その上、夏凜は――まで使った。外させたはずなのに。

昨日思い描いた楽しい未来はたった一晩で崩壊しちゃった。あたしを――  
――大赦への――、夏凜が障害を持つ原因を作った  
あたしへの――。

聞かないようにしてた声が、またさらに大きくなってる。あたしの



頭をガンガン揺らす。全部――して、あたしも――べきだって。

何を弱音をこんなところに書いてるんだ、あたし。あたしは芽吹と夏凜の教導なんだから。

二人に心配されちゃいけないんだ、絶対。二人が自分の力で壁を乗り越えたんだから、あたしも。

このページは文面が混沌としていた。まるで前半と後半で別の人間が書いたように。

銀が幸福を求めるほどに、自分を突き動かしてきた決意と解離していく。感情が煽られる度に表と裏がせめぎ合う。

――過ぎたことを後悔しても仕方ないけど、銀に一言謝りたかった。あなたの事情も知らずに私たちのいざこざに巻き込んでしまった、と。

そんな不安定な心情の中で、私たちのことをちゃんと導いてくれたなんて――



て、二人の勇者に――――よう。それで三ノ輪銀のお役目は終わ  
りだ。外に――――されて、ようやくあたしは自由になる。

ようやくわかった、あたしが――――と――――に生かされた意味。答  
えにたどり着いたよ。一人で戦い続けてきた意味も。

――――と――――に見られたら、全力で止めて来そうだけど。忘れな  
いためのメモなのにもうこのページ見れないじゃんか、これじゃ。

---

自由になる。

表と裏の意志の、初めて一致した目標なんじゃないかしら。これを  
書き始めてからの銀はあらゆるものに縛り付けられていたから。

重責から解放されたかった。闇の中を一人で歩くのはもう限界  
だった。隣に誰かいてほしかった。

私や夏凜は銀の隣に立てたんじゃないのか。後ろを歩いて甘えて  
いただけじゃないのか。そう考えると後悔の念が大波になって押し  
寄せる。

私たちが、一番の理解者にならなきや行けなかったのに。

なんでだろ。楽しいのに悲しくなる。

せつかく芽吹が提案してくれて、三人で作った座椅子で卓を囲んでも、これまで通りに笑えない。

決めたじゃんか。あたしが二人にしてあげるべきなのは、そばにいらることじゃなくて未来を作ることだって。あたしの気持ちなんて関係ない。

——も——も自分の気持ちにウソをつくなって言ってくる。  
夏凜や芽吹なら助けてくれるって。

うるさい。今さら退けるもんか。二人の未来のためなら何もかも投げ捨てられるから。

自分で自分を追い詰めて、もはや逃げ場のないところまで行ってしまった。

自分の気持ちに嘘をつかなかったからここまで来れたのに、最後に自分を騙してしまった。そうすれば、――当然破綻する。

後悔が押し寄せる度に、その勢いは増す。私にも何かできたはずだと、過去の私が責め立ててくる。

その声を振り払うようにさらにページをめくった。

――のアイディアを拝借して、新たな救いのヒーローが完成した。

国防仮面。まさかあたしがやるなんて。

――はあたしの気持ちを多少はわかってくれたみたいだ。――  
――のを放っておけない、できることがあるなら勇者としてやるべきだって。

逆に――は頑固だ。あたしが――になるのは絶対認めないって。他の方法を探そうって。

仮にあつたとしても、それはあたしのお役目じゃない。だって、これ以上ひどいことがあつたら、自分をコントロールできる自信がないから。あたしに残された時間は多くはないから。

文面は銀の内面のことばかりになってる。誰かに聞いてほしかったけど、言えるはずもないことをここに書いていたということだろう。

これが書かれたのもごく最近のはずだ。国防仮面について触れているし。

あれだけ気丈に振る舞っていた銀だけど、この時にはもう疲弊しきっていたのか。早く楽になりたかったのかもしれない。

私は何て無力なんだ。そばでこんなに傷ついていた銀に気づいてあげられないし、気を遣わせてばかりで。

本当に大切なものに気づかないまま強くなった気になって

バカか私は。

---

“ありがとう、芽吹”

“ありがとう、夏凜”

---

その感謝の言葉を書いたページから後ろは白紙だった。これが最後のページだ。

どんな想いでこの言葉をしたためたのか。どうにかなりそうな気持ちの中で銀が残した最後の言葉が、私たちへの感謝。

どうして。どうして私たちに感謝したんですか

私たちのせいで、あなたは無用な苦痛を強いられて

---

聞きたい。今すぐ聞きたい。私たちはあなたに何ができたのかを。そんなに大切に想ってくれた理由を。

会いたい。あの憎たらしい笑い声を聞きたい。恥ずかしい思いをさせてくる手に触れたい。舐めまわすように見つめてくる目で見守らりたい。

「…っあ…、ううっ…」

何て苦しいんだ。大切な人に会えないってことは。胸が痛くて、目が熱くて、息が苦しくて。

「ああ…：うああああっ…ああああああっ」

涙を止められない。声が止められない。耐えてきた感情の波を抑えられない。

会いたい。

理屈とかそんなの関係ない。こんなお別れはイヤだ。

私は  
———  
!!!



## 結城友奈の章

それでもわたしは戦いたくない

『四国の皆さん、はじめまして。当代勇者の三好夏凜です』

『いきなりこのような形で会見することになって、皆さんも驚いてい  
ると思います。私も決して正しい方法だと思っ  
ていません』

『ですが、皆さんに知ってもらわなければなら  
ないことがあります。どうか、お聞き入れく  
ださい』

突然テレビの放送が切り替わって、行方を  
くらましたはずの夏凜ちゃんが声高らかに  
会見を始めた。

一緒に食堂にいた“防人”のみんなも、か  
つての勇者の会見に視線を集めた。

ただ一人を除いて。

「芽吹…見ないの?」

「…裏切り者の戯言に耳を貸す必要はない  
です。忘れましたか?あの日のこと」

一切視線を乱さずにうどんをすするのは

“あの事件”の後、半壊した防人隊を立て  
直すために“教導”として赴任した、もう  
一人の勇者“乃木芽吹”ちゃん。かけが  
えのない相棒が姿を表したのに、恨み言を吐  
いて眉をひそめた。

そのひどく苛ついた様子を見て、声をか  
けた風先輩も言葉を続けられなかった  
みたいだ。

「…樹ちゃんを大ケガさせたのは誰  
ですか?友奈にあんな心の傷を負

わせたのは誰ですか？…紛れもない、あの裏切り者です」  
「それは…」

芽吹ちゃんは淡々と言い放つ。夏凜ちゃんはもう敵でしかないと突き放すように。

右眼につけていた義眼が不意にわたし————  
結城友奈の方を向いた。

銀ちゃんがつけていたあの義眼。だけど、銀ちゃんみたいな優しさは感じない。

『…私を勇者として育てた勇者、私の大切な親友…三ノ輪銀は大赦に殺されました。…いえ、大赦の束縛から解放されるために人の身を捨て霧の広がる外の世界へ漕ぎ出しました』

夏凜ちゃんの後ろのモニターには、樹海でバーテックスと戦う銀ちゃんの映像が流れていた。どうやって撮ったかもわからないけど、今まで世の中に出回るはずのなかった光景が国民みんなの目に入った。

『外の世界には疫病ではなくて…見ていただいた通り人類を滅ぼす神の尖兵が蔓延っています。銀はいつ終わるともわからないそれらとの戦いに身を投じて、それでも笑顔でお別れを告げていきました』

『…私の右腕が見えますか？これは…銀が使用していたものです。勇者とは、身体中を大赦に改造され、誰にも称賛されないお役目を果たし、最後には用済みの烙印を捺されて放り出される機械仕掛けの化物。…それが、勇者なんです』

『…私は認めません。銀も、私も、人間です。勇者である前に、人間です。人間であることを示さないで、人間を愛した神樹様に報いることができませんか？』

『大赦は人の子を人間として扱うことを否定しました。私の親友も…

先代勇者の園子様も須美様も…大赦に見殺しにされたんです』

『……私は決めました。人間のあるべき姿を取り戻します。真実をねじ曲げて人間の真理に背いた大赦を粛清し、神の尖兵を打ち払います。本当の意味での自由を勝ち取ります』

『無論、私一人でできることはありません。国民の皆さん一人ひとりが立ち上がらなければ、成し得ることではありません』

『私たちの手で、脅威を取り除きましょう。300年前に奪われた人間の当たり前を取り戻しましょう』

『かつての日本国のように、自由を保証してくれる王が私の背中を押してくれました』

『どうか、皆さんも“天子”の下へおいでください。…皆さんの、力を貸してください』

一礼をして夏凜ちゃんは壇上から身を引いた。その後、夏凜ちゃんが天子と呼んだ人が上がる。

ヴェールみたいな幕が被り物から下がっていて、その顔は見えない。背は小柄な夏凜ちゃんより低くて、子供みたくに見える。

すう、と大げさに肩で息を吸ってから天子は語り始めた。

『はじめまして、当代勇者三好夏凜よりご紹介預かりました、大和の末裔にございます』

『この国の行く末を憂い行動を起こした志士が、わたくしの元に集いました。人のあるべき姿を取り戻そうという、その思いに…わたくしも同調する所存でございます』

『信仰は必ず己の中にあります。大赦にも、神樹様にもありません。人間として、何が正しいかを自分で考えて決断してください』

『もちろん、これまで通り大赦の教義の通りにするのも答えの一つです。それも信仰の形ですから。我々と道を違うことになっても自分を貫き通してください。自分を曲げてしまうのは神樹様も望んでい

ません』

『少しでも大赦の教義に疑問を持ったのなら…わたくし共“浪士”の下へお越しく下さい。勇者三好夏凜が必ず明日への道を切り拓きます』

テレビの向こうから拍手が聞こえる。テレビ局の収録現場にいた人たちが、二人の言葉に感動したのかもしれない。

「…手の込んだプロパガンダね。誰の入れ知恵かしら。テレビ局を占拠して電波ジャックするなんて」

「芽吹…あんた…」

「やつてることはテロリストと何ら変わりないわ。だいたい、天皇家の血筋はとうの昔の途絶えたのよ。あれは皇帝を騙る賊臣に過ぎない」

「…乃木教導の言うとおりですわ。ああいった輩を肅清することこそ、弥勒家の—— 鏑矢のお役目なのですわ」

「そうよ弥勒さん。これは鏑矢の—— 勇者のお役目。あなた達は防人として招集されたけど、私と行動を共にする時点で勇者よ。…今度は失敗したりしない。私が共にいるのだから」

芽吹ちゃんの力強い言葉に、防人のみんなから歓声が上がった。

夏凜ちゃんに唯一対抗できる勇者が、勇者になれなかった人たちが勇者と呼んだんだ。大赦の最高戦力になった芽吹ちゃんが味方なら、負ける気がしなくなるのもわかる。

——でも私は、乗り気になれなかった。

「夏凜ちゃんと戦うことに、抵抗はないの…?」

「…別に。任務の障害になるのなら単なる敵よ」

「…本気なの…? 芽吹ちゃん…」

「戦うことを望んだのはあいつよ。自分の信条を信じて私たちの前に

立ちほだかるのだから、否定する権利はあなたにも私にもない。お望み通りに殴りあつて、決着をつけるだけ」

「…怖いよ…。夏凜ちゃんも芽吹ちゃんも…。どうして友達同士で戦うのがイヤじゃないの…？」

「…結城。乃木はそういう立場にいるから…教導としてわたし達を引っ張っていかないといけないから」

「しずくちゃん…」

芽吹ちゃんが強情を張ってるだけなら、大きなわだかまりもないのに。

乃木家へ養子に入って、大赦の中で権力を持つて、公人として振る舞う。今の芽吹ちゃんは、しがらみに囚われて自分の気持ちを吐き出せないってことなの…？

わたしの肩に手を置いて首を振るしずくちゃん。芽吹ちゃんはなぜかその様子をじつと見つめていた。

「じきに上から指令が出ると思うわ。各自任務に備えて待機」

「了解！」

この話は終わりつて言うように芽吹ちゃんは号令を出した。うどんのつゆを一気に飲み干して食器を片付けた芽吹ちゃんは、何食わぬ顔で食堂を出ていった。

「…なんであんなに平気な顔してるのよ…芽吹は…」

「…風先輩も、おかしいと思いますか…？」

「そりゃ…そうでしょ。あんなだけ打ち解けあつた芽吹と夏凜が…どうして立場を変えて争うことになっても平静でいられるのよ」

「そう、ですよね…。わからなくなっちゃいました…芽吹ちゃんのこと」

「風先輩も違和感を感じてるみたいだった。

樹ちゃんに刃を向けてケガさせたのは間違いない。夏凜ちゃんだし、また敵対するってことになったら芽吹ちゃんは間違いない。怒ると思ったのに――

その出来事を思い出すと、今でもわたしは胸が痛くなる。

「敵襲!! 敵襲!! みんな起きろお!!」

大雨が降る夜中のゴールドタワーに、風先輩の叫び声が響く。あの日の戦いはそれが開始のゴングだった。

その日は銀ちゃんがなくなつてちようど一ヶ月経つた日。

わたし達防人隊は各地で現れた大赦の離反者“浪士”が起こすテロ事件の対応に追われていた。その日も一事件を制圧してタワーで休んでただけ――

つかの間の平和は、突然打ち破られた。

「風先輩! 敵襲つてどういうことですか!?!」

「わかんないわよ! ただ何者かがタワーの警備を破って侵入したって情報が!!」

「何者かって何者なんですかあ風先輩い! まさかバーテックスがこんなところまで!?! イヤだイヤだ袋のネズミじゃくん!!」

風先輩の号令にも負けず劣らず絶叫するのは加賀城雀ちゃん。袋のネズミっていう今の状況を正しく掴んでるみたいだし、まだ余裕があるみたい。

「うるせえ雀！テメエなら窓から飛び降りても平気だろうが！」

「雀ってのは名前だけなのお！てか敵がどんなのかわかんないのに外に一人でなんて自殺と変わんないよお！」

「まずは敵勢力の把握ですわね。犬吠埼隊長、わたくし弥勒夕海子が偵察に参りますわ！」

慌てはじめた雀ちゃんを一喝したのは山伏シズクちゃん。最初からしずくちゃんじゃなくてシズクちゃんが出てくるってことは相当危機が迫ってるのかも。

逆に勇み足になってるのは弥勒夕海子先輩。あの夏凜ちゃんと芽吹ちゃんと勇者の座を争ったって話だけど、少し空回り気味。

「一番危険な任務って意味になるけど任せていい？」

「どんとこいですわ！ようやく弥勒の名に恥じぬ功績をあげられるというもの！」

「友奈、弥勒と一緒に行ってくれる!?ここは二人一組で行動するわよ！」

「りよつ、了解です風先輩！」

「よろしくお願いいたしますわ結城さん！」

風先輩は冷静に状況を判断して役割を決めた。敵がどこにいるのか、何が向かってきているのかをわたしと弥勒先輩で調べてこいって。やっぱり風先輩は頼りになる。

弥勒先輩は気合い十分。早速防人の装備を起動して居住区を飛び出した。わたしもはぐれないように急いであとを追う。

「雀、樹、二人は亜耶の護衛に向かつて！戦えない亜耶を一人にはできないわ！」

「ええーっ！！風先輩っ私を守ってくれないんですかあ!？」

「あたしの側にいるより最後列の亜耶の所の方が安全だと思うけど？」

「謹んで承ります」

「あはは。雀さんは相変わらずだなあ」

「各班はエレベーターと階段を封鎖して！あたしとシズクで下層を回って遊撃するわ！」

「了解!!」

「どうして外からロープで降りるんですか弥勒先輩？」

「階段やエレベーターみたいな狭いところで鉢合わせするのは良くないですわ。わたくし達の任務はあくまで偵察。相手に気付かれるのはなるべく避けるべきですわ」

タワーの外壁からロープを伝って下る弥勒先輩とわたし。かなり息巻いてたから正面から行くものと思ってたけど、意外に手堅い作戦を取ってる。

窓から中の様子をのぞいても動くものは見えない。確認しては別のところを探すの繰り返し。難しいかくれんぼになりそう。

「足音の一つでも立てればよいものを…。敵は忍者か何かですか？」

「この雨の中じやさすがに聞こえないと思いますよ弥勒先輩」

「全く鬱陶しいですわ！もうこうなれば突入して後ろから追い回してやりますわー！」

「先輩先輩！さっきと言ってることが逆です！」



窓を蹴破って突入しようとする弥勒先輩を慌てて止める。ホントは成果を挙げたくてしようがないのをなんとかこらえてたみたい。止めないでくださいまし!と暴れる弥勒先輩をなんとか抑えてると、窓の内側に動くものが見えた。

暗闇に溶ける人影が一つ。非常灯に照らされた一瞬を見てラツキー!

「見えました弥勒先輩!非常階段を昇る人影有りです!今のところ一人みたいです!」

「でかしましたわ結城さん!…隊長!こちら偵察班!六階非常階段に人影有り!数はイチ!」

『了解よ弥勒!引き続き偵察を続けて!一人じゃないかもしれないから!』

「了解ですわ!」

「…はい!続いて階段を昇ってる人がいます!三人います!」

『結構多いわね!…!了解よ友奈。アタシとシズクが非常階段を抑えるから、二人は一番下から敵がいなか確認して!』

「了解です!」

風先輩があわただしく指示を出す。リーダーシップがあるから、ここでもリーダーを任せられる風先輩。勇者部部長の肩書はダテじゃない。

指示に従って地面まで降りてきた。外に人影は見当たらない。

「結城さん、よく見つけられましたわね。あの真つ暗の中」

「目の良さには自信がありますよ。ほら、エントランスに何かマントをつけた人が二人」

「…敵ですわ!後詰めが残っていますわ!」

弥勒先輩の絶叫であつちも気付いたみたいだ。外にいるわたし達の方を見てビックリして、その後詰め寄ってくる。

でも、ビックリしたのはあっちだけじゃなかった。

「えっ…あれって…国防仮面!?!」

「国防仮面?...ほ、本当に国防仮面ですわ!」

国防仮面。

つい最近まで銀ちゃんが変装して世のために善行をしていた『救いのヒーロー』。

制帽に軍服、目元だけを隠すマスクに短めのマント。年もわたし達と同じくらいで、まさに国防仮面の特徴と一致してる。

銀ちゃん――正確には鷲尾さんだけど――が流行らせたかったって言ってたし、本当にマネする人まで出て来たんだ。

「何者だ!」

「それはこちらのセリフですよ。夜襲なんてとんだ匪賊のやり方ですわね」

「防人の連中か!どこから来た!」

「壁からちよちよいとね。国防仮面さんはなにしに来たの?」

「国防仮面ではない!我ら『国士』は皇国の臣民!権威を恣にする大赦を粛清し、臣民の主権を取り戻す者だ!」

「こうこく?...しんみん?よくわからないなあ。

弥勒先輩ならわかるかな?」

「えっと、どういうことだろ?」

「結城さん、要するに大赦の敵ということですよ」

「えっ...敵なの...?」

「...そんな捨てられた子犬みたいな目でこつちを見るなあ!」

「この子やりづらいわ...」

国防仮面さんの一人がこめかみに指を当てて首を振った。やりづらいつてどういうことだろ？

ある意味スキだらけの国防仮面さん。それを弥勒先輩は見逃さなかつた。

ワイヤーでつながれた銃剣の切っ先が何枚にも分離して、やりづらいつて言った一人に巻き付く。

「捕りましたわ！」

「なっ！奇襲とは卑怯な！」

「まだ話してる最中なのに…」

「大人しくお縄についてもらいましょうか国士さん」

「なめるなよ国賊！」

言葉遣いが難しい方の国防仮面が銃剣のワイヤーを掴むと、怪力のままに引きちぎった。とても人間業とは思えない。

もしかして、この人たちも「勇者の力」を持つてるのかな？浪士たちの仲間なのかな？

「えっ、なんですのそのバカ力は！」

「これが未来を見据える臣民の力だあ！」

「!!弥勒先輩!!」

国防仮面さんはそのまま踏み出して一瞬ひるんだ弥勒先輩に拳を振りかぶる。

ほとんど反射的に身体が動いた。背負ってた防盾を構えて国防仮面さんに突っ込む。

拳と盾が大きな音を立ててぶつかった。

「ぬっ…！」

「うわっ！」

お互いに衝撃で後ずさりする。バランスを崩して尻もちつきそうなどころを弥勒先輩が抱きとめてくれた。

「結城さん、大丈夫ですよ!？」

「はい、ありがとうございます弥勒先輩！」

「よく訓練されているようね。乗り込んで正解かも」

「ここで叩けば大赦を守る盾はなくなるのだからな！」

「待つて待つて!もう少しお話を聞かせてよ!もしかしたら戦わないでもいいかもしれないしっ！」

「…何を言い出すかと思えば。防人が平和ボケしてどうするのよ」

クールな方がため息混じりに言った。

あつちの人たちは大赦が許せないって人の集まりかもしれないけど、この世界を守りたいって気持ちはわたし達と一緒のはず。

だから、戦う理由なんてどこにもない。

「…大赦は売国奴よ。神樹様の力が弱まった今、奴らはあろうことが生け贄を用意して天の神に赦しを乞う儀式を計画していた」

「えっ…生け贄…?」

「…私の親友がそうだった。そんな理不尽な理由で私たちの日常は破壊されたんだ」

衝撃のカミングアウトで、わたしは完全にフリーズしてしまった。

生け贄って

わたしの親友も、同じようなことになった。

「…次の生け贄になりたくないのなら、あなた達もさっさと大赦を抜けなさい。浪士たちはいつでも受け入れてくれるわ」

「ご忠告痛み入りますわ。でもそのようなあからさまな離間の計、見え見えでしてよー！」

「弥勒先輩!?!」

わたしが背中にかけてた銃剣を弥勒先輩が引き抜いて、すぐに銃弾で反撃した。

クールな方はあまり戦うのが得意じゃないみたいだった。弾を避けきれずに肩を撃ち抜かれた。

「ぐっ…」

「少しは人の話を聞け表六玉があー！」

「この弥勒夕海子、信じるものはもう決まっていますの。他人の話を鵜呑みにして信念を曲げることは致しませんわ」

「弥勒!?!…貴様、大赦の!」

大赦に名を連ねる名門という話は本当だったらしい。言葉遣いの難しい方は弥勒先輩にしか向いてない。大赦への恨みも本気みたいだ。

拳法みたいな技で弥勒先輩に向かっていく。対する弥勒先輩は、落ちて着いて銃剣を槍みたいに使って距離を詰めさせない。

「だっ…大丈夫…?」

それでもわたしは戦いたくない。

弥勒先輩が戦っていても、任務にそむくことになっても、こんなこととは間違ってるから。銀ちゃんが守りたかった世界はこんなものじゃない。

肩を押さえてうづくまる国防仮面さんに寄り添って、容態を確認する。戦えるほど元気は残ってないみたいだ。

「…あなたみたいな純真な人がどうして防人なんかやってるのよ…。使い捨ての兵士にされるのに…」

「…わたしの親友が守ってくれた世界を、わたしは守りたいから」

「あなたの親友も、生け贄にされたのね…」

誰になんと言われても、わたしはこの人とは戦わない。無事な方の肩を担いでエレベーターの方に向かう。

「応急処置しないとね。道具は上かな」

「…捕虜にする気？」

「結城さん！頼みましたわ！」

「させるかあ！」

「わたくしを抜けると思つて？」

「くそお！どけ大赦の犬があ！」

言葉の難しい方がすごい速さで駆け寄ってくるけど、弥勒先輩の銃剣のワイヤーが脚にからまってつんのめる。すぐに弥勒先輩が詰め寄ってきて、また近距離での差し合いを演じる。

「捕まえるつもりなんてないよ」

「あなたはそういうつもりかもしれないけど、上はそう思っていないわ」

「大丈夫だよ。わたしがなんとかするから」

「なんとかって…。…ホント、あなたは何なの？」

そう言ってもクールな方は抵抗してこない。半分あきめたような声をあげて、それっきり下を向いたままだった。

「ちっ、コイツら『オレ達』と同じような能力を持ってんぞ！」  
「とうとうあっちも『勇者の力』を使いだしたっていうの…！」  
「そうみてえだなあ隊長！大赦の離反者が相手だっていうんなら、不思議ってわけでもねえか！」  
「でも全然戦う気が感じられないっていうか…撒かれてるっていうか」

「エレベーターは押さえてるし、階段はここしかねえのに、何やってんだ？少しちよっかい出してすぐに逃げるって」

「さあね。相手に聞いてみないとわかんないわよシズク」

「あんまりいい予感やしねえがな…」

『隊長お！伝令！隊長お！』

『どうしたの雀、騒がしくして』

『うえうえうえからゆゆゆゆ勇者ががが』

「は？『勇者』？」

『か、夏凜さんがっ！夏凜さんが!!』

「樹!?夏凜がどうしたのよ!？」

「…私の一撃を防いだのはあんたが初めてよ」

「わっ…わわわ…」

紫電が防盾を穿つ。さつきまでの連中は盾ごと吹き飛ばされてたのに、この防人はなかなか根性があるようね。

「夏凜さんっ…どうしてっ…」

「久しぶりね、樹。…でも、立ち塞がるなら容赦はしないわ」

——三好夏凜は、大赦の離反者たちと志を共にする勇者となつた。

そう、私は大赦を裏切つたんだ。

浪士たちが作り上げた擬似勇者システム「国土」の初運用。その任務は防人と巫女の確保。彼女たちには防人たちの陽動に当たつてもらつてる。

ゴールドタワーの上層。神樹の祠がある部屋の前には二人の大赦の尖兵：防人が守護にあたっていた。その一人は私も知つた顔だ。

「どどどどうやってタワーの上に来たんですかあ!？」

「勇者の力を舐めないでもらえるかしら。外から昇れない理由なんてないのよ」

「ど、どうしてわたし達に攻撃してくるんですか…!？」

「樹が知る必要はないわ。死にたくなかったらそこをどいて」

今にも腰が抜けて道を明け渡そうとする盾の防人。能力の割に卑屈な性格というか。こういうやつが長生きするっていうけど、少し気に入らない。

逆に樹は一步も退く様子はない。決して気が強いわけでもないのに、使命のために自分を奮い立たせてる。

「と、止まってください夏凜さん！」



「私は本気よ。手加減なんて一切しないから」

盾を構えて扉を塞ぐ樹。なかなか覚悟を決めた顔をしてる。風のやつが見たら何て言うでしょうね。

でも、私には関係ない。風がこの後どんな顔をして私に向かってくるかなんて、私は気にしない。

戟の杭を盾の裏に引っ掛けて無理矢理樹から剥がした。

それなりの力で盾を支えてたみたいけど、真の勇者の力と銀の義手の前ではベニヤ板を剥がすみたいなものだし。

「あつ…！」

「風に言っておかないとね。樹がお利口さんじゃなくなったって」

戟を大きく振りかぶる。いくら防人の装備があっても、避けなければ間違いなく深手を負うのは樹だってわかってるはずだ。

それでも、立ち塞がる。両手を広げて仁王立ち。でも、まぶたを閉じて視線を切ってる。

怖いんじゃない。それでもこの奥にいる巫女を守りたいってか。

「…その強情さは風譲りかしら」

「…っ！」

「…あんたもこっち側だったらよかったのに」

少しだけ本音をもらしてから、戟を振り下ろした。

けど、振り抜くことはできなかった。

「うわわわ…！ヤバい威力う…！」

「受け止めた…？いい反応するわね、あんた」

もう一人の防人が柄の部分で盾で受け止めた。ギリギリと音を鳴らして障壁と盾が潰れるけど、紙一重で抑え続ける。

「い、樹ちゃんっ、逃げて！」

「雀さん!? な、なんで!？」

「わ、私もすぐ逃げるからっ、亜耶ちゃん連れて逃げてえ！」

「わわ、わかりました！」

この子の指示で樹は奥の部屋へ駆け出した。

頼りないと思ってたけど、———この子、見どころがあるわ。だから、力には力で向き合わなきゃいけない。

「へえ、カッコいいじゃない？先輩？」

「お、お褒めいただきありがとうございます勇者様…」

「だから、少し本気を見せてあげるわ！」

柄を押さえるのは上策と言ってもいい。刃に触れば盾ごと真っ二つだから。

ただ、私の手の内を知らないから次の攻撃は対応できない。

戦についた三日月型の刃が飛んで、障壁を突き破った。勢いはそのまま、防人の肩の腱を切断する。直後に防御は崩れて槍先が胴に入る。

「ぎい…う」

「剛毅なのは結構だけど、立ち向かう相手を間違えたわね」

「あ…うあ…」

「…あんたには二つの選択肢がある。このままのたれ死ぬか、私たちと一緒に来るか」

倒れ込んだ防人は虚ろな目で私を見つめる。

私はそつと右手を差し伸べた。私を勇者にしてくれたその義手で。

「…しに…くな、い…」

「…ええ。あんたは死なないわ。戦いの中で生き残るのよ」

防人は私の手を掴んだ。賢そうな判断をする、現実的なお利口さんだ。

そつと手を引つ張つて抱き寄せる。意識は薄いけど、傷は見た目ほど酷くない。かなり手加減したから治療すれば回復する。

「…この子を搬送してあげて」

「……はい」

後ろから来た国士のメンバーが影から現れて、盾の防人を抱える。私と連携して戦うにはまだまだ修練が足りないから、後ろで控えてもらってた。

——私と肩を並べて戦えるヤツなんて、あいつしかいない。

「この子も…私たちの、新しい仲間よ」

「は、はい！閣下！」

「閣下はやめて」

国士からはそんな仰々しい尊称をつけられる。銀が教導って呼ばれるのを嫌がったの、今ならわかるわ。

「…まさか三好夏凜様が…」

「亜耶ちゃん！行くよ！ここは危ないから逃げるよ！」

「…樹ちゃん。でも…本当に三好夏凜様なら…」

「知ってたの!?!夏凜さんがここに来るって!?!」

「…初めて神託を疑ってしまったの。あの三好夏凜様が、浪士たちに加担して神樹様に矛を向けるなんて…」

「…別に神樹様を裏切ったわけじゃないわ。神樹様から大赦を断ち切りたいただけ」

祠の前で佇む巫女と、隣で袖を引く樹。巫女は何か覚悟を決めた顔で私を見つめる。

「…本当に、三好夏凜様、なんですね」

「ええ。国土隊司令官の、三好夏凜よ」

「このような形でお会いするなんて…」

「あなたはまだ私を勇者って言う気？大赦に刃を向けた反逆者なのに」

「三好様がこの世界を守ったことは決して変わらない事実です。神樹様の力が失われないのなら、あなた様は勇者です」

この後に及んで巫女はまだ私を勇者として崇めるらしい。相当原理主義的で敬虔な信奉者のようだ。

一歩ずつ巫女へ詰め寄ると、間に樹が割り込んできた。

「…まだ邪魔する気？さっきの防人は一分持たなかったわよ」

「夏凜さん！考え直してください！夏凜さんは騙されているんです」

！」

「私が簡単に騙されるちよろいヤツって言いたいの？」

「えっ!? あ、いや、そういうことじゃ…」

「…私も覚悟決めてんのよ。何を捧げることになっても、銀を助けるって」

「えっ…銀さん…?」

銀の名前を出した途端に、樹の目から堅い意志は消え失せた。行方不明になって誰も一切の手がかりを持ってないから、樹も知りたいはずだ。

だけど、知る必要はない。知れば戦えなくなるから。

「…邪魔よ」

「うあっ…!」

石突で樹のおなかを打つ。石突から水が噴き出す圧で紙切れのように吹き飛んで壁に叩きつけられた。

樹はうずくまって動けなくなった。防人の装備があっても紙一重の一撃だから、もう立ち上がることはできないはず。

「かり…ん…さん…!」

「もう言葉でどうにかなる状況は通り過ぎてるのよ。言葉で騙しすぎたのよ、大赦は」

「樹ちゃん…!」

巫女は祭壇から立ち上がって私を掴みかかってきた。槍先が樹の首にかかった武器にだ。

大人しそうな見た目からは想像もできないくらい強い意志を感じる。一歩も退くつもりはないと目が訴えてくる。

「…武器を納めてください」

「…それはそちら次第ね。私が武器を降ろすのに十分な条件を提示できるの?」

「あなた達の目的は、巫女であるわたしのはずです。わたしの身を差し出せば、三好様も国土の皆さんも退いていただけますか?」

「…察しがいいわね。別に防人を暗殺しにきたわけじゃないし。神託ってそんなことまで教えてくれるわけ?」

「神樹様はすべてを見守ってくれています」

なるほど、浪士の連中がこの巫女————国土巫女を欲しが  
るわけだ。

浪士たちの中にも巫女の力を持つ人間がいたけど、防人や勇者と戦うのに役立つほどのレベルじゃないからね。

あまり作戦を長引かせるのは良くないから、さっさと用事を済ませよう。ここには勇者の資質を持ったのが「あと二人」もいる。国土たちじゃ荷が重いわ。

「…その言葉、取り消せないわよ?」

「はい。神樹様の民を守るのが勇者なら、勇者を守るのが巫女ですから」

「…あい聞き入ったわ、————巫女。丁重にお連れするわ」

「あや…ちゃん…?」

「…情けないわね、樹。戦う力を持たない巫女に守ってもらったこと、絶対忘れないこと」

私の後ろから来た国土に手を引かれてついていく巫女。国防仮面さん?とか少し抜けたことをいいながら。

戦を担ぎ直した私を樹がじつとにらむ。

————何よ、その目は。戦いに必要なのは手打ちなく相手の全てを否定する意志。そんな戸惑いの目を向けられても私の意志は

揺るがない。

「じゃ、風によろしく伝えておいて。私を殺したいでしょう、って」「かりん、さん…まつ…て…!」

「待たない。止めたいなら追いかけてきなさいよ」

「追いかけてきてやったぞコラア!!」  
「…!!」

意図しないところから銃弾と怒号が飛んできた。とはいえ、反応できない程でもない。一振りで銃弾を撃ち落とす。

入口には、殺気立った防人が一人私に銃口を向けていた。亜耶を連れた国士は反射的に亜耶をかばうように前に立つ。

「シズク、さん…?」

「別働隊かしら? 増援が早いわね。いい指揮官だわ」

「そりやどーも。うちの隊員を随分可愛がってくれたみてえだな!」

「ただ、一人で向かわせるのはナンセンスよね!」

口の悪い防人は言葉と同時に銃に付いた剣で突っ込んできた。骨のあるヤツもいるもんね。

ただ、相手が何なのか理解しないで突撃するのは蛮勇って言うのよ。

「だありやああ!」

「ふん!」

石突を床に叩きつければ水蒸気と共に地面が大きく揺れる。タイルが割れて浮き上がる。

——銀の右手の力を、私は少しだけ使えるようになった。自分の近くにある物だけ、あのサイコキネシスを使える。

足を取られた防人だけど、浮いたタイルを構わず踏み抜いて私に迫ってきた。これで怯まないなんて、覚悟の決まったやつじゃない。

「もらつとけえっ!!」

防人は最後に大きく跳んで上から銃弾を放つ。かなりの近距離だ、私だって反応できない。

弾丸は水蒸気に包まれた私の頭に到達した。そのまま貫通して床に穴を開ける。

「どうした勇者ア！油断してんのかア!？」

「油断ですって？誰が？」

「!?なにっ!？」

もちろん、弾丸で頭を撃ち抜かれたわけじゃない。そこにあった影は蜃気楼。銀の右手で水蒸気を操って相手の目を欺く、私の新たな能力。

完全に防人の背後をとった。戟の柄を相手の首にかけて、いつでも首をへし折れる状態だ。

「し、シズク先輩っ!」

「大人しく武器を置いてくれるかしら？亜耶の護送が終われば解放するわ」

「……ちっ」

少しでも抵抗すればやられるのを察知したのか、銃剣を手から放した。

この程度で遅れを取るわけにはいかないわ。私は勝ち続けなきゃいけない。全てを取り戻すまで。

「さあ、行った行った。下の部隊も引き上げるわよ」



「はい、閣下!」

「閣下はやめろって言ったでしょ。バカにされてるみたいだわ」

隊員も私や銀の戦果を聞いてるし、なんか持ち上げたくなるらしい。特に役職が決まってないからこんな敬称で呼ばれるわけ。

「国土をどうするつもりだ」

「別に。あんた達の実力の調査のついでに、有能な人材をヘッドハンティングしにきただけ」

「やってることは人攫いじゃねえか」

「そうね。まあ、私たちの考え方をちゃんと理解してくれる人しかいないけど」

「はっ。てめえの目は節穴かよ。ここで一番敬虔な信奉者の国土が、反逆者の思想なんて理解するわけねえ」

「…事実を知って葛藤することが、今の人間に一番必要なことよ」

口の悪い防人が減らず口を聞いてきた。この状況で詮索してくる辺り、なかなか見どころがあるけど。

このコトは敵として戦いたい。

「し、シズク先輩を放してあげてください。わたしは逃げませんから」  
「…あんたも亜耶に守られたってこと、ちゃんと受け止めなさいよ。何も守れなかった名ばかりの防人だって」

「言ってくれるじゃねえか。オレを見逃したこと、高くつくぞ?」

「ええ、何度でも向かってきなさい。戦う相手が腰抜けじゃつまらないから」

殺意のこもった視線が私に刺さる。いいじゃない、そうでなくちや。

撤収する国土の後ろを警戒しながら祭壇のフロアから出る。睨み合いと無音の緊張感で歩く以外のこと許されない状況だ。

脱出には塔の屋上から航空機で迎えに来ることになってる。この悪天候の中でも使いこなす浪士って、本当に航空機を忌避した大赦の出奔者なのかしら？

脱出口に向かう途中、亜耶が小声でつぶやいた。

「シズクさん、樹ちゃん、雀さん、ごめんなさい。わたしにはこうするしかありませんでした…」

「…いいえ。あんたはよくやったわ。二人も守れたじゃない」「え？」

このコは本当にできたコだ。自分が拉致されてるっていうのに、口を開けば誰かを慮る言葉ばかり。

巫女の力以上に、私はその部分に魅力を感じた。

「何も戦うことだけが力じゃないわ。人の心を動かす言葉、それは勇者の力なんかよりも価値のあるものだけわ」

「どういう、ことですか？」

「あんたの言葉に私も動かされたってこと。本当ならあの二人、死んでもおかしくなかったってこと」

「………………。三好様は、一体何を考えていらっしやるのですか…？」

「…これからの人間の未来よ」

私が見据える先には、―――必ず“あいつ”がいる。

そう思った瞬間。国土を迎えに改修中の屋上に待機していたヘリコプターの操縦席が何かに撃ち抜かれた。

「！伏せて！敵よ！」

「ふえ!?敵!？」

パイロットは霊的戦闘力を持たないただの浪士、つまり一般人だ。あの攻撃をもらって無事なわけがないだろう。

夜陰と大雨に紛れてヘリで屋上に来たんだ、防人たちにバレてるとは思えない。そして、この狙いなんて一切効かない状況である正確な一撃。

そんなことできるのは、私の知る限り一人だ。

「…須美様が騒ぎ立ててると思つたら…あなただったのね。夏凜」

「芽吹…あんたか。ここにいるなんて聞いてないけど？」

「えっ…芽吹…さま？」

妖しく義眼を光らす大赦の勇者、 “乃木芽吹”。

大赦にとつては、あいつこそ完成型の勇者らしい。上層部はあいつを祀り上げ、跡取りを失った乃木家へ養子に迎えられた。

今やあいつが大赦の首長。私が大赦を離れてから割と時間は経つけど、全権掌握してるのは殆ど確定だ。

つまり、浪士たちにとっては唾棄すべき国家の癌。私にとっては――

「亜耶を連れて下がって下さい。あいつは私がやる」

「御意！」

「反大赦勢力のリーダーか。急いで来た意味はあったわ」

「まあなんでもいいけど。あんたとまた全力で戦える。こんな僥倖他にはないわ！」

「私も全く同意見だわ。テロリストの下っ端との戦いなんて、何の面白みもないから！」

私にとっては、今も昔も変わらない。// たった一人の好敵手”だ。

二人とも喜々として踏み出した。もう言葉はいらない。あの時と同じだ。

ただ、芽吹も前に来たのは予想外だった。あの時よりさらに銃身が短くなった銃を片手で持って撃ちながら前進してくる。

「奇襲のつもり!?!」

弾丸を弾く防御はもう手馴れたものだ。戟を前でぶん回して障壁を作る。

弾丸が戟に触れた途端、爆発と突風が弾け飛ぶ。威力は羽衣のバーテックスの爆撃を超えるレベルだ。構わず突っ込めば私だって無事では済まない。

「このっー！」

爆発の反動を駆使して射線から外れるように跳ぶ。被害は最小限で済んだけど、出鼻をくじかれた。

よく見ればあいつの周りに二体の精霊が飛び交っている。喋るインコと、青い火の玉が衛星みたいに回ってる。

「高火力でゴリ押しして、私のお株を奪わないでくれる!？」

「自覚はあったのね。まあ私が手に入れた力はそれだけじゃないけど?。」

なおも前進をやめない芽吹。もう戟での攻撃が届く距離だ。

銃を脇に抱えて、利き手で腰に差した刀を引き抜いた。あいつの苦手な接近戦をあれで補ってるってことか!

「はっ!近接で私に敵うとでも!？」

「受けてみなさい、真なる勇者の剣を!」

もちろん受けて立つ。石突が雲を作り切り切つ先が紫電を走らせる。この二つが組み合わされば、戟が信じられないスピードで加速する。

このスピードはほとんど不意打ちに近い。あいつの反応速度や、須美様の加護があっても反応が間に合うはずがない。

戟から返ってきた手応えは、まるで鉄筋を叩いたような反動だった。

「ぐっ…紙一重ね…!」

「受け止めた…!?あの細身の刀で…!？」

「これが乃木若葉様の…『生大刀』の力…!私は須美様と若葉様の覚悟を負っているのよ!」

あいつはそのまま刀を翻して斬り上げた。槍先だけが宙を舞いガランと音を立てて床に落ちる。

武器を叩き折られた \_\_\_\_\_ !?

「…あんたも鍛錬をサボってたわけじゃないのね。安心したわ!」

「私は勇者よ。前線から離れても、誰よりも強くなければならない。道を示さなければならぬのよ!」

「それは私も同じよ!!」

折られた柄で、石突をあいつに向けて叩きつける。高圧の水流が吹き出して勢いをさらに増して。

とはいえ、さっきの一撃に反応してきたんだ。これも反応される。棍棒と化した戟の石突を斬り落として、左手の銃でさらに追撃してきた。

「そんな単調な攻撃、もう見切ってる!」

「そう? 私一人の攻めはそうかもしれないけど、ここには園子と銀がいる!!」

弾丸は突然急停止した。私に届く前に勢いをなくして床に落ちる。

銀の右手が展開して、紫の光を放った。――園子が、守ってくれた。

それだけじゃない。折れた戟の切っ先が浮かび上がり、月型の刃があいつの脚に肉薄する。

「ぐうっ…!」

「前にこんなことあったわね。銀と一緒に座礁船に乗り込んだ時に」  
「くっ…なんのっ!」

精霊がその一撃を防いだけど、衝撃は伝わる。あいつは膝を着きながらも銃口を向けて牽制を挟んだ。

牽制が来るのはわかってたから先に横に跳んで避けておいた。次はこっちが先手を取る番だ。

——  
って!?

「危ないっ!伏せて!!」

「えっ?」

「私が守りますっ!」

射線には亜耶と、付き添いの国土。屋上には遮蔽物がないから、銃撃は防ぎようがない。

必死の思いで叫んだ。どうか無事であつてくれと。

国土は亜耶をかばうように背中を見せて、炸裂する弾を数発受けた。

「うっ…くっ…」

「しっ、しっかりしてくださいっ…!」

「人質を守るくらいの良い心はあるのね」

「…!あんたっ、関係ない人を巻き込んで何よそれは!」

「知ったことじゃないわ。テロリストが一人死のうが一億死のうが」

私が見せた一瞬の隙を逃さず、あいつは刀を構え直して飛びかかってくる。対する私は槍先と石突の折られたただの棒しか持っていない。自分の身を守る手段がない。あいつの剣撃を受ければこの棒も一刀両断されるし、銀の右手も反応が間に合わない。

まずった…!と心の中で悪態をついた時。

「とおりやあああ!!」

「は…!?うわっ!!」

「え…友奈?」

夏凜ちゃんに刀を振り下ろす芽吹ちゃんを見て、身体が勝手に動いた。盾を構えて芽吹ちゃんに突っ込む。

芽吹ちゃんは一瞬驚いた声を出したけど、すぐに受け身を取って左手の銃を私に向けた。

「…友奈か。次々と増援を送る手腕、風さんは何とかやってるみたいね」

「ううん。風先輩の指示じゃないよ。この子から夏凜ちゃんの話聞いて上がってきたんだ…」

「…申し訳ありません、閣下。敵に助けられた挙げ句情報を吐いてしまうなど…」

手すりに寄りかかって夏凜ちゃんに謝ったクールな国士さん。応急処置はしてあるけどまだ十分には動けないし、とりあえず一緒に上まで来た。

国士さんの姿を見て夏凜ちゃんは先の折られた武器を降ろした。

「いえ、無事で何よりよ。もう要件は済んだし、引き上げるわよ」

「！待ちなさい夏凜！勝負はまだ終わってない！」

「…退いてやるって言ってんのよ。…部隊を預かる将じゃないあんたには、わからない判断だろうけど」

興味を失った顔をして、夏凜ちゃんはクールな国士さんと亜耶ちゃんとケガをした国士さんを抱えてタワーから飛び降りた。銀ちゃんみたいにサイコキネシスを使って。

取り残されたわたしと芽吹ちゃん。芽吹ちゃんも少しケガをしてるみたいで、夏凜ちゃんの後を追うことはなかった。

「…まさか友奈に邪魔をされるなんて」

「ダメだよ、芽吹ちゃん。…友達同士で戦うなんて…」



わたしが急いで屋上に昇ってきた理由もそれだ。芽吹ちゃんと夏凜ちゃんが命の取り合いをするなんて間違ってる。二人は銀ちゃんが全てをかけて守ってくれた大切な人なんだ。

命令に背くことになっても、芽吹ちゃんに嫌われても、こんなこと許しちやいけない。

「もう友達でも何でもないわ。銀の志を投げ出した裏切り者なんて」「銀ちゃんが見たら悲しむよ…。銀ちゃんはこんな心が伝わらない戦いなんて望まないよ…」

「…だけど、あいつは望んだ。…それが全てよ」

芽吹ちゃんは大雨の夜空を見上げて、夏凜ちゃん存在を拒絶した。

芽吹ちゃんの意志は簡単には曲がらない。信頼していた相棒に裏切られて、心を閉ざしちやったのかな。

でもそれじゃ、芽吹ちゃんはまた一人ぼっちになっちゃう。銀ちゃんも夏凜ちゃんもいなくなったら、誰が芽吹ちゃんに寄り添ってあげられるの？

———  
どんなに嫌われても、わたしは二人を仲直りさせた  
い。銀ちゃんの笑顔を取り戻してくれた二人を、また笑えるようにしたい。

銀ちゃんに何もしてあげられなかったわたしの、せめてもの恩返しをしたいから。

もう会えないなんて、イヤだよ…

「次の作戦の説明をするわ」

夏凜ちゃんの会見の日の夕方には、芽吹ちゃんが防人隊のメンバーを講堂に集合させた。

みんなは目を見開いてその説明を待つ。浪士たちがあんな会見をしたから、こつちも何かしたいと気持ちがあたふあつてるのかな。

また国士たちと戦わないといけないと思うと、わたしの気持ちは沈んでいく一方だった。

「今回、私たち防人から仕掛ける作戦を敢行する」

「私たちから?」

「ええ、後手後手に回ってるから。私たちが専守防衛のノロマじやないことを、あいつらにわからせる意味もあるわ」

「いよいよ弥勒の名を世に知らしめる時が来ましたわ!」

「…それくらいの気持ちでいてください。これは状況を一変させる作戦だから」

芽吹ちゃんが放つ言葉は、みんなの使命感や向上心を刺激する。ここにいるみんなが選ばれた特別な存在なのだ、納得させる力がある。

教導…このチームのリーダーとして、みんなを勝利に導いていく。勇者部で見せた、あの芽吹ちゃんのリーダーシップはここでも生きてる。

「ただ、なんでだろう。今の芽吹ちゃんからは、その時とは違った何かを感じる。」

「目標は

——拉致された防人メンバー及び巫女の奪還。浪士

の占拠した高知城に突入して、制圧しながら目標を救出する」

「高知城？そこにいるって情報はどこで？」

「内通者。浪士に紛れ込んだスパイがリークしてくれたわ。大赦も平和ボケしてるかと思っただけど、強かなことをしていたわ」

「奪還…国土たちを…」

「とうとうその時が来たのね。だけど芽吹、勝算はあるの？」

「真正面から行っても国土がいては勝機はほとんどないでしょう。だから、相手の行動を利用します」

「利用？」

「国土が出張ってきている間を強襲する。その為には、こちらで戦力を分断して陽動をしなければならぬ」

「あつちが何かやつてる間に、こつちも動くってこと？」

「そうです。…まあ、大規模なデモ活動の現場には必ず国土がいる。陽動自体は間違いなく成功するので、そこは問題ないです」

「…確証があるの…？」

「乃木教導と三好さんの間柄ですから。お互いに考えることは手に取るようにわかるということですよ」

「そういうことです。あの戦闘狂は私との戦いを楽しんでる。内乱状態をかきまわしてね」

「芽吹、それは邪推し過ぎでしょ。夏凜がそんな短絡的な考えで戦ってるなんて」

「100%ではないかもしれませんが、思ってもないことではないです。———そういうヤツなんです」

芽吹ちゃんは遠くを見つめる。ここにはいない夏凜ちゃんのことを思ってるのかな。…もう、仲直りできないって思ってるのかな。

みんなが考える夏凜ちゃんの人柄は、この混乱を楽しむ悪人ってイメージがついたみたいだった。やっぱりテロリストの親玉だったとか、勇者にふさわしくないってみんなが言い合う。

「そんなことないよ。夏凜ちゃんだつて、銀ちゃんと同じ未来を見てたはずだよ。それと真逆な道を突き進むなんて、きつと何か事情があるんだよ。」

「話を戻すわ。部隊は二つに――いえ、正式は三つね」

「え？他の作戦も展開するの？」

「…私は今回別行動を取るようになります」

「え？」

「奪還作戦を展開中に、私は大赦の首長として会見を開きます。浪士の会見に対するアンサーとして」

「そ、それでは乃木教導が指揮をとれないではありませんの？」

「はい。高知城突入隊の指揮は風さんに、デモ制圧隊は弥勒さんにお願ひします」

「は、はい！」

「…会見を被せる理由は何？防人の指揮より重要なこと？」

「これは国民へのメッセージですから。私たちが必死で連れ去られた仲間を取り返していると伝えれば、心象は固まります」

「…あんたも人のこと言えないくらいにプロパガンダしてるわね」

「この戦いの勝敗を決めるのは、最終的に国民一人ひとりの意思です。大義を示さないで討ち滅ぼしても、誰も納得しません」

「…なるほどね。芽吹の考えはよくわかったわ」

「芽吹ちゃんの言葉が、わたしと芽吹ちゃんの距離を伝えてきた。」

「すごく遠くに行ってしまった気がした。勇者部にいた銀ちゃんの弟子の楠芽吹ちゃんは、もう私の見えない場所に行ってしまった。」

「今わたしが見ているのは、大赦のトップの、乃木芽吹ちゃんなんだ。」

「日時は土曜の17時。作戦の詳細はモバイルに送っておいたから各自確認して。質問があれば直接私まで」

「了解！」

号令を最後に、みんなが送られた作戦の内容をチェックしはじめた。みんな生き生きした顔だ。

仲間を取り返すなんて、ホントに勇者みたいだもんね。

——わたしがみんなとは違う表情をしてるのに気付いたのか、芽吹ちゃんはわたしのところまで来て声をかけてきた。

「友奈。…気が乗らないかしら」

「え？ううん、そんなことないよ！あっちにいつちやった仲間に見えるなんて、嬉しいに決まってるよ！」

「…そう。…でも無理はしないでね。この…国土と戦う任務は友奈には適してないって私もわかってるから」

「大丈夫だよ芽吹ちゃん。私は大丈夫だから」

芽吹ちゃんは何かとわたしを気にかけてくれる。この前だっと思いつきり命令違反しちゃったけど、芽吹ちゃんがうやむやにしてくれた。…反省はしてます。

芽吹ちゃんに心配ばかりかけちゃいけないね。わたしも世界を守る防人の…勇者の一人。しっかりがんばらないと。

「…友奈はデモ制圧隊に行ってもらうわ。弥勒さんが指揮官だと手が回らなくなりそうだから、友奈が主力になってくれると助かるわ」

「任せて芽吹ちゃん。今度はちゃんと戦うから」

「…何度も言うけど、無理しちゃダメよ」

「…うん」

心配症だなあ、芽吹ちゃん。そういうところは風先輩や銀ちゃんよ

りおせつかいかも。

でも、どうしてだろう。芽吹ちゃんを遠くに感じるのに、こうしてわたしの心の一番近いところに来てくれるのは。

芽吹ちゃんは少しだけ微笑むと、会議では一言も話さなかった仮面をつけた神官さんと話し始めた。あの神官さんは、基本的に芽吹ちゃんとしか話さない。

監視役、つて風先輩は推理してたけど。でも、芽吹ちゃんの様子からは信頼関係が出来てるように見える。

わたしが考えてもわかんないや。

「…あ、お姉ちゃん。友奈さん」

「樹、調子はどう？」

「今日は愛媛のみかんを持ってきたよー」

あの戦いで大ケガをした樹ちゃんは、もうゴールドタワーの医療施設で暮らせるくらいには回復したみたい。

わたしと風先輩の毎日の習慣。樹ちゃんのお見舞いに行くのが何かと楽しみになっていた。

「ありがとうございます友奈さん。だいぶ動けるようになりました！」

「内臓へのダメージは紙一重だったっていうのに、回復が早いわねえ」

「勇者、になったからかな。精霊様々だよお」

樹ちゃんにも勇者システムが適応されたのはケガをした後。ホントなら内臓破裂で命を落としてもおかしくなかったけど、勇者システムを作動させると何事もなかったみたいによくなった。

ベッドに腰をかける樹ちゃんの頭の上には緑のもふもふ…木霊がちよこんと乗ってる。樹ちゃんが頭から下ろそうとしても気づいたらこの位置にいるらしい。

「でも、その様子じゃ次の作戦には間に合わないわね。リハビリもあるし」

「そっかあ、残念。夏凜さんに聞きたいことがたくさんあるのになあ…」

「…今度会ったらタダじゃおかないわよ。落とし前をつけてやる」

「お姉ちゃんったら、そんな顔しないで。…夏凜さんにだって、事情があるんだし」

「関係ない。樹にこんな大ケガさせたんだから」

「…銀さんを助けるって、夏凜さん言ってたんだ」

「…え？」

ふとギモンの声が出てしまった。風先輩じゃなくて、わたしの口から。

銀ちゃんの行方は、誰もわからない。丸亀勇者部の最後の戦いが終わってから、全く銀ちゃんの情報は回ってこない。

銀ちゃんは、「待ってて」って言った。でも、できることとならすぐに会いたい。

会って…謝りたい。銀ちゃんがどんな思いで戦ってたかも知らずに、勝手なことを言っただけで苦しめてたから。

「夏凜さんは何か銀さんの情報を知ってたのかも。だから大赦を出て銀さんを助けるために、浪士側に入ったんだと思う」

「そうかもしれないけど。あいつがやったことは大赦への…国民全て

への反逆よ。許されることじゃないのよ」

「…でも、勇者、なんだよ？神樹様は夏凜さんから力を取り上げなかったんだよ？」

「…もうわけわかんないわよ」

あれだけのケガをさせられたのに、樹ちゃんは夏凜ちゃんを恨んだりしてない。むしろ戦わずに、一緒に銀ちゃんを助けに行きたいって目が言ってる。

風さんは夏凜ちゃんを許すつもりはないみたいだ。夏凜ちゃんが裏切ったことより、樹ちゃんを傷つけたことに怒ってる。

仲良し姉妹の間に、少しミゾができてる。

わたしは、どうなんだろう？銀ちゃんを助けない？それとも銀ちゃんの世界を守りたい？

「…今度会ったらわたしが聞いてみるよ。銀ちゃんのこと」

「友奈まで。また命令違反する気？」

「相手から情報を聞き出すのも立派な任務です。芽吹ちゃんならオツケーって言うってくれるはずですよ」

「…厳しいんだか甘いんだかわかんないのよね、芽吹って。この前も友奈の命令違反をもみ消しちゃうしさ」

「…それは反省してます」

風先輩にクギを刺された。芽吹ちゃんがトップになったとはいえ、風先輩の隊員からの信頼は強くて実質現場のリーダーになってる。芽吹ちゃんが許しても風先輩はよく思わないだろう。

芽吹ちゃんは、何か知ってるのかな？銀ちゃんのこと。

「樹ちゃんは芽吹ちゃんには聞いた？銀ちゃんのこと」



「いえ、お見舞いには来てくれたんですけど忙しそうで」

「芽吹はどう思ってるのかしらね。それはあたしも気になる」

「じゃあ、今から聞きに行ってみますね」

「うん、お願い。あたしだって銀がどうしてるか心配だし」

「友奈さん、お願いします」

尊敬してた銀ちゃんの行方を、芽吹ちゃんが気にしてないはずがない。何も情報を持ってないとしても、芽吹ちゃんがどう思ってるかを知りたい。

勇者部の絆を、絶対に取り戻したい。

芽吹ちゃんは隊員たちの自主トレに付き合っていた。みんな次の作戦に向けて、少しでも力をつけようと息巻いている。

「弥勒さん、腕を上げましたね。後は戦況を見て適切な選択をする判断力を養えば」

「うっ、精進致しますわ…」

「いつまでも鉄砲玉のままじゃ、上には昇れませんから」

弥勒先輩と芽吹ちゃんが実戦形式で打ち合っていた。国士を想定して、芽吹ちゃんは防人の装備じゃなくて刀と銃で相手していた。

弥勒先輩は戦闘力なら防人の中でもトップクラスだ。でも、芽吹ちゃんに銃剣をかすらせることすらできてない。攻め立てる弥勒先輩を軽くあしらうように受け流して、当てられるはずのタイミングでけん制程度にすましてる。

「：少し休憩しましょう。弥勒さんには実戦より座学が必要です」

「：承知しましたわ。芽吹さんも、本当に変わりましたわね」

「はい。：私の師の影を追ってるだけですけどね」

「三ノ輪銀様、ですか」

「：私がこうして勇者を続けているのも、銀が守ってくれた世界のために尽くそうと思ったから、なんです」

——芽吹ちゃんの口ぶりは、まるで銀ちゃんはもういない人みたいなものだった。

本当に、銀ちゃんはもういないの：？本当にもう会えない人なの：？

「乃木教導もお休みになってくださいまし。ずっとわたくし達の相手をしてお疲れでしょうし」

「：そうですね。私も、皆も、代えの効かない存在ですからね」

「茶菓子のお準備をいたしますわ。アルフレード！」

——ここに雀ちゃんがいたら、「せつかくいい雰囲気だったのに架空執事のせいで台無しだよ！」ってツッコんでたと思う。

国士に：夏凜ちゃんに連れ去られた隊員は巫女の亜耶ちゃんを入れて四人。仲が良かった隊員も、四人がいなくなって悲しんだり怒ったりしてた。

わたしも悲しいし、さびしい。みんないい子だったのに。これから仲良くなれると思ったのに。

やっぱり人と人が戦うのはダメだ。悲しい思いをする人がこんなに増えちゃう。

「名字変えたから実質別人って理屈なの芽吹？」

「乃木家の人間として恥ずかしくない立ち居振る舞いをしないとって思ってる」

「それだけじゃないでしょ乃木さん。なんか、こう、丸くなったよね？」

「皆もあの人の下で勉強したらこうなると思うわ」

「すごいね銀サマ効果。国防仮面イコール三ノ輪銀って都市伝説も出てくるくらいだし」

「もしかして、恋!?!恋なの!?!」

「結婚できるとしたら、私はあの人の思想と結婚するわ」

何でか一部の隊員が色めき立った。コイバナ? っていうのかな。そういうのは風先輩に聞かないとわかんないや。

その中には、勇者の座を芽吹ちゃんと争った子——芽吹ちゃんに散々叩きのめされた子たちも入ってた。

芽吹ちゃんがゴールドタワーに来た当初は毛嫌いしてたのに、今ではそういう話をできるくらい仲になってる。

わたしは銀ちゃんと一緒にいた時しか知らないけど、その頃の芽吹ちゃんって相当荒れてたのかな? あのとときの銀ちゃんみたいに。

「お待たせしましたわ皆さん。お茶会の準備が整いましたよ」

「弥勒先輩もサンキューです! 雀ちゃん拉致られてガツクリきてたけど、芽吹ちゃんのおかげで雰囲気良くなったよね!」

「最初はヤバいのが来た! って思ったけど、蓋を開けたら究極の美少女戦士だった」

「弥勒も芽吹ちゃんが来てからメキメキ強くなったし! 国士なんか私たちがブツ飛ばす!」

「…ありがとうございます、弥勒さん。弥勒さんが仲を取り持ってくれたおかげで、こんなにいい関係を築くことができました」

「礼には及びませんわ。これが弥勒家に名を残す者の務めですので」

弥勒先輩も芽吹ちゃんの姿を見てちよつとだけ変わったと思う。目標を見つけたというか、気合いが入り直ったというか。

イヤでも人目につく任務だから弥勒先輩のやる気は下がる心配がないし、追いかける目標がすぐそこにいるのはモチベーションが上がると思う。

芽吹ちゃんと夏凜ちゃんもそうだったはず。

競い合うって、ホントはそういうことなのに。

「結城さんもこちらへいらっしやい。今日はフルーツサンドを用意致しましたわ」

「あ、はい！いただきまーす！」

「亜耶ちゃんがいない今、友奈ちゃんがこの隊のマスコットよねー」

「芽吹が守りたくなるのもわかるわー」

弥勒先輩に呼ばれてクリームがたっぷり入ったフルーツサンドをいただく。料理上手な弥勒先輩の一品は紅茶によく合う。

テーブルを囲んだメンバーもみんな笑顔があふれる。弥勒先輩のお茶会、わたしは好きだ。必ずみんな同じ気持ちになれるから。

芽吹ちゃんだって、満足そうにお茶を飲んでほほえんでる。

「そういうんじゃないけど…。友奈には勇者の力がある。些末事の処理は私に任せて、その力を存分に発揮してほしいのよ」

「言われてるぞー友奈ー」

「あははは…芽吹ちゃんに迷惑をかけないよう、がんばります！」

芽吹ちゃんの理想のリーダー像は、裏の仕事を全部片付けてメンバーには余計なことを考えなくていいようにすること、なのかな。

風先輩みたいに全部をみんなで作るってスタイルじゃなくて、芽吹ちゃん一人に余計な負担を集中させる。…芽吹ちゃんは、大丈夫なのかな。

悩んだら、相談。少しでもその負担を聞いてあげないと。

「でもさ、友奈が人を殴るなんて想像できないよね」

「そうそう。まだ防人の装備の方が戦えるんじゃない？直接殴るわけじゃないし」

「武道の心得はあるよー？」

「相手があの国防仮面軍団でも？」

「悪趣味ですよ、アレ。救いのヒーローをテロリストに仕立て上げるなんて、銀サマもプンプンじゃないっすかねー？」

「…どうだと思う？芽吹ちゃんは」

「どうって…。私に聞かれてもただの敵としか答えられないわ、友奈」

うまくはぐらかされたかな。

銀ちゃんの話題になると、何事もなかったかのように受け流す芽吹ちゃん。何回か銀ちゃんについて聞こうと思ってトライしてたけど、毎回上手く切り抜けられちゃってたし。

何か知ってるのかもしれないし、何も知らないから何も言えないのかもしれない。でも、今度は何とか聞き出さなきゃ。

「そうね、ただの悪趣味な敵よね。次は絶対ブツ飛ばす！」

「ついでに三好夏凜もね！」

「やめて。三好夏凜との接触は禁止。この命令だけは絶対守って」

「わかってるって。アレの相手は芽吹ちゃんじゃないとできないって」

「闇堕ち勇者を討つのは元の仲間じゃないとね。そういうストーリーをみんな望んでるから」

「そうね。決着は、私がつける」

「その露払いは、わたくし達にお任せあれ」

芽吹ちゃんがみんなを勇者として自立させようとしてるように、防人メンバーも芽吹ちゃんと夏凜ちゃんの決着に協力する気だ。リー

ダーとメンバーがお互いに気づかう、チームとして理想的な関係。

—— 応援したくなるはずなのに、わたしはやっぱり止めたくなる。

この戦いが終わってしまったえば、芽吹ちゃんと夏凜ちゃんの関係は絶対に元に戻らなくなる。

銀ちゃんがいたら、どうやって仲直りさせたんだろう。

夕食の時間。

食堂でわたしはしずくちゃんとラーメンをいただいた。

「…乃木と三好の決着…か」

「…しずくちゃんはと思う？ やっぱり本人同士が納得のいくまで戦うしかないと思う？」

「…乃木の師匠なら、殴ってでも止めたと思う」

「銀ちゃん？…あ、しずくちゃんも神樹館小学校にいたんだっけ」

「うん…。…間違ったことをする友達がいたら、何がなんでも止めると思う…。三ノ輪は…正義の勇者だったから…」

「…そっか」

しずくちゃんには二人とも間違ってるように見えてるみたい。わ

たしと同じ意見を持つてる人がいてくれてよかった。

「でも…乃木のことは…応援したい。乃木も…立派な勇者」

「そう、だよ。わたし達を元気付けてくれたのは芽吹ちゃんだもんね」

「…乃木が来てくれなかったら…このチームは崩壊してた…。わたしが見つけた、…大切な仲間が…」

しずくちゃんは、このチームを誰よりも大切に思ってる。しずくちゃんにとつて、みんなは家族みたいなものだから。

それを守ってくれた芽吹ちゃんに感謝するのは…当たり前なのかな。新参者の芽吹ちゃんにも、しずくちゃんは心をすぐに開いたから。

「…シズクもわかってくれた。乃木はわたし達を絶対勝たせてくれるって…」

「戦うことではかわからないこと、って言ってたっけ。…わたしにはわかんないや」

「わたしも…。…シズクが乃木と戦って満足したことしか…」

あの事件からしばらくしずくちゃんは戻ってこなかった。ずっとシズクちゃんが出てて、夏凜ちゃんへ借りを返すためにずっと一人でトレーニングしてた。

シズクちゃんの怒りを治めたのは、芽吹ちゃんだった。シズクちゃんと模擬戦をして、一方的に押し勝ったらしい。それも同じ防人の装備を使って。

感情的になつて集団行動を乱すシズクちゃんを、芽吹ちゃんは力でだまらせた。

芽吹ちゃんに勝てないのなら、夏凜ちゃんには勝てない。でも、チームとしてなら夏凜ちゃんに勝つことができる。その言葉を聞いて、シズクちゃんは満足して引っ込んだらだつて。

今改めて説明しても、何で満足したかわかんないけどね。

「…仲直りしてほしいんだ。芽吹ちゃんと夏凜ちゃんに。そんな立場にはいないのはわかってるけど…」

「…仲が良かった頃の二人って…どんな感じだったの…？」

「…一言で言えば、ライバルかな。二人でバーテックスを倒すためにお互いに競い合って。それが二人を強くして。二人の信頼を確かなものにして。…銀ちゃんから聞いた話だけだね」

「信頼、しあつてたんだ…」

「うん…。ずっと競い合って強くなりたいて…」

「…その結果が、こんなことに…？」

競争がいきすぎて、戦争になってしまった。

二人の中では、これも今までと同じ競争なのかな。それなら二人はまだ信じ合ってることになるけど…。そうであつてほしいと思ってしまう。

でも、やつちやいけないことの一線を越えてる。銀ちゃんがゲンコツするくらいに。

わたしがやらないとダメ、なのかな。

「…まだ強くならなきゃいけない理由がある、のかな…」

「…鉛色の霧。…乃木や三好には、まだ倒さないといけない敵がいるのかも…」

「…それって」

わたしも見た。鉛色の霧を出して進む、鉛色の船を。

樹海を腐らせた、鉛色の大蛇を。

大蛇につながれた、わたしの大親友を。



「…ううん、何でもない。芽吹ちゃんに聞かないと、霧のこともわかんないもんね」

「でも、禁則事項の一点張り…」

「何なんだろうね、あの霧」

やめよう。これ以上考えるのは。

だって

夏凜ちゃんは銀ちゃんを助けるって言った。

芽吹ちゃんは銀ちゃんをもういない人って思ってる。

芽吹ちゃんが銀ちゃんの命を奪おうとしてるなんて、ありえない。そのために強くなりたいたいなんて、思うわけがない。

そんなの、勇者じゃない。

悪い方向に考えが行くのを必死で戻そうと視線を上げる。ふと、テレビに目が行った。ニュース番組をやってる。

『国防仮面は今日も慈善活動を行っていたようです。暴徒たちとの衝突でケガをした市民の救護をしていたとの投稿が多数寄せられています』

「あれ…国土の人かな？」

「たぶん…」

「…やっぱり、ほんとはいい人たちなんだよ」

「…でも、大赦の敵。…争いをたきつけながら市民を助けて…マツチポンプとも言える」

「…わたしの会った国士さんは、ちゃんと世の中のことを考えてる人だったよ」

「…相手が絶対悪じゃないのは、本当にやりづらい…」

銀ちゃんがなくなってから、国防仮面の活動は止まらなかった。まねする人がいたのかなと思ってたけど、正体は国士さんだったわけ。

銀ちゃんの考えをちゃんと引き継いでるのなら、なおさら国士さんは悪とは思えなくなっちゃう。

『続いて、エネルギー問題に立ち向かうベンチャー企業が成果を上げました。高知沖に眠る燃料資源の実用化に成功したようです』

『三好エネルギー社CEO、三好春信氏が取材に応じてくれました』

「三好…？浪士の勇者の関係者…？」

「えっ、夏凜ちゃんのお兄さんだよ！」

「そうなの…？」

「銀ちゃんのお世話をしてた人だよ！大赦を辞めて起業したんだ！」

大赦を辞めたって聞いた時はイヤな予感がしてたけど、浪士側に行ったわけじゃなかったんだ。

でも、夏凜ちゃんのお兄さんって知られたら、信用がなくなっちゃうかも…。

「…そのことについては…キャスターも追及しなかった。…アンタツチャブル」

「この戦いとはもう関係ないってことなのかな」

「でも…大赦にも浪士にもパイプのある人…。…重要人物には、変わりない」

「芽吹ちゃんは知ってるのかな？知ってたら何かすると思うけど…」

銀ちゃんから聞いた春信さんは、妹をかわいがる気前のいいアニキ。銀ちゃんも信頼をおくエリートさんだ。

夏凜ちゃんが大赦を裏切って、春信さんは何を思ったのかな。銀ちゃんがいなくなつて、大赦に嫌気がさしたのかな。

『続いては、匠がその技を振るおうとしています。楠工務店が同業者を先導して復興事業に名乗り出ました』

「楠って…芽吹ちゃんのお父さんかな？」

「…乃木の？」

「うん。乃木家に養子に入る前は楠だったよ」

「…確かに。職人気質みたいなところは乃木にもあるし」

芽吹ちゃんの手先の器用さは、職人さんの血が流れてるから？ガンコなところもそれっぽい。

『ご子息の芽吹さんが勇者として大赦の防衛隊の指揮を取っていますし、父親としても世の中のために何かしたいと思ったということでした』

「やつぱり。すごいなあ、芽吹ちゃんもお父さんも」

「…乃木家に娘を送ったから、その発言力が増した…とか？」

そうだとしたら、芽吹ちゃんの影響力はわたし達だけじゃなくて世の中にもあるってことになる。名ばかりの大赦の首長じゃなくて、実際に人を動かす力があるのかも。

「…いいお父さん、だね」

「？しずくちゃん？」

「…わたしも力を持っていたら、…二人が心中せずにすんだのかな…？」

しずくちゃんの両親は、しずくちゃんを残して自殺してしまった。

それが原因で、外からの心ない言葉に耐えるために第二の人格

シズクちゃんが現れた。

芽吹ちゃんみたいに両親を不自由させない力を持っていたら、そんなことにはならなかったかもしれない。しずくちゃんはそんな〝もしも〟を考えたのかも。

「…でも、そうだったらシズクちゃんに会えなくなっちゃう。それはさびしいよ」

「うん…。わたしも…さびしい」

「しずくちゃんも、シズクちゃんも、わたしの大事な友達だよ」

「…そう言ってくれる人は、結城が初めて…」

しずくちゃんが、笑ってくれた。

初めて見たかもしれない。しずくちゃんの笑顔。

しずくちゃんが守りたいのは、この笑顔をくれる防人隊なんだ。たぶん、シズクちゃんも。

「…ラーメン、伸びちゃった…」

「…あ。ちよつと話しすぎたね」

「…食堂に残ってるのもわたし達だけだし、…食べて部屋に戻ろう…」  
「そうだね」

伸びたラーメンを急いでかきこんで食器を戻す。

うどんばかり食べてたわたしが、最近ではラーメンを主食にしている気がする。

しずくちゃんがいつでも笑っていられるように、わたしもしつかりがんばらないと。

「…違う。こうじゃない。まだ死角を防げてない。…須美様、もう一度お願いします」

「芽吹ちゃん？」

メンバーが寝静まった夜中の修練場に、芽吹ちゃんはいた。一人で刀と銃を持ってホログラム相手に立ち回ってる。

—— 須美様、つて言った？まあいいや。今は。

たぶん、ここにいると思ったからわたしも来た。

もちろん、—— 銀ちゃんのことを聞き出すため。

「…友奈。まだ寝てなかったの？」

「うん。…芽吹ちゃんに聞きたいことがあって」

「皆がいるところじゃ聞けないこと？」

「…うん。銀ちゃんのことだから…」

銀ちゃん、という言葉聞いて芽吹ちゃんは構えを解いた。その後わたしの方に視線が向く。銀ちゃんがつけていた義眼が光ってわたしを見つめる。

「…あいつが言った通りよ。あの霧の向こうで、今もバーテックスと戦ってる」

「じゃあ、夏凜ちゃんはほんとに銀ちゃんを助けるために」  
「でもそのために無用な戦いをする道を選んだ。それは銀が望むことじゃない」

わたしが言い切る前に、芽吹ちゃんは夏凜ちゃんの考えを否定した。

バーテックスとの最後の戦いの時もそうだった。夏凜ちゃんは何がなんでも銀ちゃんを助けるって言った。でも、それを芽吹ちゃんはエゴだと言った。

二人の考えは、あの時から枝分かれして対立するようになってしまった。銀ちゃんを助けるのか、銀ちゃんの願いを叶えるのか。

二人が戦う理由は。きっとそれだけなんだ。世界がどうなるとか未来がどうなるとかじゃなくて、銀ちゃんをどう思うか。

二人とも銀ちゃんを心から想ってるのに、どうしてこんなことになっちゃったんだろう。

「…芽吹ちゃんは、助けたくないの…？銀ちゃんのこと…」

「…銀がどういうことを思ってたか、友奈は知ってる？」

「…？」

「……自由になりたかったのよ。心が壊れそうになるくらい憎しみと怒りから。大赦にも、お役目にも、世界にも縛られない、本当の自由を求めていた」

「自由…」

「友奈もわかっているはずよ。私や夏凜…そして友奈が、銀をがんじがらめに縛り付けてたって」  
「……………」

銀ちゃんが戦った理由。銀ちゃんが全てを捧げた理由。

全部、わたし達のため。

「…正義感の強い銀は、全てを放り出して呪縛から逃げるのを拒んだ。全てを終わらせてから、自由になることを望んだ」

「……………」

「…全部一人で解決していったわ。外の世界への道を作り、人々を前に進んでいけるようにした。…自らの魂を捧げて」

「……………」

「今もその目標へ向けて、戦ってる。…どうして邪魔できるの？どうしてまた縛り付けられるの？銀はまだ苦しい思いをしなきゃいけないの？」

わたし達が銀ちゃんを間接的に苦しめていたのはわかっていたつもりだった。

何も知らなかった頃に戻れるって希望がチラチラ見えて、現実にそれを何度も打ち砕かれて。銀ちゃんはそのたびに心を痛めて。

もう銀ちゃんは限界だったことを、芽吹ちゃんの言葉でようやく理解した。

銀ちゃんをもうこれ以上苦しめるな。

芽吹ちゃんが言いたいのはそういうことだ。

ボロボロの銀ちゃんが安心して休めるように、世界を安定させること。それが芽吹ちゃんの使命なんだ。

「…友奈は、どうなの？」

「え？」

「銀がいなくなって、どう思った？戻ってきてほしいと思った？」

「…わたしは…」

「…私に気を遣うことはないわ。素直な気持ちを聞かせて」

——芽吹ちゃんの目は、優しかった。

いつも自分にも他人にも厳しい芽吹ちゃんが、その時だけはまるで銀ちゃんみたいにほほえんでいた。

芽吹ちゃんに導かれるまま、わたしの中で絶対に変わらない思いを口にした。

「…：銀ちゃんともう会えないなんて、イヤだよ…」

「…：そう。…それが普通の反応よ」

「……………」

「それでいいのよ。私は普通でいられないだけだから。乃木芽吹として…：銀の弟子として、私は偉大な勇者の意志を引き継いだのだから」

普通でいられない。

芽吹ちゃんが遠くに感じてしまう一番の理由。

人としての当たり前前の感情を封じ込めて、銀ちゃんの思いを遂げるために尽くす。

——そこに、芽吹ちゃんの意志は存在しない。

「…：あいつに同調したいのなら、止めはしないわ。その時は敵になるだけ」

「!!」

「私だけはいつに同調しない。偉大な勇者に背を向けたあいつだけは、許すつもりはない」

夏凜ちゃんをここまで軽蔑する理由。

それは、銀ちゃんの苦しみを理解しようとしなから。



夏凜ちゃんも銀ちゃんの苦しみをわかってるはずなのに。芽吹ちゃんもほんとは銀ちゃんと一緒にいたいはずなのに。

一度すれ違ってしまったら、もう戻れないのかな

「…聞きたいことは他にある?」

「…銀ちゃんの、…あの霧を吹く船はなに?」

「…友奈も見てたのね。…銀が外の世界のバーテックスを廃滅するための力よ。あの霧で世界を包みこんで、バーテックスを駆逐してる」

「…この霧が晴れた時、神世紀300年の戦いの幕が降りる。銀が終わらせてくれる。だから、私たちは次のステージに上がる準備をしないくちやいけない」

大赦のトップとして、国民を取り戻した世界へ帰さないといけない。銀ちゃんの願いを叶えるためには絶対に避けては通れない道。

決して楽な道じゃないのは、わたしでもわかる。銀ちゃんみたいに、芽吹ちゃんはイバラの道から逃げずに進んでいく。

芽吹ちゃんは、銀ちゃんと同じ道を行こうとしている。自分の全てを捧げることになるのをわかって、覚悟を決めて一歩ずつ。

それは、芽吹ちゃんとも二度と会えなくなるかもしれない、ということだ。

「…夏凜ちゃんがどうやって銀ちゃんを助けようとしてるかって、芽吹ちゃんはわかる…?」

「………………。…あの蛇を倒す、って会見で言ってたわ」

「あれって…バーテックスのことじゃなかったの?」

「……ここから言うことは誰にも言い触らさないって約束できる?」  
「…わかったよ。わたしと芽吹ちゃんの秘密」

意外にも洩ることなく教えてくれるみたいだ。トップシークレツトなことだと思っただのに。

「…既にバーテックスの大半は霧に飲まれて消滅したのを外に出て確認してる。外敵からの脅威はもう存在しない」

「霧は危険じゃないの?」

「直接触れれば命に関わるけど、四国に上陸することはないわ。銀が制御してるし、神樹が大気を守ってるから」

「霧は完全に、銀ちゃんの力なんだね」

「そうじゃなかったら、今頃四国は霧に包まれて全滅してるわ」

わたし達防人の元のお役目がうやむやになったのも、外の世界が一変したからってことか。それで、大赦に武力で反抗する人たちを抑える部隊が変わった。

今の問題は四国の内側だけわかって少し安心した。芽吹ちゃんと夏凜ちゃんが仲直りできれば、全部解決できる。

—— 一番気になることは。

「銀ちゃんがバーテックスを全部倒したら、銀ちゃんは  
どうなるの…?」

「…この世界にはいられなくなる。神樹も天神もない、神の力が働かない世界じゃ…現人神となった銀は存在できない」

「…そんな…」

「…それが銀の望みよ。銀が銀の感情から解放されるには、それしかない」

銀ちゃんの感情

—— 須美様と園子様を奪ったバーテック

スへの恨み。銀ちゃんから自由を奪った大赦…大人たちへの怒り。大切な人を守らなきやいけないことへの怖れ。

この世界に生きる誰よりもそれを感じてきた銀ちゃんだ。その負担はわたしなんかじゃわからないほど、心が壊れてしまうほどに大きいんだ。

誰よりも優しい銀ちゃんでも、それを耐え続けることはできないんだ。休まなきやいけないんだ。誰もたどり着けない場所で。

「…須美様って、さつき言ってたけど…」

「…この義眼は、須美様と繋がってるのよ」

「…え？」

「どこかで生かされてる須美様が、私に助言をくれる。一緒に戦ってくれる」

「…ってことは、夏凜ちゃんの義手には園子様が…？」

「…察しがいいわね、その通りよ。銀を支えてくれた人間同士が、こうして銀のためを思って争ってる」

芽吹ちゃんは鼻で笑った。こういうのを“ヒニク”って言うのよって顔が言ってる。

—— 須美様は、どう思ってるんだろう？

「…ありがとう、芽吹ちゃん。いろいろ話してくれて」

「友奈も銀の大切な人だから。…できる限り真実を知ってほしい。…このお守りの願いは叶えられないかもしれないけど、…私にとってもあなたは大切な人よ」

芽吹ちゃんの手には、わたしが三人におくったシロツメクサのお守り。少し血で汚れてるけど、大切に持ってきてくれて嬉しくなった。

「…芽吹ちゃん。…芽吹ちゃんは、いなくならないでね…？」

「…もちろんよ。不死身の勇者の後継者だから」

芽吹ちゃんの無事を願うのに、わたしは芽吹ちゃんの行く手に立ちふさがらないといけない。夏凜ちゃんと仲直りさせるなら。

どうすればいいの、わたし

もう、全然わからないよ

「…っ！…これじゃ、あいつに勝てない…」

「ちよっと根つめすぎだよお三好さあん」

芽吹との一戦以降、私の鍛錬の度合いは一層厳しくなった。一緒に戦術を磨いてる国士たちにもいさめられるくらいには。

私はほとんど圧倒されていた。芽吹が手にしたあの刀

生大刀が私たちの実力を引き離してしまった。園子の助太刀がなかったら完敗してた。

初代勇者が振るったとされる妖刀。この刀に選ばれた人間こそが乃木家の当主…つまり大赦の最高権力者となる権威の象徴。最新の勇者システムに適合したならば、その神具としての力も比類なきものになっている。

私はその差を埋めるには、鍛錬しかない。大昔の神具も、勇者シス

テムの強化計画も私にはない。

焦り。今一番感じてるのは、芽吹との実力差を見せつけられて何者かに追い立てられる感覚。

このままじゃ、あいつの好敵手でいられない。

「…なんてことないわ。このチームのリーダーなんだから、模範を示さないよ」

「勤勉すぎる模範なんていらないうてえ」

「…あんたが一番知ってるはずよね？雀。防人がどんなに強敵かって」

「…うん。風先輩が適格に指示してるし、チームとしての一体感は私たち以上かも」

ゴールドタワー強襲作戦で確保した防人三名は、国土として戦うことを志願した。

その一人：加賀城雀は臆病ながらも危険予知とその対策において並外れた能力を持つてる。自信さえ自覚できれば、部隊を動かせる人材になり得る。

「それでも雀は私の側について。…あんたには期待してるわ」

「…無理です。私はただ身を守るので精一杯で」

「身を守るってことは、予め危険を摘むってことよ。あんたにはそれができる」

「私が守る、って言うてくれないのおー!？」

臆病というより、他力本願なのかしら。この子は私の力に惹かれてこっちに来たわけだし。

でも、私を越える存在が敵になった。もう後には退けないし、雀も焦ってるのかも。

この子たちを守るのは、私だけ。乃木芽吹という最強の敵と渡り合えるのは、私だけ。

私の肩に乗った重荷は、気付けば大勢の仲間の命を預かることと同じになった。だから全身全霊で、一つの手落ちなく努力をしないといけない。

私がしくじれば、この子たちも道連れになる。

「守るためには強くならなきゃ。強くなるためには鍛錬あるのみよ」

「ああ、何言っても聞いてくれない。みんな三好さんのこと心配してるのに」

「少し気負いすぎですよ、閣下。乃木芽吹と戦ってから」

「いくら同じ師から学んだライバルとはいえ、意識しすぎです」

「…銀様から同じことを学んだのに、なんで乃木芽吹は大赦にいるんだろう？」

「大赦の老害の傀儡にされているのではないのか？」

「…!!違う!!あいつは…そんなヤツじゃない!」

声を荒らげてしまった。

どんな状態でも、どんな立場でも、あいつは私が認めた唯一の好敵手だ。その人がただの操り人形だなんて、認められるわけがない。

私の拒絶が伝わってしまったのか、国士たちは黙ってしまった。一応、乃木芽吹に関しては接触を禁じてるし、この話題は二度と上がらないだろう。

「…ごめん。ちよつと熱くなった」

「こちらこそ、出過ぎたことを申しました。陳謝します」

「少し休んだ方がいいって、三好さん」

「…そうね。焦る必要なんてないものね」

そう自分に言い聞かせて、力を抜いた。

それと同時に、我慢の糸が切れた。

「!!閣下!!」

「ちよつと！大丈夫!？」

「…平気よ」

意識が揺らいで足元が覚束なくなつて、めまいでも起こしたように倒れ込む。

私の身体は、あの大蛇の毒に侵蝕されている。呑み込まれかけた、あの時から。

口の中には我慢した血ヘドがのさばってる。吐いてしまうと余計な心配をかけてしまうから、絶対見せてはいけない。

徐々に弱っていく感覚を嫌でも思い知らされる。霊科学者の話だと、勇者の力もどんどん弱まっているらしい。神樹が忌み嫌う、不浄が溜まっているとか。

へ…にぼっしー。どうしてそこまで一人で背負い込もうとするの?<

(…これは私の戦いだからよ。他の誰かに指図される筋合いはない。たとえば、銀を支えた勇者…乃木園子だとしても)

へ…せめてメブーには言っておこうよ。にぼっしーまでいなくなつたら…メブーはひとりぼっちになっちゃうよ<

(そんなの関係ない。銀を助けるためならなんだって犠牲にできる。…芽吹でさえも)

私に語りかけてくる園子の声は、いつもいさめる言葉だ。銀に私のことを任せられたって言うけど、…関係ない。

私に残された時間は、わずかだ。

勇者の力が消える前に、銀を取り戻さないといけない。

焦りの煙が私の心をいぶしていくような感じがして、精神も蝕まれて痛む。

銀はこの焦燥に打ち勝つたんだ。私も絶対に、乗り越えてみせる。



ここに居る間は敵じゃないですよ

「今日の任務は、テロで街が破壊されて避難してきた人たちの避難所のお手伝いよ」

「…え？」

「…教導、お気は確かですか？」

芽吹ちゃんが朝のミーティングの時間に、絶対言わなそうなことを言い出した。わたしも風先輩も他のメンバーも目を点にして、芽吹ちゃんが言ったことをもう一回確認する。

「私たちが何のために戦っているか。それを再確認するために、戦火で被害を受けた人たちの支援をする」

「再確認、つて？」

「ただ浪士を撲滅すればいい、という考えは捨てて。私たちは今を生きる人全てに未来を見せなければならぬの」

「…それが勇者、つてことね？」

「その通りです、風さん。困っている人を見て見ぬ振りをしては、私たちに未来は作れません」

「乃木教導はやはり真の勇者ですわ。わたくしは大いに賛同いたしますわ」

「わたしも！なんか勇者部みたいだね！」

芽吹ちゃんにも銀ちゃんのスピリット…勇者部の魂がちゃんと受け継がれて嬉しくなった。それに、わたしも絶対やりたいことだ。

風先輩もここ最近じゃ一番楽しそうな顔をしている。防人になっても勇者部みたいな活動ができて嬉しくなったのかな。弥勒先輩も「のぶれすおぶりーじゅ」？つて言つて張り切ってる。

「でもこれって国土…国防仮面のやってることと被らない？後を追うようにやっても後手に回ってる印象は拭えないんじゃない？」

「やるとやらないのでは印象にしても雲泥の差だし、一番大切なのは私たち一人ひとりが勇者だという意識を持つこと。そのための活動よ」

「あの勇者部の活動にイヤイヤ付き合ってた芽吹からそんな言葉が聞けるなんてねえ。銀は先生に向いてるんじゃないかしらね」

「元はといえば風さんがやってたことじゃないですか。…風さんにも感謝しないとイケませんね」

「あー…うん。…なんかムズがゆいわね…。…ありがと、芽吹」

風先輩がほめ殺しにされてほっぺを指でかいてる。

芽吹ちゃん、思えばずっとほめてる気がする。訓練の時厳しいのはそうだけど、必ずいいところを見つけてそこをほめてる。

「作業は結構多いから、いくつか班に分けて分担する。炊き出しのお手伝いは風さんに指揮をお願いします。他のメンバーは風さんが選んでください」

「任せなさい！…ここが女子力の見せどころよお！」

「物資や廃棄物の分別や処理は弥勒さんに任せます。体力のある人員を選んでください」

「承りましたわ！任務を命じられた以上、ご期待に沿いますわよ！」

「避難所には子供も多くいるわ。慰問の意味でも出し物を催す。私はそれに取り掛かることにするわ」

「出し物、ですか。いいと思いますわ」

「…それ、乃木が、やるの？」

しずくちゃんの発言で、その場が凍りついた。

芽吹ちゃんが子供向けに出し物をやる。

わたしはこの前の子供会のおかげで少しイメージを想像できるけど、厳しい教導のイメージしかない防人メンバーにはピンとこないか

も。

「芽吹…得手不得手ってあるのよ？リーダーだからって無理しなくて  
も」

「……………こんにちは〜！私の名前は乃木芽吹！ブツキーって呼  
んでね♪」

凍りついた。ここにいた人全員が。

何か見ちゃいけないものを見た気がする。一秒でも早く記憶から  
消さなきゃいけない気がする。

しばらくシーンとした後、突然吹き出した笑い声が。みんなギョツ  
としてそつちを向く。

「……………w w w w。ごめっ…wちよつと……………w w」

「しずくちゃん!？」

「やば…w w こwれwはw…」

「ダメよしずく！抑えて！芽吹の尊厳が！」

「でもw w …」

「の、乃木教導はそれだけ真剣ということですよ！」

「……………やるからには完璧を目指すわ。演技において恥ずかしがるこ  
とこそが恥なのだから」

笑いを抑えられないしずくちゃん。

芽吹ちゃんがどんな反応するか恐ろしくてフォローに回ったけど、  
芽吹ちゃんは何を焦ってるのかわかってないみたいだった。

「皆は何も心配する必要はないわ。各班班長の指示を聞いて、人助け  
にはげみましょう」

「は、はい」

「…芽吹ってさ、前から思ってたけどマルチタレントよね」

「ものづくりに運動、演技に学業…弱点が見当たりませんわ」  
「お笑いのセンスもありそう…まさに完璧超人…」

任務を遂行すること以外を削ぎ落とした芽吹ちゃんだったが、防人隊の教導になってから人間らしさが良く見られるようになったと思う。良く笑顔を見るようになったし。

芽吹ちゃんは…今幸せなのかな。銀ちゃんとは会えなくなっちゃったけど、毎日が充実してて。芽吹ちゃんなりに、銀ちゃんが望んだ自由を生きてるのかな。

でも、芽吹ちゃんは夏凜ちゃんとの友情を失ってしまった。芽吹ちゃんにとっても、夏凜ちゃんにとっても、銀ちゃんと同じくらい大切なものだったはずだ。

「…げ」

「…!!貴様は…乃木芽吹!?!」

避難所に来て早々、大トラブルにみまわれたわたし達。  
いたんだ。国防仮面が。避難所に。難民キャンプのお手伝いに。

この前会った言葉遣いの難しい国士さんが芽吹ちゃんの顔を見るなり、あわてふためいた様子で周囲を確認する。

芽吹ちゃんは身構える防人隊に待ったをかけて、一つため息をついて国士さんに伝えた。

「落ち着いて。別に国土を狩りに来たわけじゃないから」

「……くっ」

「こんなところでドンパチするのはそっちも不都合でしょう？下手な気を起こさないで」

「……ちっ」

「……いるんでしょ？夏凜。ここは私たちが話し合って調整しましょう」

遠くに視線を向けてお目当ての人を呼び付ける。トップ同士で話し合って、戦闘を避けようと考えてる。

まるで打ち合わせたみたいに、義手が引き戸を開けて顔を出した。国防仮面の姿をした夏凜ちゃんが。

「ちよつと。隊員にはあんたと接触を禁じてるんだけど」

「それはお互い様よ。だから私たちが取り決めしようって話よ」

「てか、なんであんた達がここにいるのよ。防人隊の三十人近くが勇者部に入ったわけ？」

「困ってる人を助けるのに理由があるの？国防仮面さん？」

「…はいはい。大赦の首長様はご殊勝なことで。全く、誰の薫陶を受けたんだか」

ほとんどいつも通りの憎まれ口の言い合い。仲がよかったところと変わってない。

夏凜ちゃんが手招きして芽吹ちゃんを呼び付ける。

でも、そっちに行っただけじゃなかった。

「夏凜……！のこの顔を出して……！」

「どうしたの勇者部部长。そんな怖い顔して」

「それはあんたが一番知ってることでしょうがあ!!!」

風先輩が見たこともないような怖い顔で勇者の力を解き放った。

振りかぶった大剣が引き戸ごと夏凜ちゃんを叩き斬ろうとする。

風先輩、樹ちやんのことで夏凜ちゃんに恨みを募らせてたから、もう理屈なんてお構いなしだ。

ダメだ、止めないと!!

「風さん、三好夏凜との接触は禁止したはずですが？」  
「なっ……!」

私が駆け出す前に、芽吹ちゃんが変身もせず刀を抜いた。武器を叩き折る武器の大剣が、刀に触れた途端に真つ二つになる。

「規律を乱さないでください。現場長を任せられる人がそういうことをしては、隊員に示しがつきません」

「……でもっ……」

「……もし風さんが除隊になったら、樹ちゃんは一人で戦わないといけません。……どうなっても私は責任持てませんよ」

これ以上食い下がるなら防人をやめてもらおうと、樹ちゃんと引きはなすって言うてる。芽吹ちゃんの表情はいつも通りだけど、視線が冷たく言い放ってる。

さすがの風先輩も引き下がった。変身を解いて怒りを抑えつけた顔をしてる。

「借りは戦場で返せって話よ、風。ここは戦っている場所じゃない」  
「……っ」

「そうやって煽るのやめてもらえるかしら？そっちから突つかかってくる収拾がつかない」

「はいはい。……あーあ、そっちは勇者が四人もいるのか。こっちは一人だつてのにやっつてらんないわ」

「テロリストの末路には相応しい相手と思わない？大義の物量にすり

潰されるって」

「まあ、私が一人ずつ始末すればいいだけ、なんだけど？」

「その中には私も含まれるのかしら？」

「お望みならやってやるけど？」

「せいぜいほざいてるといい。言うだけならタダなんだし」

言い合いがとどまるところを知らない。

みんなが安然とする中、二人は言い合いながら人が来なさそうな建物の裏手に歩いていった。

理解できない光景だったかも。少なくとも前の二人を知ってる人以外は。

わたしだつて、芽吹ちゃんがしゃべりたくもない相手と言い合いするなんて思ってたもんな。

「閣下に刃を向けるとは……！ 貴様、覚えておくぞ……！」

「三下のセリフご苦労さん。……あーあ、何やってんのかしらねあたしは」

リーダー二人がいなくなつてピリピリした空気がこつちにも伝わったみたいだ。風先輩と国士さんがにらみ合ってる。

間に入らないとマズイかも。風先輩もいつもより気が立ってるみたいだし。

「まあまあまあ。戦うことになつたわけじゃないんだし。それより、国士さんも避難所の援助にきたんでしょ？ 目的は一緒だあ！」

「……貴様は。……相棒が世話になつた」

この人はゴールドタワーで会つた、古風な国士さんだ。帽子をとつて頭を下げてきた。

「ううん。困ってる人を助けるのに理由はいらないよ！どうなの？元気にしてるの？」

「ああ。今も中で子供たちと遊んでる」

「よかったあ。いろいろお話を聞かせてもらって、すごい気になってたんだ」

古風な国士さんの声のトーンが一つ下がった気がする。敵をイアツするような張った声じゃなくて、相手に話を聞いてもらおうとする声だ。

この人は義理堅い人なのかも。いくら敵対するグループの人でも、善い行いには礼を尽くしてくれる。やっぱりただの悪のテロリストじゃないんだよ。

「…結城さん。敵とどのように馴れ合うものではありませんわ」

「少なくともここに居る間は敵じゃないですよ。同じ目的を持った仲間です」

「何言ってるのよ友奈。油断したところを刺されるかもしれないのよ」

「そういうことはできませんよ。国士さん達は、自分の正義を信じて戦ってる勇者だから」

「…三好閣下と、同じことを言うのだな」

国士さんからもう敵意は感じない。わたしと同じことを感じてくれたのかな。

でも防人のみんなの方が警戒を解いてくれない。イメージが固まりすぎちゃったのかも。

「…結城の言うとおりだと思う。困ってる人を助けたいのは…防人も国士も同じ」

「いいこと言うじゃないしく。今はそういういがみ合いはナシで」

「休戦休戦。今日は休戦記念日ってコトで」



「誰が決めたのよそれ」

「あたしが決めた！」

「…ふ。防人も大して我々と変わらんな」

「所詮は女子の集まりってことよ。だから女子力が強い方が勝つ！」

「団結力で言うなら、そうなのかもしれないな」

「そうおっしゃる貴女は女子と思えない言動ですわね」

「私は天子に仕える公僕であることを常に矜持としている。貴様とて同じであろう？・弥勒」

「わたくしが仕えるのは弥勒の血だけでしてよ」

それでも一緒に避難所のお手伝いをするのを受け入れてくれたみたいだ。お互いのリーダーがそうするって言うてるんだし、拒否はできないと思うけど。

心の底から手を取り合えたらいいな、ってわたしは思った。

しばらくして芽吹ちゃんと夏凜ちゃんが戻ってきた。話をついたみたいだ。

中にいた国士の人たちもそろそろ出てきて、わたし達のとなりに並ぶ。

「協議の結果、私たちは共同でこの避難所の支援を行うことを決定した」

「…マジで？」

「友奈から厭戦ムードが伝播した？」

「それは違うわ。目的が同じなのに別々に行動してたらお互いに邪魔になるだけだから。それなら一緒にやった方が効率的でしょ？」

「…およそ敵対していた勢力のリーダーたちから聞ける提案ではないですわね…」

二人はやっぱり銀ちゃんの弟子だ。勇者部の部員だ。

勢力の枠を越えて、手を取り合うことができる。人助けって一緒の目的のもとに。芽吹ちゃんも夏凜ちゃんも、そういう人なんだよ。

「はいはい！わたしは大賛成です！」

「閣下がそう決断しましたのなら、私は賛同するほかありません」

「…いいと思う。こういう時は…みんなで明るくしないと…」

「人として善を行う。陛下もそれが人間らしさとおっしゃっていたし」

「…わかってるの？芽吹。敵と手を取り合う意味を」

「僭越ながら私も反対です閣下。情が芽生えれば、いざという時撃てなくなります」

「マッチポンプやってる相手よ？行動を共にするって…ちよつとないわ」

「決起したただの市民を暴力で制圧している走狗どもが何を言うか」

どっちのグループにも賛成と反対の声が上がった。わかっていたことだけど、防人も国士も一枚岩じゃない。

次第に言い争いが広がってきた。お互いの勢力の間ではもちろん、チームメイト同士でも。

————— どうしよう。このままじゃせつかく二人が折り合いつけてくれたのに、台無しになっちゃう。

「静粛に。これは決定事項よ。異議申し立ては私への口答えと同じ：懲戒も考えるわ」

「厳しいわねあんたは。…納得できないかもしれないけど、私に免じて何とかやってほしい」

二人のリーダーはそれぞれ違う言葉で意志を統一しようとした。

芽吹ちゃんは教導という立場から、規律を乱すのは許さないと圧力をかけて。

夏凜ちゃんはメンバーの考えをくんで、上からお願いするように。

どっちのグループもその一言でピタリと口論をやめた。

「敵対する組織のトップが最初に話をつけたのです。部下があれこれ言うのは野暮というものですわ」

「長の二人が個人的な感情を割り切って決断したのだ。どうして我々が非難できようか」

「そうだよ！手を取り合うって決めたことはすごいことなんだよ！みんなも二人の気持ちを考えてあげようよ！」

芽吹ちゃんと夏凜ちゃんの気持ちをわかろうとする人もいる。弥勒先輩と古風な国士さんは、リーダーの意志を尊重するように言葉をおぎなった。

わたしだって二人の気持ちを大事にしたい。どんなことになっても、わたしは二人の友達だから。

「…ホント、偉大な勇者様よね。あんた達は」

「これだけ賢明な人なのに、どうして乃木芽吹は売国奴の側にいるの…？」

「三好夏凜がテロリストに加担する理由がわからなくなってきたわ…」

「同じ三ノ輪銀様の弟子なのに…」

反対していたメンバーも渋々納得してくれたみたいだ。

納得はしたけど、疑問は晴れない。世のため人のために行動できる二人が、どうして敵対してるのか――

弥勒さん率いる力仕事チームは、さっそく大量に持ち込まれた支援物資の支度を始めた。

「では、気を取り直して届いたベッドをセッティングしていきますわー！」

「ベッドだど？支援物資にそんなものは」

「乃木教導が手配していたようですよ。楠工務店の職人たちがチャリティーで製作したものですのよ」

「乃木…前々から準備してたってことか……」

大掛かりな荷物の半分くらいは、木製の簡易ベッドとふとん。寝具が足りない避難所の実状を見て用意したんだと思う。

芽吹ちゃんは、できることを全力でやってる。お父さんや大赦の偉い人に頼んでいろいろ用意してたんだ。それが上に立つ人の使命なのかな。

「さあさあ、無駄口叩いてるヒマはありませんわよ！乃木教導の出し物の時間までに片付けてますわよー！」

「それは絶対見たい」

「あのカタブツの芽吹先輩が子供向けの出し物って…想像しただけで笑えるよね」

「…それなんだけど、三好閣下も共演する話になったって」

「…は？」

「…もっかい言っつて？」

「乃木芽吹と、三好閣下の、共演」

「この空気は今日何回目だろう。笑ってはいけない、凍りついた空気は。」

でもやっぱりそれをぶち壊すのはしずくちゃんだった。耐えきれずに吹き出したのを聞いて、全員がしずくちゃんを見る。

「……………www」

「ほ、本人がいないところで笑ってはいけませんわwww」

「だ、だつて…www」

「閣下が…？子供向けの出し物を…？www」

「こ、堪えろっ！閣下の威厳がっ…www」

「あんたも笑ってんじゃないのよwww」

不謹慎だけど、笑いつて広がってく。防人も国土も関係なく。

たったこれだけで二つのグループの距離感がグツと縮まった気がした。お互い警戒姿勢を解いて、普通に話し出す。

「あの乃木芽吹が…？www」

「私もそう聞いた時やばかったwww」

「いやいや、三好夏凜もやばいでしょwww」

「お互いジョークなんて言わなそうだしwww」

「…んんっ。笑ってないで作業を始めますわよwww」

「弥勒だつて笑ってんじゃないんwww」

笑って仕事に手が付かない。これを芽吹ちゃんに見られたらどうなるか。

「あ、弥勒さん。ちょっと報告しておきたいことが」

とか言ったら芽吹ちゃんがすつと現れた。ヤバいかも。みんな顔を引きつらせる。

「……どうしましたの乃木教導。まだ作業を開始してはいませんわ」「よかった。明日届くはずだった支援助資が前倒しで届いたので、そっちにも人員を配置してください。資材置き場がパンクしそうです」

「承知いたしましたわ。わざわざ教導に出向いていただくなんて、お手を煩わせてしまいましたわ」

「いいんですよ。私たちは一つのチーム。必要な仕事に立場は関係はありません」

ケロツと表情を変えていつもの対応をする弥勒先輩。全員が笑いを飲み込んで顔をひくつかせてる中、芽吹ちゃんに感づかせることなくやりきった。

「じゃあ、よろしくお願いします」

「任されましたわ。教導の出し物、楽しみにしてますわよ」

特に何も気づいた様子もなく、芽吹ちゃんは戻っていった。

芽吹ちゃんってかなりキレモノで感が冴えてると思ってたけど、

意外にニブいのかな。それともわかってて気づいてないフリしてるだけ？

「……ふはあつ！ヤバい、笑い死ぬところだった……！」

「……弥勒……ナイス……！」

「……………」

「…？弥勒先輩？」

「」

「…此奴、気絶しているぞ！」

「ええっ!!？」

極度の緊張で精神が限界だったみたい。笑顔で手を振りながら気絶してる。風先輩がオバケの話聞いた時みたいだ。

別に芽吹ちゃんに気づかれても大丈夫だと思っただけだな。そういう空気とはいえ、ちよつとみんなビビりすぎかも。

「…あ。どうも。この前はお世話になったね」

「ううん！元氣そうで良かったよ！」

炊き出し班のお手伝いに、あの時ケガしてたクールな国士さんが参加してた。わたしの姿を見つけると、軽く手を振って声をかけてきた。

元気にしてて良かった。特にケガを引きずってる様子もなく、食材を台車に積んで運んでる。

「またこうして話す機会ができるなんてね」

「芽吹ちゃんと夏凜ちゃんのおかげだよ！」

「…あなたはリーダー二人の知り合いって聞いたけど。不思議なこともあるものだよ」

「ホントにね。…人助けなら簡単に手を取り合えるのに…」

クールな国士さんも不思議に思ってるみたいだった。芽吹ちゃんと夏凜ちゃんがどうして対立してるのかって。

それは本人たちにしかわからないことなのかも。他人には想像もつかない理由があるのかも。

「…案外、同じものを違う視点から見てるだけなのかもしれないわね」「へ?」

「目標は大きく違わない。これからの世界をどうするかをちゃんと考えるなら、自分がどうするべきかが違うだけで」

浪士たちだって、霧が晴れた後の外の世界を復興することを考えてるはずだ。それを大赦には任せられないっていうだけで。

でも、それって。夏凜ちゃんが会見で言ったこととは少し外れるような気がする。もうバーテックスはいないのに、敵を打ち倒すって。

やっぱり、銀ちゃんのあの大蛇を倒すってことなのかな

「雀ちゃん達は どうしてるの?」

「…躊躇なく聞いてくるのね、捕虜のこと。敵である私に」

「敵じゃないよ。こうやってお話できてるんだから」

「……本当、敵意とかないのねあなた…」

?  
クールな国士さんは両手を上げて苦笑い。そんなにおかしいかな?

「まだ処遇は決まってないわ。このまま幽閉されるか、それとも…」  
「…?」



「…あなたはどうなの？このまま大赦の下で戦い続けるの？」  
「…：わかんないんだ。わたしはどうするべきなのかなって」

「…根本的に、あなたは戦いに向いてないのかもしれないわね。周り  
にいる人全てを慮ってしまいうあなたには」

「そう、なのかな」

「敵の私が言うのも何だけど、この戦いに関わらない方がいいと思う  
わ。もつと違う場所に、あなたを必要とする人がいると思うの」

考えもしなかったことだ。防人をやめて、普通の生活に戻るって。

——それもアリ、かなと思う。

でも、そうしたらできなくなることがある。

「…ありがとう。そう言ってくれて。でも、二人を仲直りさせないと  
いけないから」

「…そう。それはあなたにしかできないこと、なのね」

「うん。…銀ちゃんにできる、せめてもの恩返しだから…」

「三ノ輪銀様の…」

クールな国士さんは言葉を続けられなかった。大赦に親友と引き  
離されたって言ってたし、思うところがあるのかも。

「国士のみんなも、銀ちゃんの話は聞いているの？」

「…ええ。私たちに道を示してくれた英雄。その志を私たちが引き継  
ぐんだって」

「…芽吹ちゃんと同じこと言ってるね」

「乃木芽吹も、どうして我々に同調してくれなかったのかしらね…。  
同じことを考えていたはずなのに…」

「夏凜ちゃんは銀ちゃんを助けたって、伝えてないのかな？そう聞いたらそつちにも力を貸したいって言うと思うけどなあ。」

いろんな事情が絡み合って、わたしじゃとても正解がわからない。

でも、お互いに手を取り合えるチャンスは残ってるのはわかった。それを絶対つなげたい。

「…荷物持つよ。ケガ上がりでしょ？」

「…ありがとう。…今日はよろしくね、結城さん」

「みんなく！集まったかな？」

「これからわくわく姉ちゃんがダンボールを使っているんなもの作り方を教えてくれるりこよ！」

子供たちが、ニワトリパジャマとお馬さんのようなお魚さんのようなきぐるみを着たお姉ちゃんたちを見て素直に喜ぶ声を上げた。

後ろで見てた防人と国士のメンバーは、全員揃って絶句。

「…う…嘘でしょ…？」

「閣下…なぜきぐるみ…？」

「いやいや、芽吹もなんでニワトリパジャマなのよ…？」

「想像の斜め上をいかれましたわ…」

「wwwwwwwwww」

「しずくちゃん！待って！開演中はせめて！」

しずくちゃんの薄ら笑いはどんどん伝わって、メンバーをどんどん笑いの沼に引きずり込む。

「今日は集まってくれてありがとうとー！これからみんなと一緒に、いりこーんと工作をしていくよ！」

「みんなで役立つ道具を作って、楽しい時間を過ごすりこー！」

ニワトリパジャマの芽吹ちゃん—— わくわく姉ちゃんは、

今まで見たことのない優しいお姉さんだ。銀ちゃんとも風さんとも違う、みんなを笑顔にするための笑顔。……誰を参考にしたのかな？

いりこーん—— ユニコーンのきぐるみの夏凜ちゃんは、おどけた言葉と仕草を違和感なくやってる。恥ずかしがり屋の夏凜ちゃんが、その姿でみんなを笑顔にしている。まるでプロのきぐるみ師みたい。

「ダンボールってすごいんだよー？私がこうやって乗っかってもつぶれないんだよー」

「ええー？それはわくわく姉ちゃんがそつと座ってるだけりこー」

「いりこーんも座ってみて！勢いよく、ドーンと！」

「えーい！」

背中から飛び込むみたいに、いりこーんがダンボールで作ったイスに座る。

わー！つと子供たちの叫び声が上がった。

「…あれ？ホントだ！しっかり座れるりこー！」

「ねー？ちゃんと作れば大人が座っても大丈夫なんだよー！」

「すごいりこー！わくわく姉ちゃん、作り方を教えるりこー！」

二人は完全に子供たちの心を掴んだみたいだ。見てる子供たちみんなが食い入るように前のめりになってる。すごい。何か自然と引き込まれちゃう。

「…息、ピッタリだな…」

「これが即興芸、なの？こんなに息のあったコンビ、初めて見た…」

「…あまりに惜しいわ。二人が手を組めば、どんなこともできそうなのに」

「銀のヤツに見せてやりたかったわね。あんたの弟子はこんなにも勇者部だったって」

「風先輩、しつかり録画してるじゃないですか」

「樹に見せてやろうと思って」

笑ってた国士や防人メンバーも、次第に二人の世界観に引き込まれていく。

——真剣なんだ。世界を導くことに。道は違ってても、思いは同じ。

だから、なおさら戦わないといけない理由がわからない。二人が協力すれば、大赦や浪士の片方を壊滅させることも難しくはないはず。

こんな意味のない争い、すぐに終わらせることができるのに。

…本当に、銀ちゃんのことだけ、なのかな。

わくわく姉ちゃんの工作教室は大盛況で終わった。子供たちだけじゃなくて、そばで見ていた大人たちも次々参加していった。ダン

ボールでイスや机などをみんなで作った。

そしてそこに、風先輩たちが作った炊き出しの料理が並ぶ。

「全て、乃木教導の計算ずくだったってことですね」

「…資材から出る廃ダンボールを再利用して、みんなで食事できる卓をつくる……」

「…敵ながら、あっぱれ」

「次期部長を任せてもいいかしらね。何か、あたしより才能ありそうだし…」

「末恐ろしいわ…。あんなカリスマが敵の首領なんて」

芽吹ちゃんは、避難所の暗い雰囲気塗りを塗り替えた。ここにいるみんなが温かい気持ちになって、心を開いて言葉を交わす。

この時だけは、防人も国士も避難民も関係なくて。この時間を楽しもうとする一つの集まりだった。

「お疲れ様です、国士と防人の皆さん」

「久々に楽しい気持ちになれたよ！」

「浪士の連中が派手に暴れたせいでインフラが途絶して避難してきたが、中には見上げたヤツもいるじゃねえか」

「ああいうのは一部の過激派ってことかい？」

「大赦も動きが遅くて腐敗してると思うんだけど、本当に平和を願う人が残ってるってわかって安心したわ」

「そういう人がこれからの世界を先導してほしいよね」

実際に現実を目の当たりにした人たちの意見を初めて聞いた。

信じるものがゆらいでしまつて、心の拠り所がなくなつて。それが不安の種になって、空気が重くなつていく。

——銀ちゃんが国防仮面をやつたのって、こういう人たちの駆け込み寺になるため、つてことなのかな。

わたしは国防仮面でも国土でもないけど、それには大賛成だ。こういう活動なら、いくらでもやりたい。

「…今日のヒーローの二人が見当たらないわね」

「二人がいないと始められないね」

「…わたしが、探してくる。…笑ったこと、謝りたい」

「お願いねしずく。たぶんまだ脱衣所にいると思う」

しずくちゃんが芽吹ちゃんと夏凜ちゃんを呼びにいった。謝りたいって言ってたけど、しずくちゃんのおかげで国土さん達と打ち解けられたと思うけどね。

わたしはどうにかしてしずくちゃんが作ってくれたチャンスをもにしなきゃね。芽吹ちゃんと夏凜ちゃんが仲直りする、そのお手伝いをね。

「…全部終わって。…でもさ、ね…」

「…全部終わって。…でもさ、いい

の？」

「何が？」

「…いいこと」。私たち

「…感じるのって、時よ

「…あなた、つもり？」

「何を言ってるんだか」

「フィクサー」

「よ

「…決めたでしょ。あの時。\_\_\_\_\_つて」

「どんな\_\_\_\_\_、ね」

「…はあ。こんな\_\_\_\_\_、わね」

「それには\_\_\_\_\_。…次の\_\_\_\_\_、わよ」

「ええ。\_\_\_\_\_満足\_\_\_\_\_、\_\_\_\_\_と思う」

「…に、してもよ。友奈はすごいわね」

「ほとんど\_\_\_\_\_。防人と国土で\_\_\_\_\_活動するなんて」

「それすら\_\_\_\_\_あんたが一番怖いわ。サイコパス\_\_\_\_\_」

「\_\_\_\_\_ないの？」

「\_\_\_\_\_受け取っておくわ。…でも、\_\_\_\_\_、一番の

障害\_\_\_\_\_」

「…そう。その時は…\_\_\_\_\_」

「…\_\_\_\_\_」

(…?乃木と三好は、何を話してるの…?よく聞こえない…)

(…でも、敵同士でどうしてそんなに仲良さそうにしてるの…?…乃木は三好のことを見捨てたんじゃないの…?)

(…なにか、裏がある…?)

「夏凜ちゃん、隣いい?」

「…私との接触は禁止されてるんじゃないの?」

「今はただの結城友奈だから。防人のじゃなくて、夏凜ちゃんの友達

の」

戻ってきた夏凜ちゃんのとなりに腰を降ろす。聞きたいことがいっぱいあるんだ。

国土のメンバーがすぐにこつちを見るけど、夏凜ちゃんは手を上げて止めた。夏凜ちゃんも話す気はあるみたいだ。

「そう。…後で怒られても知らないわよ」

「えへへへ。それを考えてたらこんなことできないよ」

「そうね。味方の芽吹を盾で跳ね飛ばすなんてできないわよね」

「それは……」

「…先に言っておくわ。ありがとう。あの時は助かったわ」

夏凜ちゃんがペコリと頭を下げた。

いいよいいよと手を振ると、上げた顔はいい笑顔だった。

「お礼って言ったらヘンだけど、聞きたいことがあるなら聞いて。話せる範囲で話すわ」

「じゃ、お言葉に甘えて」

義理堅いのは国土さんだけじゃない。

夏凜ちゃんのそういうところが国土さんにも伝わってるんだと思う。

「……銀ちゃんを助けたんだよね？」

「…ええ。何がなんでも。あらゆるものを敵に回してもいいって思うくらいには」

「そのために、大赦を抜けたんだよね？」

「そうよ。銀を迎えに行くためのピースを大赦は持ってないから」  
「ピース？」



そう聞き返すと、夏凜ちゃんは言いよんだ。話しづらいことなのかな。

「…私は『あるもの』を探してるわ。銀とあの精霊…邪神を完全に切り離す神器を」

「…神器？」

「……それが、神樹の中にあるって話よ」

「……………」

「それを取り上げれば、残り少ない寿命を一瞬で終わらせることになる」

避難所にも飾られてある神樹様のほこらを遠くに見て、夏凜ちゃんは言った。

国士や浪士の目的とも違う、明らかな神樹様への反逆。それが知られれば、浪士も大赦も黙ってはいられないと思う。

「…その神器…『叢雲』は元々天皇家の持ち物。王がそこにいるのなら、神器はその手に収まってなければならぬ」

「…天子、だよな？」

「そう。王政復古を掲げたのもそういう理由。力を持った天皇がいるのなら、神樹から叢雲を接収する大義もある」

「……………」

こういうの、風先輩ならよく知ってると思うんだけどね。わたしはお勉強はあんまり……。

「夏凜ちゃんは国士を指揮してるけど、浪士の中でも物言いできたりするの？」

「……コネがあるのよ。浪士の主要メンバーに」

「その人に頼めば、意見が通るってこと？」

「…まあ。国士隊を好き勝手動かしてるのもそういうこと。それに、

“天子付きの勇者”だから。天皇直属の勇者…力の象徴ってことよ”

芽吹ちゃんも大赦を動かす力があるけど、夏凜ちゃんも浪士の意志に入り込む力がある。

二人が仲直りすれば、全てが解決する。

わたしがやるべきなのは、やっぱりそれだ。

「…芽吹ちゃんは、知ってるの？むらくものこととか、天子のこととか」

「…全部知ってるわよ。一緒に調べたんだから」

「……………」

「知った上で、私たちと刃を交えることを望んだ。銀を取り戻す唯一の方法を切り捨てると知って」

夏凜ちゃんの声が震えた。怒ってるような、悲しんでるような、入り組んだ感情が伝わってくる。

「バカよ、あいつは。自分の感情に蓋をして、キレイ事並べて。私は銀も世界も取り戻すつつつてんのに」

「……………」

「…あなたはどうかなの？友奈」

「…わたし？」

「あいつに美化された銀の姿を崇める気？銀が本当の望みを読み違えたあいつの、勝手な妄想に付き合う気？」

「……………」

銀ちゃんが本当に望んだこと。

芽吹ちゃんが言った “自由になる” こと。

夏凜ちゃんが言った “一緒にいる” こと。

どっちが正しいかなんて、わたしにはわからない。どっちも正しい

し、どっちも間違ってる。

「友奈。悪い事はいわない。大赦を抜けてこっちに来て。友奈があいつのせいで心を痛めるのを見てられない」

「……わたしは……」

「…迷うことが、あるの?」

「……わからないよ。この戦いの全部が。何もわからないのに決めなきやいけないなんて…できないよ…」

「……あの子の言うとおりにね。あんたはこの戦いに関わるべきじゃない」

「…でも」

「中途半端な気持ちで戦場をフラフラしないで。私にとっても芽吹にとっても、邪魔でしかないから」

「……!」

はつきりと夏凜ちゃんは言い切った。邪魔でしかない、と。

二人の真剣さに比べたら、わたしの気持ちは中途半端って言われても言い返せない。現実味がなくて、ふわふわしてる。

夏凜ちゃんには敵ですらない邪魔者に見えたってことなのかな

「…聞きたいことはもう終わり?」

「…うん」

「…もう防人なんて辞めてしまいなさいよ。…友達として言えるのは、これだけ」

「……………」

それが、夏凜ちゃんなりの優しさなんだろう。

頭がおかしくなりそうだ。

何を信じていいのかわからなくなった。

銀ちゃんのことを助けてたい。

銀ちゃんの心を癒したい。

芽吹ちゃんの理想を実現させてあげたい。

夏凜ちゃんのお手伝いをしたい。

二人を仲直りさせたい。

全部できることのはずなのに、やらなきゃいけないことのはずなのに。

わたしは選ばないといけないの――？

銀ちゃんと同じ場所に行こうとしてる

「犯人は人質と共に客船内に立てこもってこちらに要求を突きつけてきてます。大赦を解体し政権を浪士に譲渡しろ、と」

「大胆なことをしますわね。船をジャックするとは」

奪還作戦の当日。わたし達は徳島港にいた。

今日も今日とて浪士と思われる暴動を鎮圧に向かった。でも、船のジャックの制圧は初めてだ。

奪還作戦に人数をあてたから、こつちに来た防人は六人。それでこの規模の大きい暴動を抑えるのはなかなか厳しそう。

現場のリーダーを任された弥勒先輩もなかなか難しい顔をしてる。

「警察や海保も包囲はしていますが、本格的な武装をしていて手が出せない状況です」

「国防仮面：国土の存在は確認できてますか？」

「いえ、犯人グループは全員成人です。まだ国土の姿は確認できてません」

先に現場に到着していた警察の人から状況を教えてもらう。芽吹ちゃんのはからいで公権力の関係者とは連携が取れるようになったから、スムーズに作戦を立てられる。

ほとんどロストテクノロジー？になってる火薬を使った銃を持ち出して、客船を占拠する犯人。わたし達には効かないけど、普通の警察官じゃ対応できない状態だ。

わたし達が警戒しないとイケないのが、国土がいるかどうか。もしこの場にいるとなると、無茶な作戦はできなくなる。

「承知しましたわ。こちらで人質を救出しますので、引き続き警戒を

お願いいたしますわ」

「お願いします。こうなつては防人の皆さんだけが頼みです」

「わたくし達にお任せあれ。乃木教導の剣である防人が、ズバツと解決いたしますわ」

芽吹ちゃんの剣、か。

その一言でみんなのやる気がさらに高まった気がした。みんな芽吹ちゃんの理想のために力になりたいんだ。

「人質の救出は少人数で行うべきですわね。結城さんと戸郷さん、お願いできますか？」

「承り！友奈ちゃん、やるよ！」

「はい！結城友奈、人質の救出に向かいます！」

戸郷先輩とわたしがひそかに船内に潜入して、人質を救出することになった。他のみんなは待機して、いつでも制圧に迎えるように準備してる。

戸郷先輩は芽吹ちゃんや風先輩も一目置く防人のまとめ役的な人。空回り気味な弥勒先輩を支える副リーダーだって感じだね。

芽吹ちゃんの会見まであまり時間はない。それまでに人質を救出して、国士さん達をお出迎えしてあげないと。

「結城さん」

「はい、なんですか弥勒先輩」

「もし戦闘になった時：戦えますの？」

「：はい。人質の安全が確保できないなら、  
—— わたしは戦います」

「友奈ちゃん。気張らなくていいよ。私がそうはさせないから」

「そうはいいにしても戸郷さん。仮に国士に囲まれたとしたら、結城さんの力なしでは貴女も危険ですよ？」

「…まあ。その時は友奈ちゃん、お願いね」

「任せてください！」

わたしの力があるのが前提で潜入を任されたってことだ。

芽吹ちゃんのものよりさらに進化した勇者システム。防人の装備やそれが原型になってる国士の装備じゃ性能が全然違う。芽吹ちゃんが言うには、戦いにすらならないくらい圧倒できるって。

——— そんな力をぶつければ、国士のみんなは無事では済まない。一つ間違えれば、簡単に命を奪ってしまう。

それが怖い。明るく返事をしたけど、いざという時に拳を振るえる自信がない。

「船の見取り図はモバイルに送付いたしましたわ。なるべく犯人との接触は避けて、まずは人質の場所を探し当ててくださいいな」

「はいよー」

「結城友奈、いきますー！」

「………弥勒たちが動き出したわ」

「………ほんとに国士が、動くのかな……？」

「芽吹の言うことを信じるしかないわよ。まあ、居城をガラ空きにするわけでもないから戦闘は避けられないわ」

「この激戦を芽吹先輩ナシで、ですか」

「…それをやれるって、芽吹は期待してくれてるのよ」

「最後に確認よ。三好夏凜との接触は厳禁。遭遇したら全力で退避する」と

「了解！」

「相手がしつこく追ってくるならあたしに報告して。…勇者のあたしなら、いくらかマシに戦えると思うから」

「…怒られるのは、隊長だけってこと…？」

「…あたしが代表して怒られるから、何とか一矢報いるわよ！」

「樹ちゃんの仇、ってわけですね」

「…芽吹には悪いけど、あたしは黙ってられないのよ」

「各員、潜伏開始！合図があるまでじっと隠れてるのよ！」

「了解！」

「…誰もいないですね」

「犯人グループも一人も見当たらないのもおかしいよ。いくら広い船とはいえ」

「まさか海から上がってきたなんて考えもしないんじゃないですか？」

船への潜入はあっさり成功した。海から船体を登って通用口から入り込んだ。港側ばかり見てた犯人には死角になってる。

防人の…勇者の身体能力があつてこそその作戦だ。これまでも相手の想像を越える作戦で、わたし達は素早く任務を達成してきたんだ。

でも、誰も見当たらないのは予想外。犯人グループの見回りがいる



かなと思つてたから。

「さつきと人質を見つけて芽吹ちゃんの会見を始めさせてあげないと！一般人相手なら多少強引にでもいけるし！」

「そう、ですね」

「……友奈ちゃんは手を出さないでいいよ。友奈ちゃんが殴ったら、犯人死んじゃうもんね」

「え？…あ…はい」

「友奈ちゃんは人質の保護を優先して」

「わかりました」

国土ですら命を取りかねない威力の拳だ。普通の人ならどれだけ手加減しても命の保証はできない。

戸郷先輩は精一杯配慮してくれた。犯人の制圧は先輩がやるから、人質を保護するのをやってほしいって。

時間も迫ってるし、先輩の提案に乗るしかない。

「そうと決まれば犯人のいる場所に直行！」

人質が犯人とは別の場所にいる可能性を探すはずが、犯人を制圧してから探すことに。人質と犯人が一緒にいる可能性も高いけど、万が一別だった時人質が危ない。

その時は、わたしが全力でやらないと。

外からの監視で犯人がいると思われる船室の前に来た。展望デッキにつながる、見晴らしのいい部屋だ。

「防人7番より20番どうぞ」

〈20番ですわ。今どちらに〉

「展望デッキ前です。船内下部には人影が見られませんでした。恐らくここに人質も犯人もいるものと思われれます」

〈了解ですわ。突入、しますのね〉

「はい。後詰め、お願いします。本隊が突入できそうなタイミングで連絡します」

〈承知しましたわ。あなたがしくじるとは思ってませんけれども、警戒を怠らずに〉

「ふふ、芽吹ちゃんが言いそうなセリフ」

〈おほほ、そうですね。では、参りましょうか〉

「芽吹ちゃんが何をしゃべるか、結構楽しみだからね！」

弥勒先輩に本隊突入の依頼をして、通信を終える。

先輩もわたしも、深呼吸してから扉に向き直った。精霊の「牛鬼」もふよふよとわたしの周りを浮かんで準備万端だ。

「先輩。扉はわたしが抜きます」

「ゲートロックも友奈ちゃんの前じゃ意味ないって？」

「はい。…いきます！」

力を込めて分厚い鉄の扉をカカトで蹴る。ゲートバーも蝶つがいもお構いなしに、一撃で扉は吹き飛んだ。

すかさず先輩が煙幕弾を投げ込んで突入。防人のバイザー越しなら、煙で見えなくても人の存在が感知できる。

「私が犯人を抑える！友奈ちゃんは人質を探して！」

「アイアイサーー！」

突然視界を奪われた犯人は、手にした武器を使うこともできず戸郷先輩の一撃を受けて鎮圧される。弾を撃たずにストックで殴り倒すのはせめてもの情けだと思う。

わたしも煙幕をかき分けて人質を探す。目で見えなくても気配み

たいな感じで人がいるかどうかを感じ取れる。

窓際から離れたカドに縛られた人がいるのを見つけた。ケガとかはしてないみたいだ。

「大丈夫ですか!? 防人が助けにきましたよ!!」

「防人!? 本当に助けにきてくれたんだ!」

「ありがとうございます!」

「安全を確認してから脱出しますから、ちよつと待っててくださいいね!」

人数を確認してる間に、戸郷先輩は部屋の犯人を全部片付けた。きつちり拘束具もはめて制圧完了。増援を呼ぶ必要もなかったんじゃないかな。

「こっちは片付いたわ。犯人の人数は情報と合致してるけど、人質の方はみんないる?」

「…いえ、ここにいるのは三人だけみたいです」

「あと二人! 別の部屋に閉じ込められてると思います!」

「情報ありがとうございます。友奈ちゃん、先に三人を連れて船を降りて」

「はい! 先輩はどうするんですか?」

「犯人を引き渡すまでここで待機ね。人質の搜索は弥勒に任せるわ」

後は人質を探すだけだから、戦力は必要ない。救出した人を安全な場所に早く送り届けるのが任務だ。

三人も場所までは知らなかった。手当り次第に探すしかない。救助者を見送ってわたしも搜索を手伝わないと。

「…でも、芽吹ちゃんの勘も外れたってことなのかな」

「国土、いませんでしたね」

「どこかからこっちの情報が漏れてて高知城に全員いたとしたら、マ

ズくない？」

「そう、ですわね」

あまり考えたくない予想を先輩は口にした。減らした戦力で国土の総力と戦えるとは思えない。芽吹ちゃんがいなくてもかなりキツイのに。

「本隊に報告しておきますか。：防人7番より20番」

「20番ですわ。どうなさいましたの？」

「報告です。展望テッキの制圧は完了しました。人質三名を救出。犯人全員を確保。国土は発見できず。本隊に、残された人質の搜索を要請します」

「了解しましたわ。犯人は機動隊に引き渡しますので、警戒を続けてくださいな」

「承知。救出者は結城が護送しますので、レスキューに取り次いでください」

「承知いたしましたわ。：くれぐれも、警戒を怠らぬよう」

「弥勒がそれ言うのはやっぱり似合わないね。：りよーかい」

本隊への報告も済んで、もうほとんど作戦は終了した。いつも通りの簡単な鎮圧作戦だった。

この船に罠が仕掛けられてたの知らなかったから、そんなことを思ってしまった。

「…え？国土がない？」

「ええ。突入部隊が制圧したのですけれど、武装した一般人しかいなかったと」

「…そつちに国土がいるのを確認してから作戦開始なのに、これじゃ始められないじゃないのよ」

「…乃木教導に報告した方が良いのでは？」

「その必要はないです」

「わっ！乃木教導!？」

「芽吹、聞いてたの？」

「ええ。…船内に国土は必ずいます。十二分に気をつけてください」

「罨をはってる、ということですか？」

「恐らく。どんな手で来るか、予想が付きません」

「でもさ、立てこもり犯を見捨てるっておかしくない？」

「所詮使い捨ての手駒としか思っていないということでしょう。犯人の要求が通るとは微塵も考えていないってことです」

「じゃあ、国土の目的は？」

「…私たち、です。防人と戦い、討ち取ること。国土が存在するのは大赦の最後の砦である防人を殲滅し、勝利宣言をするためです」

「…では、今この瞬間にもわたくし達は狙われていると？」

「はい。そのためにこんな大きな船舶をジャックするなんて大掛かりな作戦を立てたようです」

「…この船自体が罨ということですね。わかりましたわ」

「弥勒さん。…指揮官としての成果、期待してますよ」

「ええ。搦め手など正面から蹂躪してやりますわ！」

「風さん、時間です。作戦を開始してください」

「…あんたのこと疑うワケじゃないけどさ。なんか、腑に落ちないの

よね」

「…絶対上手くいきます。今回の作戦で、五分と五分に持ち込めます」  
「…わかった。四国を守る勇者様のためにも、一肌脱いでやろうじゃない」

『四国の皆さん、お初にお目にかかります。大赦を代表して乃木家当主、乃木芽吹が現状に対して所信を表明いたします』

港に待機していたレスキューの人に救助者を引き継いでる途中で、ラジオやテレビから芽吹ちゃんの声が聞こえた。  
始まったんだ。芽吹ちゃんの演説が。

『まず、大赦の離反者…浪士に起因するテロリズムについて。我々は断固としてこれを認めず、一切の譲歩や妥協なく根絶することを宣言します』

夏凜ちゃんのものとは違う、明らかに浪士を排除するという意志が

伝わる。聞いている人に応援をお願いするんじゃないで、自分がやることを強く訴えかける言葉。

芽吹ちゃんの言葉はいつもそうだった。誰かを動かす言葉じゃなくて、自分の意志を示す言葉。その強さに惹かれた人だけが、芽吹ちゃんについていく。

『現在、私と志を共にする鎮圧部隊：防人が徳島港で起こったテロ事件に対処しています』

テレビの画面が切り替わって、犯人をしばらく上げて待機してる戸郷先輩が映る。監視カメラがあるのはわかってたけど、いつつないだんだろう？

『既に制圧は完了し、人質の身柄も確保しました。我々はいかなる状況においても、確実に作戦を遂行します』

『どれだけテロリストが抵抗しようが、どれだけ浪士が力をつけようが、我々が敗北することはありません』

『なぜなら、我々は未来を現実にする力があるからです。外の世界を人類のもとに取り戻す用意があるからです』

『300年前、初代勇者乃木若葉様が描いた理想。それを実現するために、私はこの場に立っています』

芽吹ちゃんの声色は変わらないけど、理想を語る言葉には心を圧倒する力がある。警察官も、レスキューも、救助者も聞き入っていた。

『非道な暴力を振るう浪士に、我々は必ず裁きを下します。望まない思想を強要された仲間、必ず取り戻します』

また画面が切り替わって、今度は高知城に突入した風先輩たちが映る。少人数で立ち向かう国士に対して、防人のみんなは集団で押し込んでる。

作戦は上手くいってるみたいだ。こつちには国土がいなかったけど、高知城にいる戦力は本当に少ないらしい。

『今の戦闘は、囚われた仲間を救出するための作戦です。浪士たちの根城に強行し、危険を顧みず仲間を迎えに行く』

『我々は決して誰も見捨てません。我々に立ちはだかる者以外は必ず次のステージに導きます』

敵は非情なまでに叩いて、味方には最大の敬意をもって接する。聞いているみんなの意志に問いかけた夏凜ちゃんとは逆の、脅迫的な選択を人々に突きつけた。

芽吹ちゃんはそういう人だ。銀ちゃんの優しさを継いだのが夏凜ちゃんなら、銀ちゃんの強さを受け取ったのが芽吹ちゃんだ。

『外の世界へ乗り出すのに不適切なものは、たとえ大赦の人間でも排除します。自由を生きるという人類種の意味に反し既得権益にすぎるとは、勇者三ノ輪銀の名において撃滅します』

『暴君、と言っていただけでも構いません。これまで四国を護ってきた勇者たちの意志を、未来への願いを踏みにじる者は、実力を以って排除します』

——— これまで大赦がやってきたことに、芽吹ちゃんも怒っているのは同じだった。夏凜ちゃんと同じ。

だから、内側から治していく。暴君と言われようが、どんなに痛い荒療治だろうが、芽吹ちゃんはやり通す。

『私たちと同じ未来を見ることを願う人には、全てを打ち明けます。過去に大赦が欺瞞した真実を。生け贄に等しい処遇を受けた人たちのことを』

『それを皆さんに伝えること……これからも忘れないように語り継ぐことが、私にできる贖罪です。大赦の首長として、皆さんにできるせめ



てもの報いです』

『この騒乱を平定した時に、全て開示します。それまでは…私を信じ  
て待っていてください』

画面の向こうの芽吹ちゃんは深々と頭を下げた。大赦を代表して、  
これまでの不祥事を謝罪したいってことなのかな。

その後には、たった一つの国民へのお願い。待っていて、と。

銀ちゃんの影が、芽吹ちゃんに重なる。その意志の強  
さも、その魂の不安定さも。生き写しって言葉しか出てこない。

私はすごく不安になった。芽吹ちゃんが銀ちゃんの後を追ってる  
気がして。

銀ちゃんのことを割り切ってる芽吹ちゃんだけど、ホントはまだ銀  
ちゃんのこと頭がいっぱいなんだ。無意識の内に銀ちゃんを追っ  
て

銀ちゃんと同じ場所に行こうとしてる。

『これにて、会見を終了します。神樹様のご加護が、皆様にあらんこと  
を』

「…ふーん。いかにもアイツらしい会見ね」

「!!夏凜!!」

「来てやったわよ、風。私と戦いたいんでしょ？」

芽吹の会見を見て、別に焦ったわけじゃないけど。警護に当たってた国士がやられたのを聞いて、出向いてやった。

もちろん、風と戦ってやるため。売られたケンカは買わないとモヤモヤするし。

「…くっ！みんな散開して！私がここを抑えるから！」

「「りよっ、了解!!」」

私の姿を見たらなりふり構わず突っ込んでくると思ったけど、最低限の指揮はとって防人たちを分散させた。

目的は——あの子たちの奪還ってどこかしらね。どうでもいいけど。

「しかし、なめられたもんね。芽吹抜きで本拠地に乗り込んでくるなんて」

「その程度ってことでしょ。あんた達の脅威なんて」

「なんでもいいけど。目の前の敵は殲滅するだけ」

戟を手にすると、風も大剣を前に構えた。

表情を見れば、今にも怒りに任せて剣を振ろうとしてるのがわかる。でも、動き出さない。

時間稼ぎ、か。防人の連中があの子たちと接触するまでの。風はどんな状況にいても、「お姉ちゃん」なのね。

——じゃあ、どれだけ持つか試してやろうじゃない。

「でもいいの？あの子たちを指揮できる人、あんたしかいないんじゃない？」

「何を敵の心配してんのよ」

「烏合の衆じやウチの部隊の相手になるかって」

「…！それはそつちも同じでしょ！」

「私が無策で一人出張ってくると思った？ここは私たちの本拠地なのよ？」

「…何をしようってのよ」

「話すと思う？」

「ここで聞き出すだけよ！」

挑発に乗ってきた。大剣を振りかぶって詰め寄ってくる。

そんな大振り、受け止めるまでもないけど。力の差を教えてやらな  
いといけないから、敢えて柄で防御する。

「そんなもん？所詮実戦経験のない急造勇者ってわけ？」

「何を！」

「その程度で私の前に立つなって言ってるのよ！」

「うわっ！」

力で押し切ろうとする風を、それを上回る力で押し返す。パワーだ  
けなら芽吹を超えてるけど、私が押し負けるほどじゃない。

弾き返された勢いを殺しきれずに尻もちをつく風。かばい立てし  
た精霊は吹き飛ばされ、風は切っ先でなでられた肩を手で抑える。

私にも、あの霧の力…邪神の力が巡ってるのかもしれないわね。それならバリアを貫ける理由になる。

これをさらに研究すれば、国士たちでも勇者に対抗しうる力を持た  
せてあげられるかも。

「あんたの覚悟はそんなもん？樹のケガの落とし前、付けに来たんで  
しょっ！」

「…そうよ。芽吹の信頼を裏切って、友奈を惑わせて、銀の大切なもの  
を傷つけた。…あたしは絶対にあんたを許さない…！」

言葉で怒りの導火線に着火したみたいだ。表情が一段と強ばる。それよ。その表情が見たかった。憎しみで周りが見えなくなる。人の感情がむき出しになった行動をする。

それが“自由”よ。銀が求めた自由。

「御託はいいわ。さっさとかかってきなさいよ」

「余裕ぶって…！」

風の余裕がどんどんなくなってるのを見て、少し笑えてくる。

ヒール役になったつもりはないけど、そういうのを見て感情が昂ぶってる。悪役は芽吹の方が似合ってると思うけど。

「実際余裕だし。真の勇者は私だってこと、見せつけてやる！」

「違う！真の勇者は芽吹よ!!」

「…！」

---

「ここね、情報通りなら」

「さっさといけよ。俺が敵を食い止めとつから」

「お願いシズク。…よし、行こう！」

「ハロー。元気にしてた？」

「うん、元気元気。…久しぶり」

「久しぶりだね。迎えにきたよ」

「……それはいらなかな」

「え？」

「これを見ても、まだ私を防人つて言うの？」

「……その格好！国防仮面!？」

「私は国士になった。…大赦が防人をどういう扱いをしてるか、知ってる？」

「え？」

「使い捨ての雑兵だって。こんな無茶な作戦をさせること自体、おかしいと思わなかった？」

「……おかしくないよ」

「芽吹ちゃんは私たちを雑兵だなんて思っていない。志を共にする勇者だつて言ってくれた」

「…そう。…でも、私を勇者と言ってくれる人は三好閣下だから」

「…気持ちは決まってるのね。なら私はもう何も言わない」

「…でも、これだけは言っておくわ。迎えに来てくれて、ありがとう」

「うん。…二度と会わないことを願うよ」

「そうだね。…一つだけ教えてあげる。亜耶ちゃんと雀ちゃんは、ここにいないよ」

「わかった。教えてくれてありがとう」

「オイオイオイ！なんであつさり引き下がってんだよ！あいつを迎えにきたんだろ!？」

「……あの子の言うことも、わかるんだ。浪士たちの主張も、三好夏凜を信頼してることも」

「バカじゃねえのか!? どう考えたって脅されるか洗脳されてるだけだろー!」

「そうなのかな。それは、私たちも同じじゃない?」

「…は?」

「芽吹ちゃんが絶対正義って、誰が保証してくれるの? 私たちも芽吹ちゃんに思想を吹き込まれてるだけなのかもしれないよ?」

「んなこと聞いてんじやねえんだよ! なんて簡単に仲間のこと諦めてんだよ!」

「思想を強要するのが、仲間なのかな? 私はそうは思わないし、私は納得した上で芽吹ちゃんについてくって決めたから」

「テメエも三好や天子の会見を見て頭おかしくなっちゃったのか!」

「…結局、何を信じるかは自分で決めなきゃいけないよ。…そこだけは天子の言ってたことに同意できる」

「…どいつもこいつも!! 何をオトナぶってやがんだ!」

「4番より1番。目標の確保に失敗しました。目標は…国土になっていました」

〈……………了解よ〉

「別の情報も取得しました。加賀城と国土は高知城にはいません」

〈…わかった。撤収の準備をして〉

「…………クソツ!」

「作戦は失敗かしら？隊長さん」

「全部わかってて何よ!!あの子たちが寝返ったのをわかってて、こんな茶番を!!」

「勝手に仕掛けてきたのはそっちよ。それに、私と天子の言葉は、ちゃんと防人にも伝わってただけ。全部あんた達の思い通りにいくとは思わないことね」

防人の隊員から作戦失敗の報せを聞いた風は、逆ギレ気味に吠えた。負け犬の遠吠えってヤツね。

少し楽しくなってきた、さらに煽ってやる。いつ怒りに任せて襲いかかってくるか。指揮官なら、ここは退かないといけないけど。

「…それで?まだやる気?」

「……くっ!!…もうここには用はないわ。あんたにも」

「樹の仇討ちに来たんじゃないの?手も足も出なかったって情けなく撤退するわけ?」

「あたしの事情だけじゃないのよ。真の勇者を、勝利に導かないといけないから」

「あいつをそんなに持ち上げたいか。部隊の被害を顧みない、冷血な暴君を」

「志を投げ出した半端者より、ずっと信用できるわよ」

—— 気に入らない。

どうしてあいつが、人の気持ちかわからないサイコ野郎がここまで信用されてるのか。あいつも何かが変わったのか。

私は何も知らない。誰よりもあいつのことを知ってるつもりだったのに、乃木芽吹のことは何もわからない。

「…まあいいけど。ここからは私たちの反撃だから」

「はっ。」

「船に乗り込んだ連中、無事に帰って来られるかしらね？」  
「バカにしないで。あの子たちだって芽吹が認めた勇者よ」  
「まんまとおびき出されたとも知らずに。ハメられたのはそつちよ」



わたしは勇者!!!

「……あれ？船が…動いてる…!？」

芽吹ちゃんの演説が終わる前だと思う。船がいかりを上げ始めたのは。

それに気付くのが遅れて、わたしが波止場に戻る頃には船は港を離れていた。もう沖の方まで出ていつてる。

———何か、すごくイヤな予感がする

！

「迷ってる時間はない！行かなきゃ！」

波に蹴り込むように足を叩きつけて水面を走る。こんな忍者みたいな技、やったことなかったけど自然に身体が動いた。

勇者の力を持って、水の上を進むのはスピードが出ない。船に追いつくのは時間がかかると思う。

その間に、何か起きなきゃいいけど

〈7番より20番!〉

「どうしましたの？そんなに慌てて」

〈ふ、船が動き始めた!〉

「え？」

〈操舵室には誰もいないはずなのに!〉

「落ち着いてくださいな。我々の能力なら沖から要救助者を陸まで連れていくことも可能ですわ」

〈そこはわかっている！問題はこの船にまだ敵がいるってこと！〉

「ええ。乃木教導からうかがってますわ。それも我々で対応いたします」

〈…了解。弥勒が落ち着いててよかった〉

「機動隊の方々が入ってくる前で助かりましたわ。引き続き、犯人の警戒をお願いしますわ」

〈……気を付けてね、弥勒〉

「よつと！な、何とか追いついた…！」

船のデッキの柵に手をかけて、船上に飛び込んだ。力まかせに海を走ったせいで、息が上がってる。

「どうするべきかな？・戸郷先輩と合流するべきかな？」

弥勒先輩たちの居場所はちよつとわからなさそうだし。レーダーじやどの階層にいるかまでは表示されないっぽい。

展望デッキに向かうために船内に入ると、大きな音が響き渡った。

「うわっ！爆発!?!」

この音は間違いなく何かが爆発した音だ。衝撃が徐々に伝わってきて、船が揺れ始める。

〈7番より20番！何があったの!?〉

戸郷先輩が焦った様子で弥勒先輩を呼び出すけど、返事がない。

「9番です！何か爆発したみたいですよ！」

〈友奈ちゃん!?戻ってきたの!?!〉

「はい！弥勒先輩の居場所ってわかりますか!?わたしが見てきます！」

〈船体下部に人質を探しにいったと思うんだけど…爆発って…〉

「戦闘があった、ってことですか？」

〈……この船に、爆弾が仕掛けられてたんじゃない!?!〉

「え？」

〈船の奥深くまで探しにきた私たちを海の底に沈めるために、この夕イミングで爆破したってこと!?!〉

「!!」

戸郷先輩の予測は、カンペキに聞こえた。

国土の目的がわたし達を倒すことだとしたら。立てこもり犯なんてどうでもよくて、船ごとわたし達を沈めることだとしたら。

これまでのおかしな点が、意味のあったことになる。

〈弥勒！返事なさい！弥勒!〉

「落ち着いてください戸郷先輩！とにかく、情報を集めないと」

〈ゆ、友奈ちゃん…?〉

こういう時に取り乱すのはダメだって風先輩が言ってた。確かに、自分のことができることをする。それが大事だって。

デッキに戻って船体を確認した。側面から煙が立ち上って、爆発で空いたつぽい穴から水が入り込んでる。

戸郷先輩のいうとおりだ。この船は沈む。

「戸郷先輩の予想通りです！船に穴が空いて水が入ってきてます！」  
〈!!〉

「一度合流しましょう！最悪の事態に備えて！」  
〈…わかった。…友奈ちゃん、ありがとう。そっちに向かうわ〉

何とか戸郷先輩も落ち着いてくれたみたいだ。

でも、ここからが難しい。国士さん達を警戒しながら、人質と弥勒先輩たちの居場所を見つける。船が沈むまでの時間も考えると、余裕はないと思う。

デッキの入口で待機していると、足音が聞こえてきた。二人分の足音。

え？二人分？

「戸郷先輩？…え？」

「え？…結城さん？」

—— やってきた人たちは、わたしも知ってる人だった。

「す…雀ちゃん？」

「ゆ、結城さん？なんでここに…？」

「人質を助けに。雀ちゃんは…」

二人は、国防仮面の格好をしていた。つまり。

「雀ちゃん、国士になったんだ…」

「わ…わわ、ご、ごめんなさい！そうしないと命が危なかったから！」

「ううん。わたしは怒ってないよ。…夏凜ちゃんなら守ってくれるもんね」

雀ちゃんは何に謝ってるのかわからなかったけど、ごめんなさいと伝えてきた。責めるつもりはなかったんだけどね。

「寄りにもよってここであなたが待ち伏せしてるなんて…」

「今日は雀ちゃんと一緒なんだ。古風なあの子は高知城の方にいるのかな？」

もう一人は、ゴールドタワーでも避難所でも会った、クールな国士さん。何か恐ろしいものでも見るように、わたしを見つめる。

「…教えてくれないかな。この船で、何があったのかを」

「ひっ…」

雀ちゃんはなぜか泣きそうな顔で身を引いた。クールな国士さんも顔をこわばらせて身を固める。

「ただでは通してくれない、ということね」

「そういうつもりじゃないけど…」

「は、話しますう！話すから今回は見逃してえ！」

雀ちゃんがビクビクしながら、国士の…夏凜ちゃんの作戦を話し始めた。

時間は船が港から離れる前までさかのぼる。

「ここですよ!? どなたかいらっしゃいませんか!?」

予定通りに、防人が人質を探しに船の奥まで来た。この良く通る声は、弥勒さんだ。

船室を片っ端から開けてチェックしてるようだ。私たちがいた部屋に二人組の防人が入ってきた。

(…マズいかな。顔が知られてる人が入ってきた) (…)

(わわわ…どうしよう…! バレたら作戦が全部水の泡になっちゃう…!)

(…私が船と爆弾を起動させるから、雀ちゃんはなんとか場を持たせて)

(ええ!?)

(浪士に捕われてここに閉じ込められてたつて言えば納得してくれるよ)

(わ、わかったよ! も、もしもの時は助けにきてねっ…!)

ゴールドタワーでの作戦で、弥勒さんに顔バレしてる隊員が一緒だと不都合。私たちの二人組が離れて行動しなきゃいけない。

だつて

(じゃあ、広間で合流ね)

(ええ!? もう行っちゃうのお!?)

(雀ちゃん。…相手の庇護欲に訴えかけるのよ)

「物音が聞こえますわね…」

「あ、あれ! 弥勒さん!」

「要救助者ですわ! ご無事で!」

「み、弥勒さああああんっ!!」  
「わっ!?!そのお声は…雀さん!?!」

——残りの人質って、〃人質に扮装した国士〃だから。  
わざわざ別の場所に閉じ込めてたのも防人を誘導する罠。

私が国士になったことは、大赦には伝わってないはず。だから助けを待ってたと必死で伝えれば、——私はただの人質だと誤認させることができる。

演技だとバレないように、大げさに弥勒さんに抱きついた。

「……こ怖かったよおおお!」

「よーしよし。雀さん、この弥勒夕海子が来たからにはもう大丈夫ですわ」

「…雀ちゃんって国士に連れてかれたはずだよね?」

「そうだよ!でも国士のいうことなんか聞かないって言ったらこの船に閉じ込められて…!」

「…雀ちゃんらしくないね。大人しく言うこと聞いてれば、怖い目に合わなくて済んだのに」

「まあまあ。雀さんのちっぽけな正義感が恐怖を超越したのでしよう」

「ちっぽけは余計だよ!」

私らしくない、か。

つまり、私は脅されたら簡単に寝返る、って思われてるってわけか。

そういう陰口を言われることにも慣れてはいるけど、——  
今回のこれは、少し心に刺さった。

防人のみんなと過ごした時間は、すごく楽しかった。初めて自分が必要とされる実感をみんながくれたから。

こうやってみんなを罠にハメて、…命を取ろうとするのに抵抗がな

かったわけじゃない。

でも、やらなきゃいけない。私は国士だから。私が次の捨て駒に、生け贄に選ばれるっていうのなら。

私以外の誰かを、追い落とす。

「残りの人質は一名ですわ！雀さん、居場所をご存知ありませんの？」  
「うん、知ってる。でも、そこには国士が何人かいるよ。できるだけ戦力を結集してから向かった方がいいかも」

「では、総員集合させるといたしましょうか」

「弥勒さん。戸郷さんはこのまま犯人の警戒を続けてもらって、残りの四人で行くべきだよ」

「そうですね。いくら国士が潜んでいようが、わたくしが軽くひねって差し上げますわ！」

この船に来た防人は六人って聞いてたけど、…これじゃ四人しか罠にかけられない。

「いや、ここで欲をかいちゃダメだ。弥勒さんは私を信用しているとしても、他のメンバーには疑われている。下手に動けば全部計画が水の泡になる。」

「20番より捜索隊各員へ。要救助者一名を確保いたしましたわ。残り一名の居場所を知っているようですので、捜索隊全員合流して向かいますわ」

〈〈了解！〉〉

指揮を取ってるのは弥勒さん？班長には選ばれてなかったはずなのに。…乃木芽吹の差し金かな。

でも、これはラツキーだ。弥勒さんは私を疑ってないし。ボロを出す前に作戦を仕上げたい。



「でも、ご無事でよかったですわ。…あちらの作戦は、失敗してしまっただようですし。雀さんだけでもお迎えできて、乃木教導の面子を何とか守れますわ」

「…ずいぶん乃木芽吹さんのことを尊敬してるんだね」

「ええ。尊敬すべき勇者であり、かけがえのない仲間ですわ。わたくしはあの人についていくことを決めたのです」

「芽吹ちゃんが描く未来、私にも見えたよ。雀ちゃんも、会ってみればわかると思う」

——三好さんから、よく聞いているよ。乃木芽吹のこと。

人の気持ちが変わらないサイコパス。目的のためなら平気で他人を蹴落とす冷血さ。敵は情け容赦なく蹂躪する残忍さ。

人の形をしたヒトの負の感情の塊だって。

騙されてるよ、弥勒さんも。防人のみんなも。防人のことを体のいい鉄砲玉としか思っていないよ。

そんな伝えても意味のないことを考えてると、防人の一人が弥勒さんを通信で呼び出した。

〈7番より20番！〉

「どうしましたの？そんなに慌てて」

〈ふ、船が動き始めた！〉

「え？」

〈操舵室には誰もいないはずなのに！〉

「落ち着いてくださいな。我々の能力なら沖から要救助者を陸まで連れていくことも可能ですわ」

〈そこはわかっている！問題はこの船にまだ敵がいるってこと！〉

「ええ。乃木教導からうかがってますわ。それも我々で対応いたします」

へ…了解。弥勒が落ち着いててよかった

「機動隊の方々が入ってくる前で助かりましたわ。引き続き、犯人の警戒をお願いしますわ」

へ……気を付けてね、弥勒

落ち着き払った様子で弥勒さんは指示を出した。私がいちときより、少し周りが見えるようになった気がする。乃木芽吹の影響、のかな。

船はもう動き出したみたいだ。着々と準備が整ってる。あと少しだ。

ソワソワしてくる気持ちをよそに、防人二人組がやってきた。

「弥勒先輩！到着しました！」

「…あれ？雀先輩じゃん！」

「あ、どうも。恥ずかしながら救出されてしまいました」

「こんなところにいるとはね！」

「みんなも無事でよかったよ。じゃあ、最後の一人を迎えにいこうよ」

みんな無邪気に私の帰還を喜んでる。

胸がズキズキする。

これから私がするのは、私をまだ仲間だと言ってくれる人たちを始末する…これ以上考えられないくらいの裏切りだからか。

自分でも不気味なくらいに脈打つ心臓に苦しめられながら、予定の部屋にたどり着く。

この船で1番外に出づらい部屋。ここに閉じ込めて、船を沈める。防人の銃剣でも突破できないように、霊的な補強もしてある。

「ここだよ。一気に突入して、付け入るスキもやらずに制圧した方が

いいと思う」

「そういたしますわ。既に趨勢は決していますもの」

「負けを認めさせてあげないとね」

自信満々にドアを開けて素早く突入する四人。勝ちを確信して油断してる。

だから、簡単に引つかかってくれた。入ったのを確認すると、私はドアを閉めて補強材を打ち込む。これでドアは簡単に突破できなくなる。

「これでよし、と。連絡入れなきや」

念入りに補強したドアの向こうの様子はわからない。音も衝撃もこつちには伝わらない。

あとは爆弾を発破させるだけ。私は一足先に脱出する準備をしよう。

「こつちは上手くいったよ！」

〈了解よ。爆破するわ〉

先に仕掛けていた爆弾が船底の一部を吹き飛ばして大穴を開ける。ここから海水が入ってくれば、あとは沈むだけ。

保険としてもう一つ反対側に爆弾を仕掛けてたけど、これは脱出間際に発破すればいいかな。

〈任務完了。合流地点で落ち合いましよう〉

「…了解」

中でどんなことになってるのかがわからないのが救いだ。それを知ってしまったら――

私の後悔は、取り返しがつかないほど大きくなってたかもしれない。

「……うそ、だよね……？」

「……いいえ、これが私たちの任務よ。防人の数を確実に減らすための作戦」

雀ちゃんが語った国士の作戦は、わたしじゃ想像できないくらいの、残酷なワナだった。

動揺が抑えられない。すぐにでもアクションを起こさないとけないのに、何をすればいいかを考える余裕もない。

「……結城さんも早く脱出しなよ。結城さんまで海の底に沈むことはないよ」

「……………」

「よくもやってくれたなっ!!卑怯者っ!!」

怒号と同時に弾丸が国士の二人を襲う。

即座に雀ちゃんは反応して光波状の盾で防いだけど、ほとんど不意打ちだ。クールな国士さんは背中からお腹を貫かれた。

「うぐっ……」

「だっ、大丈夫!？」

「あんただけは許さない!雀!この船をあんたの墓標にしてやる!」

「と、戸郷先輩!」

「友奈ちゃんは弥勒たちを助けに行つて!!大丈夫、友奈ちゃんの力は“人を救う”ためにあるんだから!」

戸郷先輩の号令で自然と身体が動いた。クールな国士さんをかばうように盾を構える雀ちゃんを飛び越して、船内へ進む。

そうだ。迷つてる時間はない。わたしが迷つてる間に、弥勒先輩たちが溺れてるのかもしれないんだから。

「…全部聞いてたんですね、先輩」

「優しい友奈ちゃんなら、見逃してくれると思つたんだろうけど。私は違う」

「そう、だよ。…でも、勇者が相手じゃないなら逃げられる!」

「…やっぱり浪士は生かしておけない。芽吹ちゃんが作る世界を歪める外道は根切りしなきゃ」

「…雀ちゃん。私のことはいいから…すぐに撤退して」

「いやいやいや。それは」

「あの子は、完全にあなたを狙つてる…。どこまででも追跡してくるよ…。…私が足止めするから」

「ちよつと待つてよ!その身体じゃ…」

「…三好閣下があなたを引き抜いた理由。単なる気まぐれじゃなくて…あなたが必要だったからよ…」

「私が…?」

「私みたいなろくに戦えない国士じゃ…三好閣下の革命に貢献できない。…雀ちゃんが…支えてあげるのよ」

「え?待つて!まだ話はっ!」

「ちつ、囿ってわけ？あんな卑怯者のために、命かけるってどういうこと？」

「雀ちゃんは三好閣下が見込んだ人。こんなところで討ち取られていい才能じゃない」

「ドアを溶接した…？それが、あなたの力ってわけか」

「もう雀ちゃんはここに戻ってこられない。そして、私があなたを倒す」

「…どの道、あなたも拘束するけど。脱出はその後よ！」

「!!ここだ!!」

すでに浸水が始まっている。封鎖された部屋のドアの前は膝の上まで水びたした。

ドアのハンドルはピクリともしない。補強材もそうだけど、丁寧にドアロックも固められてるみたいだ。

「なら、壊すしかないよ!!」

かかるとに神経を集中させて、全力でドアを蹴り込む。展望デッキのドアを開けた時と同じ技。

でも鉄製のドアにわたしの足跡が刻まれるだけで、補強はビクともしない。

これ、明らかに普通の補強じゃない。ゴールドタワーの侵入禁止の部屋の封も、こんな補強がしてあったし。

「一発でダメなら、何発でも!!」

今度は全力で拳を振りかぶって、ドアに打ち付ける。手甲の形のとが付くだけで、封は解けない。

その後もひたすらに全力で叩きつけたけど、わたしの体力を消耗するだけだった。

「はあっ…はあっ、なんで。なんで開かないのっ…!!」

何のための勇者の力だ。何のための神樹様の力だ。人を、仲間を助けられなくて、何が勇者だ。

気付けば水位は腰の高さまで上がってきてる。打ち付けた手や足は、衝撃こそ精霊が防いでくれたけど、あまりに力みすぎて自壊して変形してる。たぶん、骨や腱がおかしくなってるんだと思う。

一瞬、マイナスの思考が走った。

このままだとわたしも一緒に海の藻くずだ。ここで戻っても、最善は尽くしたけど助けられなかったって言い訳ができるって。

「うわあああああっっ!!違うっ!わたしはっっ!!!」

マイナス思考は咆哮が打ち払った。自壊した身体への恐怖はたぎる血潮が押し流した。

「わたしは勇者!!勇者結城友奈だあああああ  
!!!!!!」

死力を尽くして振るった拳は、わたしのものじゃない気がした。その一撃が、とうとうドアを破った。補強材を引きちぎってドアの上半分を奥に折った。

「弥勒先輩!!みんな!!」

「結城さん!?!いえ、今は脱出ですわ!!」

「開いたの!?!ホントに!?!」

「もうダメかと思ったよおお」

「泣いてる場合じゃないって!早く!!」

「結城さんについていきますわよ!」

沈むまでもう時間がない。

四人が無事なのを確認すると、わたしは反対側の壁をぶち破った。通路を使ってたら間に合わないかもしれないから、船体に穴を開けて海に出るのを最優先にした。

四人ともわたしについてきてる。弥勒先輩が指揮をとってくれてのおかげだ。こんな状況でも冷静に行動できてる。

芽吹ちゃんが人一倍気にかけてた効果が出てるのかも。

「これを抜けば!」

水圧にも負けずに、わたしは船体を拳でこじ開けた。水が一気に入り込んでくる。

「みんな、わたしと手をつないで!」

「え?」

「入ってくる水に負けないように、わたしががんばって泳ぐから!」  
「わかりましたわ!それしか脱出する手段は残されていないようですし!」



がっちりわたしの腕につかまる四人。あとはこれで海中に出るだけだ。

猛烈に入り込んでくる水流に飛び込んだ。どんな泳ぎの上手な魚さんだっけこれじゃ前に進めないけど、みんなを助けるって思いが現実には打ち勝つ。

激流をはねのけて海中へと繰り出した。沈みかけた夕日のわずかな光に向かって、上へ上へと足を漕ぐ。

「ぷはあっ!!」

「ゆ、結城さんっ!ご無事ですよ!」

「…えへへへ。なんとか、ね。でも、もう動けないや」

身体的にも、精神的にも、緊張の糸がぷつつり切れた。力を抜いて海面に浮かぶだけ。

視線を巡らせば、みんながわたしの方を見てる。みんな無事ではなかった。

「助けに来てくれてありがとう友奈!」

「ホントに来てくれるとは思ってなかったよ!」

「弥勒先輩の言うとおりでした!」

「弥勒先輩の?」

「わたくしはただ、出来ることをして幸運を待っただけと言っただけですわ」

中からの攻撃ではビクともしなかったけど、通気口や浸水しそうな穴を塞いでなるべく時間を稼ぐ処置はしてたみたい。

わたしがドアを突破するのが先か、室内の酸素が尽きるのが先か。

そんな賭けみたいなことを弥勒先輩はやってた。

「ひとまず無事を報告しなければ。20番より7番、ご応答を」  
「……そういえば戸郷先輩は？」

「国土さんの足止めをするってデツキの入口で戦ってたよ」

「…そうだよ！加賀城さんがっ！」

「…うん。雀ちゃん、国土になってたよ」

「あいつ、次会ったら焼き鳥にしてやる!!」

口々に雀ちゃんへの悪態をつくメンバー。ワナにハマられたこと、裏切られたこと、色んなことが雀ちゃんへの怒りや憎しみを燃え上がらせる。

わたしだって…シヨックだった。雀ちゃんと戦わないといけなかったかもと、さっきの遭遇を振り返ると胸が苦しくなる。

それより、戸郷先輩だ。

遠くに見える船はもう転覆しかけてて、その時の潮流に巻き込まれたら一緒に海の底に連れていかれちゃう。

「戸郷先輩！返事をください！戸郷先輩!!」

先輩をコールしても、通信は返ってこない。

—— イヤな想像が、止められない。

「わたくし達はまず陸に上がりましょう。結城さんがケガをしているようですし」

「待ってくださいいっ！戸郷先輩を、探しに行かなきゃ!!」

「動けますの？結城さん。いえ、動けたとしても搜索は許可できませんわ」

「どうしてー！」

「もうじき船は沈みますわ。ここで浮かんでいるのも危険ですし、近づくなんてもつてのほかなのです」

弥勒先輩は救難信号を発した。近くには救命ボートも待機してたし、すぐに来て引き上げてくれるだろう。

その後すぐに、傾きかけた船の方で爆発する音が聞こえた。煙が柱を立てて、更に水の中へと姿を隠していく。

「…大丈夫ですわ。戸郷さんは聡い方です。引き際を間違えることはありませんわ」

「……………」

救難船に引き上げられても、わたしはずっと沈む船を見続けていた。

ただ、戸郷先輩の無事を祈って。

ゴールドタワーに防人隊が集結したのは夜遅くだった。まだ帰ってない二人――芽吹ちゃんと戸郷先輩の帰りをみんなホルで待っている。

わたしのケガは気付かない間に治ってた。自壊したのが錯覚だったかもって思えるくらいに、跡形もない。軽く医務官さんが診て、そのまま解放された。

「雀が…。そう……」

「…はい。全部、ワナだったんです…」

その待ち時間に、風先輩たちへ船で起きたことを話した。

「もちろん、みんなの怒りの矛先は裏切った防人メンバーに行く。」

「許せないよ!!そんな卑劣な罠!!」

「やっていいことと悪いことがあるでしょ!!」

「あいつらに人の心を説いてもムダなこと。殲滅するしかないわ」

「…でも。…戦いの上手さは、あつちが上。…乃木と三好の指揮官としての資質が、…今回の戦いの結果」

しずくちゃんの核心をつく言葉に、ヒートアップしてた議論が一瞬止まる。

この戦いでわたし達が得られたものは、何一つない。迎えに行くはずだった仲間裏切られて、命の危機にさらされた。

国土の戦力をそぐことができたわけでもなく、行方がわからない隊員がいる。結果だけみたら負けて言っただけ。

「…芽吹が直接そつちの指揮をとってたら、そうはならなかったかもね」

「…風先輩…」

「…申し訳ありませんわ。…わたくしの不明がこのような」

「弥勒先輩は悪くないです!!このワナを見抜ける人なんて」

「それは言い訳に過ぎませんわ。その点を含めてわたくし達は未熟、ということ」

「…弥勒が言うことも正しいけど…。…こんなにあつちの思い通りにいくのは…何かおかしい」

普段みんなの前じゃたくさんしゃべらないしずくちゃんが、意を決して考えを伝えてる。

しずくちゃんが感じた違和感。何か重大なことに気づいたのかな。

「おかしいって、何が？」

「…国士の行動。…ゴールドタワーを襲撃してきた時と同じで…少しちよっかいを出しては後退してた。…自分の本拠地なのに」

「突破されても、あの子たちが国士になったから意味ないってことじゃないの？」

「……じゃあ、どうして国士たちはわたし達の目的を知ってるの？…本拠地に乗り込んできたなら…普通は倒しにきたって思わない…？」

「……………何が言いたいのよ、しずく」

「……浪士側に大赦のスパイがいるように…こっち側にもあつちのスパイがいる、かも…」

考えたくもない爆弾発言に、みんな絶句する。

でも国士たちの対応を思い起こすと、明らかに手の内がバレてると思えない。

国士がたくさんいると思ってた船のジャックの現場には、わずかに二人。ほとんどが高知城で待ち受けていた。雀ちゃんを人質に仕立て上げてわたし達を誘導して船と一緒に沈めるのも、事前に情報を知ってないといけない。

でも、スパイって？防人の情報は芽吹ちゃんと神官先生が管理してるから、大赦の別の組織にも伝わらないはず。

「……………この中に、スパイがいるっていうの？」

「……それは」

風先輩が不穏なことを口にしたとき、エレベーターが到着した。

「…皆、どうしたの？こんなところで」

「芽吹ちゃん…？…え？」

芽吹ちゃんは勇者の装束をして、なぜかずぶ濡れだった。雨は振つてないのに。

芽吹ちゃんの腕には、  
————— 血色を失った戸郷先輩が抱えられていた。

「…戸郷、せんぱい…？」

「……気道確保や心肺蘇生を施したけど……間に合わなかった…」

「……そ…ん…な…」

演説では自信を伝えてた芽吹ちゃんの声が、かすれて震えて覇気を失っていた。

それに気付かないほど、わたしの意識はぐらついている。戸郷先輩を見つめても、その姿を上手く認識できない。

「……戸郷さんは国士一人を道連れにして、全てのお役目を終えた。

…神樹様の元へと向かわれた」

「…うそ……だよ…ね…？」

芽吹ちゃんはただ首を横に振った。暗い気持ちを見せはしないと、強がった真顔で。

わたしは限界だった。抑えてた哀しい気持ちがあふれ出して、涙が止まらなくなる。抱きかかえられた戸郷先輩にしがみつくことしかできなかった。

「……これが現実よ。あんたが指揮をとってれば、こんなことには…」

「……はい。……相手の腹の中を読み違えた、私の責任、です」

「そんなこと聞いてるんじゃないのよ芽吹!! あんたがっ」

「おやめください犬吠埼さん!! 乃木教導一人の責任ではないはずです!! 元を正せばわたくしがっ」

「いえ、弥勒さんは為すべきを為しています。適切な人員を配置できなかった、私に落ち度があります」

「なんなのよあんたはっ!! 隊員が一人死んでるのよ!! なのになんてそんな平気な顔してるのよ!!」

「平気なわけありません!! ……ここで私が冷静さを欠けば、次の犠牲を誘発してしまいますから」

「全然わかんないわよ!! あんたのことが全然!!」

「やめて……! もう……やめて……! ……こんな……言い争い……!」

大きな声で責任を追求する人。一人を責めるのを良しとせず反論する人。泣きながら言い合いを止めようとする人。シヨックで言葉を失った人。

ここにいる誰一人、平静を保っていられなかった。

わたしは冷たくなった戸郷先輩を泣きながら抱きしめることしかできなかった。

わたしが戸惑っている時に、仲間を助けることができるって声をかけてくれた先輩。わたしが戦わなくていいように、危険なことを率先してやってくれた先輩。

何一つ返せてない。返せないまま、こんなお別れなんて

「……夏凜はいないのね」

「……え？あなたは…乃木芽吹様…？」

「顔を合わせるのには二回目かしら。…国土亜耶」

「…！その方は…！」

「今回の戦闘で命を落とした国土よ。遺体を見つけてしまったから、送りにきた」

「……まさか、沈没した船の中を搜索されたのですか？」

「……防人も一人船と心中してしまってるから。そのついでよ」

「……有り難う幸せにございます、勇者様」

「……まだ私を勇者と呼ぶのね。浪士に与する巫女なのに」

「わたしは神樹様に仕える巫女。浪士も大赦も関係ありません。神樹様の、四国のために奉仕する方には最大の敬意を表します」

「…ダメ元で聞くけど、大赦に戻るつもりはないのね？」

「……はい。大赦が隠してきた真実を知ってしまった以上、これまでと同じく大赦に仕えることはわたしにはできません」

「テロリストに加担するのはいいの？何も知らない一般人が被害にあってるのはいいの？」

「……あなた様や三好様、そして三ノ輪様が傷だらけになってるのに、何も知らずに傍観するのは不平等だと思えます」

「皆で傷を負ってこと？それで傷を舐め合えて？…バカげてるわ」



「…乃木様は、一人で戦い続けるのですか？」

「……それが勇者だと思ってる。例え一人ぼっちになっても、自らを滅ぼすとわかっていても。仲間を、世界を守り通す。私の目指す勇者は、その人よ」

「…三ノ輪様、ですか…？」

「…ええ。私が目指している人は、三ノ輪銀ただ一人」

「この国土も、勇者だと思ってる。仲間を逃がすために、船と敵と心中した。勇者でなければできない決断を、いまわの際で下した」

「……………」

「…丁重に葬ってあげて。敵対してなければ、私も声を大きくしてあつぱれと言いたかった」

「…承りました」

「…ねえあやや…。さっきの人…」

「…ご遺体を送り届けてくれました」

「乃木、芽吹だよね!?!なんでここに!?!あややのいる御殿はあつちに知られてないはずなのに!」

「乃木様には…鷲尾様がついています。巫女の力がありませんから」

「神託ってそんなことまでわかるの!?!」

「いえ、わかりませんよ。…でも、乃木様には巫女でも勇者でもない力がある、のかもしれない」

「ナニソレ!?!そんなのチートじゃん!勇者として三好さん以上の力があるのに、その上巫女の力に未知のチート能力!?!」

「…まるで三ノ輪銀様ですね」

「……………なんで、遺体をここまで…？」

「わかりません。わかるのは…乃木様は死人に鞭打つ人ではないということだけです」

「……三好さんが言ってる人物像と、少しズレてるなあ。死人すら利用する道德の通用しない人だって」

「…そんなことはありませんよ。乃木様も勇者ですから」

「……なんで、死んじやうのさ…。私が助けなかったみたいで、許せなくなるじゃん…」

「……自分を責めないでください、雀先輩」

「…わかってるけど…。なんで、私なんか…」

「…！泣いてるんですか…？」

「……せつかくようやく話が合いそうな人を見つけたのに…！すぐにいなくならないでよおっ…！」

「雀先輩、泣かないでください。神樹様と一緒に見守っててくれますから」

「あやや…？」

「だから、雀先輩の活躍を見せてあげないといけません」

「…うん。…この部隊の危険は、私が摘まなきや」

戦う理由が、見つけられた

戸郷先輩の葬儀は内密に行われた。参列者は家族と防人隊員と大赦関係者だけ。

戸郷先輩のご両親に、いつまでも誠心誠意陳謝する芽吹ちゃん。自分の娘より年下の女の子にここまで頭を下げられたら、怒りをどこにぶつけていいかわからなくなる。ご両親はただ涙を流しながら芽吹ちゃんの謝罪の言葉を聞くしかなかった。

戸郷先輩と仲がよかったメンバーも、先輩の棺桶の前で泣きながらしゃべりかけてる。

ちよつと思ひ込みが激しいけど、頼りになる先輩。防人の任務に誰よりも誇りを持ってた先輩。芽吹ちゃんの理想を絶対実現させようねと、みんなに言い広めてた先輩。

「……………結城さん？」

「…へ？…弥勒先輩、どうしたんですか？」

「……………ひどい顔をされてますわよ。気分が優れないのでしたら、退出してお休みになられた方が」

「……………はい」

そんなに気分が悪そうに見えたのかな。

もう、涙は出し切ったはずなのに。

あの夜からずっと、考えてた。

わたしが戸郷先輩と離れなければ、一人で助けにいかなければ、戸郷先輩は助かったんじゃないかって。

国士二人を無力化した後でも、弥勒先輩たちの救出は間に合ったんじゃないかって。

でも、それはできない。どうやってもわたしは雀ちゃんやクールな国士さんを殴れない。その時点で、雀ちゃん達を撒くことはできない。できたとしても、救出は間に合わない。

わたしは選んでしまったんだ。戸郷先輩か、弥勒先輩たちかを。後からそこに選択肢があったことに気づいたから、後悔は知ってて選んだ時よりはるかに大きい。

全部、わたしの弱さが原因だ。

わたしが強かったら、国士さん達をケガさせずに無力化することも、ドアの封を素早く開けることもできたはず。

わたしの心の弱さが敵に付け入るスキをあげてしまった。わたしの力をもっと強かったら、国士さん達をどうにかするのに時間がかかってても救出が間に合ったはずだ。

「…わたしは…どうしたらよかったですか…?」

「…友奈さんは為すべきを為しましたわ。戸郷さんの指示を受けて、わたくし達の救出に向かった。…助けられたわたくしが言うのも何ですけど、友奈さんは立派に任務を果たしましたわ」

弥勒先輩は優しくそう言っ、足がおぼつかないわたしをそっと抱きしめた。

「…わたしは…助けることができたはずなんですっ…! 戸郷先輩をつ…!!」

「戸郷さんはあなたに、わたくし達の救出に向かえと告げましたのでしよう?」

「…でもっ…わたしが国士と戦えてたらっ…! 戸郷先輩を一人にしなかったらっ…!」

「…後からたらればを考えるのは詮無きこと。それとも…あなたは戸郷さんの実力を侮っていたということですか? 戸郷さん一人の実

力では、あの場面をどうにもできないと」

「…!!」

弥勒先輩が言い放った言葉に、わたしの思考は凍りついた。

「あまりにそれを追及するのは、戸郷さんへの侮辱につながりますわ。いくら友奈さんとはいえ…それは許されることではないのです」

誰よりも誇りを重んずる弥勒先輩だからこそ、命に代えてでも仲間を守った勇者をバカにするのを許さない。

わたしがずっと考えてたことは、わたしを信じて送り出した戸郷先輩への侮辱であり、わたしの単なる高慢だ。

どんなに後悔して悲しくなっても、現在を、前を見なくちやいけない。戦友を想うとは、同じものを感じて持った志を絶対に曲げないこと。

「……わたしは……」

現実を受け止めなきやいけないのはわかってる。でも

この気持ちを封じ込めてしまったら、わたしは二度と人と心を通わせることができなくなる。わたしがずっと信じてきた「勇者」という存在を根本から否定することになる。

どんなに苦しくても、仲間のために最善を尽くす人。自分の後悔を割り切って開き直るのは

戸郷先輩と死別するという運命を、受け入れてしまうことに他ならない。神様の決めた運命を覆すための勇者なのに、その使命を果たせてない。

「……決して友奈さん一人の責任ではありませんわ。わたくしのせいでもあり、乃木教導のせいでもあり、防人全員の責任ですわ」

「……………」

「犬吠埼さんが言うように、悩んだら相談。皆で分かち合うことですか、戸郷さんの意志に報いることはできないのです」

死を美談にしないで。

死んだら終わりだつて、雀ちゃんが言つてた。どうやっても仲間外れになつちやうつて言つてた。時間とともに遠くの人になつちやうつて言つてた。

わたしはイヤだ。戸郷先輩を仲間外れにしたくない。遠くの人と思いたくない。

「……友奈さん。外でお休みしましょうか」

「……はい」

弥勒先輩に抱えられたまま、式場を出る。

弥勒先輩はわたしをはげまそうとしてくれた。楽になれる考え方を教えてくれた。周りをよく見てる、優しい人だ。

そんな先輩の心づかいを無下にしてしまった。でも、わたしはどうしても納得できない。

苦しい。割り切れない自分がイヤだし、納得しようとする自分がイヤだ。心の中がぐちゃぐちゃだ。

わたしだけなのかな。板ばさみになつてるのは

葬儀が終わってゴールドタワーに戻ってきてても、誰一人話す人はいなかった。襲撃事件の時より重い空気が講堂を包む。

公務を終えた芽吹ちゃんと神官先生が戻ってきてても、誰も出迎えることはなかった。

「……今回の責任は、全て私にある。皆は思いつめないでくれると助かるわ」

「……ごめんなさい。私が浅はかだった」

芽吹ちゃんはそう切り出して頭を下げた。

芽吹ちゃん一人のせいじゃないのに、一人で責任を取ろうとしてる。この隊を守るために。

怖いくらいに、自分がない。公人としてあるべき姿を、そのまま貼りつけたみたいに。

「…私の首を差し出して済む話ならよかったけど、…でも、そうじゃない。私たちには、戸郷さんが目指していた世界を実現させる義務がある」

芽吹ちゃんと一緒に描いていた未来。そのために戸郷先輩は――

彌勒先輩たちを、…わたしを守ってくれたんだ。

「…今日は各自で気持ちの整理をして。明日からは…通常の任務に戻る」

「私に言いたいことがあるのなら、直接私のところまで来て。どんな罵詈雑言でも、私は受け止める」

そう言い残して、芽吹ちゃんは壇から降りる。

その後すぐに動いた人がいた。

風先輩だ。

「芽吹」

「…風さん」

「…ごめん。あの時は…あたしもどうかしてた。芽吹だって、この隊のことを考えてたつてのに…感情のまま当たつて…」

「…謝ることじゃありませんよ。風さんが思ったことは、皆が思つたことです。言ってくれて、私の方が救われました」

「…芽吹。あんたも強がらなくていいのよ。素直に自分の感情を言つても」

「ありがとうございます、風さん。…でも、私はこの隊の…大赦の長ですから」

長だから、自分の気持ちをないがしろにしてもいい——それは違うよ。

芽吹ちゃんの本音を聞きたい。大赦のトップじゃなくて、一人の女の子として。芽吹ちゃんだってジレンマを感じてもいい状況だから、本当の気持ちを聞かせてほしい。

風先輩も芽吹ちゃんを気遣つて、本心を聞き出そうとしてる。

あの夜のあまりに人間味のない芽吹ちゃんに激怒した風先輩だったが、冷静になってくれた。チームを崩壊させないように頑張つてる芽吹ちゃんを支えられるのは、同じリーダーシップのある風先輩だと思う。



「風さんこそ、思い詰めないでくださいね。自分が正しいと思ったことは積極的に発言してください。私が間違えていることもありますから」

「…わかった。…ホント、あんたはすごいわね」

「…いいえ。犠牲を一人でも出してしまった時点で、私のリーダーの素質は不十分だったということですよ」

風先輩に一礼して、芽吹ちゃんは講堂を出ていった。風先輩の心配そうな表情とは裏腹に、芽吹ちゃんはずっと「教導」の顔のままだった。

「…？」  
「しずくが言ってた『スパイ』って、本当にいるのかな」

誰も動かない講堂で、誰かがそんな言葉を放った。

考えたくもないことだけど、この重い沈黙を動かすにはこの話題しかない。隊員たちもその話にそれぞれ反応する。

「…芽吹にも言っておいたけど、芽吹からは勝手に犯人捜しをするなって」

「スパイに勘付かれるから？」

「たぶん。芽吹が調査するから下手に動くなってことでしょ。あたしもそれが一番だと思ってる」

風先輩が芽吹ちゃんからの指示を伝えた。みんなでみんなを疑っ

てたら、スパイの手がかりを見つけられなくなるのかも。

風先輩もスパイ捜しには乗り気じゃないらしい。芽吹ちゃんに任せるのが一番だって。わたしもそんなことしたくないし。

「…でも、芽吹さんだって容疑者だよ?」

「樹ちゃん…?」

「国士と接点のある人は全員スパイの可能性がある。もし芽吹さんがスパイだったら、全部もみ消されちゃうよ」

タワーでの生活に復帰した樹ちゃんが、戻って早々辛口な発言をした。

「ナンセンスよ、それは。芽吹が浪士のスパイ?大赦の首長が?」

「でも、一番国士と…夏凜さんと接触してるのは芽吹さんだよ。感情論抜きで事実を確認しないと、取り返しをつかないことになる」

「…どうしたの樹。スパイ捜しにそんなに躍起になって」

「…わたしもみんなの役に立ちたいんだ。何もできなかったから」

樹ちゃんは何かを選ぶことすらできなかった。ただ一人で、病室で待つことしかできなかった。戸郷先輩が亡くなったと聞いて、どれだけ悔しい思いをしたんだろう。

二度と同じ過ちを起こさないように、できることは全部やる。樹ちゃんは覚悟を決めたのかな。

「…気持ちはわかるけど、やるべきことはそれじゃないわ。一人で下手に動いても事態は好転しないから」

「…………お姉ちゃんこそ。お姉ちゃんなら、もっと積極的に動くと思ってたのに」

「……………」

イヤな沈黙が姉妹の間に走る。

風先輩、確かに何か変わった気がする。芽吹ちゃんに謝った時といい、樹ちゃんを諭す時といい。

何かが変わることになりバスになってる、のかな。

何でもいいから動きたい樹ちゃんとは、真逆の方向を向いてる気がする。仲良し姉妹の間にできたミゾが、何か少しずつ大きくなってる気がする。

「…とにかく。芽吹がスパイ捜しを禁止したんだから、あたし達は次の任務に向けて準備をすること。…少しは芽吹の心労をわかってあげて」

これ以上話を広げるのは良くないと思ったのか、風先輩はこの談義を終わらせようとした。風先輩がそうしたなら、みんなも従わざるをえない。

「でもさ、この中にスパイがいるかもしれないって思うと気持ち悪くない？」

「問題はそこですよ。そんな状況じゃ、何もできないじゃないですか」

「でも、何かするとしても芽吹ちゃんの迷惑になるかもだし…」

「…私は芽吹先輩を信じます。必ず情報が漏れた原因を探り当てて対応してくれると」

「…信じて、いいのかな…。乃木も、人間。…全知全能じゃない」

重い空気は晴れない。

芽吹ちゃんを信用するメンバーと、芽吹ちゃんに疑いの目を向けるメンバーに分かれ始めた。心のミゾは、風先輩と樹ちゃんの間だけじゃなくなってきた。

どうしよう。このままじゃ、防人隊がバラバラになっちゃう。

「…味方を疑い始めたら、それこそ相手の思うツボですわ。スパイの

情報だってブラフの可能性もありますのに」

「弥勒……」

「わたくし達が考えなければならぬのは戸郷さんの仇を討つこと。打倒国士ですわ」

「……そうだよ。悪いのは全部あいつらなんだから」

「小細工を正面から押しつぶせるくらい強くなれば、スパイなんてどうでもよくなるって話よ」

「余計なことを考えている暇があるのなら、鍛錬に時間を費やすべきですわ」

「身体を動かして、嫌な考えを拭い去りましょうか！」

——— とういう時、弥勒先輩はブレない。目指すべきものを共有して、先陣を切ってくれる。その存在が、みんなを励ましてくれる。

芽吹ちゃんが熱心に指揮官に推す理由がわかった気がする。

身体を動かしてれば気が紛れると思ったけど、そう簡単にはいかなかった。

わたしはずっと、芽吹ちゃんのことを考えてた。自分の気持ちの整理がついてないのに、ふとした時に芽吹ちゃんのことを考えてる。今考えるべきはそれじゃないはずなのに、無意識の内に思考か芽吹ちゃんに向かっちゃう。

自分でもわからない。他人のことを優先して考えちゃうのは不治の病って風先輩に言われたけど、それにしたって異常だ。

戸郷先輩のこと、隊員みんなのこと、そして自分のこと。課題は山ほどあるのに、どうして芽吹ちゃんばかり――

「…友奈？」

「…うえ？」

「もう皆部屋に戻ったわよ？」

「あつ…ごめんね芽吹ちゃん。戸じまりしなきゃだよね」

ロッカールームでぼーっと考えてたら、芽吹ちゃんが突然視界に入ってきた。

「…少し思い詰めすぎだと思うわ。…でも、気楽にいこうって言ってもそうはいかないか」

「うん…。…ごめんね、気を遣わせて」

「ううん、私も友奈のことが気になってただけから」

弥勒先輩に熱心に指導してる芽吹ちゃんだけど、  
かわたしにも特別気を配ってくれてる気がする。――なぜ

どうしてだろう？わたしなんか国士と戦えない、ただいるだけの勇者なのに。風先輩や樹ちゃんの方が役に立つのに。

「…少し、話さない？」

「…え？」

芽吹ちゃんから絶対聞けなそうな言葉に、間の抜けた返事しかできなかった。

「…友奈に聞いてもらいたいの。私のことをね」

「う、うん。いいよ。わたしにできるのはそれくらいだしっ」

「もちろん、友奈のことも話してもらおうわ。友奈だって苦悩してるでしょ」

「そ、そんなことないよ」

「私が気づいてないと思う？友奈がしゃべる回数が日に日に少なくなってるって」

――芽吹ちゃんには、見抜かれてた。

みんな自分のことで精いっぱいなのに、わたしの悩みを聞いてもらうなんてできない。それで空気がさらに悪くなるのはイヤだから。

芽吹ちゃんは交換条件を出して、後ぐされがないように聞こうとしてきた。引っかけられた気もしたけど、遠慮しないで話してほしいって芽吹ちゃんの気持ちが感じとれた。

「ここで話すのもなんだし…私の部屋に来て」

「う、うん。わかったよ」

――わたしも芽吹ちゃんの悩みを聞きたかったから、断ることができなかった。

わたし一人で解決できれば、芽吹ちゃんに気を遣わせることもなかったのに。ただでさえ考えることが多い芽吹ちゃんを悩ませることにならなかつたのに。

自分がイヤになる。芽吹ちゃんの好意に甘えてしまった自分が嫌いだ。芽吹ちゃんの力になれない自分が嫌いだ。

「ごちやごちやした部屋でごめん」

「ううん。そんなことないよ。芽吹ちゃんの一面が見れてうれしいな」

整頓されつつも統一感のない、芽吹ちゃんの中を映し出したような

部屋だった。

教導になる勉強をした時に使ったと思われる色んな本が棚にみっちり詰まっていたり、トレーニング用具が部屋の一角を占領していたり。あと、色んな種類の模型が飾られている。芽吹ちゃんの趣味、なのかな。デスクの上には芽吹ちゃんに渡したシロツメクサのお守りと、銀ちゃんが使ってたのと同じ和装の日記帳。芽吹ちゃんが使ってたんだ。

差し出されたホットココアを一口飲んでから、ひとまず世間話でもしよう。本題を話すのは、もう少し勇気を出してから。

あまり味がしなかったのは、緊張してたからかな。

「プラモデル、いっぱい作ったんだね」

「ええ、趣味だから」

「わたしはあまり詳しくないからよくわからないんだけど…丁寧にできてるのはわかるかな」

ひととき目立つのはお城…丸亀城かな？素材に合わせて色合いが違うし、自分で塗ったのかな？

お城にひけを取らないくらいに存在感があるのが、鉛色の軍艦。細かいパーツがびっしりで、芽吹ちゃんの器用さと集中力が見て取れる。

ピッカピカの車の模型…これ、銀ちゃんがゲーセンのレースゲームで使ってたやつだ。真つ赤なボディも銀ちゃんっぽい。

キャラクターのモデルがテーブルを囲うジオラマ？的なのは作りかけなのかな？三つあるイスの一つが空席。残り二人は談笑してるみたいに明るい表情だ。

どこことなく、このキャラクターは銀ちゃんと夏凜ちゃんに似てる気がする。義眼や義手はないけど、髪の毛のセットとか表情から見える仕草とか。間違いなく二人をモチーフにしてると思う。

「…まあ、私の行き場のない感情の捌け口ね。…そう考えると見られるのは恥ずかしいかも」  
「そう、なんだ」

銀ちゃんのことをもういない人と思ってても、無意識の内に銀ちゃんを求めている。夏凜ちゃんが敵になっても、またあの頃に戻ることを願ってる。

芽吹ちゃんは、さびしいのかな。銀ちゃんに先立たれて、夏凜ちゃんと大ゲンカして。誰も芽吹ちゃんに寄り添える人がいない。

「友奈はどう？どうやってフラストレーションを解消してるの？」  
「わたし？」

「ええ。友奈がそういう負の感情を人にぶつけることがないから、どうしてるのか気になる」

「みんなと一緒に楽しい時間を過ごせれば忘れちゃうよ」  
「…じゃあ、今は？」

今はどうやって自分の感情と向き合ってるか。

みんなとワイワイ過ごす時間は今は望めない。重い空気がずっと張りつめてて、誰も笑おうとしない。

わたしの感情が悪い方から抜け出せないのはそのせいかもしれない。  
いい。

「…：意地悪な聞き方だったわね、ごめん」

「ううん。…芽吹ちゃんの思ってる通りだよ」

「…：悩んだら相談。素直な気持ちをはき出すことで、心が楽になると思うわ」

「そう、だね」



芽吹ちゃんの表情はひたすら優しい。銀ちゃんや夏凜ちゃんと接する時のつつけんどんな芽吹ちゃんとはまるで別人。

話して、いいのかな。こんな自分勝手なこと。芽吹ちゃんをイヤな気持ちにさせるだけかもしれないのに。

「……じゃあ、私のことから聞いてもらおうかしら」

「芽吹ちゃんから？」

「ええ。…友奈から見て、私はこの部隊のリーダーに相応しい行動を取れてる？」

珍しく自信なさげに聞いてきた。

これが芽吹ちゃんの本心なんだ。いつも自信を見せることでみんなの心配を取り除いてきた芽吹ちゃん。でも本当は自信なんて確認できなかったんだ。

そんな不安をわたしに話してくれたってことは。

わたしがやらなきゃいけないことは。

「それは、もちろん。芽吹ちゃんが色々動いてくれたから、みんな立ち直れたんだよ」

「…友奈はそう言ってくれるわよね。…でも、私はそう思えない。私がいなくても風さんが同じことをやってたと思うし」

「大事なのはそこじゃないよ。芽吹ちゃんがやったから、今のわたし達がいる。芽吹ちゃんの代わりなんて、誰にもできないよ」

何があっても、芽吹ちゃんは仲間だ。世界でたった一人しかいない、乃木芽吹ちゃんというわたしの友達。

そんな人が不安げに自分の気持ちを言葉にしたんだ。わたしがはげまさないきゃ。

「…でも、私はこの結果に満足してない。私をもっと上手く立ち回れ

ていたら、…戸郷さんが犠牲になることはなかった」

「それは…」

「……怖いんだ。これから国士との…夏凜との戦いが激しくなるにつれて…また私の仲間が犠牲になることが…」

いつでも勇敢で、いつでも冷静な芽吹ちゃんが、怖れの言葉を口に  
した。

ぎゅつと自分の身を抱いて震えを抑えようとする。その姿はあま  
りにも弱々しくて

護つてあげられずにはいられなかった。抱きしめることしかでき  
なかった。

「……友、奈…？」

「…わたしが守るよ。みんなを、芽吹ちゃんを、絶対。…わたしは勇者  
なんだから」

悩んでいたことが、この一瞬だけは頭から消えてい  
た。

芽吹ちゃんを守りたい。芽吹ちゃんを支えてあげられるのはわた  
しだけ。芽吹ちゃんがどこかに行かないように手をつないでなきや。

わたしの中に芽生えた気持ち、ぐるぐるしていた感情を押し込め  
た。

わたしが戦う理由が、見つけられた。

「わたし、決めたよ。わたしがこんな間違った戦いを終わらせる。芽  
吹ちゃんも、他のみんなも、悲しまなくていいように」

「……それは、国士と戦うってこと？」

「芽吹ちゃんを悲しませるのなら。もうわたしは迷わない」  
「……………」

わたしの腕の中で、芽吹ちゃんの震えが止まった。芽吹ちゃんに、わたしの思いが伝わった。

夏凜ちゃんの言ったとおり中途半端な気持ちだったから、誰にも言葉が伝わらなかった。自分を信じる事ができたから、芽吹ちゃんの気持ちに寄り添う事ができた。

「……………こんなつもりじゃなかったのに…」

「へ？」

「…友奈の悩みを聞くための建前だったのに、…本当に相談相手をさせてしまったわ…」

「ううん。芽吹ちゃんが打ち明けてくれたから、わたしもほんとうの願いに気付けたんだよ」

「…え？」

「護りたいんだ。犠牲なんていらぬ世界を、みんなが仲間を疑う必要がない世界を、芽吹ちゃんと夏凜ちゃんが戦わなくてもいい世界を、人と人が恨み合うことがない世界を」

「だから、全部間違ってるよ。おかしいってみんなわかってるはずなのに、誰も手をあげないなんて」

「……………」

「わたししか気付いてないなら、わたしがやるよ。どんな手段を使ってもわたしが止める」

「……………それが、正しい人の感情よ。神世紀に生きる人の、当たり前前の感情」

芽吹ちゃんは憧れるみたいで、自分にはわからないみたいで、な言い方で答えた。

「友奈が言う通り、今を生きる人が皆狂い始めてる。戦火が広がる度に憎悪の波が大きくなってる」

「芽吹ちゃんも、気付いてるんだね」

「…ええ。私が、そうしてしまっただから」

芽吹ちゃんの演説に共感した人はたくさんいた。テロリズムでこれまでの生活を失った人や、大赦を深く信奉してきた人たちがこぞって浪士に立ち向かうという声明を出した。真の勇者が現れたとまつり上げた。

逆に、大赦に近い権力者やこれまで大赦に弾圧されていた人たちは芽吹ちゃんを批難した。横暴の極みだと、乃木家の権威を借りた独裁者だと。

もう面と向かって中立だって言う人はいないと思う。大赦か浪士か。芽吹ちゃんの演説は、国民みんなの意見を完全に二つに割ってしまった。

「…わかってるなら、もうやめようよ。芽吹ちゃんは周りがおかしくなってるって、気付いてるんだから」

「私は…。…私も、友奈と同じ考えでいたかった」

「…え？」

「でも…できなかった。狂わずにはいられなかった。私は…乃木芽吹だから」

乃木芽吹だから。

それが、芽吹ちゃんをわたしから遠ざける最大の理由。

あらゆる責任を背負ってしまったから、自分の気持ちはねじまがつてしまった。間違いだとわかっていても、自分では止められなくなつた。

銀ちゃんと同じだ。

「私が友奈と同じ場所に立つには…。全て終わらせるしかないのよ…」

「芽吹ちゃん…」

助けたい。

今度は絶対。

銀ちゃんと同じことにはさせない。

芽吹ちゃんを強く、強く抱きしめた。もう絶対離さないように。

「わたしは絶対芽吹ちゃんの味方だよ。芽吹ちゃんが苦しむ世界なんて、わたしが変える」

「…全部、私のため？」

「…うん。芽吹ちゃんが、銀ちゃんの後を追わないように」

だから、どこにもいかないで

「何故だ！何故あいつが犠牲にならねばならなかったのだ！」

「ごめん、なさい…」

「やめなさい。…雀には何の責任もないわ」

「三好閣下っ…！ですがっ…！」

船と運命を共にした国士の遺体が運ばれてきた。アイツがやつ

たつてことは伏せてあるけど。

いつも彼女と組んでいた古風な子は、雀を責め立てた。パートナーを失って、平静を欠いてる。

他のメンバーも、驚きを隠せてない。まさか自分のチームから犠牲者が出るとは思ってもいなかったんだろう。

聞いた話だと、雀を裏切りに激怒した防人から逃がすために戦いが苦手な彼女が囷になったという。

防御特化の国士と特殊工作特化の国士では、汎用性の高い防人を二人がかりでも倒しきれない。どちらかが囷になれば、どちらも生きて帰れる保証はなかった。

彼女は何を思ったのか。どうして自分の命を負け前提の勝負にベツトしたのか。どうして雀を逃がそうとしたのか。

ひとつだけ私と言えることがあるとすれば。

「…人事をミスした私の責任よ。防人と十分に戦える人間を派遣できていれば、せめてもう一人増員できていれば」

「…我々は身を守ることで精一杯でした。城の防衛班が誰一人欠けていたら、この中にも犠牲が出ていたかもしれない」

「防人は強いです。勇者が四人もいるのもそうだけど、防人一人ひとりに高い意識と練度を感じました」

「危なくなったら退けて閣下の命令がなかったら、今頃…」

隊員は私をかばうように言葉を並べた。

安全が最優先だと、任務の達成より自分の命を大切にしろと意識を徹底した結果、一人ひとりの戦力が防人に及ばなくなってしまった。それも私の責任だ。あいつみたく、一人ひとりを信じて死地に送り出す勇気がなかっただけ。彼女にそのツケを払わせてしまっただけ。

「…乃木芽吹が、防人を強くしてると思う。私たちがいた時より、ずっ

と強くなってる」

「…何が言いたい？」

「私たち、…勝てるのかな…？」

私が恐れていたことが、起きてしまった。

その一言で、場の空気が一番下まで冷え込んだ。

勝ちが見えない、恐怖。それを皆が感じ取ってしまったんだ。

「な、何を泣き言を言っている！」

「でも、実際に負けたじゃんか！あれだけ入念に準備して、防人の部隊を全滅させるどころかこっちに犠牲が出た！！成果もたった一人だけ！！」

「それはっ…！」

「もう私たちの優位を信じられないよ！！相手があんなに強くなってるって知らなかったから！！」

「やめろっ！！」

我慢しきれなくて、隊員の声をさえぎってしまった。

私の仲間たちがこんな言い合いするのは耐えられなかった。

チームがバラバラになってこれからの作戦が立ち行かなくなるのとよりも、このギスギスした空気が苦しく感じる。

「…私たちは勝つ。絶対に」

「…閣下…」

「確かにあいつは…防人は強い。でも、大赦が強くなったわけじゃない。大赦を打倒する手段は、防人と戦うことだけじゃない」

暗に防人に対抗できる力がない、と言われたらそれまでだ。

だけど、歩みを止めるわけにはいかない。ビビって立ち止まってた

ら、私の望む未来にはたどり着かない。

苦しい言い訳だけど、ウソはつけなかった。この子たちの前では、誠実でなきや。

「…それに、まだ私がいる。私が戦う限り、あいつの好きにはさせない」

この子たちを守れるのは私だけ。私が前に出てなかったから、犠牲が出てしまった。

次で最後にしよう。次で決着をつける。全てを賭けた総力戦で、私はあいつを凌駕する。

そうすることですか、この淀んだ空気は払拭できない。

「……私は三好さんについてくよ。それで勝つことですか、あの子に報いることができないから」

「雀……」

「…私は元より閣下に付き従う所存です。…加賀城が覚悟を決めたのなら、もう何も言うまい」

私の意志は伝わったのか。渦中の二人以外は私を目を無言で見つめてる。

なら、私はやる。全身全霊をもって、防人と

乃木芽吹と対峙する。

へ…にぼっしー。一人で背負い込むのはやっぱりだめだよ

(……言えるわけないでしょ。私“たち”の本音なんて)

へでも…。あの子たちを守りたいっていう気持ちも、ウソじゃないんでしょ…?<

(…だから、私一人でやるって言ってんのよ。園子にも、芽吹にも関係



ない。私のエゴよ)

へ……聞き分けのないにぼっしーへ

(そんな分別がつく人間なら、……テロリストのリーダーなんてやっ  
てないわよ)

そばにいるよ

「……まさか、これほどとは」

わたしの目の前には、模造刀を床に突き立てて膝をつく芽吹ちゃん。わたしを見上げて驚きの言葉をあげる。

「模擬戦だからだよ。芽吹ちゃんが手加減してくれたから」「いいえ。負けるつもりはなかったのよ。ただ友奈の戦いが私の想定を上回ったってこと」

わたしは強くならなきゃならない。みんなを、…芽吹ちゃんを護るために。

強くなるには、トレーニングしかない。

一番そのやり方を知ってると思った芽吹ちゃんに、特訓をお願いした。二つ返事でいいよって言うてくれた芽吹ちゃんには感謝しかない。

ただでさえ忙しい芽吹ちゃんに負担をかけることになるのはわかってるけど、…それ以外に方法が見つからなかった。

「…でも、どうしたの突然。特訓をつけてくれって」

「……いてもたってもいられなかったんだ。もう二度とこんな思いしたくないから」

「友奈が強くなればもう戸郷さんのようにはならない、ってこと？」

「うん。危ない任務は、全部わたしがやるよ」

芽吹ちゃんはわたしの目をじっと見つめた。生身の目も銀ちゃんの義眼も、ブレることなく何かを訴えかけてくる。

しばらくして芽吹ちゃんが立ち上がった。構えを解いてるから、今日はもう終わりかな。

「……風さんなら無理するなって言うと思うけど、私は言わない。私と同じ気持ちでいてくれる人がいて、嬉しくなったんだ」

「……わたしもだよ、芽吹ちゃん」

何ともさびしそうな、悲しそうな笑顔を見て、芽吹ちゃんを抱きしめずにはいられなかった。

「わたしはずっと芽吹ちゃんのそばにいるよ。壁の外でも、この世界じゃないところでも。絶対に芽吹ちゃんをみんなのところへ連れて帰るから」

「……死ぬつもりはないわよ。銀がくれたものを、無駄にするわけがない」

「……そうだね。この世界の全てを、取り返さないといけないんだもんね」

芽吹ちゃんがここにいることだって、銀ちゃんが色々がんばってくれた結果の一つだ。それとわかっていて命を捨ててしまうのは、銀ちゃんへの裏切りになってしまう。

少しだけ安心した。自分の命すら目的のためにささげてしまいうだったから、それを止めてくれる理由があつて。

「……友奈は。…手伝ってくれる?」

「もちろんだよ。わたしの戦う理由は、それだもん」

「夏凜と戦うことになっても?」

「うん。もう迷わない。芽吹ちゃんのそばにいられるのはわたしだけだから」

「……銀と、戦うことになっても?」

少しだけ言うのをためらってから、芽吹ちゃんはそう告げた。

考えなかったわけじゃない。解き放たれた銀ちゃんが、わたし達の敵になるって可能性を。

夏凜ちゃんはもう覚悟を決めてた。あの蛇と…銀ちゃんと戦って、取り戻すって。

芽吹ちゃんも同じはずだ。取り戻すことは考えてないかもしれないけど…もし人類の敵になるのなら、芽吹ちゃんは戦う。

わたしは

「…うん。戦う。…それが勇者、だから」

戦うってことは、銀ちゃんにまた会える可能性があるってことだ。話すことができれば、なんとかなると思う。

勇者部五箇条のひとつ、〃為せば大抵なんとかなる〃、だ。

「友奈……。…ありがとう。最高の友達に、出会えた気がする」  
「そういつてくれるとうれしいな。わたしも芽吹ちゃんのこと

徳島港の事件の後、国土の出現は激減した。

最近の出動のほとんどが、浪士の考えに便乗した一般人による犯行の鎮圧。警察や公安の人で十分対応できるレベルの事件もあり、わたし達の出番もかなり減ってる。

「相手も犠牲者が出て慎重になってる、ということね」

「そんな気概があいつらにあつたんだ」

「人の心のわからない外道のくせに」

「偏見はやめて。相手が人間だということを見誤れば、そのしっぺ返しを喰らうのは私たちよ」

朝のミーティングで芽吹ちゃんが推測を立てれば、それを聞いて国士を卑下するメンバーがいる。国士に深い恨みをいだいて復讐を誓った、力のあるグループの人たちだ。

「あつちが臆病風に吹かれてるなら、今こそ私たちが攻め立てるべきだと思います」

「戸郷の仇、取らないと」

「三好夏凜を討ち取れば全部終わるんでしょ？こんな戦い」

「…今、国士と総力戦をしたとして、その被害は前回の比にならない。犠牲者だつて出る。…お願いだから、早まったことはしないで」

いきり立つメンバーを芽吹ちゃんは静止した。珍しく疲れてそうなため息をついて。

犠牲者が出たことが芽吹ちゃんのトラウマになってる。夏凜ちゃんも慎重になってるかもしれないけど、芽吹ちゃんも大きな動きがでない状態だ。

「そうですね。まだ内側の問題が解決したわけじゃないですし」

「……それをどうにかしないと、…また足元をすくわれる…」

「やめようよ、二人とも。みんなの不安をおおるだけだよ」

「スパイ捜しは禁止したはずよ。下手に動かないで」

「でもそれじゃ、わたし達は何もできないじゃないですか」

「時期尚早って話よ。まだ行動を起こすには、確証が足りなすぎる」

スパイを疑うメンバーからも不満の声が出てきた。この話も聞かれてるってなると、気味が悪いような気もする。

これに関しても、わたし達にできることはない。芽吹ちゃんが調べることになってるから。

「……私たちが現場の兵隊だからって、少し情報を開示しすぎじゃない？」

「知れば勝手に行動してしまう。そうなったら私でもフォローしきれない」

「…わたくし達は乃木教導の剣なのです。剣は独りでに動いたり、しゃべったりしませんわ」

「弥勒の言い方はアレかもしれないけど、実際そうよ。防人の一員である以上、芽吹の指示に従うしかない」

芽吹ちゃんの指示に素直に応じるメンバーも少なくなってしまう。部隊の心がバラバラになってる。

この空気をどうにかしたいとは思ってるけど、わたし一人の力じゃどうにもならない。みんな心に傷を負ってるから、なのかな…。

「…とにかく、今は準備期間だと思って。時期がくれば、…その時は決戦になる」

「誰一人欠けることなく戸郷に戦勝を伝えるのが、私たちの役目よ」

「風さんの言う通りですわ。最終的なわたくし達の目標は、勝利すること。誰一人欠かすことのできない存在であることをご理解くださいいな」

こうして風先輩や弥勒先輩がフォローをしてくれなければ、みんなの行動を統一できない。ギリギリのところまで分裂がとどまっているの

が現状だ。

「……こんなのは早く終わらせなきゃ。次で絶対に決着をつける。」

「ミーティングはこれで終了よ。各自出動に備えて待機して。私は外で公務だけど、話があったら連絡をして」

「…了解」

「……樹ちゃん？」

「あ、友奈さん」

樹ちゃんは待機時間でメンバーに話を聞いて回ってた。

「もちろん、スパイに関する情報を探るために。」

その後ろにはしずくちゃんがついて歩いてる。二人はメンバーの中でもスパイを疑ってる度合いが強い。

「丁度よかったです。友奈さんにも聞きたいことがあったから」

「わたしに？」

「はい。最近芽吹さんと距離が近いって、みんな言っていましたよ」

「そうかなあ」

「結構な頻度で芽吹さんの部屋にお邪魔してるって」

「特訓に付き合ってもらってるだけだよ」

聞き方こそ優しいけど、その裏ではわたしを探ってる視線を感じ

る。

樹ちゃんは芽吹ちゃんがスパイなんじゃないかと思ってるらしい。風先輩に釘を刺されたけど、それでもやめないのは確証があるから、なのかな。

疑いを晴らしてあげないと。芽吹ちゃんはひたむきにがんばってるって、ちゃんと伝えないと。

「……友奈さん。特訓はいいんですけど、あまり芽吹さんのことを信用しちゃうダメですよ」

「どうして?」

「……しずくちゃんが避難所で、夏凜さんと芽吹さんが仲良さげに話してるのを見たって」

「……ほんとうに?」

「……これはトップシークレットで。…表裏のない結城になら話してもいいって思ったから…」

「うん、わかったよ。ありがとうしずくちゃん」

これが事実なら、疑われてもしようがない。

でも、わたしにはそれが芽吹ちゃんが裏切り者って証拠とは思えない。四国の人々を助けたって思う二人の思いは同じだと思ってるし、だからあの時協力できたんだし。お互いを尊敬してるのは敵になっても変わらないはず。

二人が本当の意味で手を取り合えるチャンスはまだ残ってるって、わたしならそう考える。

「友奈さんは何かわかりませんか? 避難所で夏凜さんと話してたし」

「うーん。夏凜ちゃんは芽吹ちゃんを許すつもりはないとしか」

「夏凜さんが?」

「うん。逆もそうだけど、お互いにいい関係を持つ状況じゃないんじゃないかな」



「それはそうですけど…」

「……じゃあ、あの時のあれは…?」

「……ほんとうは二人とも、あの頃に戻りたいんだよ。銀ちゃんと一緒にいた時に。そういう空気だったから、昔を思い出したんじゃないかな」

芽吹ちゃんの作品には、それがあらわれていた。楽しかったあの頃を忘れないように、形に残したんだ。

夏凜ちゃんだって、そうじゃなきゃ銀ちゃんを助けるなんて言わない。どんなに今が苦しくても、大切な時間を取り戻したいんだ。

「……友奈さんは優しすぎです。少しは疑った方がいいです」

「大丈夫だよ。何があってもわたしがみんなを守るから。そのために特訓してるんだし。もし誰かがスパイだったとしても、わたしがなんとかする」

「…弥勒みたいなこと言ってる。…他人を疑う前に、自分が為すべきを為せて…」

「為せば大抵なんとかなる。わたしもそう思ってるよ」

二人は黙り込んでしまった。何か考え込んでるようで、視線をぐるぐるしてる。

「とにかく、芽吹さんがスパイって可能性を忘れないでください。何かわかったら、友奈さんに報告します」

「うん。…でも、わたしがスパイかもって思わないの?」

「……罠にかけられた敵を命がけで救出するスパイはいない…」

「わたしも友奈さんをスパイと断定できる証拠は存在しないと考えます。…それに、友奈さんには味方であってほしいから」

「…そっか。何かわかったらわたしからも伝えるね」

わたしは無条件で信用されてるのかな。わたしが無条件で信用し

てるから。

スパイ捜しにはあまり気が乗らないけど、このまま樹ちゃんとしずくちゃんを孤立させるのはよくない。わたしが橋渡しをしたほうがいいかな。

今日も夜中に芽吹ちゃんと特訓をするところになってる。公務から帰ってきて休む間もないけど、芽吹ちゃんは嫌な顔一つせずにつき合ってくれる。

せめて荷物持ちくらいやろうと芽吹ちゃんの部屋まで迎えに行くと、先客がいた。丁度芽吹ちゃんの部屋から出てきた。

「あら、友奈さん。今夜も特訓ですよ？」

「はい、弥勒先輩。もともともと強くなって、戦いを終わらせますよ」

「わたくしの取り分を残しておいてくださいませね」

「わ、わかってますよー。…でも弥勒先輩、どうしてこんな時間に芽吹ちゃんの部屋に？」

「ちよつと確認したいことがございまして」

何を聞いたかはわからなかったけど、弥勒先輩の様子を見る限り納得のいく返事が聞けたようだった。

「では、わたくしはこれで。根詰めすぎてお身体を壊さないように、お気を付けてくださいな」

「はい。おやすみなさい、弥勒先輩」

ひらひら手を振って、弥勒先輩は自室に戻っていった。

弥勒先輩は何も変わってない。船の事件で少し距離が縮まった気がするけど、芽吹ちゃんのもとで防人をつとめる姿勢は少しもブレてない。

弥勒先輩がスパイ、というのはありえないだろう。そもそもワナにハマられた本人だし。一番信頼できる人かもしれない。

「あら、友奈。来てたのね」

「芽吹ちゃん。…ありがとうね、特訓に付き合ってくれて」

会話を聞いてたのか、芽吹ちゃんがドアを開けて顔を出した。

「お礼なんていいわ。友奈と一緒に戦ってくれてるって決めてくれて、うれしかったんだ」

「そうだったんだ。てつきり義務感でやってくれてるんだと」

「…友奈だからよ。こんなに私が頑張れるのは」

芽吹ちゃんはわたしへの信頼の言葉を隠さなくなった。乃木芽吹と防人の一人じゃなくて、一人の友達として接してくれるようになった。

わたしもうれしかったけど、「乃木芽吹」の姿がかすんでいくようで不安にもなった。わたしのせいで大赦を導く勇者が、そうじゃなくなったら……

「じゃあ、今日もやりましょうか」

「うん。よろしくお願いします」

翌日の夜明け前、国土が出没したとの情報を受けて、わたし達は現場に急行した。

わたしと芽吹ちゃんは特訓を終えて、まだ寝てなかった時間だった。人数もそれほど必要ないということで、わたしと芽吹ちゃんと朝練を予定していたメンバーが召集された。

「こんな時間に動いてくるなんてえ……」

「あーあ、終わってから仮眠する予定だったのに……」

「夜襲はあちらの専売特許ですわね。まあ、もうわたたくし達には無意味だということを教育して差し上げましょうか」

「こんな時間の召集に応じてくれてありがとう。手早く片付けて、通常の任務に戻るわよ」

「任せて芽吹ちゃん。特訓の成果、確認したかったんだ」

みんな眠そうな顔をしてるけど、さっさと終わらせようって気持ちで伝わってくる。

そんな会話をしてる間に、現場の前までついた。県境の大きな道路にはテロ警戒のための関所があって、それを密かに占拠したテロリストの中に国土がいたそうさ。

わたし達のミッションは、関所の奪還と国土の排除。今までなら奪還「まで」の命令だったけど、今回は国土を排除しろと明確に到達された。

つまり、大赦は国土と…浪士と事を構えることを決めたということだ。慎重になった国土とは裏腹に、わたし達は容赦なく仇討ちにく。

「うん。友奈には重要なポジションをお願いするわ」

「今回はどんな作戦で？」

「まだ公安も到着してない状況を利用するわ。両側から密かに追い込んで、押しつぶす」

「国士もテロリストも一網打尽ってこと？」

「ええ。友奈一人で裏に回ってもらって、私たちは正面から奴らの注意を引く」

「…乃木教導の存在があらに知れ渡れば、国士が撤退してしまうのでは？」

「それはそうね。だから、友奈が退路をふさぐことが最重要ってこと」「責任重大だね。結城友奈、がんばります！」

わたしがしくじれば、国士の排除という任務が果たせなくなってしまう。

でも、不思議と不安はない。確実に成功するって確信みたいなものがある。

モバイルで関所の地図を確認してから、わたしは一人で裏手に回るようになった。幸い出口が全部見通せる場所があったから、そこで待ち伏せだ。

「今回の戦いで、前回得られなかったものを手に入れる」

「得られなかったもの？」

「勝利、よ。負けに近い引き分けを、ここで取り返す。…戸郷さんが安心して眠れるように、力を示すのよ」

「…了解！国士を討ち取って、相手に勝ち目がないことをわからせてやる！」

「ええ。弥勒の敵になったこと、後悔させて差し上げますわ」

わたし達のやる気は最高潮になって、自信満々で敵地に乗り込んだ。

〈0番より9番どうぞ〉

「はい、9番です！」

待機地点で様子を見てると、芽吹ちゃんから通信が入った。

〈予定通り国土と思われる人物二名がそちら側に退避するのを確認したわ。一般のテロリストは確保してあるから、国土を追撃して〉  
「待つてました！了解！」

作戦は芽吹ちゃんの予定通りに進んでる。あとはわたしの番だ。しばらくすると、通用口と思われる場所から二人の国土が出てきた。船の時と同じで、二人一組で行動してる。

まずは一声かけよう。戦わずに降参してくれば一番いい。

「ストーツプお嬢さんたち！ここは通行止めだよ！」

「！！防人っ…いや、勇者!？」

「後詰めにそんなんっ…！」

わたしが駆けつけて足止めすると、国土さん達は驚いた声をあげて立ち止まった。

「おとなしくわたしについてきてくれればなにもしないよ」

「…私たちの所在がバレてた時点でおかしいと思ったが…」

「…二人も勇者を使って追い込んでくるとはね…」

「浪士側にも間者がいる事実を認めざるを得ないか…」

国士二人の声のトーンが急に下がった。私を放って、冷静に二人で話しあっている。

「…さて、どうしようか」

「…どの道私たちに戻る場所はないのだ。開き直って戦うしかないだろう。お前は どうする？」

「…バカな人。私を囮にして逃げることもできたのに」

「…：最後に、三好閣下の意向に沿っておこう。仲間を見捨てて逃げるなど、勇者にあるまじきことだろう」

「仲間から逃げてきたのに？…：ホント、どうしようもない人ね」

「でも、お前はそんな私についてきたんだろう？」

「最後の時まで、私はあなたの側にいるわ。そう決めたんだから」

冷静にお互いの意志を確認して、冷静に戦いを仕掛けてきた。一瞬で気持ちの波を押さえつけたのが、すごく気味が悪かった。

男の子っぽい話し方の子は拳銃みたいなのを手にして、ためらいなく撃ってきた。芽吹ちゃんなら反応できる攻撃だけど、わたしはまだまだ訓練不足。避けられない。

「…こつちの話聞いてはくれないんだね…」

「…：拳で撃ち落とされた…？」

「…：対勇者バリア用の弾のはずだけど、こうされたら利き目はない、か」

「…：手加減できないから、覚悟を決めてね」

相手が動きを止めたのを確認してから、わたしは一步で男の子っぽい国士に詰め寄る。伸び切った腕を掴んで、力を込めずに背負い投げで地面に叩きつけた。

芽吹ちゃんから教わった対人格闘。わたしの力を使わずに相手を

倒す技。これなら最悪の事態は回避できる。

「ぐうつ…!」

「もう一つ!」

投げっぱなしにはしてない。わたしはまだ国士の腕を掴んでる。

逆方向へまた背負い投げ。今度は逆の手でえりを掴んで、もう一人の国士に投げつける。人が飛んでくるとは思ってたから反応できてない。

「うあつ!!」

「…ぐつ、何て怪力だっ」

「安心して、殴ったりしないよ」

二人重なって横になつてるところに駆け寄って、立ち上がれないように上からボディプレスみたいに押さえつけた。力を込めてふんばれば、下から動かされることもない。

すぐに芽吹ちゃん達がここにくると思うから、このまま待つてれば確保が完了する。そこから先は芽吹ちゃんの仕事だ。

ほとんど待つ時間もなく、足音が近づいてくる。たぶん、防人のみんなだ。

「…もう確保されていたようね」

「あつ、芽吹ちゃん!国士二人の確保、完了しました!」

「さすがですわ友奈さん!特訓のご成果、見事に証明なさいましたわね」

「芽吹が手塩にかけて育てた甲斐があったね。私たちはお役御免かな?」

「そういうことじゃないわ。友奈が強くなろうとした結果よ。それに、皆も強くなっていたのは私もこの目で見たわ」



「それでも、勇者の力ってすごいよ。前線に立つてくれると安心感が違う」

「えへへ。ならもつとがんばらないとね」

国士に拘束具をはめながら、みんなが冗談も交えてわたしと芽吹ちゃんをほめる。完全な勝利を手にして、チームの雰囲気ぐつと明るくなった気がする。

わたしがほしかったのはこれだ。わたしががんばれば、みんなが明るくなる。もつとがんばれば、もつと多くの人々が前向きになれる。

「……これが、防人か」

「多くの人に支えられているのね、乃木芽吹は」

「……ええ。私は一人じゃない。ひとりよがりなあなた達のリーダーとは違うのよ」

「……そこまでわかっているのだな」

「……私たちがこんな所にいる理由も知ってそうね」

「無駄話してる暇はないわ。話したいなら後にして」

国士さん達は、なぜかこっちに友好的な気がした。

芽吹ちゃんはその気持ち察したようだ。敵対するような口調を控えて、ちゃんと話を聞くって意志を伝えた。

芽吹ちゃんも、変わったのかな。わたしが変えちゃったのかな

「明朝の任務の詳細は以上。国士2名を拘束できたのは、大きな戦果

よ」

「あの友奈が、ねえ…。どうい風風の吹き回しよ？人間相手に勇者の力を使うなんて」

朝のミーティングでさっきの戦闘のことが、待機していたメンバーにも伝わった。

わたしがやった、ということにギモンを投げかけたのは風先輩だからかい半分なのか、本心で聞いているのかはちよつとわからない。

「どうもこうもないですよ。芽吹ちゃんのために、全力で任務を果たしただけです」

「…友奈は吹っ切れたみたいね。どんなきつかけがあつたかは知らないけど」

「…悩んでるのはわたし達だけじゃないはずですよ。一番苦しい思いをしているのは、たぶん芽吹ちゃんですよ」

「…うん、実に友奈らしい理由ね」

風先輩は両手を上げて苦笑いした。ある意味予想通りの答えが聞けて、安心したみたいだ。

「友奈さんがこうして勇者としての自覚に気づいたのです。わたくし達も見做って精進あるのみですよ」

「本気で取り組めば、絶対うまくいく。戸郷ちゃんの仇だつてとれる」

「…友奈先輩のおかげで、そう思えました」

制圧に向かったメンバーも、吹っ切れたみたいだ。自信をもって任務に当たれると、気持ちが上がきになってる。

うれしくなった。防人が続けててよかったと、心の底から思った。みんなの元気をもっと高められるなら、わたしももっとがんばれる。

「……でもさ。…結局、勇者でしょ？」

「…?」

メンバーの一人が、誰に目がけたかわからない質問を口にした。

「結局この戦いを決めるのは勇者でしょ?」

「…何が言いたいのです?」

「私たち防人の必要性って、どこにあるのよ?そんなに簡単に国士を倒せるなら、私たちいらないじゃん!」

冷や水を浴びせられた気分だ。

わたしが良かれと思ってやったことが、実は知らないところで人を傷つけていたなんて。

でも、もう迷わない。迷っちゃダメだ。それで悲しむ人がいるから。

「そうだよね!?芽吹!?だから友奈を戦えるように仕立てたんだよね!? 私たちを戦わせなくてもいいように!戦力に数えてないから!!」

「…:…:言いたいことは言えたかしら?」

「…:答えてよ質問に!」

「…:少なくとも私も友奈もそんなことは考えてない。力のあるものがその責を果たすのは、当然の義務よ。あなた達もその責を果たさなければならぬ!」

芽吹ちゃんは淡々と答えた。ヒートアップした言葉をかけられても、いつも通りに。

芽吹ちゃんが言い終われば、もう誰も二の句を続けられない。芽吹ちゃんは何も変わってなかったから。

「…:…:友奈さん」

「樹ちゃん…?」

「ムリ、してますよね…?」

「ううん。むしろようやく心が決まったっていうか」

「……それはきつと違いますよ。だって…」

樹ちゃんは一枚のカードを差し出した。

「…その気持ちは衝動です。苦しい心境を誤魔化す『逃げ』、です」  
「……………」

そのカードには、崖に向かって上を向いて歩いてる人が描かれていた。わたしにはカードの意味はわからないけど、『逃げ』と言われたら言い返すことはできなかつた。

それでも、わたしはやり通す。わたしにできることは、芽吹ちゃんを支えることだけなんだから。

ウソなワケがないよ

「……まだスパイのことを追ってるの？樹」

「お姉ちゃん……やめろっていう話なら聞かないよ」

樹ちゃんとしずくちゃんはそれからもスパイ捜しを続けていた。

この間の関所の奪還で捕えた国士に、直接聞きに行つたみたいだ。

芽吹ちゃんは国士を尋問するでもなく、タワーの隔離棟で普通に生  
活させていた。もちろん防人が接触するのは禁止で、二人は決まりを  
破って話をしたということになる。

でも、満足のいく話を聞いた様子じゃない。風先輩が遠回しにやめ  
るのを勧めても、樹ちゃんは突っぱねてそっぽを向いた。

「あの二人は国士を抜け出した脱走兵、って話じゃない。機密情報を  
持つてるってのは虫のいい話でしょ」

「……たぶん、…乃木に口止めされてる…」

「え？」

「……保護する代わりに、…乃木にだけ国士や浪士の情報を渡した…  
んだと思う」

「…それは被害妄想よしずく。あたし達にまで秘密にする理由がない  
じゃない。有益な情報がなかっただけよ」

二人は芽吹ちゃんを疑いに疑い、考えがどんどん後ろ向きになつて  
る。あらゆるできごとが芽吹ちゃんがもみ消した跡だって考えで、あ  
りもしない芽吹ちゃんの裏の姿を作り上げてる。

「最近、日中はほとんどタワーにいないし。わたし達が外に出られな

いいことをいいことに、何を企んでるかわかったものじゃないよ」

「…二人はどうして芽吹をスパイに仕立て上げたいわけ？」

「え？」

「フツーに考えてありえないでしょ。大赦の首長が、現在進行系で紛争中のテロリストとつながってるなんて」

「…戸郷先輩の仇を討つってみんなで結束してるところに、水を注ぐのはないわー」

「これ以上続けるなら、芽吹に報告しないといけなくなるよ。…まあ、芽吹が気付いてないわけがないと思うけど」

「重い処分が来ると思うよ。今のうちにやめておきなって」

メンバーからもこころよく思っていないって声が上がった。多少言葉を選んでるけど、強めの批難をしたのは初めてだと思う。

樹ちゃんとしずくちゃんは何を思ったんだろうか。表情を見ても視線が下がってることしかわからない。

わたしはこの空気が好きじゃないので、ひとまず仲裁しよう。

「まあまあまあ。芽吹ちゃんがスパイってわたしも思っていないけど、あらゆる可能性を否定するべきじゃないって芽吹ちゃん自身が言ってたから。芽吹ちゃんはそれを試してるんじゃないかな？」

「…乃木教導ならやりそうな試練ですわね」

「同調圧力に屈せず信念を貫き通せて？…あー確かに芽吹ちゃんっほい」

「それであえて泳がせてるって？自分が疑われてるのに？…いや、芽吹先輩ならやるわそれ」

「芽吹ちゃんはちゃんとわたし達のことを考えてくれてるよ。なら、わたし達も芽吹ちゃんに恩返ししないとね！」

わたしの思い描く芽吹ちゃんとみんなの考えはほとんど同じだった。日常のすべてが訓練で、いつもその課題をわたし達に出す。自分にも他人にも厳しい人だから、それが信用になる。

「……それじゃ全部芽吹さんの手のひらの上のことじゃないですか」

「……そういうことよ樹。……大人、なのよ。芽吹は」

それはいい意味だったのか、悪い意味だったのか。

芽吹ちゃんは守るべき立場を持った大人だ。自分の気持ちさえ閉じ込めてしまわないといけない、悲しい覚悟をした大人。

「……一番つらいのは、芽吹ちゃんだと思うよ。味方にもこんなに疑われて、悲しくないわけないよ」

「……」

樹ちゃんは言葉をつぐんでしまった。芽吹ちゃんがあつちと通じてる証拠になるものをもってるのに、芽吹ちゃんの気持ちもわかるから。板挟みになってる。

しずくちゃんも視線がずっと下向きだ。守りたい人を疑って、守りたい人に疑われる。しずくちゃんは逃げずに立ち向かってるけど、このままシズクちゃんが黙ってるわけもないだろう。

「……ごめんなさい、友奈。少しバタバタしてて」

「ううん。気にしてないよ。でも珍しいね、芽吹ちゃんがスケジュール押してるなんて」

いつも通りに芽吹ちゃんの部屋まで迎えに行った時のことだった。芽吹ちゃんは部屋の中で忙しそうにしてて、特訓の準備ができてなかった。芽吹ちゃんの後ろに見える部屋の様子を見ると、なんだか散らかってるように見えた。

「もしかしてお掃除中だった？」

「……まあ、そんなところよ」

「よかつたら手伝うよ。芽吹ちゃんはいつも忙しそうだし、少しでも力になれたらうれしいし」

芽吹ちゃんは少し考え込んでる顔をした。何を考えてるのかはわからないけど。

返事はすぐに返ってきた。

「……うん、お願いできる？このままだと最低限も片付かなさそうだから」

「……そんなに散らかってるの？」

「……友奈には言っておくけど、誰かが私の部屋を調べて荒らしたみたいな。……これは他言無用で」

誰がやったかの推測はすぐできたけど、芽吹ちゃん自身それが追及するのを良しとしてない。大ごとにするのはよくないと判断したんだと思う。

でも、これは一線を越えてる。芽吹ちゃんも犯人に気付いてると思うけど、そこで黙っちゃうのはかわいそうだ。

「……芽吹ちゃん」

「どうしたの？友奈」

「……こんなことになって、芽吹ちゃんはどう思った？」

「…………。……まあ、来るべきところまで来た、って感じね。なる



べく穩便に済ませたかったけど、これ以上は隊の協調に影響が出るわ。処分を考えないと」

「…芽吹ちゃん自身は？かなしくならなかった？」

「…ええ。私の行動が原因とはいえ、仲間と思っていた人にこうまでされると…この立場を少し恨んだわ」

犯人に怒りを向けないのが、少しズレてるなと思った。色んな視点で物事を見られるのが芽吹ちゃんのいいところなんだけど、ね。

芽吹ちゃんは少し自分を大事にしなすぎだ。芽吹ちゃんを大事に思ってる人がいるのをわかってほしい。

芽吹ちゃんの部屋はこれでもかというくらいに捜されていた。

本棚の本に隠されていないか徹底的に開けられて、トレーニング用具を分解してまで捜されて、一つのアートみたいだった模型の棚もぐしやぐしやだ。

本人に気付かれないように、元に戻すのが普通なんじゃないのかな。どうしてこんなに荒らしたまま出ていったんだろう。

「……………これ、芽吹ちゃんの？」

「え？カード？」

デスクに散らばった書類の中に、一枚のカードを見つけた。たぶん、タロットのカード。

それには、大きな塔が描かれていた。

「…メッセージ、かしらね」

「え？メッセージ？」

「この塔がゴールドタワーのことだとすれば、これから訪れる運命は

「……」

わたしにはカードが意味することはわからない。芽吹ちゃんが言葉を続けなかった理由もわからない。

その間にも芽吹ちゃんは手を止めることはなかった。そして、芽吹ちゃんもカードを見つけた。

「……何が運命の輪だ。地獄に突き進む車輪は止めなきやいけない。たとえば下敷きになったとしても」

芽吹ちゃんはカードを握りつぶした。明らかに必要以上に力んで、語調も荒々しい。

でも、芽吹ちゃんは芽吹ちゃん自身の感情を見せてくれた。乃木芽吹じゃなくて、芽吹ちゃん自身の怒りを。

「……大丈夫だよ。芽吹ちゃんはわたしが守るから」

「……友奈」

「多くの人が、芽吹ちゃんを必要としてるから。……もう、芽吹ちゃんは一人じゃないんだよ」

なぜか、芽吹ちゃんは戸惑った顔をしていた。

芽吹ちゃんの部屋に家捜しが入ってから数日。

樹ちゃんとしずくちゃんのスパイ捜しは表向きは静かになったと

思う。でも、二人で行動することが多いのは相変わらずで、やっぱり疑いの視線を向けられるのは避けられてない。

確証になるものは見つけれなかったんだろうか。芽吹ちゃんの様子からは、見られてマズいものがあるようには見えなかったし。

—— やっぱり、芽吹ちゃんがスパイだなんてあり得ないよ。処分が下る前に、芽吹ちゃんと仲直りさせてあげないと。

「とりあえず芽吹ちゃんに…」

—— あ、芽吹ちゃんは今日も外で公務だ。決戦のために浪士の情報を集めて回ってるみたいだ。次で最後にするって、芽吹ちゃんも覚悟を決めてる。

じゃあ二人に話そうと思ったところで、違和感に気付く。

「……あれ？先生？」

芽吹ちゃんの側にいるべき神官先生が、何故か一人で講堂にいる。わたし達の間では「芽吹ちゃんの秘書」って認識で通ってる先生が、公務に行った芽吹ちゃんを置いてここにいる。理由を聞きたいけど、こつちから話したところで無言なのはわかりきってる。芽吹ちゃんとしか話さないのは徹底してるし。

「風先輩、先生が一人でいるのって珍しくないですか？」

「……え？」

「…風先輩？」

「…あ、ごめん友奈。ちよつとぼーつとしてた」

「ふふっ。風先輩もお疲れですもんね。弥勒先輩と特訓、してるらしいじゃないですか」

「弥勒の女子力も大したもんよ。女子力の双璧で、国士なんぞ押し返してやるわあ！」

風先輩も特訓を始めたみたいだ。疲れた顔で女子力を語るのはアリなんですかね？

でもぼーっとしてるのはそれだけじゃないと思う。あの戦いからずっと、風先輩は後ろ向きな気がする。特訓を始めたのだから、弥勒先輩に誘われたからだと思うし。

「先生が一人、ねえ。芽吹に言われて監視でもしてるんじゃない？」

「余計なことをしないように？」

「たぶんね。芽吹が一番信頼を置いてるのが、銀の従者だって言った先生だってことだろうし。先生がスパイってことは、ちよっと考えられないわ」

銀ちゃんの従者。

家出した銀ちゃんに頭を下げて連れ戻しにきたのが、安芸先生だ。銀ちゃんに絶対従うことを条件に、わたしの家から戻っていったんだ。

その時から、先生はずっと銀ちゃんの味方。銀ちゃんの意志を継いだ芽吹ちゃんに従うのも不思議じゃない。

「ちゃんと勉強しないと、芽吹に言いつけられて怒られるわよ？」

「あははは……。真面目にやらないといけませんねー」

芽吹ちゃんに勉強まで見てもらうのはさすがに申し訳ない。真面目にやろう。

「……って言う風先輩も、課題が真っ白じゃないですか」

「そーなのよお！最近全然身が入らないっていうか！もう受験なのに、内申点まで下げられそうなのよお！」

「あ、はは……」

「こ、こんだけ防人頑張ってるんだから、少しは便宜してくれるわよね

!?!?そうじゃないと志望校落とさないといけなくなるわよお…!」  
「このまま行ったら、そのまま防人として進級するんじゃない?」

そうたしなめても風先輩はおおげさになげくのをやめない。青春が防人でおわつちやうわとか、これ以上バカは増えなくていいのか。

芽吹ちゃんは次で終わりにするって言った。そう  
なったら、わたし達防人はどうなるんだろうか。普通の生活に戻されるのかな。それとも

---

日程の訓練が終わって自由時間。

樹ちゃんとしづくちゃんと話すチャンスが巡ってきた。何を言え  
ばいいかはわからないけど、芽吹ちゃんは怪しくないことを伝えな  
いといけない。

夕食の時間だし食堂にみんな向かっていくけど、二人が逆方向へ行  
くの見逃さなかった。

尾行するのも怖い気がしたけど、見逃すのも怖い。何か、いけない  
ことをするような気がして。

「?友奈さん、どうしましたの?」

「…弥勒先輩。…ちよつとお願いしたいことがあります」

「ウェルカムですわ。他ならぬ友奈さんのお願い、どうして断れる理  
由がありませんようか」

「ありがとうございます先輩。…今からわたし、樹ちゃんとしづく

ちゃんを尾行します。もしモバイルにコールがあったら、わたしの位置情報のところに来てください」

「…だいぶ大げさな警戒ですけど、承知いたしましたわ。乃木教導に危機管理のいろはを叩き込まれましたのね」

「悩んだら相談、です。…もちろん、何もなことをわたしも祈ってますけど…」

「わたくしだってそうですわ。仲間を疑うことに他ならないのですからね…」

わたしじゃ対応できない場面に遭遇しても、頼りになる先輩がいる。それだけで恐怖が和らいだ気がする。

「…じゃあ、行ってきます。弥勒先輩、お願いします」

「承りましたわ。友奈さん、どうかお気をつけて」

二人はタワーの一番下、エントランスに向かったみたいだ。芽吹ちゃんが帰ってくる時間を見計らって、待ってるのかな。

わたしもエレベーターで行くと尾行がバレそうだから、階段で静かに降りる。かなりの階層を降りることになるけど、体力には自信がある。

でも、芽吹ちゃんの帰ってくる時間はもつと遅くだった気がする。夕飯も食わずにずっと待つのかな。

階段の出口からエントランスの様子は見える。ここで静かにしていればまず気付かれないと思う。扉のすきまから二人の様子をじっと見つめる。

しばらくすると意外な人がエレベーターで降りてきた。

「…やっぱり来ると思っていましたよ、先生」

「……………」

「神様が帰ってくるのに、お出迎えしないわけにはいかないですもんね」

「……………」

「……先生は、知ってるはず……。…乃木が、一体何者なのかを……」

「……………」

二人は、先生と人目のないところで話したかったのかな。たぶん、全部知ってる先生と。

でも、仮面の下から声は発せられない。これまで通り、わたし達とは一切会話をしない。

「…どうしてわたし達とは話してくれないんですか。芽吹さんの指示ですか」

「……………」

「わたし達は知りたいです。わたし達の隊のリーダーが何者なのかを。このまま何も知らずに戦うのは、納得できません」

「……………」

「……ダンマリ決め込む気かよ。てめえらはいつもそうだな。乃木のやつも上に立った途端、隠し事するようになりやがって」

シズクちゃんが出てきてしまった。それだけ今の状況が腹立たしいってことなんだと思う。何も返答がないのは確かにいいものじゃない。

「俺らを家畜かなんかと思ってんのかもしれねえけどよお、ナメてんじゃねえぞ先公！」

怒号を上げたシズクちゃんは、次の瞬間には信じられない行動を起こしていた。

神官先生の仮面を、力いっぱい殴りつけたんだ。仮面が吹き飛ん

で、先生はよろけて倒れる。

「……………」

「俺は本気だぞ？ 飼犬のしつけをてめえの教え子に任せっきりにしたツケだ」

「……………教えてください。本当は芽吹さんと夏凜さん、まだ繋がりがあ  
るんですよね？そして、先生も」

樹ちゃんはシズクちゃんを止めるところか、暴力に訴えて尋問を  
始めた。

その光景を見てショックで頭が空っぽになったけど、すぐにどうに  
かしないと…！

でも、わたし一人でどうにかできるとは思えない。わたしが暴力で  
黙らせてしまうのは絶対ダメだ。仲間なんだから。

「言えよ！ 外と自由に連絡を取れんのはてめえらしいねえんだよ  
！」

「……………」

「……………死んじやいますよ？ 教えてくれなきゃわたし達もやめられませ  
んし」

二人とももう後先が考えられなくなってる。こんなことが芽吹  
ちゃんに知られればどうなるか。もう取り返しがつかないところま  
できてる。

手遅れになる前になんとかしないと。弥勒先輩の力を借りよう。  
コールしたら来てくれる。

わたしはそれまで場を持たせよう。もうかなりのケガをしてると  
思うけど、しないよりマシだ。

「だ、ダメだよ二人とも!!」

「え…友奈さん…?」



「…ちっ、まさか結城につけられてるとはな」

「友奈さん…見られたのは仕方ないです。どの道バレちゃうんですから」

二人とも悪びれる様子はない。開き直ったのか、そもそも悪いと思っていないのか。

それより、先生だ。容態を確認しようと先生の方を向く。

「先生！大丈夫ですかっ!？」

「……………」

それでもなお、先生が言葉を発することはなかった。

でもケガは明らかに大丈夫じゃない。骨が曲がっちゃいけない方向に曲がってて、膝をついたまま動けないでいる。

「友奈さん。一緒に脱出しましょう。ゴールドタワーから」

「えっ…?」

「捕まえた国士から聞いたんだよ。三好から聞いた、あいつの…乃木の本来の目的」

「芽吹ちゃんの…?」

「…全てが減じるまで戦い続けること。勝ち負けなんてどうでも良くて、銀さんをあんなことにした大赦…いや、国民全てに復讐する。それが芽吹さんの目的なんです」

確信を持って樹ちゃんはそう言ったけど、わたしには到底信じられない話だった。

銀ちゃんの弟子二人が対立する組織を率いて戦うこと、裏でつながっていて二人で糸を引いていたこと、その他にもこの推測に説得力を持たせる事実があることはわかってる。それを知った国士が脱走したのも理由になる。

でも

芽吹ちゃんがわたしに見せてくれた“心”は、何一つそのつじつまを合わなくする。

仲間を想って身体を張る真っ直ぐな女の子。見えない恐怖に肩を抱く臆病な女の子。信頼を基準に仲間に背中を預ける頼れる女の子。当たり前前にそこにいる、芽吹ちゃんはそういう子だ。

「…そうですよね？先生」

「……………」

当然のことを確認するように、樹ちゃんは先生にそう言った。そこに感情はなくて、まるで意趣返しだった。

「…樹ちゃん」

「…友奈さん。…わたし、見てられないんです。友奈さんが芽吹さんに洗脳されていくのを」

「…樹ちゃんも、見たよね？芽吹ちゃんの部屋」

「……………」

「…芽吹ちゃんがわたし達を裏切ってるって証拠は何一つなかったし、ただ銀ちゃんや夏凜ちゃんとの思い出を形に残してただけ」

「……………」

「…普通の子なんだよ。芽吹ちゃんだって。芽吹ちゃんがわたし達にくれた優しさが、ウソなワケがないよ」

“乃木芽吹”という人格が全部ウソや演技だとしたら、わたしはもう何も信じられなくなる。わたし達をただの手駒と思ってるのなら、芽吹ちゃんが弱い部分なんて見せるはずがない。

「わたしは芽吹ちゃんを信じるよ。銀ちゃんがただ復讐のために生き

てたわけじゃないように、芽吹ちゃんも世界を愛そうとしてるんだって」

「……どうしようもないバカだよ、結城は。信頼だけで決めていいことじゃねえんだよ、これは」

「…残念です、友奈さん。友奈さんは、おかしいことをおかしいと言える人だと思ったのに…」

「……言い切ったのよ、友奈は。あんたがおかしいって」

「えっ…お姉ちゃ

パシンツ、と乾いた音があった。

いつの間にかそこにいた風先輩が、樹ちゃんの頬を平手打ちしたんだ。

「やっていいこと悪いこと。あんたは先生に暴力を振るった。友奈は止めようとした」

「……………」

「…反省しなさいっ！…これ以上、友奈を悲しませないでっ…………！」

風先輩は泣いていた。わたしのことを心配したようなことを言ったけど、一番悲しいのは風先輩のはずだ。

樹ちゃんは一言も返せなかった。涙を流す姉を見て、ただ何かにおびえる顔で見つめるだけだった。

「…ブレるんじゃないよ樹い！お前言っただろ！何を犠牲にしても乃木を止めるって!!」

「……………」

「…それが貴女“たち”の出した答えなのですね？シズクさん？」

その弥勒先輩の声は、今まで聞いたことのないくらい抑揚のない声だった。

すでに防人の装備を展開した弥勒先輩が銃のストックでシズクちゃんに殴りかかった。

シズクちゃんだから、その不意打ちに反応できたんだと思う。シズクちゃんも装備を展開して受け止める。

「…けつ。一番めんどくせえヤツがきやがった」

「…わたくし、只今怒り心頭ですよ。信頼し尊敬できる仲間をそうまで言われて、菩薩の顔をできる程わたくし人間出来ていませんわ」

あの弥勒先輩が、怒ってる。

雀ちゃんに茶化されてプリプリしてることはあつたけど、本気で怒ってるのは浪士を相手してる時だってみたことない。

「…ただじゃ行かせてくれねえみてえだなあ！弥勒！」

「行かせませんとも。乃木教導に引き渡すまで！」

二人ともいつになく本気だ。本気で相手を打ち倒そうと手段を選ばない攻め手を使ってる。

——— これまでの成績から見れば、弥勒先輩が勝てる道理はない。いくら弥勒先輩が特訓をしてるからって、シズクちゃんが訓練をサボってたわけじゃない。元々の差はそう簡単には埋まらない。

「はっ、その程度かよ弥勒！頭でつかちになっても動きはシロウトのままじゃねえか！」

「それはこちらのセリフですよ。その粗雑な動き、まだ〴〵しずくさんの方が対応しやすいですわ！」

振り回した銃剣を弥勒先輩は銃身で受け止めた。力を抜くとシズクちゃんはよろめいて、そのスキにシズクちゃんの後ろに回り込んで絡みつく。

怒ってるって言ったけど、弥勒先輩の動きは至って冷静だ。頭に血が登ったシズクちゃんを手玉に取ってる。

「ナメんなコラァー！」

「うっ!?なんの!」

シズクちゃんは自分へのダメージを考えずに、絡みついている弥勒先輩の腕を掴んで投げ飛ばす。本来曲がらない方向に関節が曲がってるから見るだけで痛い。

即座に反応した弥勒先輩もシズクちゃんに足を絡めて、そのまま二人とも床に叩きつけられた。

「悪手でしたわね!こうして組み合ってしまったえば、貴女は逃げられなくなる!」

「ほぎきやがれ!テメエをのせばいい話だろうがよお!」

武器も持たずに、殴り合う。芽吹ちゃんがみんなに徹底して教えてた素手での戦いを、二人は見事に物にしていた。

もみくちやになれば体格で勝る弥勒先輩が有利だ。シズクちゃんを何とか組み伏せて容赦なく殴りつける。

「ちっ…やるじゃねえか弥勒!」

「シズクさん相手に手加減はできませんわよ…!それに、弥勒家の人間がわざと手を抜くことは致しませんわ!」

見てるのも痛いぐらいの生々しい殴り合い。わたしが止めなきやいけないんだけど、身体は動かなかった。

弥勒先輩の目が、止めてくれるかと訴えかけてくる。怒ってるのは

間違いないけど、シズクちゃんにそこまであたる理由はわからない。わたしが間に入ったら、否応なしに力を振るわなければならぬ。それを察して弥勒先輩が代わりになってくれるのかもしれない。

「お家のことなんざ知らねえけどよお、ちつたあ現実を見ろってんだよ！その信念を利用されてるだけだつて！」

「わたくしは逃げませんわ。真実を確かめるために、乃木教導の元に馳せ参じたのです！」

その後はお互いの意識が飛ぶまで殴り合ってたんだと思う。気付いたら樹ちゃんとしずくちゃんが風先輩に拘束されて、柱にくくりつけられていた。

「…どうしたの、皆？」

芽吹ちゃんが帰ってきた。

その頃には隊員みんなもエントランスに集まってきてて、捕まえられた二人を囲う。

困惑の声を上げながら芽吹ちゃんが全体を見渡して、目を見開いて驚いた顔をする。

「弥勒さんっ…そのケガ…！」

「…大したことはありませんわ。先生に比べたら」

「先生…？」

「もう救護に運ばれましたけれど、歩くこともままならない程のケガ

でしたのよ」

弥勒先輩も救護を受けた方がいいと思うくらいのケガだけど、芽吹ちゃんへ報告しなければならぬと言つてこの場に残つた。

軽く手当てしただけの弥勒先輩を見て、芽吹ちゃんがまた苦しそうな顔をする。わたしも胸が苦しくなる。

「……なにが、あつたんですか……？」

「……樹さんと、しずくさんが……。先生から、暴力で情報を聞き出すとしたのですわ……」

「……………」

「……二人は取り押さえていますけれど、……いかんともしがたいですわ……」

芽吹ちゃんの視線が二人の方へ向く。ロープで柱に巻き付けられて、下を向いたままピクリとも動かない。

その様子を少しだけ見て、芽吹ちゃんはまぶたをぐつと閉じた。やるせない表情を悟られないようにと、みんなに背中を向ける。

その先には、壁に寄りかかつて膝小僧を抱える風先輩。あまりに風先輩の人物像からかけ離れた姿に、芽吹ちゃんも目を見開いていた。

「……樹さんを捕えたのは、風さん、なのですよ……」

「……………」

弥勒先輩はありのままを伝えた。教える必要がなかったと思うことも、包み隠さずに。

「……乃木教導。……この始末、いかなさるおつもりですか？」

「……………」

芽吹ちゃんは黙つてみんなを見回す。みんなが皆、思い思いの表情

を芽吹ちゃんに向ける。怒り、悲しみ、恐れ――負の感情が  
一手に芽吹ちゃんへ向かう。

そして、わたしと芽吹ちゃんの目があった。

「……友奈……泣いてるの……？」

「……………」

「…第一発見者は、友奈さんでしたわ。何とか穏便に済まそうとした  
のでしょうけど……友奈さんの思いは、無下になってしまいましたわ  
…」

芽吹ちゃんの目の色が途端に変わった気がした。深い悲しみの色  
から、燃え盛る怒りに。

「……除隊、です」

「……え？」

「…犬吠埼樹及び山伏しづく両名を、只今をもって除隊とします。国  
家機密関係者の権利を剥奪し、反逆者として拘束します」

淡々と、隠しきれない感情を不気味なくらいに殺して言い放った。

――反逆者。

そう判断したからには、もう一切の手心を加えるつもりはないとい  
うことだ。単なる敵として、厳正な処分を下す気なんだ。

「ま……待ってよ芽吹っ！そんなに重い処分はっ……！」

食い下がったのは風先輩だ。樹ちゃんがそんな重い処分になると  
は考えてなかったみたいだ。

「…私は再三警告しました。スパイ捜しはするな、と。まあ、それだけ



なら除隊なんて処分にはしていません」

「……………」

「…ですが、…仲間を傷つけた。自らの意志で。私が共有してもらいたかった防人の理念を、最悪の形で踏みにじりました」

「……………」

「そういう人間は、この隊には不要です。他人と関わるべき人間じゃないです」

有無を言わず、淡々と。ここまで冷酷になれる人を、わたしは知らない。

二人に注がれる芽吹ちゃんの視線は、背筋も凍るくらいに冷たかった。まだ国土や夏凜ちゃんを見ている時の方が優しい気がするほどに。

「…あたしはどうなってもいいからっ!!監督不行届で処分していいからっ!!樹をつ…!樹を反逆者にしないでっ…………!あたしと引き離さないでっ…!」

「………………。姉にここまで言わせて、どういう気分かしら?樹ちゃん」

「…………とうとう本性を現しましたね、芽吹さん。私怨で権力を濫用する暴君の姿が…!」

「…………風さんが自分の立場を捨ててまであなたをかばっているのに、開口一番それか」

呆れたような、あざ笑うような声で芽吹ちゃんは言い捨てた。

「…今まで泳がせて情報探索能力を測ってたけど、聞かせてもらおうかしら。あなた達がどこまで真実に迫ることができたのかを」

「全部私怨ですよ。この世界の全てをめちやくちやにして、銀さんのことをめちやくちやにした四国の人間に復讐しようとしてるんですよ!!」

捨て台詞みたいに吐き捨てた樹ちゃんの言葉の後には、不気味なくらしいの沈黙。芽吹ちゃんも聞いてた周りのメンバーも、言葉を発することができない。

言葉の代わりに、この空気にそぐわない笑い声がホールに響く。

「……フッフッフ……アツハツハツ!!それは傑作ね!私じゃそんなドラマティックな動機、思いも寄らなかつたわ!」

大笑いする芽吹ちゃん。普段からは想像できない狂気じみた姿に、全員が困惑する。

「…何がおかしいんですか」

「大ハズレもいいところって話よ!銀が全てを賭けて守ったものを無茶苦茶にする?あれだけ銀に復讐はやめてと言った私が?どうやら妄想と現実の区別がつかなくなるまで思い詰めていたようね」

「じゃあ、一体芽吹さんは何を考えていたんですか。情報があつちに漏れていたのはどういうことなんですか」

「あなたに質問する権限はないわ。あなたの洞察力、評価していたのだけれど買いかぶりすぎていたようね」

「……必ず罰が下りますよ。芽吹さんのやってることは、大赦の大人たちと何も変わらない」

「私たちを罰せられるものなんて存在しない。そんなものは私が滅ぼす。神と対峙する勇者なのだから」

芽吹ちゃんはもう樹ちゃんを仲間と見ていない。倒すべき敵としか見えてない。

——もう間に合わないとかわかっていたけど、それでも何とか樹ちゃんと仲を取り持つ言葉を言わずにはいられなかった。

「芽吹ちゃん…。もうやめようよ…。樹ちゃんも、錯乱してるだけだ  
と思うから…。少し冷静になってからお話しよ…。?」

「時間を空けても、事実が変わらない。先生に…。仲間に暴力を振るっ  
たことは」

「…悲しくないの…。?樹ちゃんとしづくちゃんを…。追放するなんて  
…」

「…。私だけは、無情でなければならない。感情に左右されず、道を示  
さないといけない」

乃木芽吹の覚悟は、わたしがいくらほだしても揺るがない。

悲しみも怒りも全て飲み込んで、勇者として道を示す。かすんで見  
えていた乃木芽吹の姿は、わたしの目がうるんでいただけだった。

「…。最後に一つだけ聞いておくわ。どうして私があっちと繋がって  
いることにしたかったのかしら?」

「…。このままじゃ犬死だからですよ。芽吹さんの手のひらの上で、  
押し付けられた理想のために死んでいく。そんなの、許せんせん」

「…。クツクツクツ。…。本当、ナンセンスよ」

「…わたしの知ってる芽吹さんはそんな人じゃなかった。自分の力だ  
けで、理想にたどり着く人だった」

「もう私たちは一人じゃないのよ。仲間を守るためなら、手段は選ば  
ない」

「…。ここに宣言するわ。大赦の首長の私が浪士と結託する理由はど  
こにもない。もし私がただの浪士のスパイなら、乃木家に養子に入っ  
たりしない。それだったらあいつと一緒にテロに加担してる方が性  
に合ってる」

「私はこの国を守るために戦う。乃木家に名を連ねた者として、その  
宿命を全うする」

何度も聞いた芽吹ちゃんの決意は一切ブレることはなかった。その姿勢が、言葉に説得力を持たせてきたんだ。

樹ちゃんとしづくちゃんも含めて、芽吹ちゃんの言葉を納得するしかなかった。